研究紀要　第三十二号　二〇二四

（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

研　究　紀　要

第３２号

栃木県内における後期旧石器時代の東北頁岩について（その１）…… 芹澤　清八

研究ノート　矢板市小丸山６号墳の再評価 …… 石橋　　宏

栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳の須恵器甕　－真格子叩き須恵器甕の出現期と副葬品－
…… 内山　敏行

中世の堀の理解についての一考察　－発掘調査から見えてきたもの－…… 杉浦　昭博

２０２４

公益財団法人とちぎ未来づくり財団
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー

研究紀要　第32号　　目　次

目次……（ｉ）

栃木県内における後期旧石器時代の東北頁岩について（その１）
…… 芹澤清八（1）

研究ノート　矢板市小丸山６号墳の再評価
…… 石橋　宏（69）

栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳の須恵器甕
－真格子叩き須恵器甕の出現期と副葬品－
…… 内山敏行（81）

中世の堀の理解についての一考察
－発掘調査から見えてきたもの－
…… 杉浦昭博（95）

栃木県内における後期旧石器時代の東北頁岩について（その１）

芹澤清八[1]

はじめに　　栃木県内の東北頁岩製石器 出土遺跡一覧
１　栃木県の状況　　石器実測図

栃木県の後期旧石器時代の全般を通して、また縄文時代への橋渡しとなる神子柴段階から草創期では大型の尖頭器が、さらに縄文時代前期にはやはり大型な抉入尖頭器（両尖匕首）など、本県には明らかに東北地方を供給元とする珪質ないしは硬質頁岩が原礫や素材剥片、また製品として搬入されていることは疑いようもない事実である。既に下総台地では、これらの石材の使用について幾つかの時期が確認され、栃木・茨城方面を経由してもたらされたとの論考もある。このことを裏付けるためにも、先ず東北からの玄関口である本県の状況を的確に把握することが必要である。

はじめに

2022年の岩宿フォーラムでは、「東北頁岩と北関東地方」と題し、量的に僅少であるものの当該地域において岩宿時代各期に存在する東北頁岩に焦点を当てている。このテーマについて議論するにあたっては、渋谷孝雄氏による「加藤稔と東北地方の旧石器時代研究」の基調講演（渋谷2022）、基調報告では外部より中村由克氏に「東北地方の珪質頁岩（東北頁岩）について」（中村2022）、また橋本勝雄氏に「下総台地からみた旧石器時代の東北頁岩製石器の特質」（橋本2022）をお願いし、そしてさらにフォーラム実行委員６名により群馬県及び周辺地域の状況が報告されている。

今回、珪質頁岩もしくは硬質頁岩と呼称される石器石材を東北頁岩として一括りにしているが、このことについては趣旨説明で明らかにされている（岩宿フォ2022）。しかしその原産地となると、中村氏による詳細な検証がある。群馬県下の多くが山形系の「寒河江D」としながらも、色調や光沢の具合、微化石の状況等のバリエーションから高精度の石材鑑定が原産地推定に極めて有効と説いている。

１　栃木県の状況

フォーラムでは、茨城県・栃木県の状況を石川太郎氏が報告を行い（石川2022）、栃木県については芹澤が作成した当日資料が配布された[1)]。ここでは当日資料を再録することを岩宿フォーラム実行委員より了解をいただき、またこの資料を踏まえ栃木県の状況を（その２）で検討するものである。なお、石器実測図についてはキャプションの変更はあるものの配布資料のまま[2)]、また出土遺跡一覧表については若干の訂正を加えている。

さて一覧表及び掲載図には、本県における発掘調査等によって、東北頁岩が出土した遺跡を掲載している。それはあくまでも報告書記載の珪質頁岩及び硬質頁岩とする石材名に従っており、専門者による石材鑑定以外についてはすべてが東北頁岩とする根拠に乏しい。

本県における石材の認定については、幾つかの段階を経て今日に至っているが、その一つは報告書作成時期

(1) 株式会社シン技術コンサル　文化財調査部

に関係するものである。別表内の栃木市赤羽根遺跡（田代1984）では、石材名の認定について県内に頼る研究者もなく、調査者がこれまでの経験から東北系の珪質頁岩と同一の石材名として頁岩と記載した経緯がある。古墳時代中期の大集落として注目された赤羽根遺跡であるが、削片系細石核の出土はその後の研究に必須の資料である。

一覧表への掲載はないが、小山市本郷前遺跡（芹澤1985）では石材鑑定を県内の地質に詳しい研究者にお願いしている。石器の幾つかには流紋岩や珪化木との石材名が与えられたが、その幾つかには東北頁岩に加えられるべき石材であると確認されるのは数年後のことである。

1990年以降、栃木県立博物館に地質及び岩石を専門とする荒川竜一氏が赴任されてからは、特に岩宿及び縄文時代を通じ各遺跡からの出土石器について石材鑑定をお願いすることが通例となり、同一鑑定者による石材名の統一は、石材研究上極めて有効な結果をもたらすこととなる。

しかし近年では、新たに高原山山麓より珪質泥岩、さらに下総半島の各所より珪質頁岩の産出とその利用が確認されたことにより（田村・国武・吉野2003、田村2005）、なおいっそう識別が混沌としている。実際に、那須町内出土や狭原根本遺跡出土の尖頭器の報告では（森嶋2015）、珪質泥岩としながら括弧書きにて珪質頁岩の名称も与えられ、また寺平遺跡では白滝頁岩の利用も報じられている（中村2015）。これまで北関東では、出土する珪質及び硬質頁岩について、すべて東北からの搬入と一括りにしてきたが、考古学を専門とする我々にとってこれを認定するには、中々ハードルが高く困難な部分と言えよう。

さて、別表の出土層位では、下位より基本となるハードローム、暗色帯（上位にAT）、ハードローム、ソフトローム（上位に今市、七本桜パミス）及び漸移層からの出土を明示し、出土石器群の様相から岩宿フォーラムによる群馬Ⅰ～Ⅴ期の根拠としている（岩宿フォ1994 ・2010）。しかし、中には後世の遺構内や攪乱等からの出土もあり、複数の時期が混在する遺跡もある。それらの遺跡については、一覧表の巻末に掲載し差別化を図っている。なお、出土層位が不明であっても、細石器段階のⅤ期や神子柴段階から草創期の石器群などは一見して所属時期が明確であるため、各々の時期に位置付けている。

註

1）岩宿フォーラム実行委員は、今回のテーマを設定した後に、早い段階で群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管する資料の確認を行っている。その際、茨城及び栃木県の基調報告については、石川太郎氏が担当することとし、栃木の関連資料については芹澤がまとめることとなった。本来ならば、栃木の資料もフォーラム予稿集にまとめられるべきであるが、予定を大幅に超える枚数であったため、当日の配布資料とした。

2）出土遺跡一覧表では、出土石器の時期を群馬編年のⅠ～Ⅴ期に準拠している。これを南関東の編年に合わせるならばⅠ期は立川ロームⅩ・Ⅸ層、Ⅱ期はⅦ・Ⅵ層、Ⅲ期はⅤ・Ⅳ層、Ⅳ期は砂川期と槍先形尖頭器、Ⅴ期は細石器の時期となる。掲載した石器は基本的に縮尺２/３に統一しているが、中にはそれ以外のものもある。スケールを確認されたい。

参考文献

石川太郎　2022「茨城県・栃木県における旧石器時代の東北頁岩の利用について」『東北頁岩と北関東地方』岩宿博物館　岩宿フォーラム実行委員会

岩宿フォーラム　1994『群馬の岩宿時代の変遷と特色』岩宿文化資料館　岩宿フォーラム実行委員会

2010『北関東地方の石器文化の特色』岩宿博物館　岩宿フォーラム実行委員会

岩宿フォーラム実行委員会　2022「東北頁岩と北関東地方」『東北頁岩と北関東地方』岩宿博物館　岩宿フォーラム実行委員会

渋谷孝雄　2022「加藤稔と東北地方の旧石器時代研究」『東北頁岩と北関東地方』岩宿博物館　岩宿フォーラム実行委員会

芹澤清八　1985「Ⅳ本郷前遺跡の発掘調査　イ．先土器時代」『鷹の巣前遺跡　本郷前遺跡　向野原遺跡』栃木県教育委員会　（財）栃木県文化振興事業団
田代　隆　1984「第Ⅳ章 発見された遺物　第２節 石器」『赤羽根』栃木県教育委員会　（財）栃木県文化振興事業団
田村　隆・国武貞克・吉野真如　2003「下野－北総回廊外縁部の石器石材（第一報）－特に珪質頁岩の分布と産状について－」『千葉県史研究』第11号　千葉県
田村　隆　2005「氷河時代の旅」『発掘された日本列島2005－新発見考古速報展 地域展展示解説』千葉県立中央博物館
中村信博　2015『寺平遺跡発掘調査報告書』市貝町教育委員会
中村由克　2022「東北地方の珪質頁岩（東北頁岩）について」『東北頁岩と北関東地方』岩宿博物館　岩宿フォーラム実行委員会
橋本勝雄　2022「下総台地からみた旧石器時代の東北頁岩製石器の特質－関東地方の調査成果を中心として－」『東北頁岩と北関東地方』岩宿博物館　岩宿フォーラム実行委員会
森嶋秀一　2015「栃木県那須町出土の大型尖頭器について」『栃木県立博物館研究紀要』第32号　栃木県立博物館

栃木県内の東北頁岩製石器 出土遺跡一覧

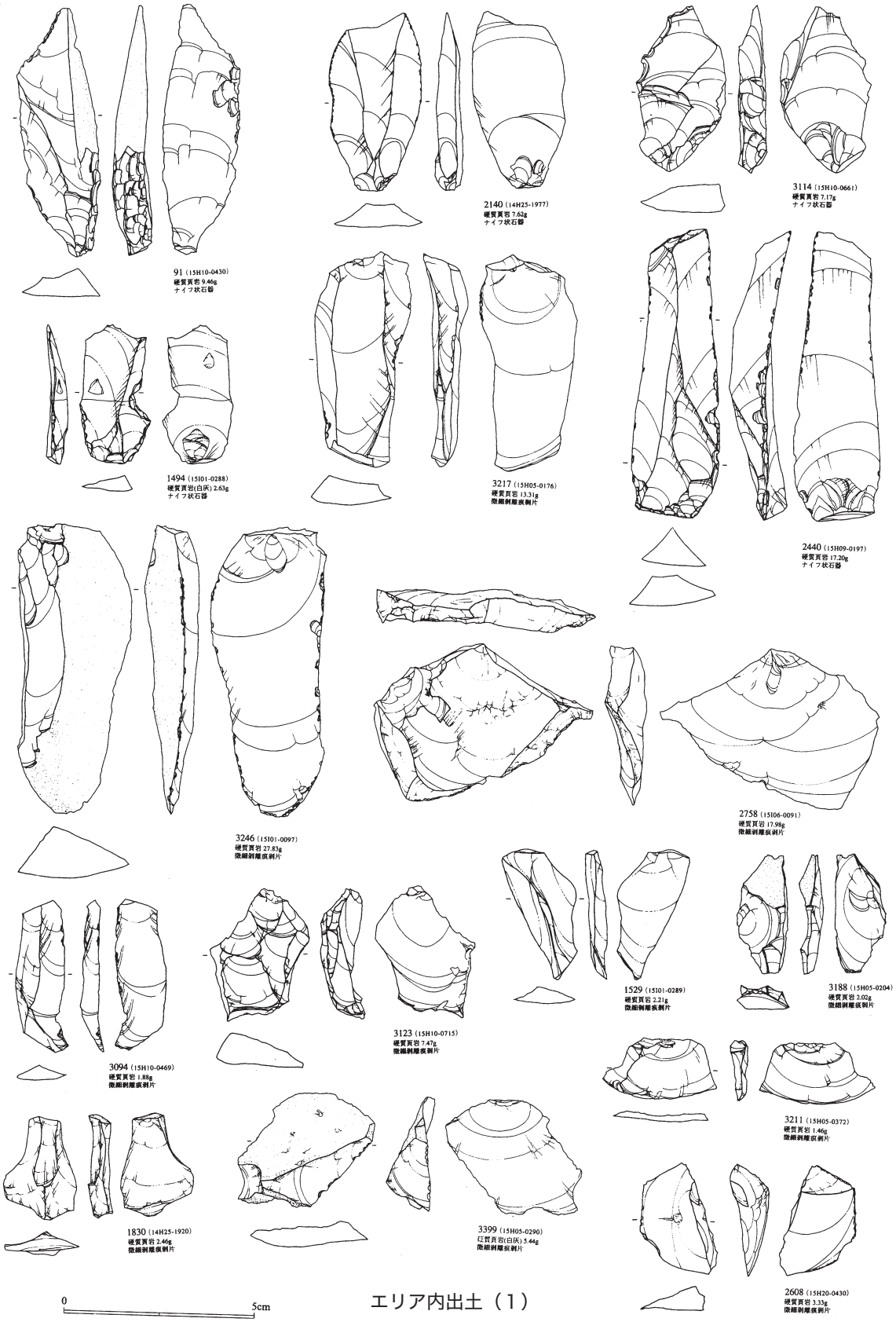
No.	時期	遺跡名	地点・文化層	全体数量	珪質頁岩製の点数	珪質頁岩製石器の内容	備考	資料所蔵者	調査報告書
1	Ⅰ期	上林遺跡 かみばやしいせき 出土層位は暗色帯下部	第2文化層 A-01～A-64に エリア区分	3,564点 （エリア外24）	38点（外2 1%） チャート2854，黒曜石382，流紋岩53，砂岩43，ガラス質黒色安山岩42，ホルンフェルス36，黒色頁岩34，頁岩14など	ナイフ状石器6，微細剥離痕剥片14，石核2，剥片類16	石材鑑定は柴田徹	佐野市教委	出居　博　2004『上林遺跡』佐野市教育委員会
2	Ⅰ～Ⅱ期	大志白遺跡群 おおしじろいせきぐん 出土層位はAT下位の暗色帯中	1地区 1～3ブロック	31点	10点（32%） 安山岩12，流紋岩2など	ナイフ形石器1，彫器1，Uフレ4，剥片4	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	宇都宮市教委（河内町）	戸田正勝　2000『大志白遺跡群発掘調査報告書（旧石器時代編）』河内町教育委員会
			4-1地区 1・2ブロック	32点	3点（9%） 流紋岩17，安山岩4，ホルンフェルス3など	彫器1，Uフレ1，石核1			
			5-1地区 1～3ブロック	21点	4点（19%） 黒曜石6，流紋岩4など	Uフレ1，切断剥片2，剥片1			
			5-2地区 1～4ブロック	35点	8点（23%） 安山岩15，黒曜石7，流紋岩3など	台形様石器1，剥片7			
			6地区 1～6ブロック	95点	1点（1%） 安山岩43，黒曜石29，流紋岩6，ホルンフェルス6など	彫器1			
			7地区 1～6ブロック	401点	1点（0.003%） 安山岩287，ホルンフェルス73，流紋岩9など	切断剥片1			
3	Ⅱ期	上神主・茂原遺跡 かみこうぬし・もばらいせき 出土層位は暗色帯を含む上下のハードローム内，集中範囲は暗色帯	第1ブロック	284点	40点（14%） 珪質頁岩20点の接合資料 他に流紋岩質凝灰岩71点の接合資料あり	石核1，Rフレ3，剥片36 （ブロック外に同一石材のナイフ形石器あり）	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	安永真一　2001『上神主・茂原　茂原向原　北原東』栃木県教育委員会　㈶とちぎ生涯学習文化財団
4	Ⅱ期	塚崎遺跡 つかざきいせき 第2文化層 出土層位は暗色帯上位～ハードローム内	ブロックB	291点	3点（0.1%） チャート110，ホルンフェルス46，安山岩36，玉髄36，黒曜石10，流紋岩9，流紋岩質凝灰岩9など	ナイフ形石器1，削器1，Uフレ1	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	斎藤　弘　1994『塚崎遺跡』栃木県教育委員会　㈶とちぎ生涯学習文化財団
5	Ⅱ期	伊勢崎Ⅱ遺跡 いせさきにいせき 第Ⅱ文化層 1区1～3号 2区4～9号 3区10号ブロック 出土層位は暗色帯下部 上位に1～5ブロックを伴う第Ⅰ文化層あり 出土層位は暗色帯上部～ハードローム 珪質頁岩は皆無	1号ブロック	25点	5点（20%） 黒色安山岩13，流紋岩質溶結凝灰岩3など	剥片2，砕片3	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	森嶋秀一　2000『伊勢崎Ⅱ遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
			2号ブロック	243点	128点（53%） 流紋岩質溶結凝灰岩74，流紋岩質凝灰岩32，黒色安山岩7など	石刃18，石核3，Rフレ3，Uフレ1，剥片63，砕片40			
			3号ブロック	43点（外8）	20点（外4 47%） 流紋岩質凝灰岩10，黒色安山岩6，流紋岩質溶結凝灰岩6など	石刃3，Uフレ1，剥片12，砕片4			
			4号ブロック	26点	10点（38%） 流紋岩質凝灰岩6，黒色安山岩3，泥岩3，玉髄2など	石刃2，石核2，剥片6			

			5号ブロック	44点	30点（68%） 流紋岩質溶結凝灰岩11，黒色安山岩2など	石刃3，石核2，剥片13，砕片12			
			6号ブロック	64点	24点（38%） 流紋岩質溶結凝灰岩17，黒色安山岩14，流紋岩質凝灰岩4など	彫器1，石刃2，敲石1，剥片13，砕片7			
			7号ブロック	33点	8点（24%） 流紋岩質溶結凝灰岩13，流紋岩質凝灰岩4，黒色安山岩3，黒曜石3など	剥片8			
			8号ブロック	22点	4点（18%） 黒色安山岩6，流紋岩質凝灰岩4，流紋岩質溶結凝灰岩2，石英2など	剥片2，砕片1，原礫1			
			9号ブロック	27点（外17）	9点（外4 53%） 流紋岩質凝灰岩2など	石刃2，楔形石器1，剥片3，砕片21			
			10号ブロック	35点（外1）	10点（外1 35%） 流紋岩質凝灰岩18，黒色安山岩5など	石刃1，剥片5，砕片3			
6	Ⅱ期	寺平遺跡 てらだいらいせき 第2文化層（B地点） 出土層位はハードローム下半部	第1ブロック	132点 石材分析掲載は58点	8点（6%） 黒曜石47，泥岩3など	ナイフ形石器2，先刃掻器1，二次加工剥片2，剥片3	石材鑑定は報告者 黒曜石は建石徹ほか	市貝町教委	中村信博　2015『寺平遺跡発掘調査報告書』市貝町教育委員会
			第2ブロック	396点 石材分析掲載は215点	8点（3%） 黒曜石197，流紋岩2，安山岩2など	ナイフ形石器1，剥片7			
7	Ⅲ期	三ノ谷東遺跡 さんのやひがしいせき Ⅲ地区 第2文化層 出土層位はハードローム上位～ソフトローム下位	広範囲な1ブロック	1,065点	19点（0.18%） 黒曜石，安山岩主体	ナイフ形石器2，掻削器3，石核2	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	田代　隆　1990『三ノ谷東・谷館野北遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
		Ⅲ地区 第3文化層 出土層位の中心はハードローム	散漫な1ブロック	22点	1点（0.45%） 黒曜石，安山岩主体	剥片1			
			ブロック外		5点	尖頭器1，ナイフ形石器1，有樋尖頭器1，削器2			
8	Ⅲ期	上林遺跡 かみばやしいせき 第1文化層 出土層位はハードローム内As-BP～ソフトローム内As-YP間	集中箇所C-1，C-2，C-3，集中以外	96点	9点（9%） 黒曜石46，チャート22，黄玉石10，碧玉5など	有樋尖頭器2，彫器4，スポール2，削器1	石材鑑定は柴田徹	佐野市教委	出居　博　2004『上林遺跡』佐野市教育委員会
9	Ⅲ～Ⅳ期	エグロ遺跡 えぐろいせき 文化層はハードローム上位～ソフトローム	1～7ブロック（2号と3に接合あり）	2,005点	僅かに10点程度 99%は足尾山系の層状チャート	大型な削片1，有樋尖頭器1，尖頭器1，掻器1，削器1，石刃など これ以外に凝灰質泥岩の大型石刃製削器が複数あり	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	佐野市教委	芹澤清八　2001『エグロ遺跡』栃木県教育委員会　㈶とちぎ生涯学習文化財団
10	Ⅲ～Ⅳ期	寺野東遺跡 てらのひがしいせき	地点外出土		6点	ナイフ形石器2，有樋尖頭器2，削器1，彫器1	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	森嶋修一　1998『寺野東遺跡Ⅰ（旧石器時代編）』栃木県教育委員会　小山市教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団

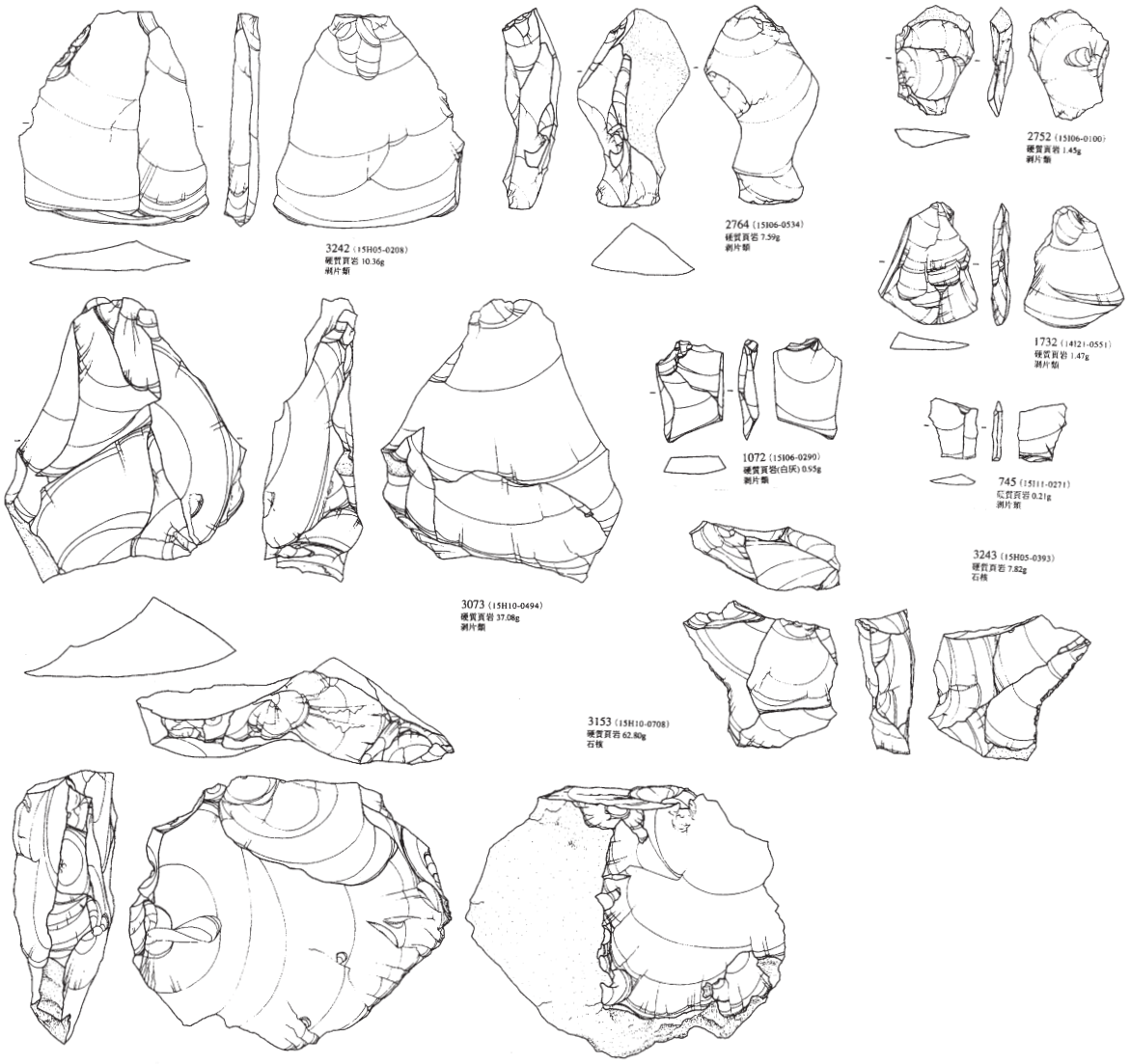
No.	時期	遺跡名	地点・文化層	全体数量	珪質頁岩製の点数	珪質頁岩製石器の内容	備考	資料所蔵者	調査報告書
11	Ⅳ期	八幡根東遺跡 やはたねひがしいせき 出土層位はAs-BPより上位で，As-YPに近い位置	第1ブロック	60点	37点（62%） 珪質凝灰岩7，油性頁岩4，安山岩4，チャート3など	彫器1，掻器1，Uフレ2，Rフレ3など	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	斎藤　弘　1996『八幡根東遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
			第2ブロック	49点	13点（27%） 珪質凝灰岩21，安山岩14，黒曜石1	ナイフ形石器1，鋸歯縁石器1，錐1，石核1など			
			第3ブロック	286点	177点（62%） チャート41，珪質凝灰岩28，凝灰岩22，黒曜石6など	ナイフ形石器2，削器3，抉入石器1，尖頭器2，Uフレ35，Rフレ16など 唯一尖頭器含む			
			第4ブロック	21点	21点（100%）	ナイフ形石器2，Uフレ2，剥片7など			
			第5ブロック	42点	37点（88%） 珪質凝灰岩2，油性頁岩2，ホルンフェルス1	ナイフ形石器5，彫器1，円形掻器1，削器1など			
			第6ブロック	31点	29点（94%） 油性頁岩1，チャート1	掻器1，削器1，錐1など			
			第7ブロック	36点	32点（89%） 油性頁岩2，チャート1，珪質凝灰岩1	彫器2，掻器1，円形掻器1，削器1，Uフレ3など			
			第8ブロック	44点	38点（86%） ホルンフェルス2，チャート2など	ナイフ形石器1，抉入石器1，削器1，石核2など			
			第9ブロック	12点	6点（50%） 安山岩2，凝灰岩1，珪質凝灰岩1，チャート1など	ナイフ形石器1，石核2など			
			ブロック外	30点	15点（50%） チャート6，黒曜石3，油性頁岩2，玉髄2など	ナイフ形石器6，削器1，Uフレ4，Rフレ3など			
12	Ⅳ期	多功南原遺跡 たこうみなみはらいせき 出土層位はソフトローム上位 1～13ブロック中，1，4，5，7～9は珪質頁岩の出土なし	第2ブロック	519点	1点（0.002%） 黒曜石514など	剥片1	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	山口耕一　1999『多功南原遺跡《旧石器・縄文編》』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
			第3ブロック	80点	3点（0.04%） 黒曜石50，溶結凝灰岩8，花崗岩6，チャート5，安山岩4凝灰質頁岩3など	剥片3			
			第6ブロック	504点	9点（0.02%） 黒曜石378，溶結凝灰岩32，玉髄19，チャート15，流紋岩11，凝灰質頁岩10，珪質凝灰岩8など	ナイフ形石器1，石刃4，剥片4			
			第10ブロック	434点	1点（0.002%） 黒曜石427，玉髄4など	剥片1			
			第11ブロック	582点	8点（0.014%） 黒曜石530，玉髄22，チャート5，珪質凝灰岩5など	剥片8			
			第12ブロック	644点	8点（0.012%） 黒曜石578，玉髄22，凝灰質頁岩12，チャート9，溶結凝灰岩6など	剥片8			

			第13ブロック	174点	2点（0.011%） 黒曜石169，チャート2など	剥片2			
			ブロック外	30点	6点（0.2%）	尖頭器1，細石刃核1，剥片4			
13	Ⅳ期	寺平遺跡 てらだいらいせき 第1文化層（A地点） 出土層位はソフトローム中位	第1ブロック	197点 石材分析掲載は132点	47点（36%） 流紋岩46，チャート23，安山岩9など	尖頭器1，尖頭器未成品1，剥片45	石材鑑定は報告者 黒曜石は建石徹ほか	市貝町教委	中村信博　2015『寺平遺跡発掘調査報告書』市貝町教育委員会
			第2ブロック	644点 石材分析掲載は265点	105点（40%） 珪質凝灰岩60，チャート57，流紋岩46など	尖頭器5，尖頭器未成品2，削片1，削器2，石核4，剥片91			
			第3ブロック	716点 石材分析掲載は239点	27点（11%） チャート155，流紋岩54，碧玉4など	剥片27			
			第4ブロック	424点 石材分析掲載は263点	62点（24%） 流紋岩77，チャート49，碧玉21，安山岩15，珪質凝灰岩14，ホルンフェルス9など	尖頭器未成品1，彫器2，削片5，石核1，微細剥離剥片1，調整剥片2，剥片50			
			第5ブロック	428点 石材分析掲載は245点	44点（18%） チャート105，流紋岩52，玉髄17，黒曜石9，珪質凝灰岩2など	尖頭器未成品1，削片4，石核2，微細剥離剥片1，ドリル2，石刃2，剥片32			
			第6ブロック	3点	3点（100%）	尖頭器1，剥片2			
14	Ⅳ期	西裏遺跡 にしうらいせき	攪乱及び後世の遺構内出土	17点	7点（33%） 黒曜石4，玉髄2，ホルンフェルス，頁岩，チャート，珪質凝灰岩各1	ナイフ形石器3，尖頭器2，Uフレ1	石材鑑定は報告者	栃木県教委	斎藤　弘　1996『西裏遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
15	Ⅳ期	小倉水神社裏遺跡 おぐらみずじんじゃうらいせき 出土位置はローム層上位及び後世の遺構内出土	ユニット外	19点	4点（21%） チャート5，流紋岩4，黒曜石3	ナイフ形石器1，尖頭器2，二次加工剥片1	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	塚本師也　1990『小倉水神社裏遺跡　水木東遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
16	Ⅳ～Ⅴ期	西赤堀遺跡 にしあかぼりいせき 出土層位は今市パミス直下のソフトローム上部	第Ⅰブロック	328点	101点（31%） 凝灰質頁岩42，溶結凝灰岩34など	Uフレ2以外は剥片 （実測図の掲載なし）	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	上野修一　1996『西赤堀遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
			第Ⅱブロック	69点	27点（39%） 安山岩27，砂岩9，凝灰質頁岩7など	掻器1，Uフレ1			
			第Ⅲブロック	81点	41点（51%） 凝灰岩頁岩13，溶結凝灰岩9，安山岩7など	剥片41			
			第Ⅳブロック	2点	1点	剥片1			
17	Ⅴ期	赤羽根遺跡 あかばねいせき	後世の遺構内出土		2点	削片系細石刃核1，削器1 他に細石刃あり	石材鑑定は報告者	栃木県教委	田代　隆　1984『赤羽根』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
18	草創期	三ノ谷東遺跡 さんのやひがしいせき Ⅲ地区　第Ⅰ文化層 出土層位はソフトローム上位～漸移層	1ブロック	1,463点	276点（19%） 珪質頁岩，流紋岩主体	柳葉形尖頭器3，掻削器2	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	田代　隆　1990『三ノ谷東・谷館野北遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団

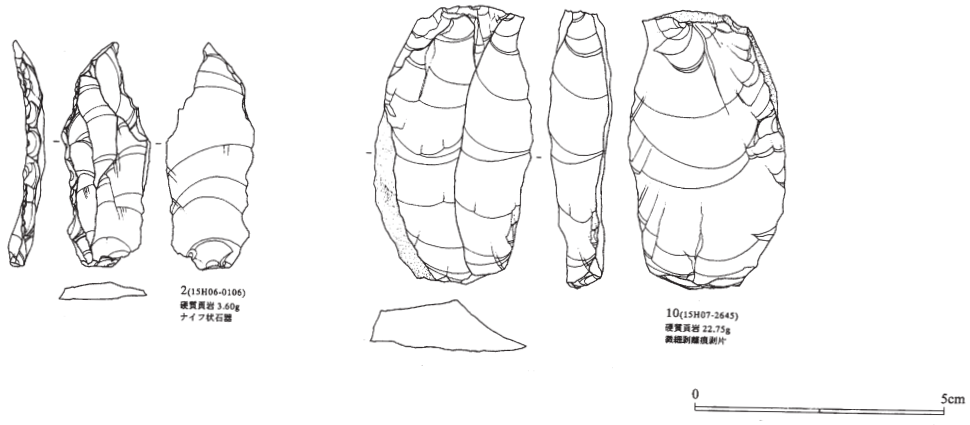
No.	時期	遺跡名	地点・文化層	全体数量	珪質頁岩製の点数	珪質頁岩製石器の内容	備考	資料所蔵者	調査報告書
19	草創期	山崎北遺跡 やまざききたいせき	包含層出土		3点	半月形石器1，尖頭器1，彫器1	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	上野修一　1998『山崎北・倉沢・台耕地・関口遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
20	Ⅴ期～草創期	那須官衙関連遺跡 なすかんがかんれんいせき	後世の遺構内出土		3点	荒屋型彫器1，神子柴型尖頭器1，Uフレ1	石材鑑定は報告者	栃木県教委	森嶋秀一　2000『那須官衙関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
21	草創期	川木谷遺跡 かわきやいせき	一括採取資料	29点	14点（48%） 安山岩6，チャート4，流紋岩4，石英1など	彫掻器1，掻器5，削器5，ドリル2 他石材に神子柴型石斧3，尖頭器7，掻器1，削器2，石斧調整剥片1など	石材鑑定は報告者	個人蔵 大田原市指定文化財	芹澤清八　1989「川木谷遺跡の石器群について」『川木谷遺跡』黒羽町教育委員会 芹澤清八　1990「栃木県川木谷遺跡採集の神子柴系石器群」『縄文時代』1　縄文文化研究会
22	草創期	片府田富士山遺跡 かたふだふじやまいせき	後世の遺構内出土	19点	15点（79%） 黒色安山岩2，珪質凝灰岩1，凝灰岩1	尖頭器2，調整剥片2，石刃4，石核4，剥片3	パリノ・サーベイ	大田原市教委	津野田陽介　2012『片府田富士山遺跡』大田原市教育委員会
23	草創期	谷館野東遺跡 やだてのひがしいせき	単独出土		1点	大形尖頭器	石材鑑定は報告者	栃木県教委	田代　隆　1993『谷館野東・谷館野西・上芝遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
24	草創期	狭原根本遺跡 せぶはらねもといせき	単独出土		1点	大形尖頭器未成品	石材鑑定は報告者	個人蔵	森嶋秀一　2011「栃木県東部の縄文遺跡」『氏家の歴史と文化』10
25	草創期	鹿沼流通業務団地内遺跡 かぬまりゅうつうぎょうむだんちないいせき	C区グリッド出土		2点	大型な柳葉形の尖頭器1，木葉形尖頭器1 他石材に片刃石斧3	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	芹澤清八　1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県教育委員会　㈶栃木県文化振興事業団
26	草創期	那須町内出土 なすちょうないしゅつど	採集資料		1点	大型尖頭器	石材鑑定は報告者	個人蔵	森嶋秀一　2015「栃木県那須町出土の大型尖頭器について」『栃木県立博物館研究紀要』第32号
27	草創期	逃室遺跡 にがしむろいせき	採集資料		1点	大型尖頭器	石材鑑定は報告者	那須町教委	那須町教育委員会　1963『栃木県那須郡脇沢遺跡・逃室遺跡調査報告』
28	草創期	小深遺跡 おぶかいせき	採集資料		1点	大型の木葉形尖頭器	石材鑑定は報告者		中村紀男　1964「栃木県小深発見の尖頭器について」『若木考古』70号　國學院大学
29	Ⅲ～Ⅳ期	間々田六本木遺跡 ままだろっぽんぎいせき ハードローム上部～ソフトローム下部	3号墳周辺出土	62点	16点? 流紋岩，黒曜石，安山岩など（すべての石材記載なし）	ナイフ形石器1，石刃含む剥片15 他の石材のナイフ形石器や両面調整の尖頭器あり	石材鑑定は県立博物館　荒川竜一	栃木県教委	片根義幸　1997『間々田地区遺跡群Ⅰ』栃木県教育委員会㈶栃木県文化振興事業団
30	Ⅱ期	八剣遺跡 やつるぎいせき 出土層位はハードローム下部	第1ブロック	2点	1点（No.7）	両側縁に疎らな二次加工，他にナイフ形石器	㈱アルカ	栃木県教委	玉橋さやか　2001『八剣遺跡（本文編Ⅰ）』栃木県教育委員会　㈶とちぎ生涯学習文化財団
	Ⅲ～Ⅴ期		後世の遺構内出土	17点	8点	ナイフ形石器1，大型有樋尖頭器1，細石刃1，石刃4，Rフレ1			
31	Ⅳ期	西山遺跡 にしやまいせき	ブロック外・攪乱層出土	37点 縄文時代の石器も混在か	11点（29%）	ナイフ形石器2，尖頭器2，掻器1，削器3，縦長剥片2，石核1	㈱アルカ	小山市教委	松井　泉　1996『西山遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会



第１図　上林遺跡　第Ⅱ文化層出土石器（1）

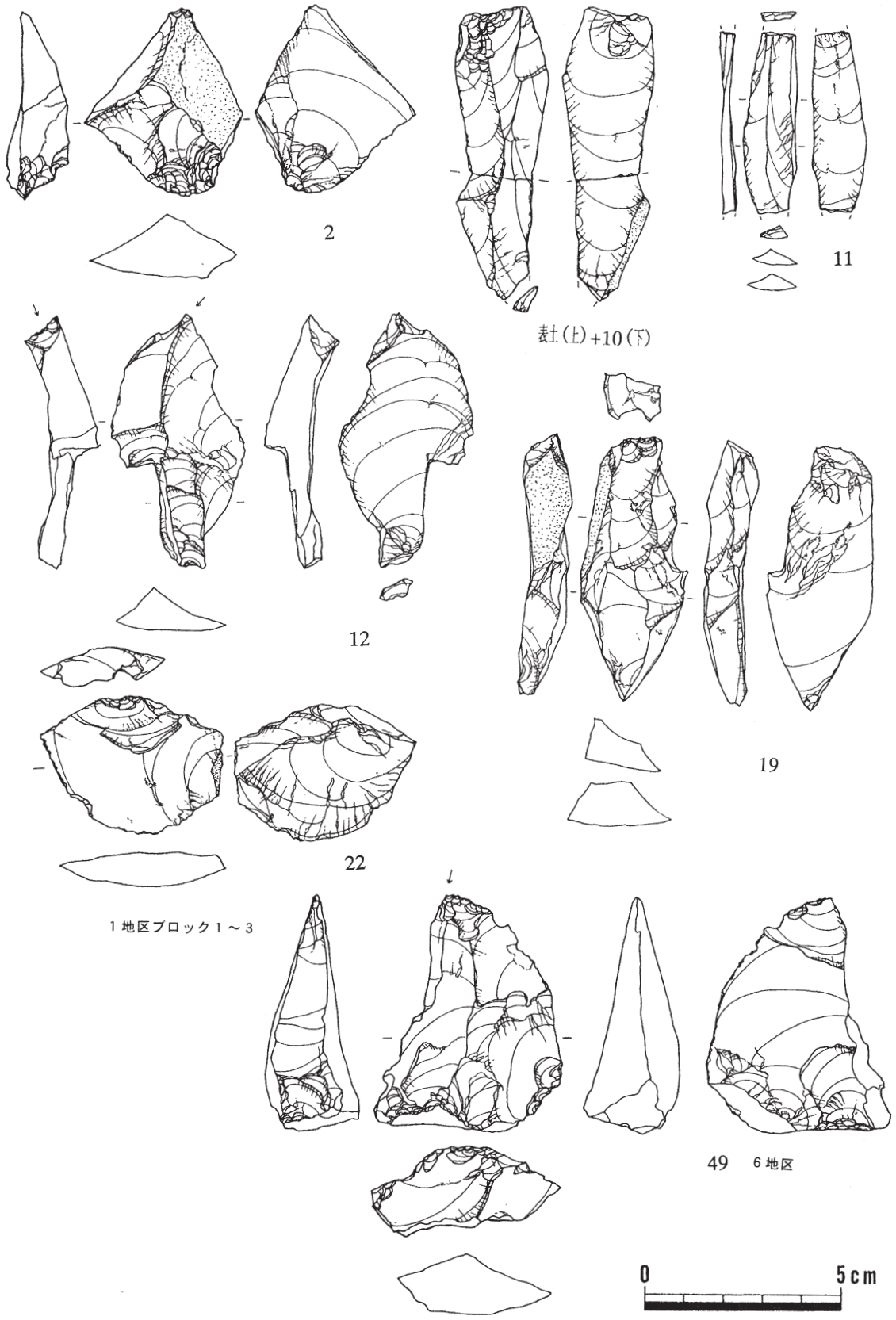


エリア内出土（2）

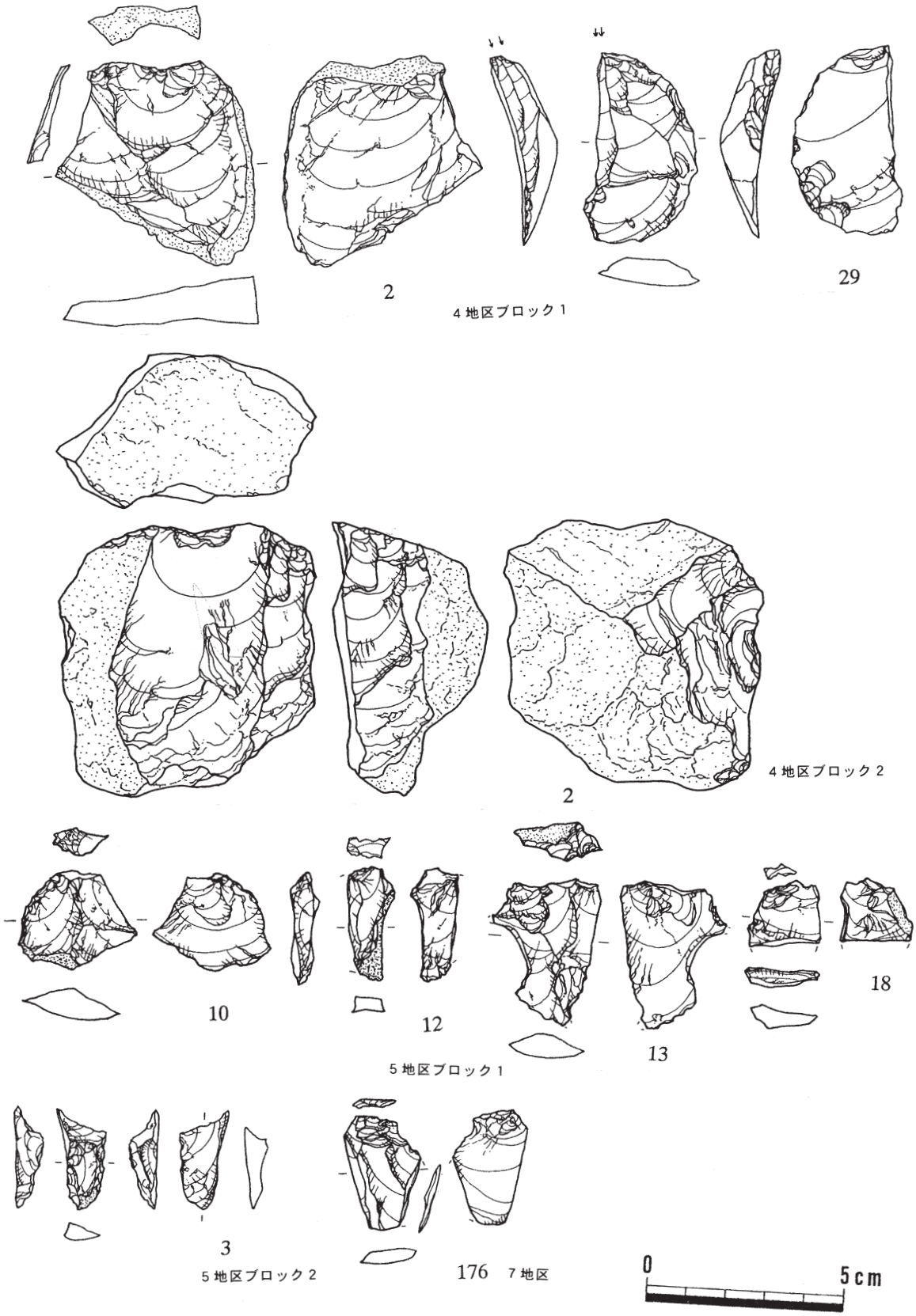


エリア外出土

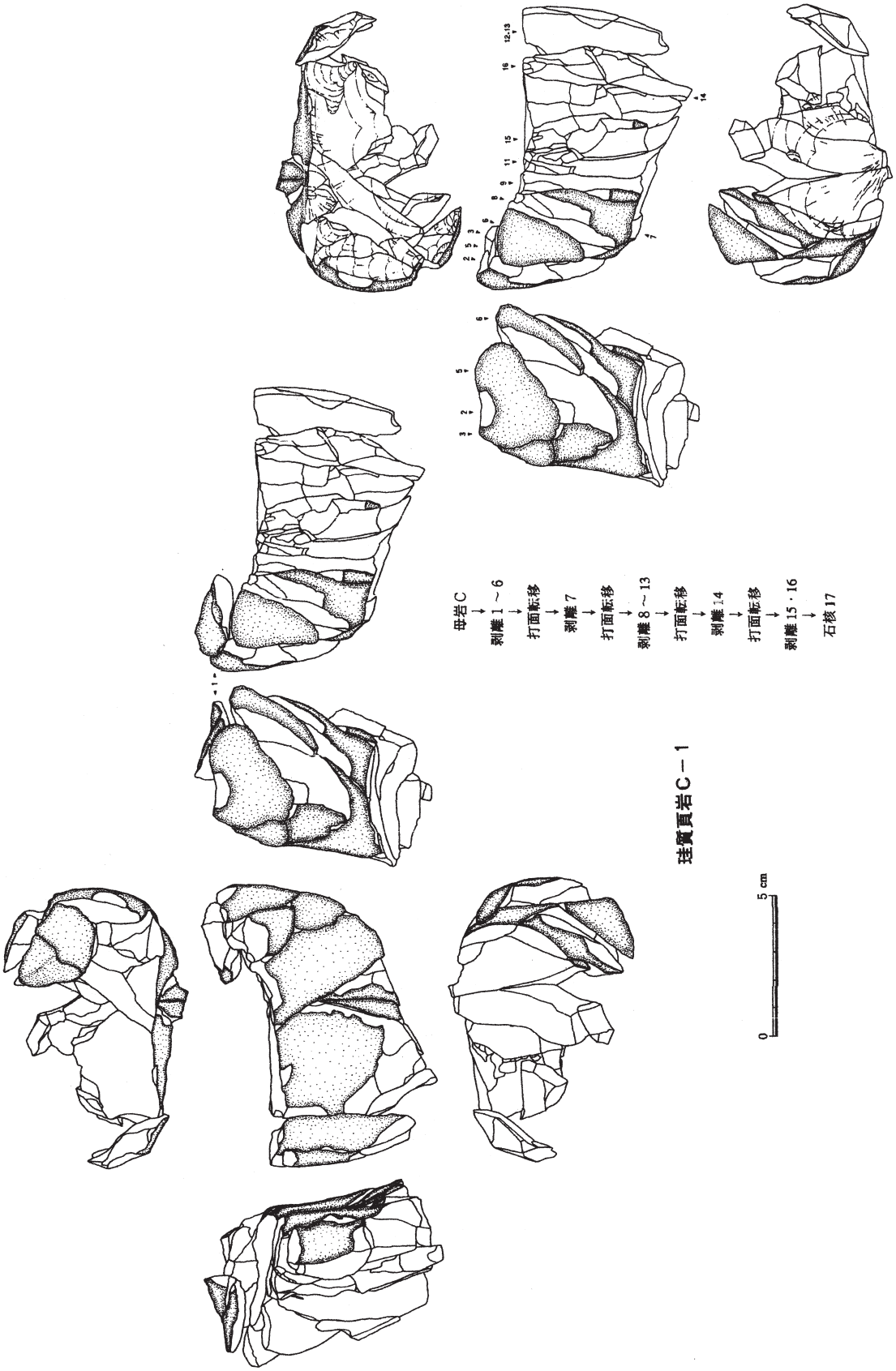
第２図　上林遺跡　第Ⅱ文化層出土石器（2）



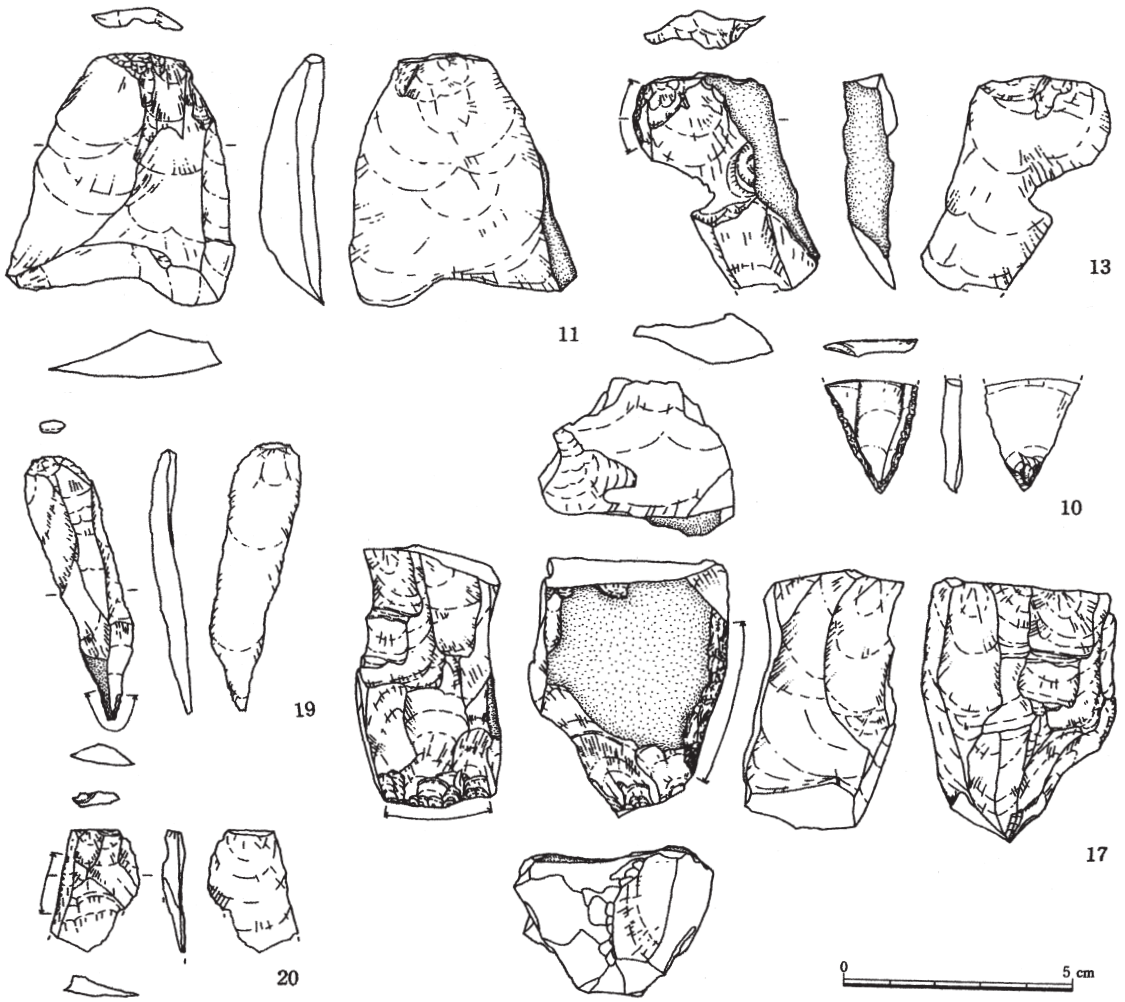
第３図　大志白遺跡　１・６地区出土石器



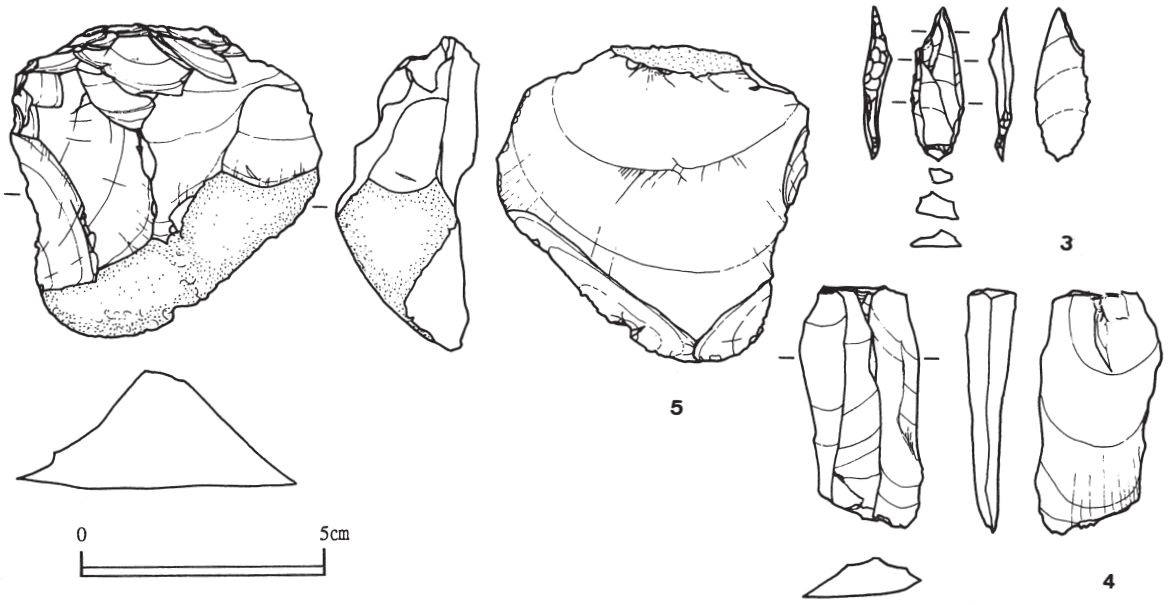
第４図　大志白遺跡　４・５・７地区出土石器



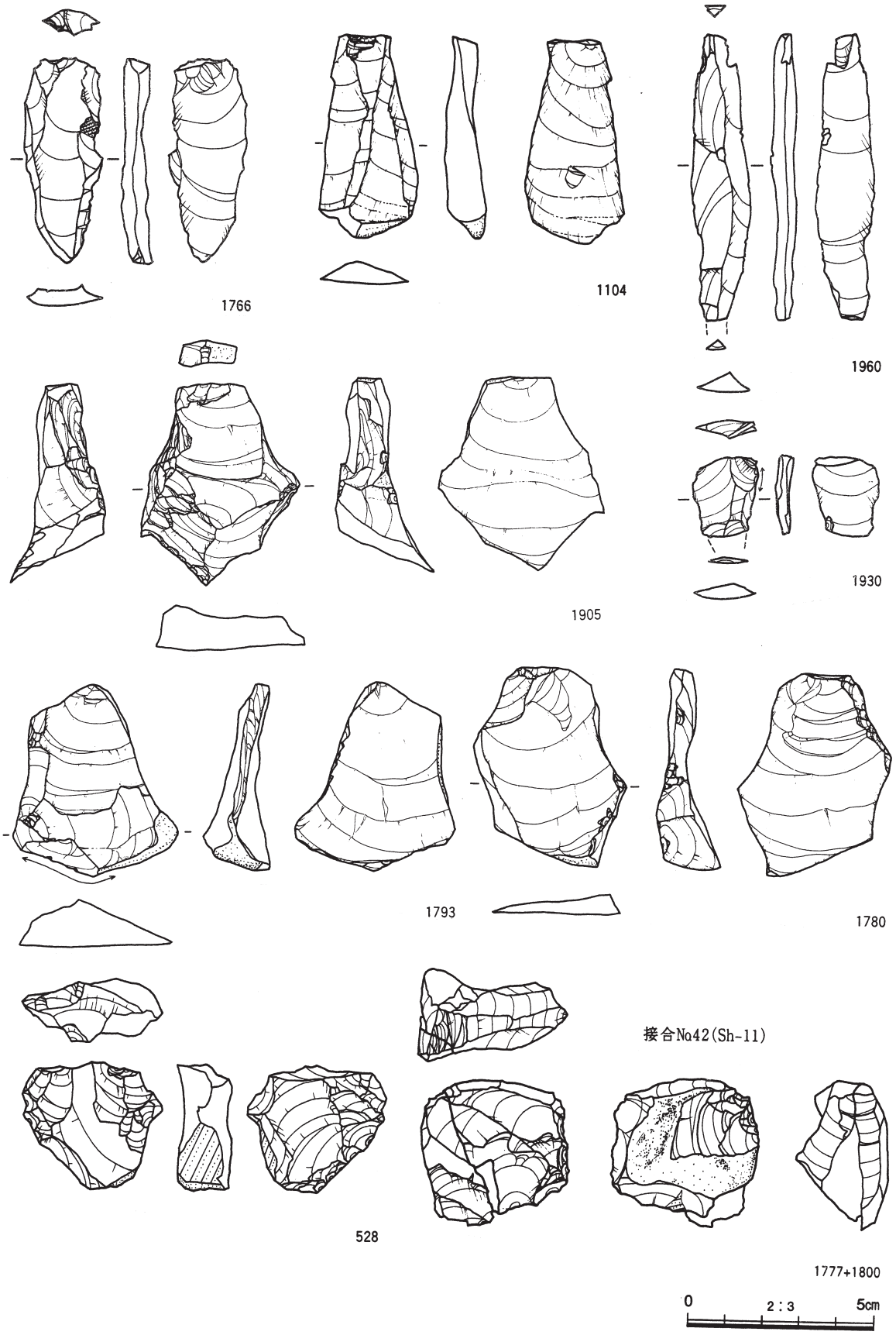
第５図　上神主・茂原遺跡　第１ブロック出土石器（１）



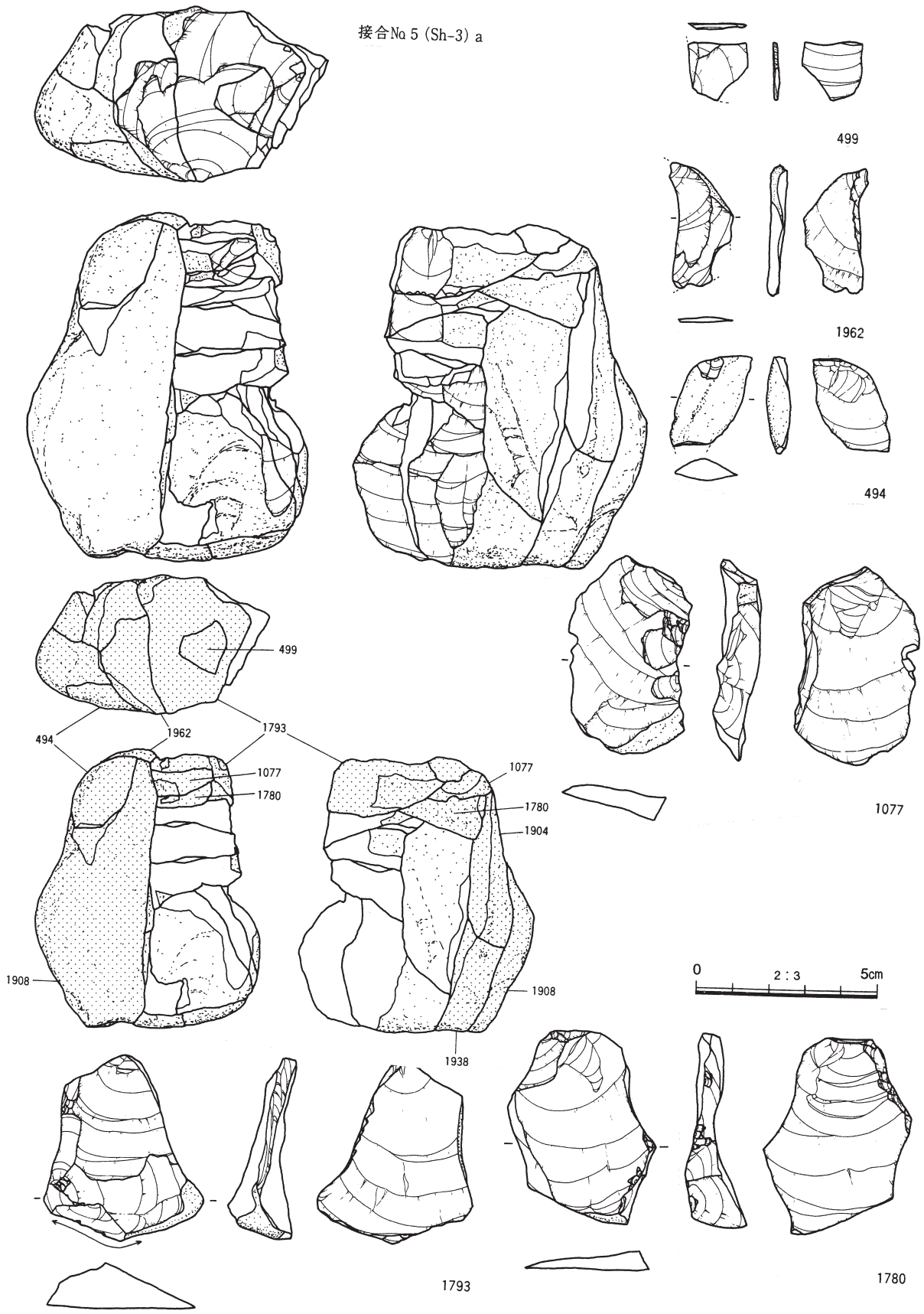
第６図　上神主・茂原遺跡　第１ブロック出土石器（２）



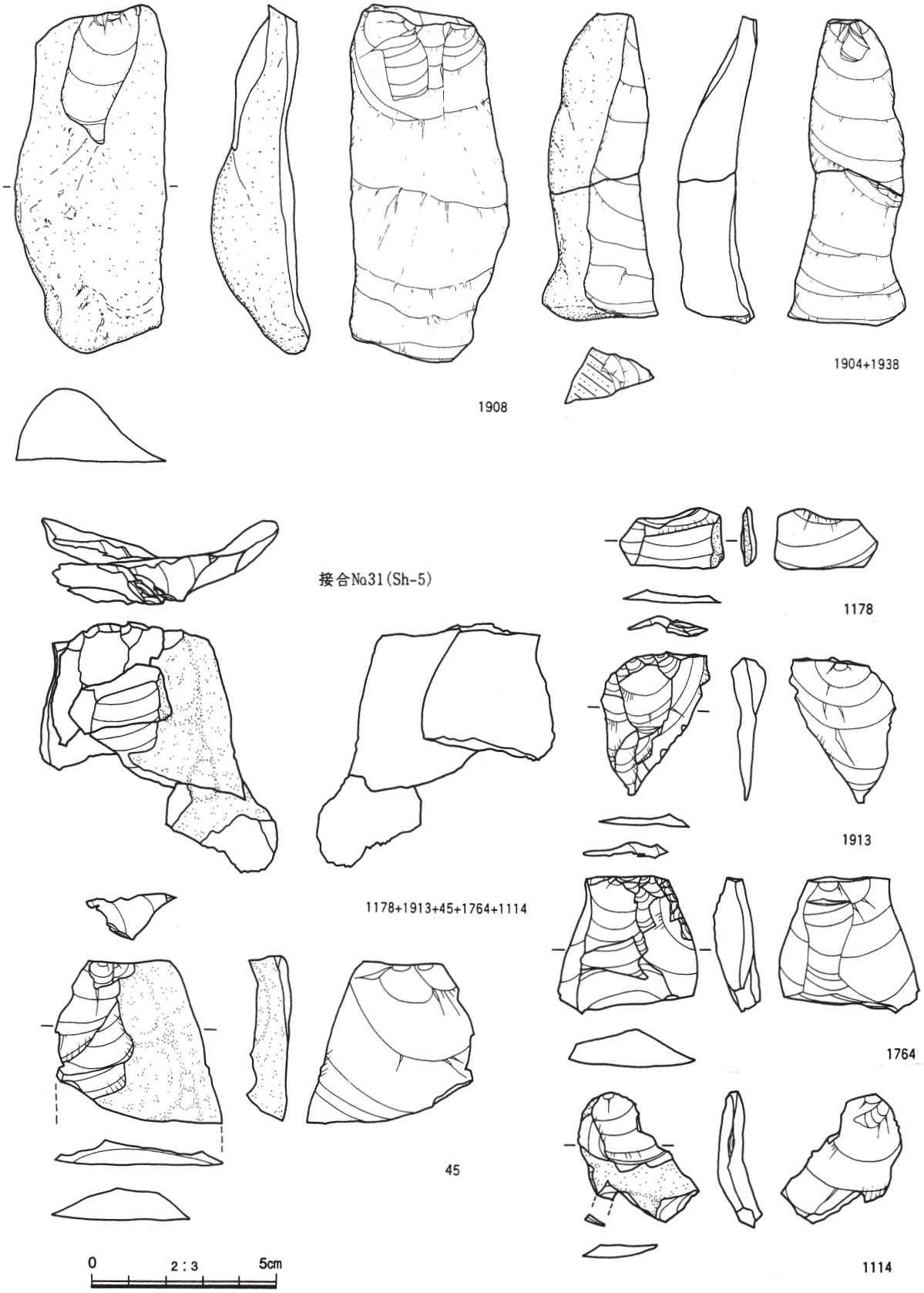
第７図　塚崎遺跡　第２文化層ブロックＢ出土石器



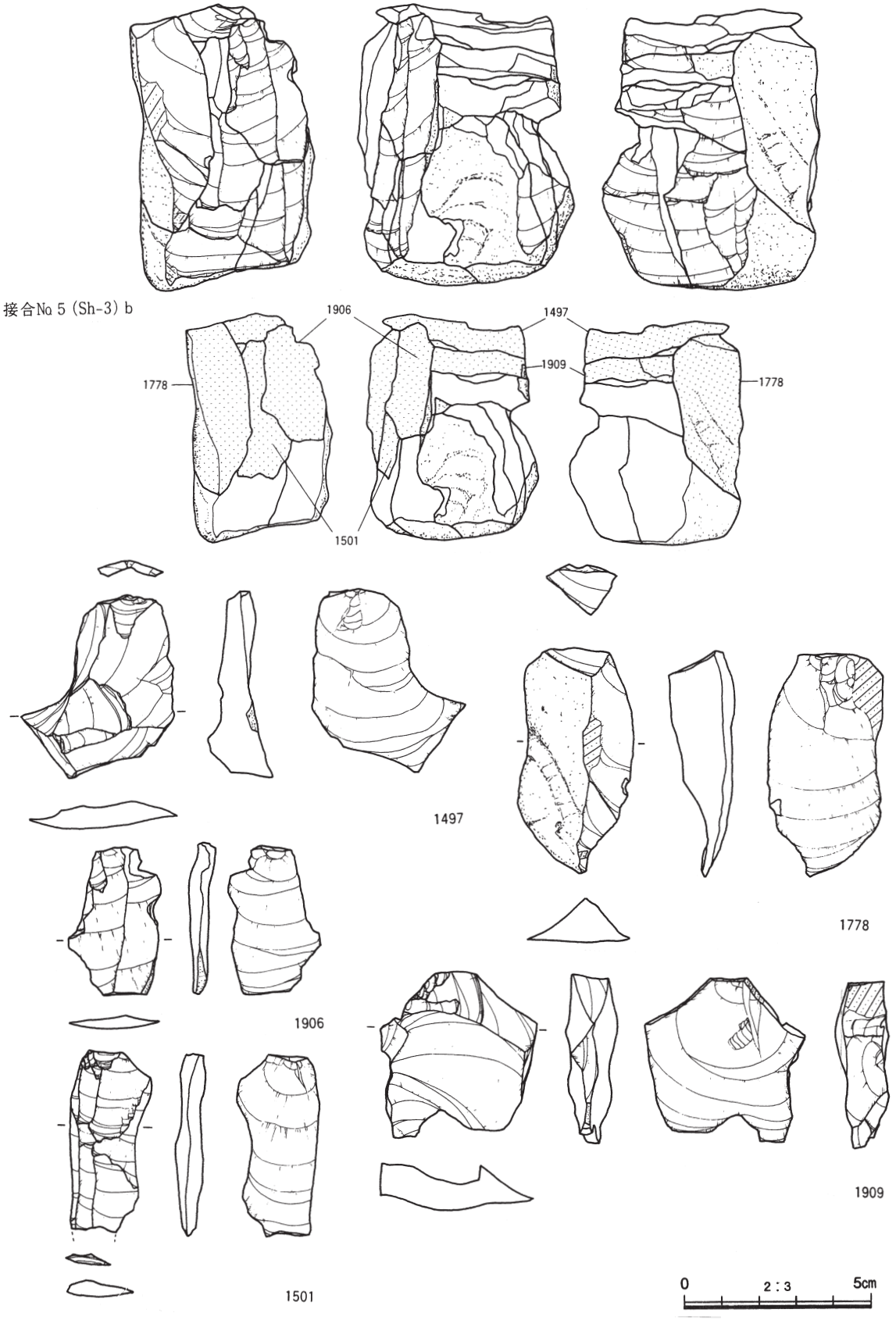
第８図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（１）



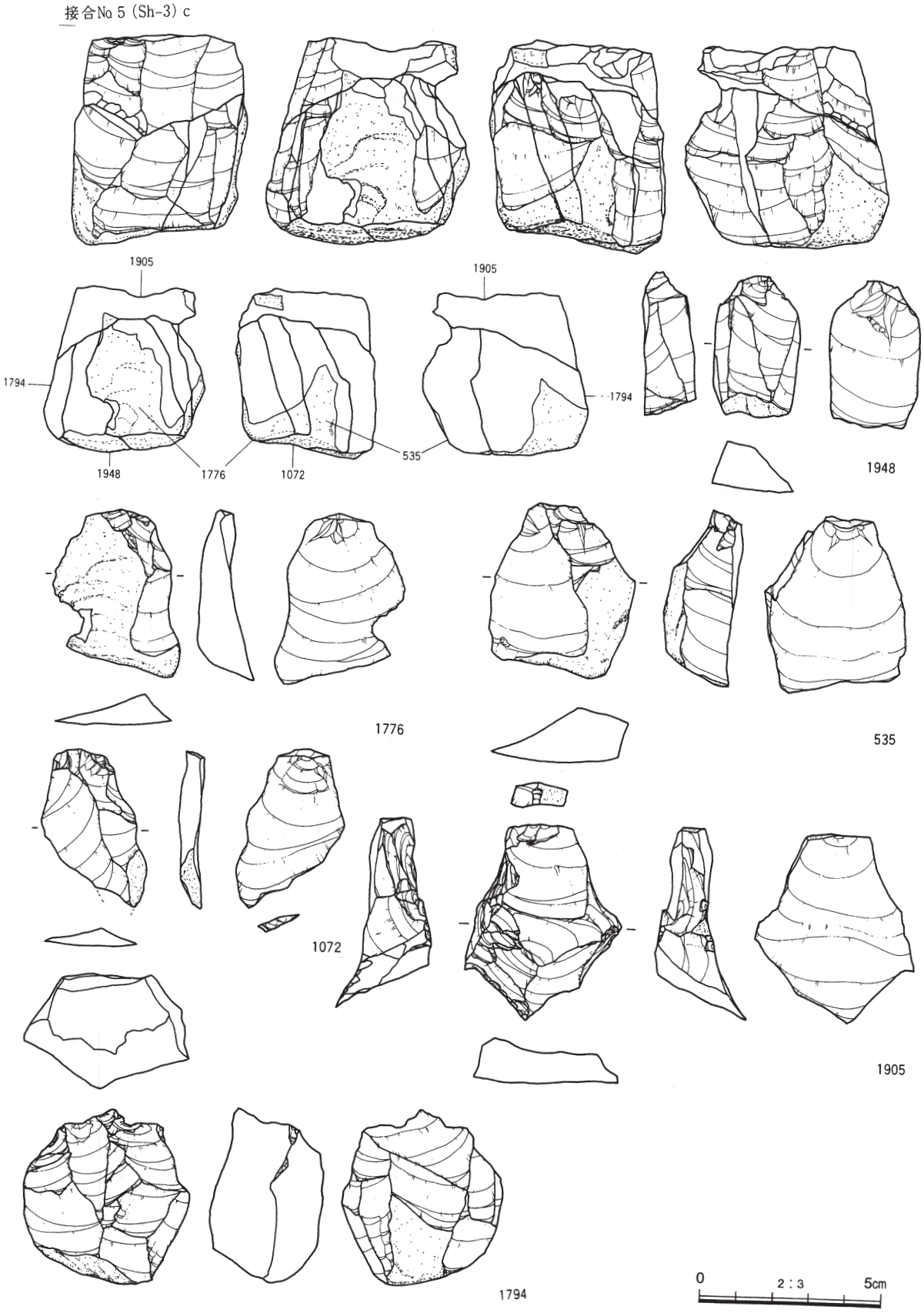
第９図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（２）



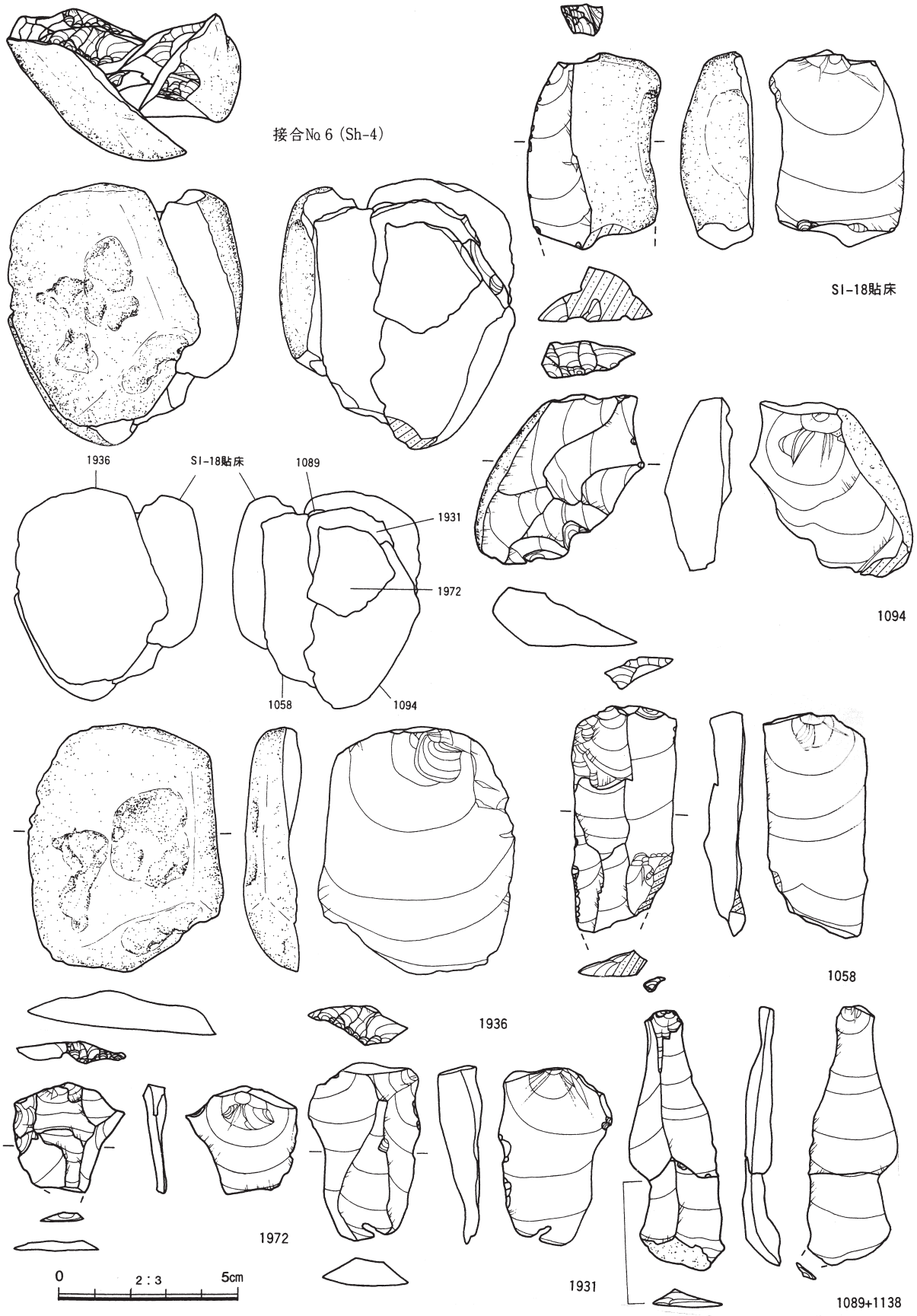
第10図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（３）



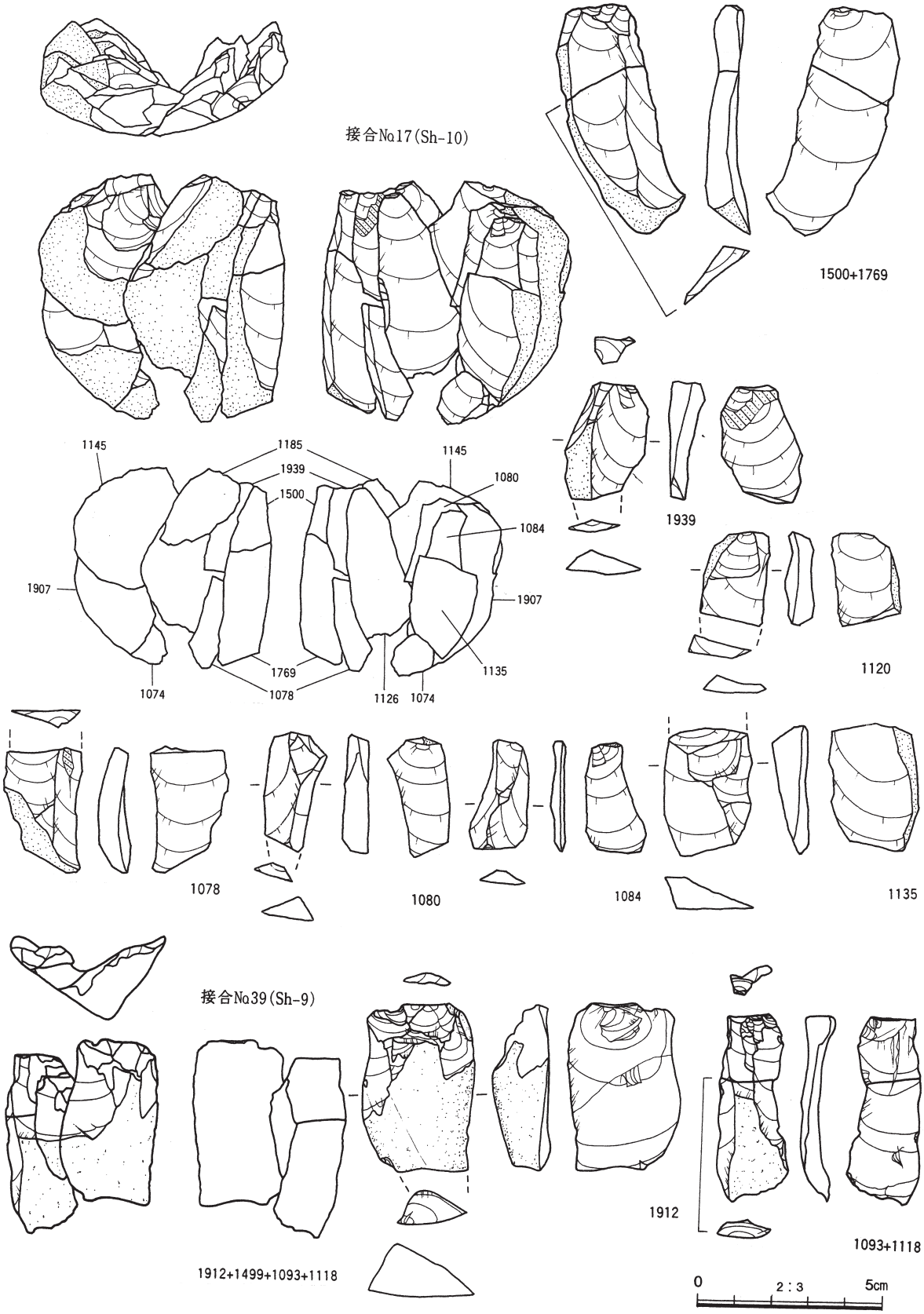
第11図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（４）



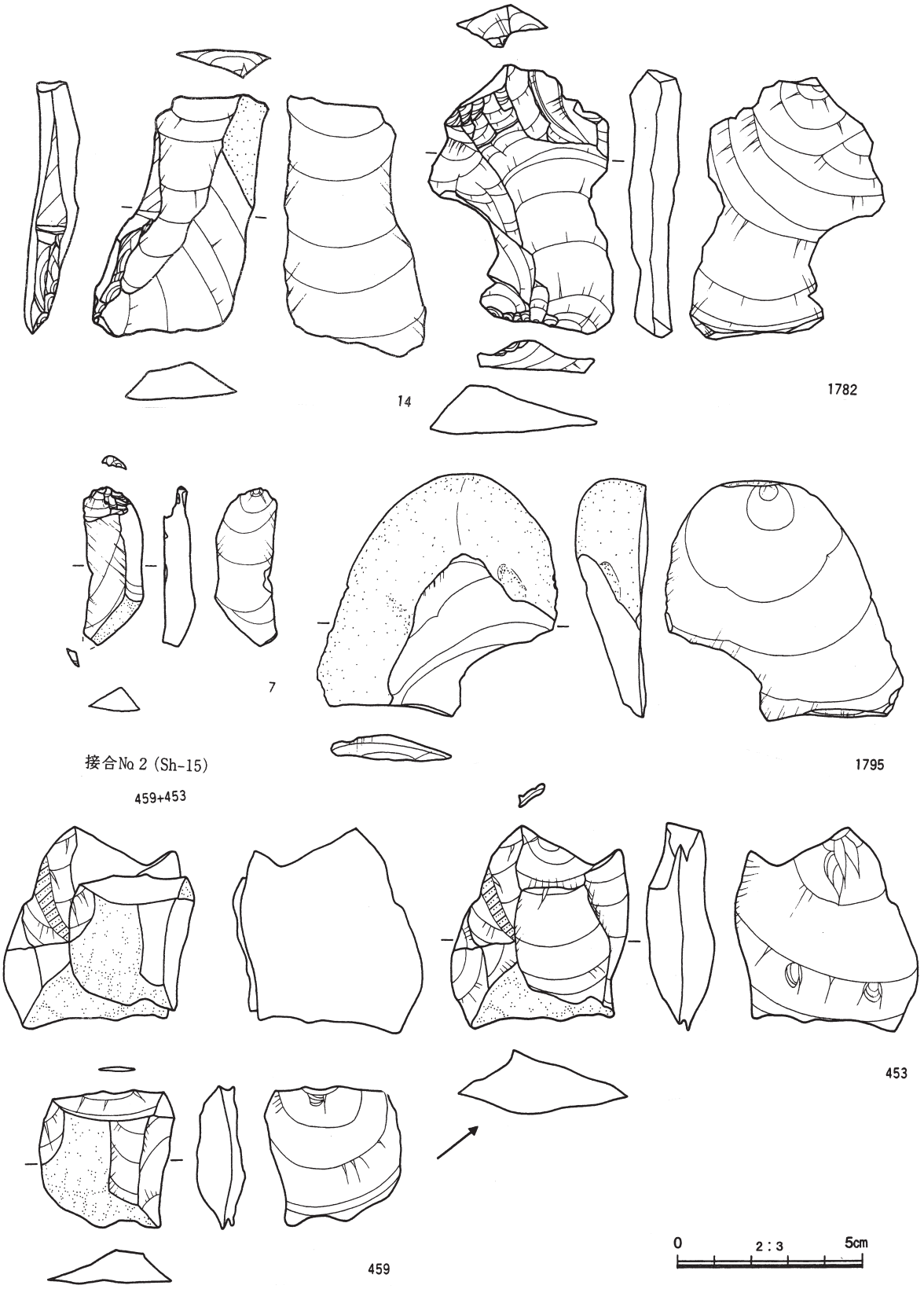
第12図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（５）



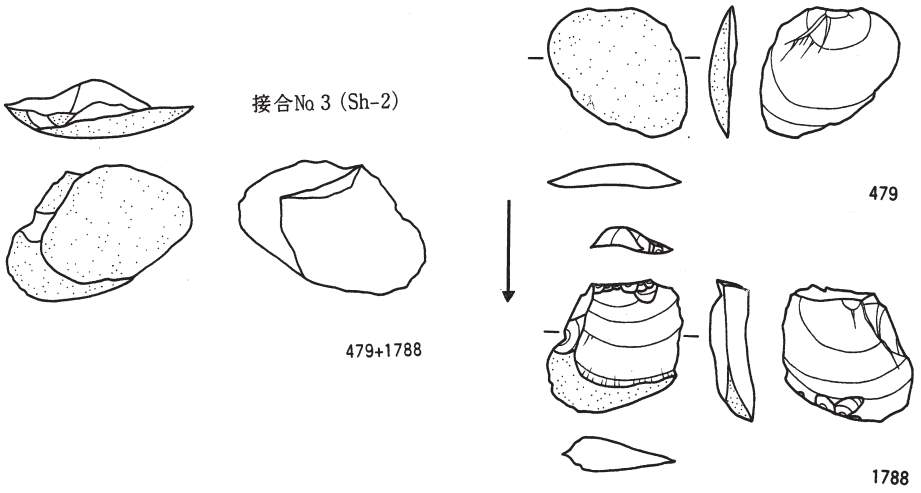
第13図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（６）



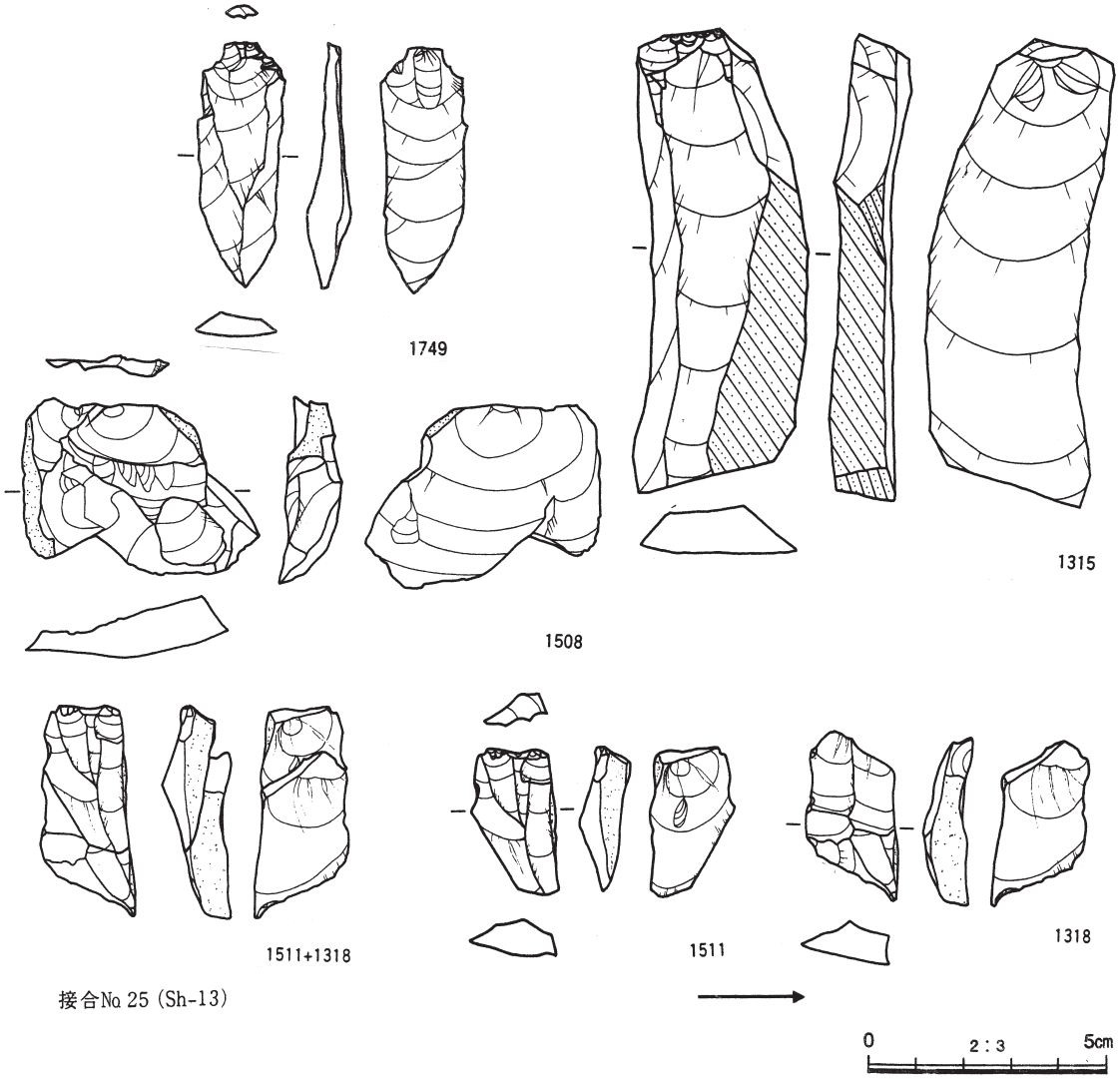
第14図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層２号ブロック出土石器（７）



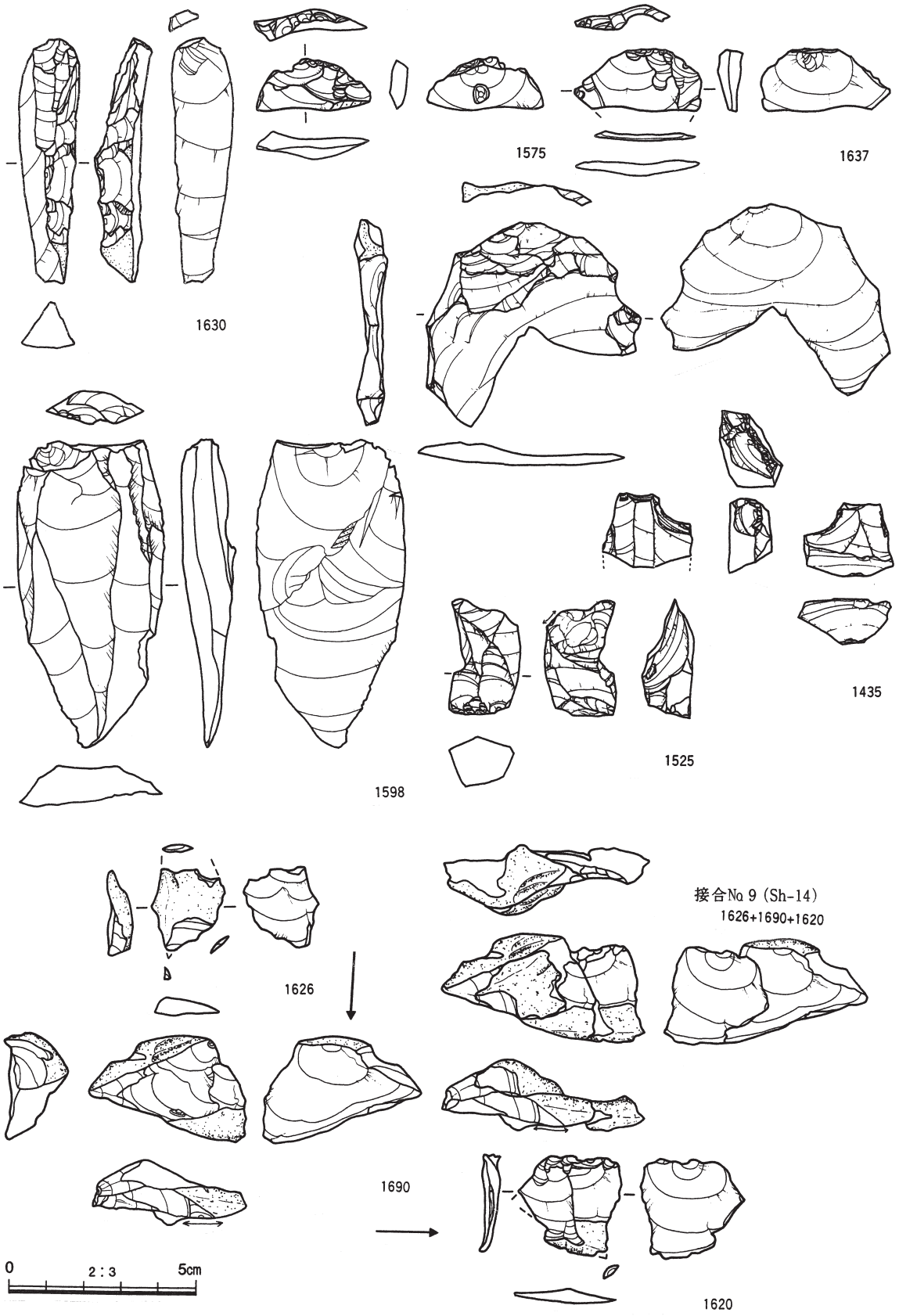
第15図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層３号ブロック出土石器（１）



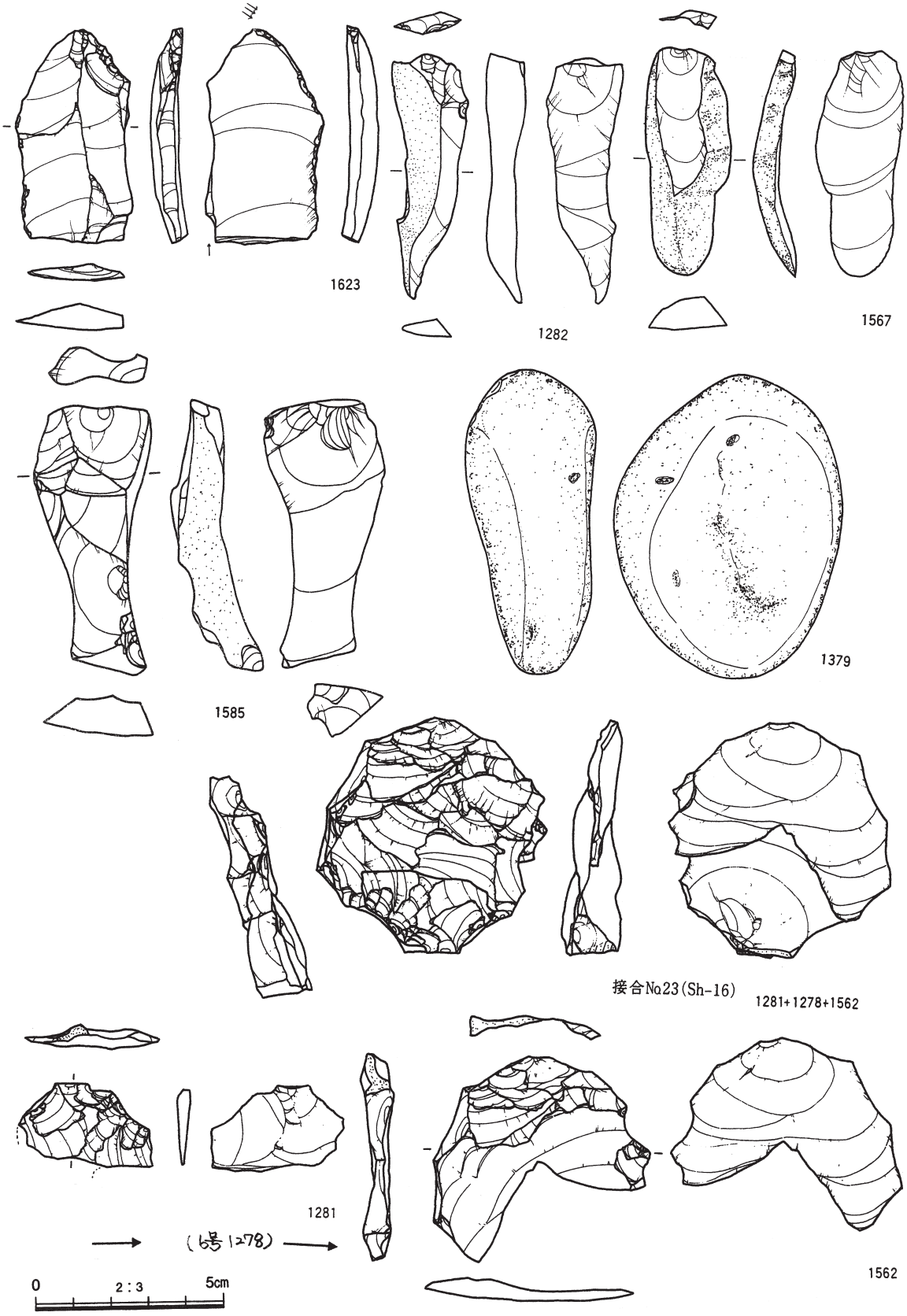
第16図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層３号ブロック出土石器（２）



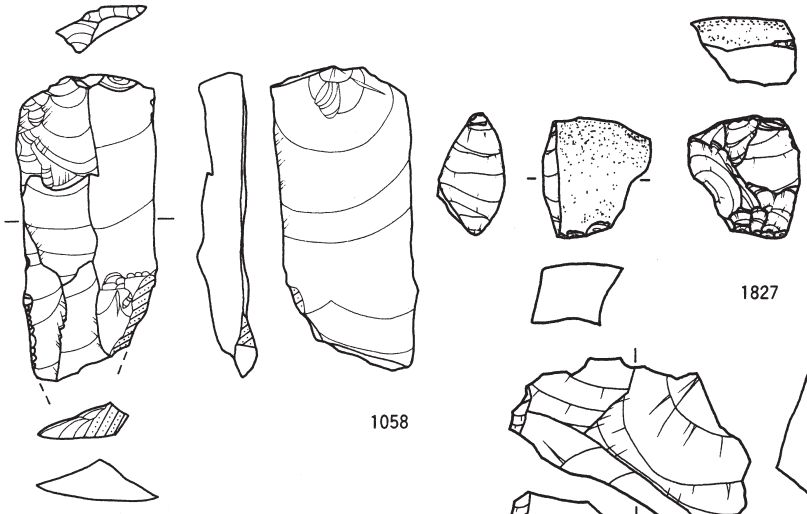
第17図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層４号ブロック出土石器



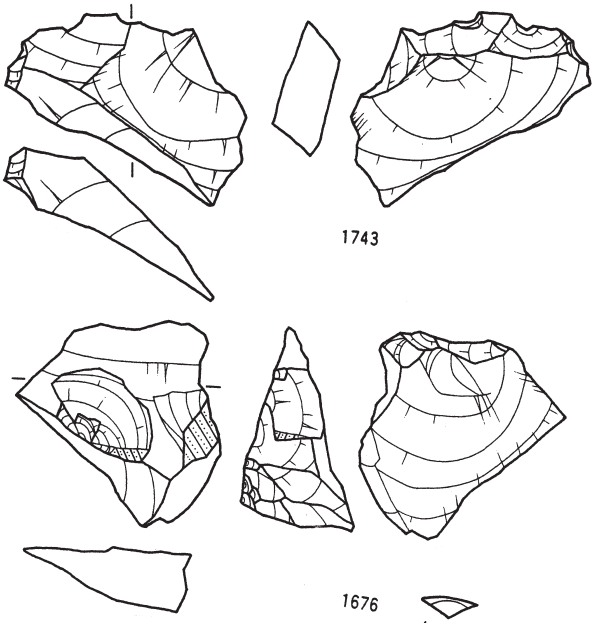
第18図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層５号ブロック出土石器

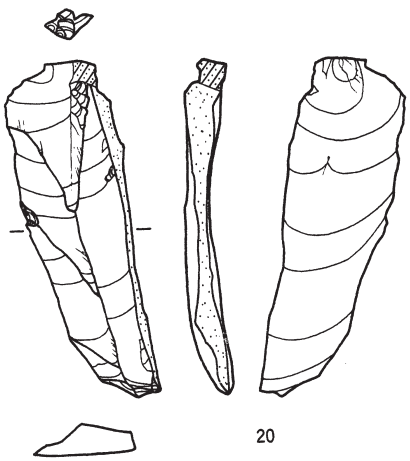


第19図　伊勢崎Ⅱ遺跡　第Ⅱ文化層６号ブロック出土石器

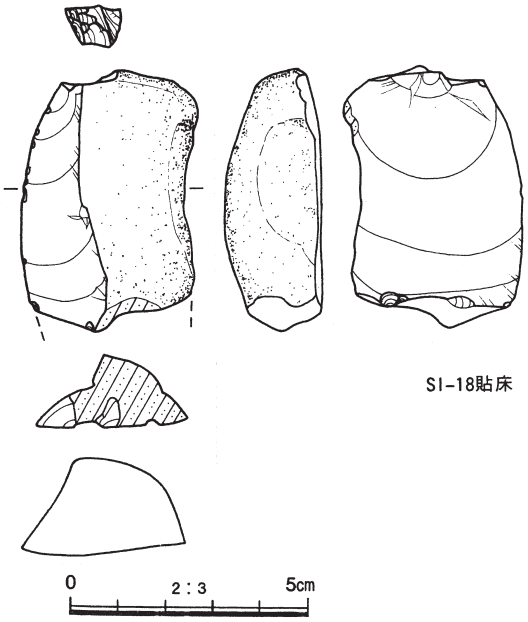


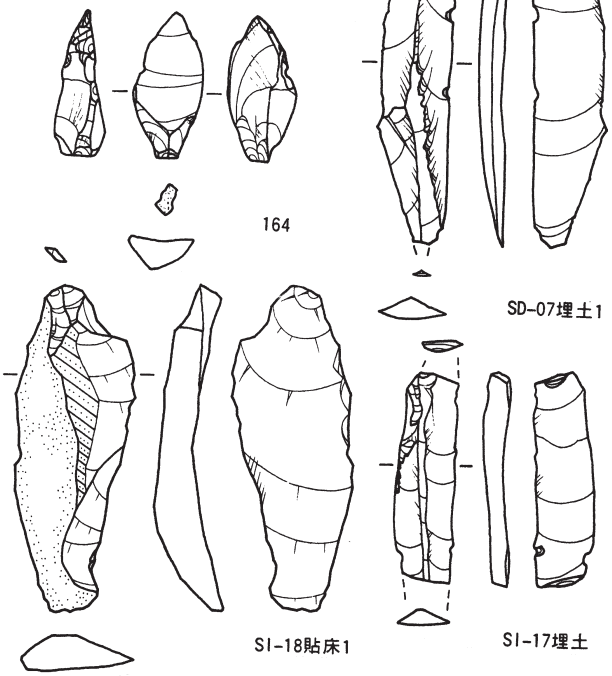
第20図　伊勢崎Ⅱ遺跡
第Ⅱ文化層９号
ブロック出土石器



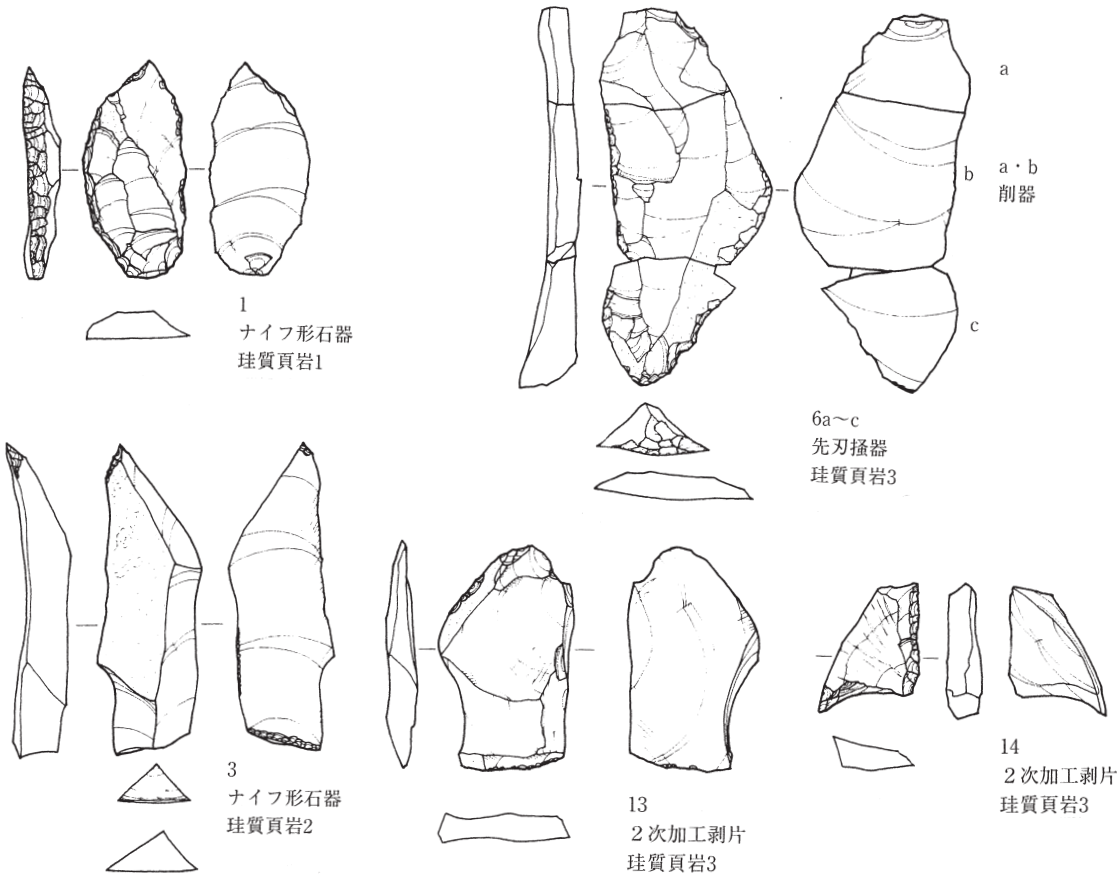


第21図　伊勢崎Ⅱ遺跡
第Ⅱ文化層10号ブロック出土石器

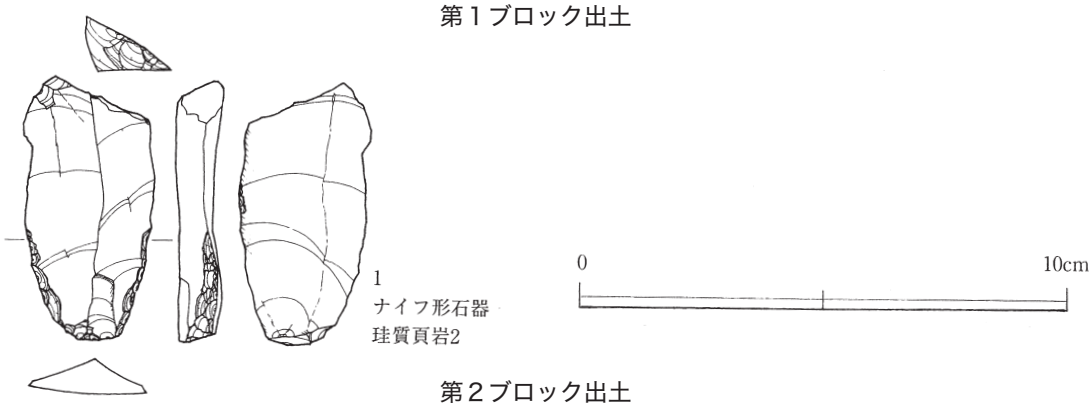




第22図　伊勢崎Ⅱ遺跡　ブロック外出土石器

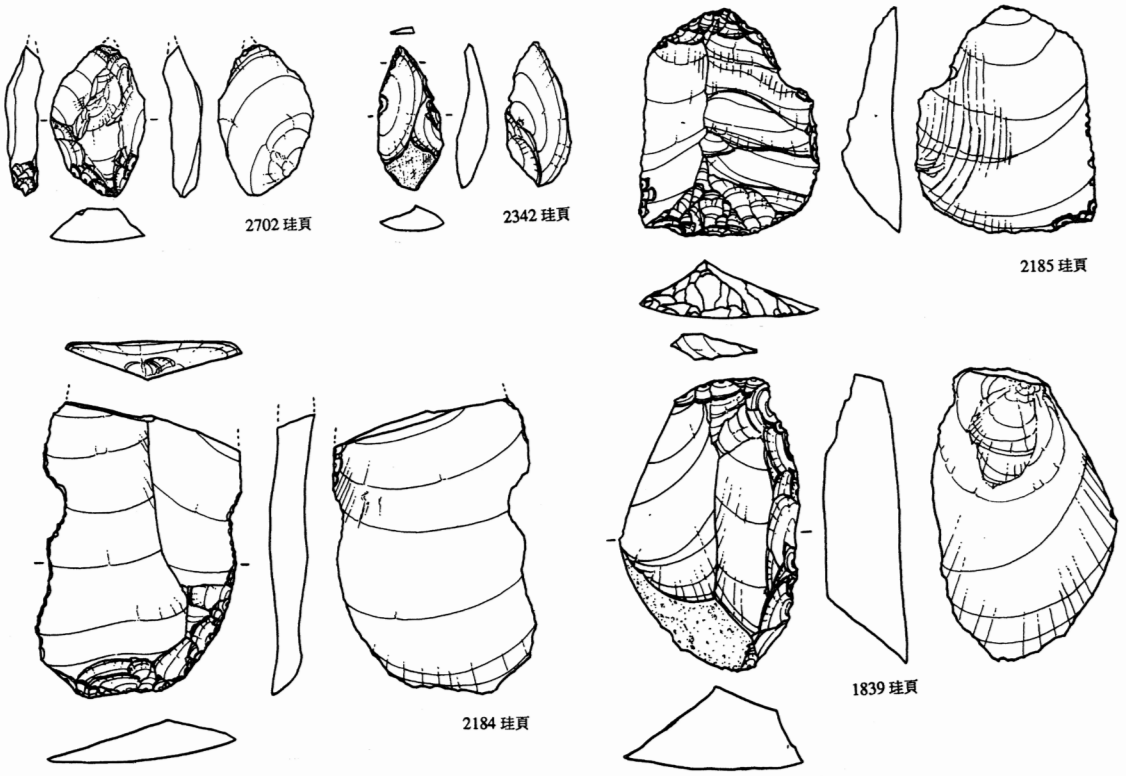


第１ブロック出土

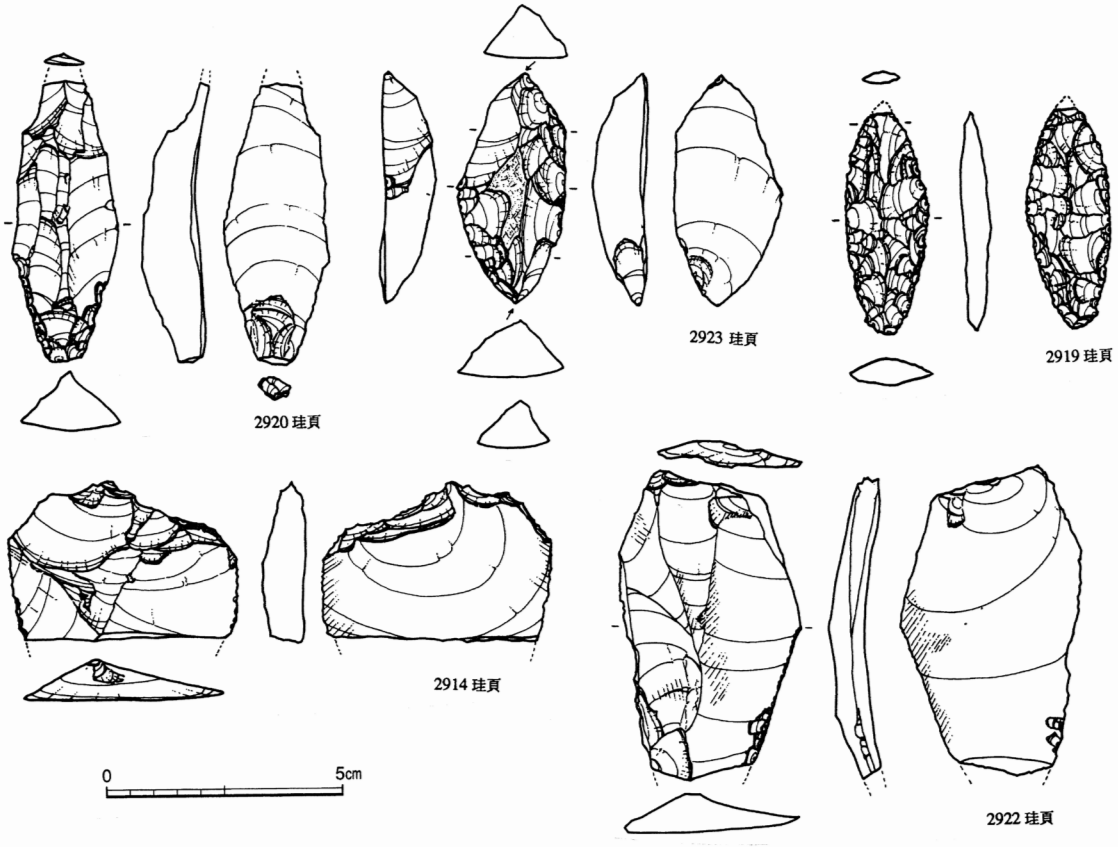


第２ブロック出土

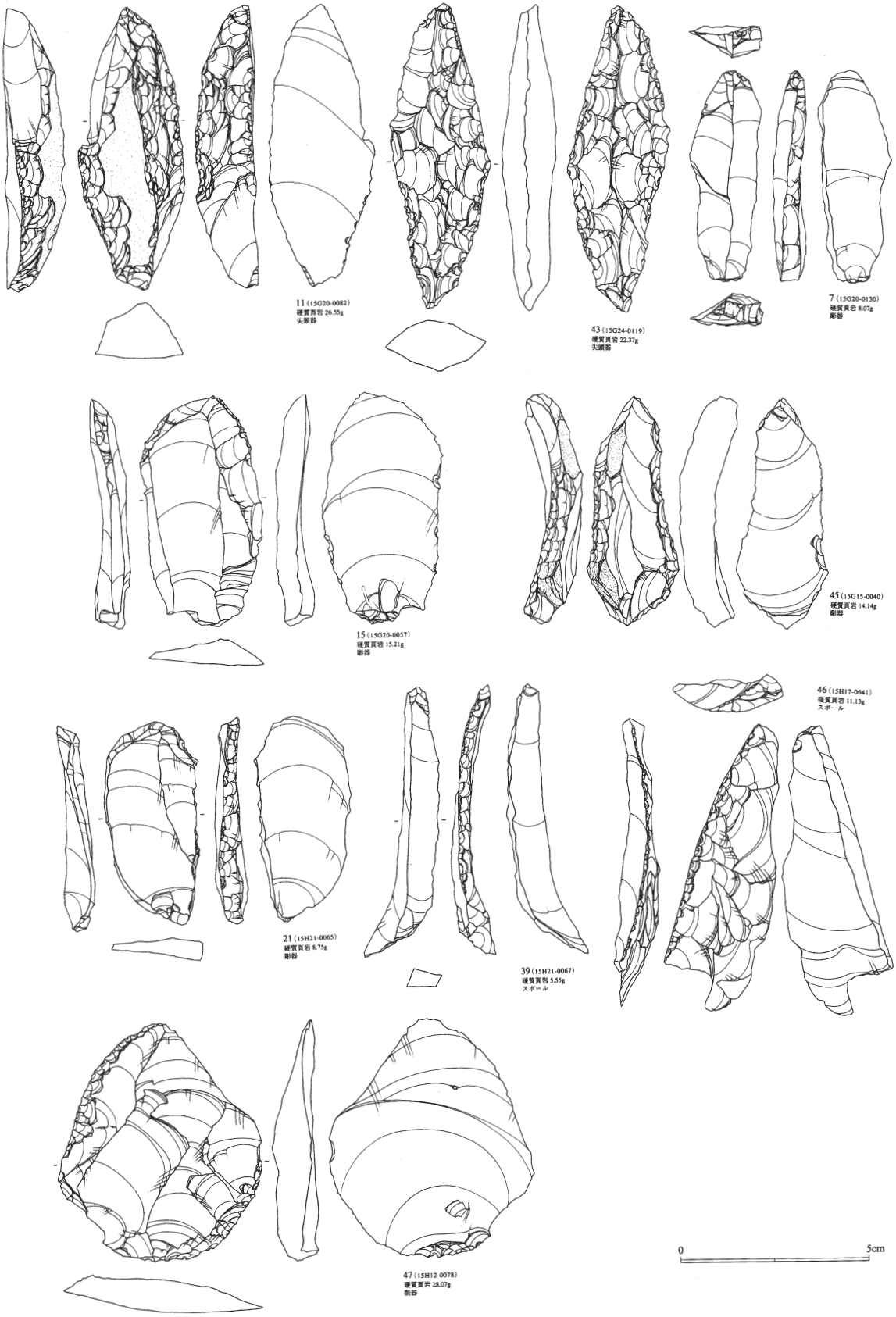
第23図　寺平遺跡　第２文化層出土石器



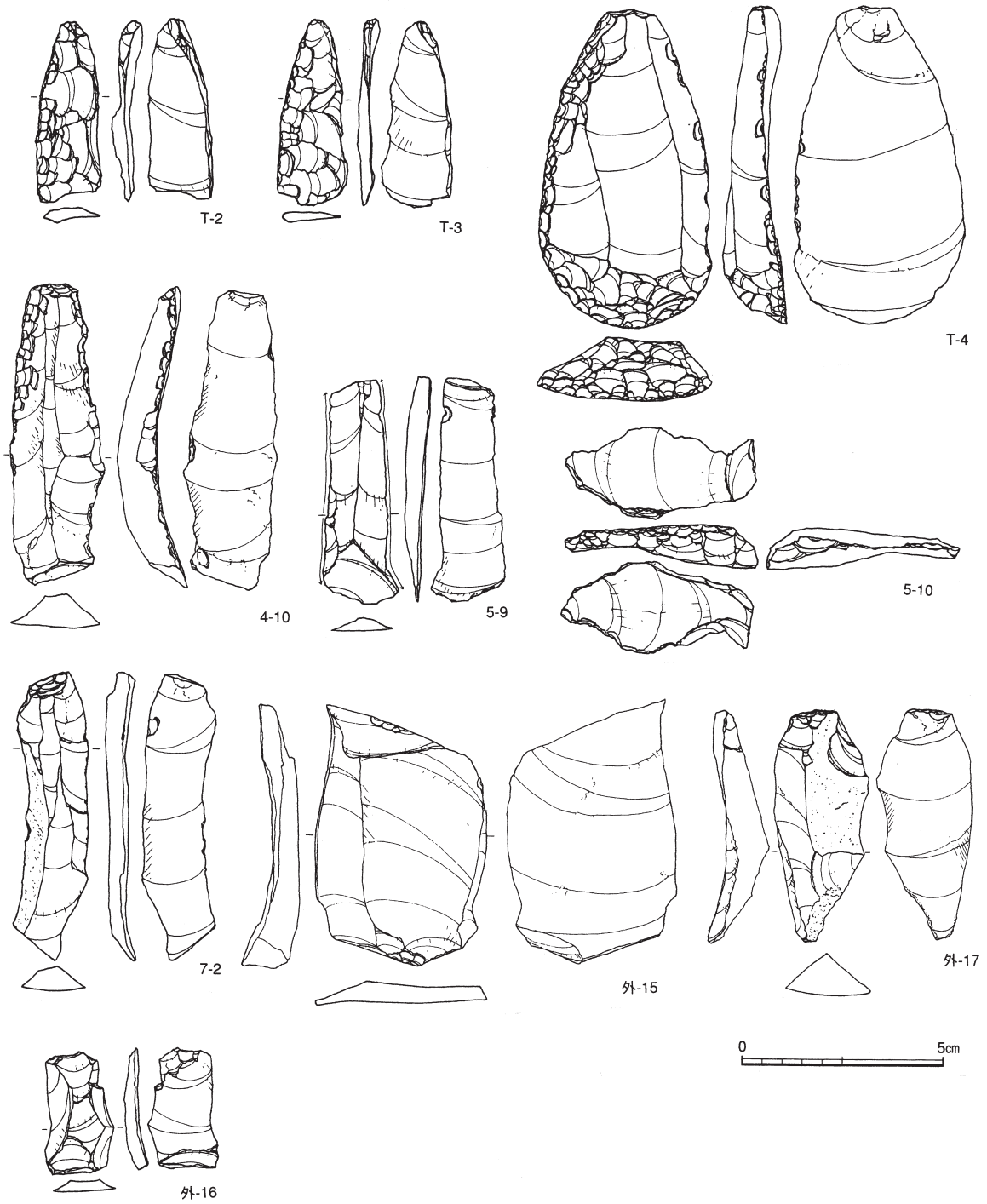
第24図　三ノ谷東遺跡　Ⅲ地区第２文化層出土石器



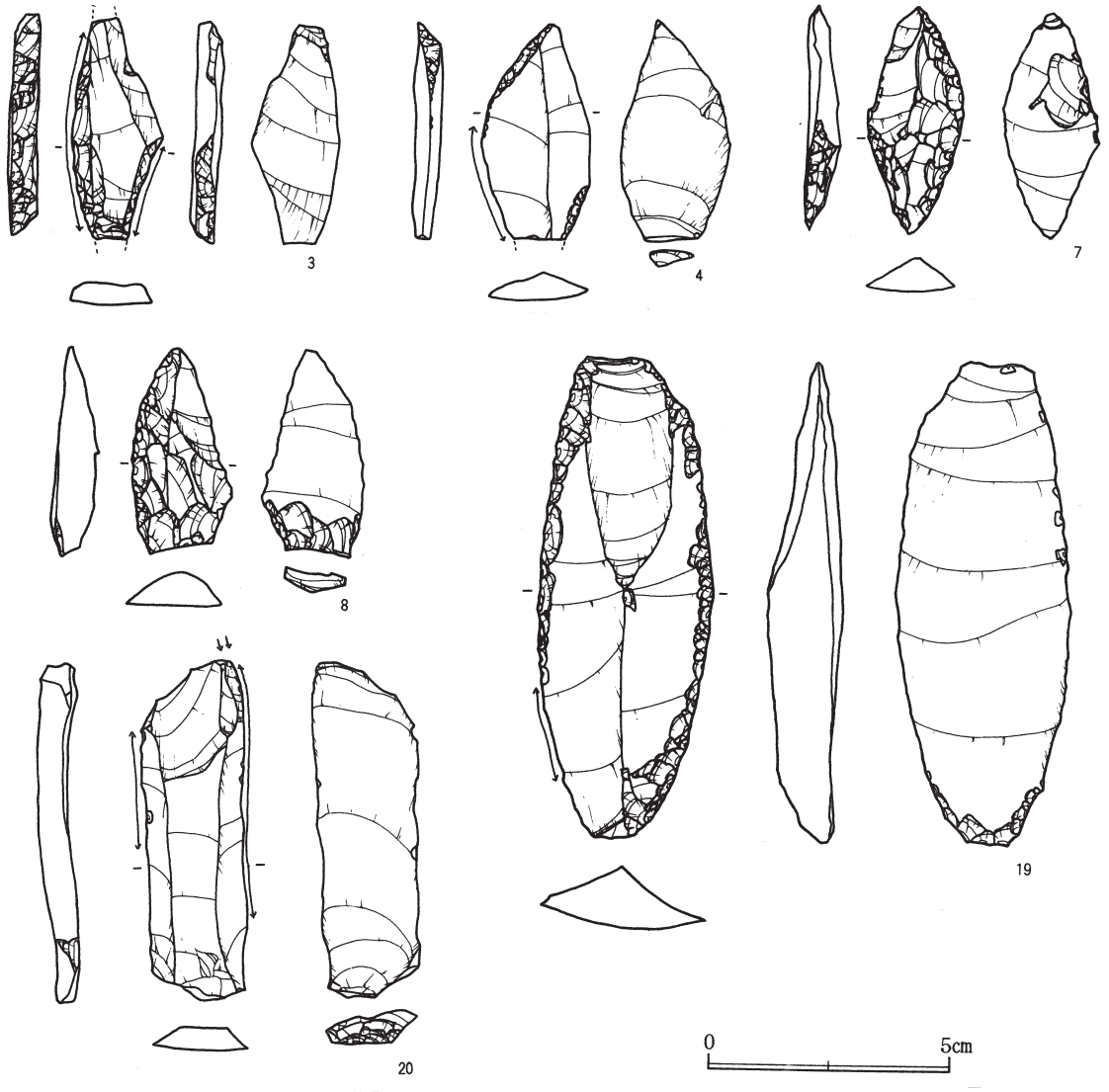
第25図　三ノ谷東遺跡　第２文化層ブロック外出土石器



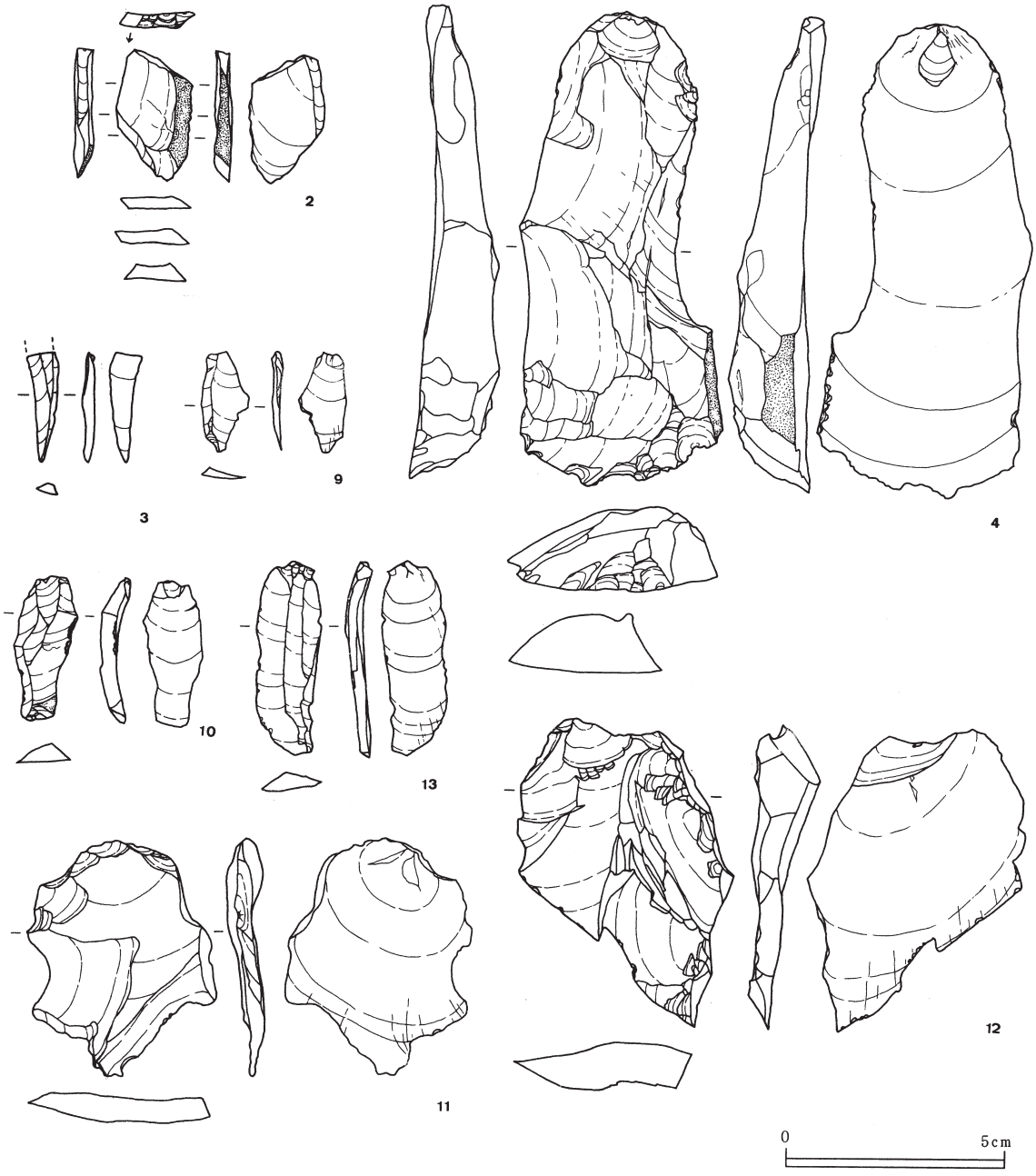
第26図　上林遺跡　第Ⅰ文化層出土石器（1）



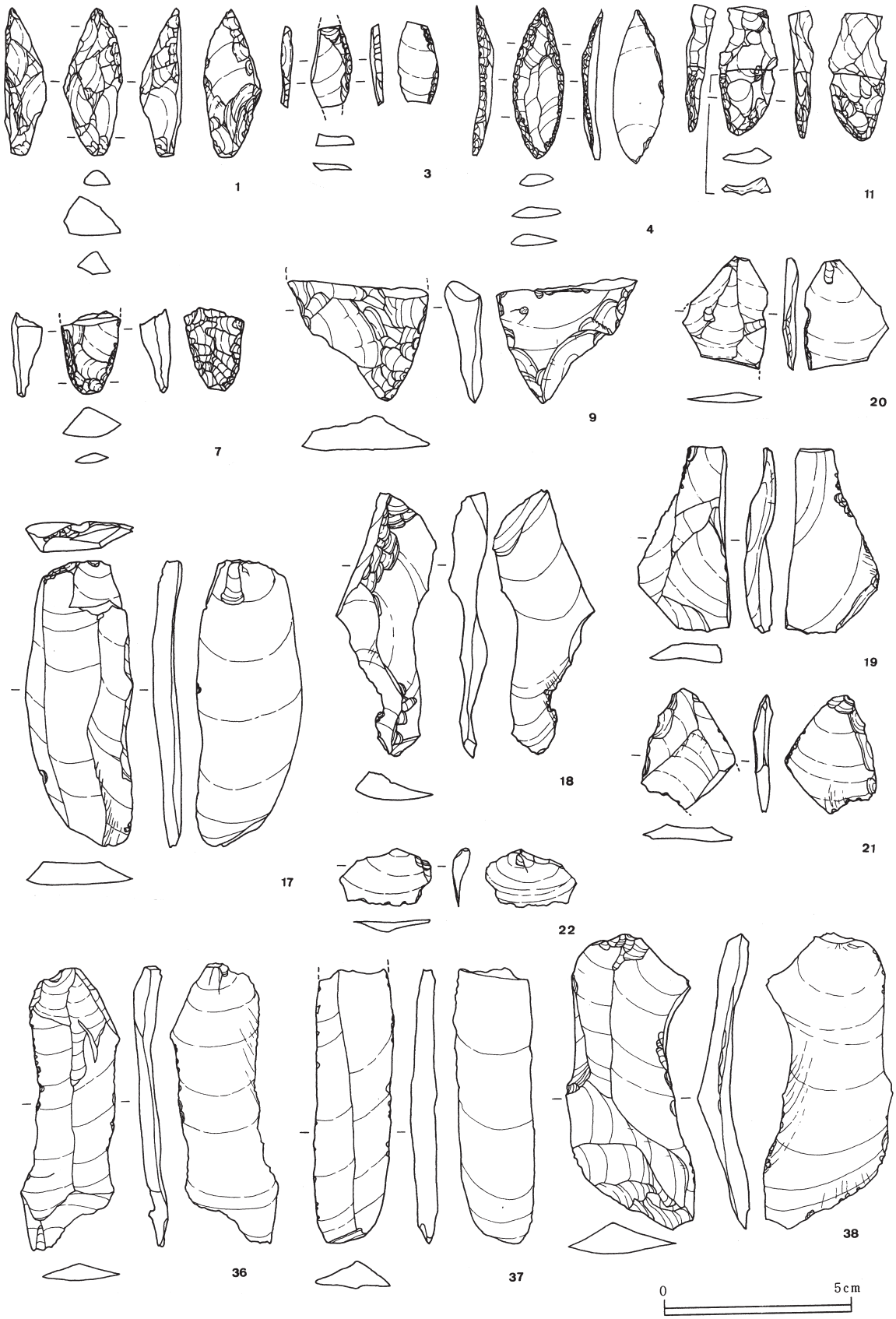
第27図　エグロ遺跡出土石器



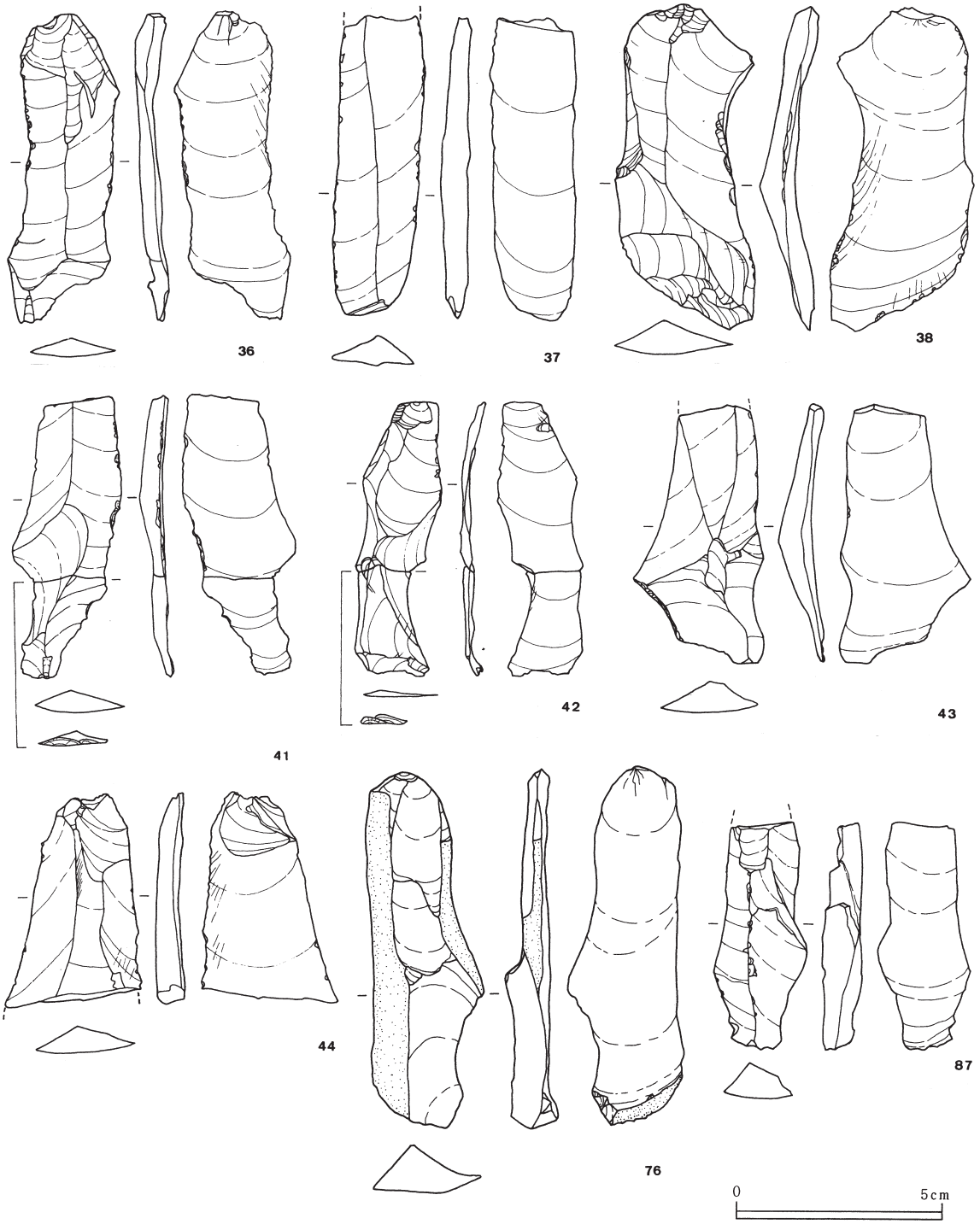
第28図　寺野東遺跡　地点外出土石器



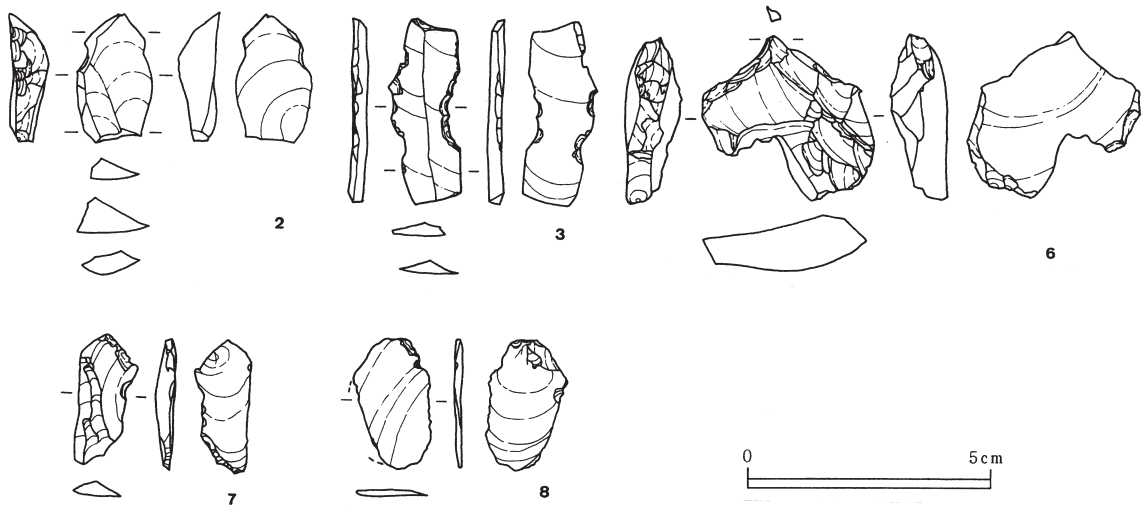
第29図　八幡根東遺跡　第１号ブロック出土石器



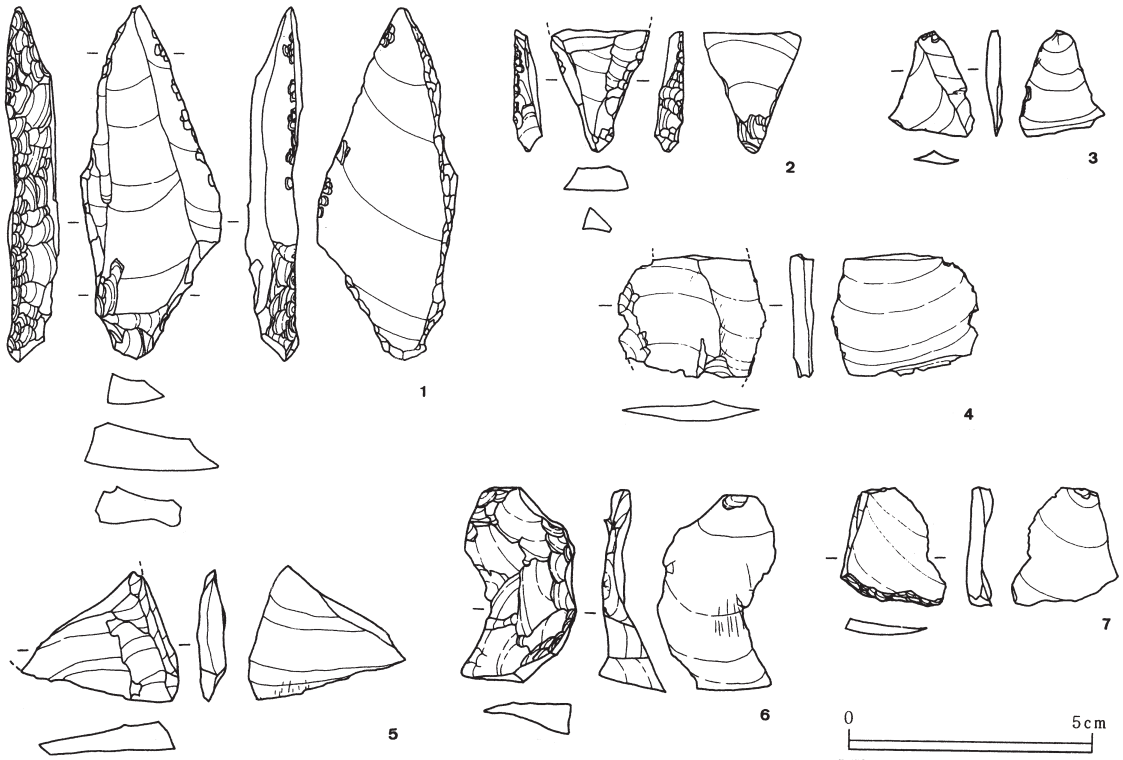
第30図　八幡根東遺跡　第３号ブロック出土石器（１）



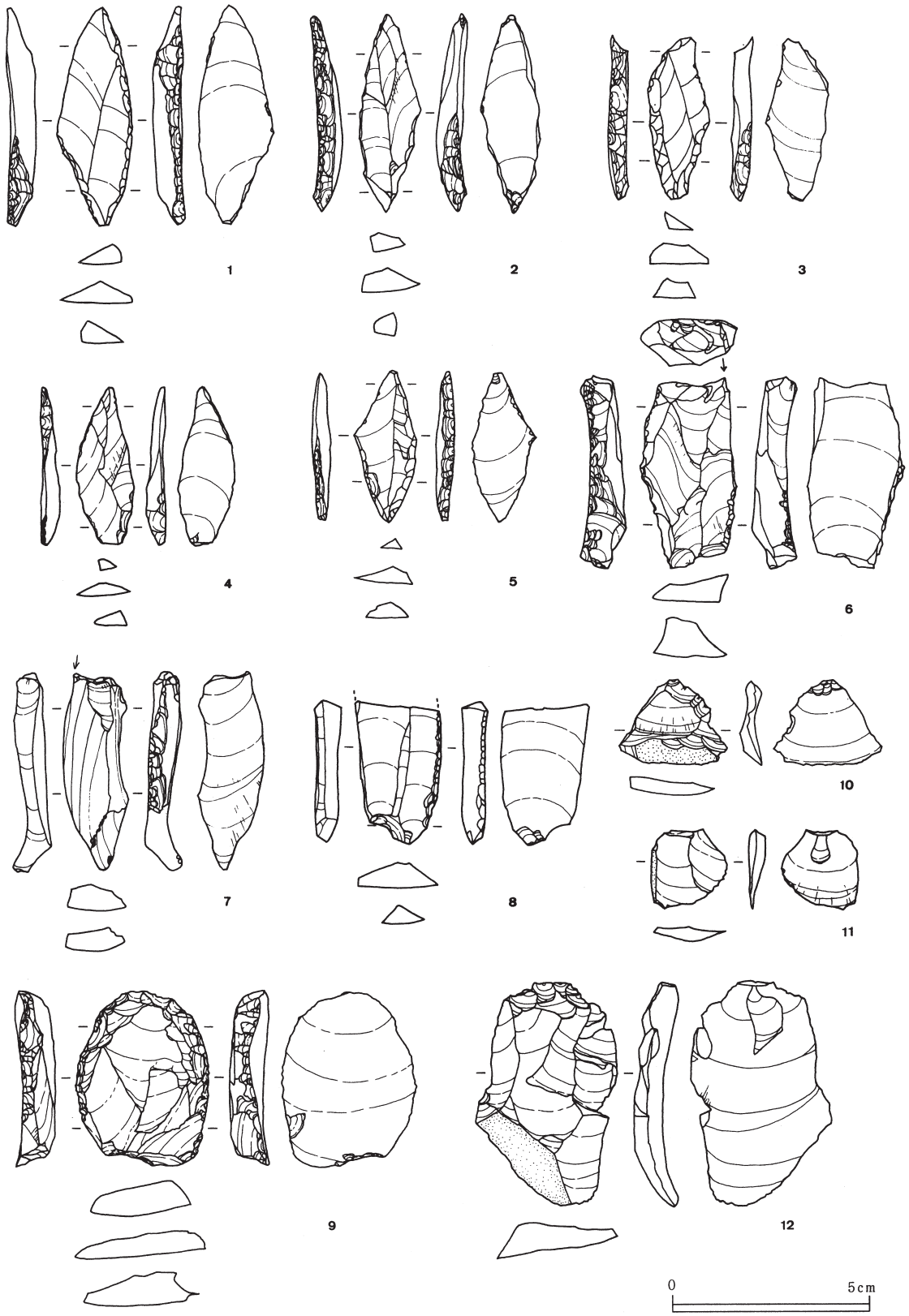
第31図　八幡根東遺跡　第３号ブロック出土石器（２）



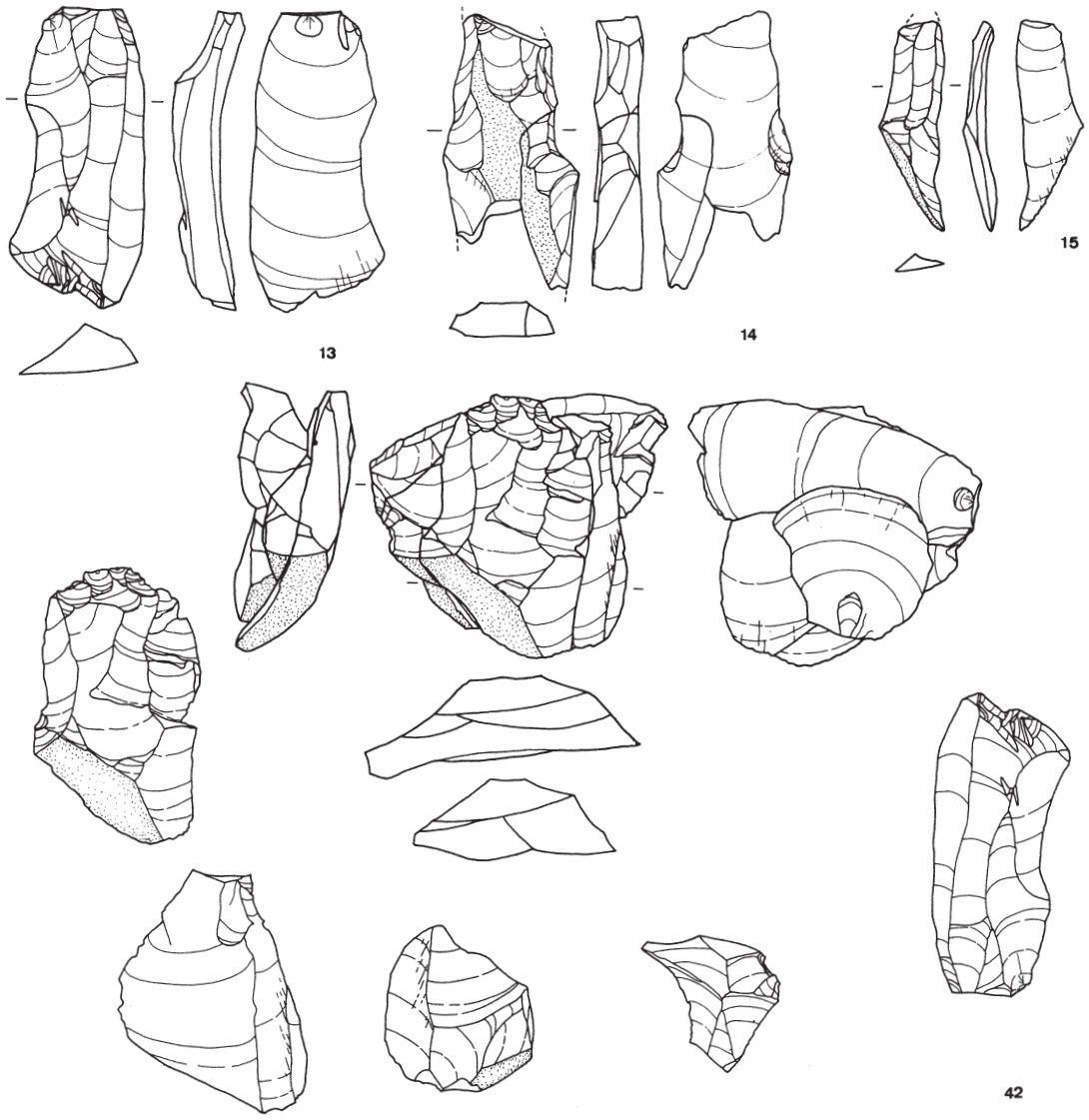
第32図　八幡根東遺跡　第２号ブロック出土石器



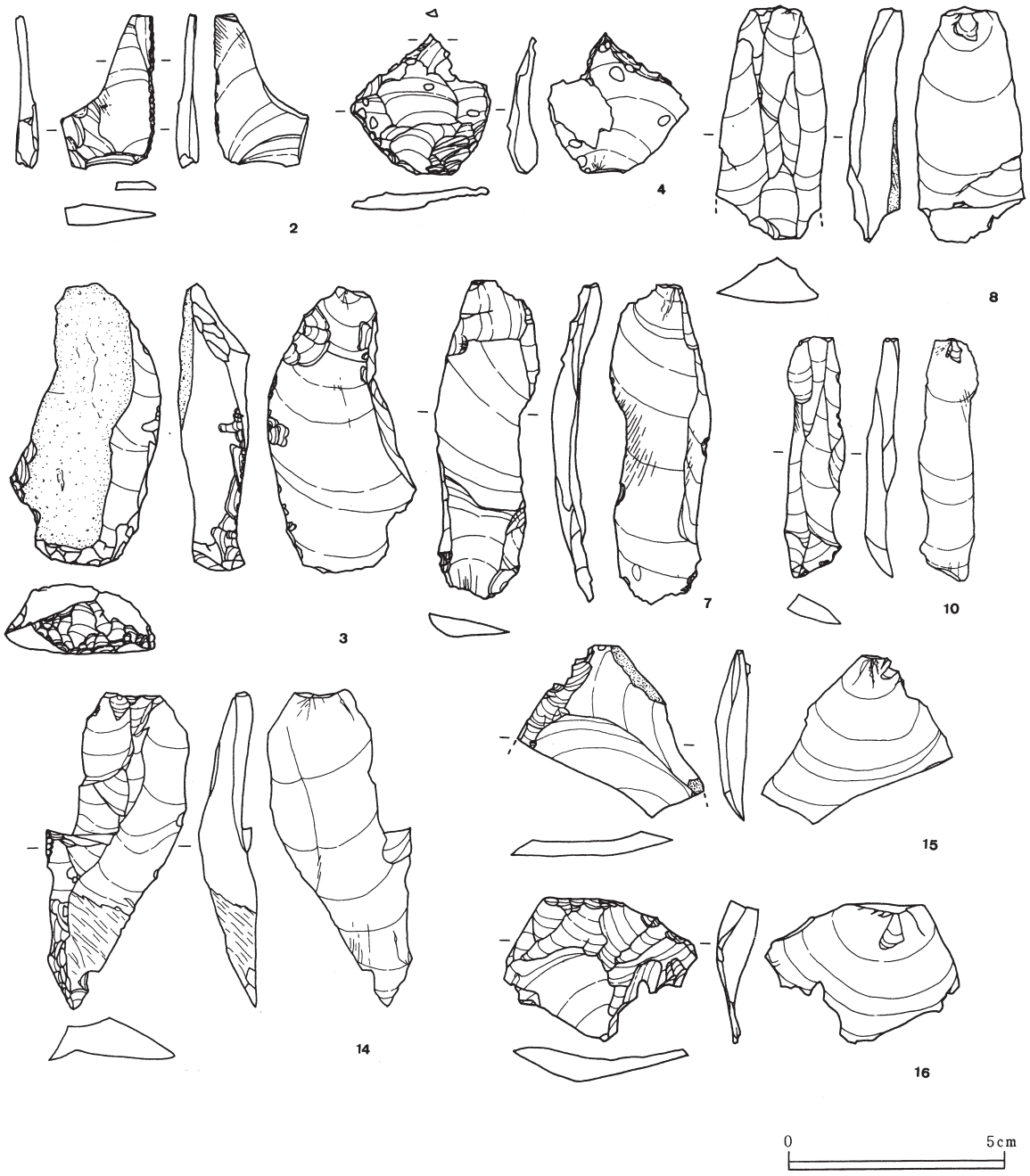
第33図　八幡根東遺跡　第４号ブロック出土石器



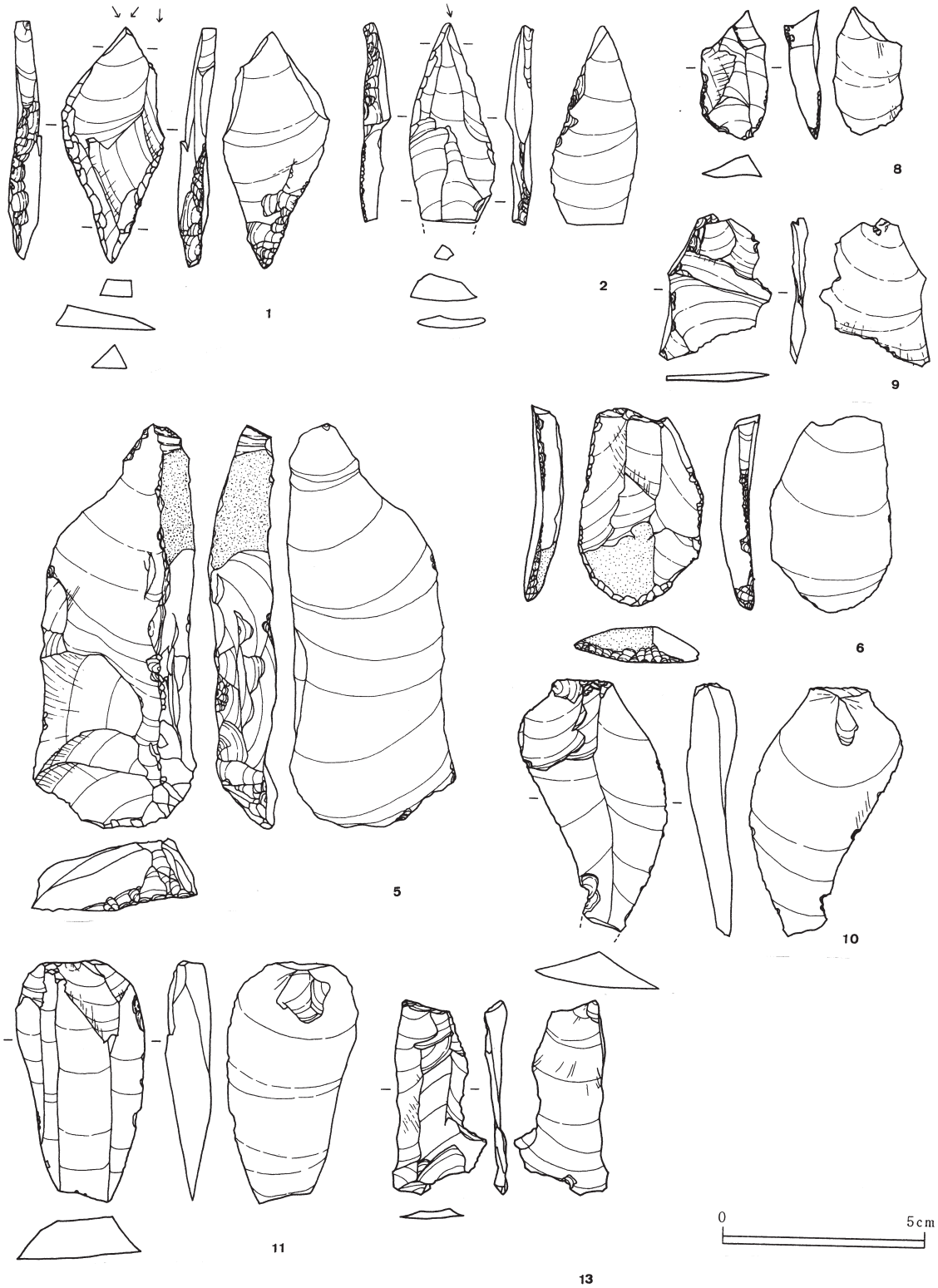
第34図　八幡根東遺跡　第５号ブロック出土石器（１）



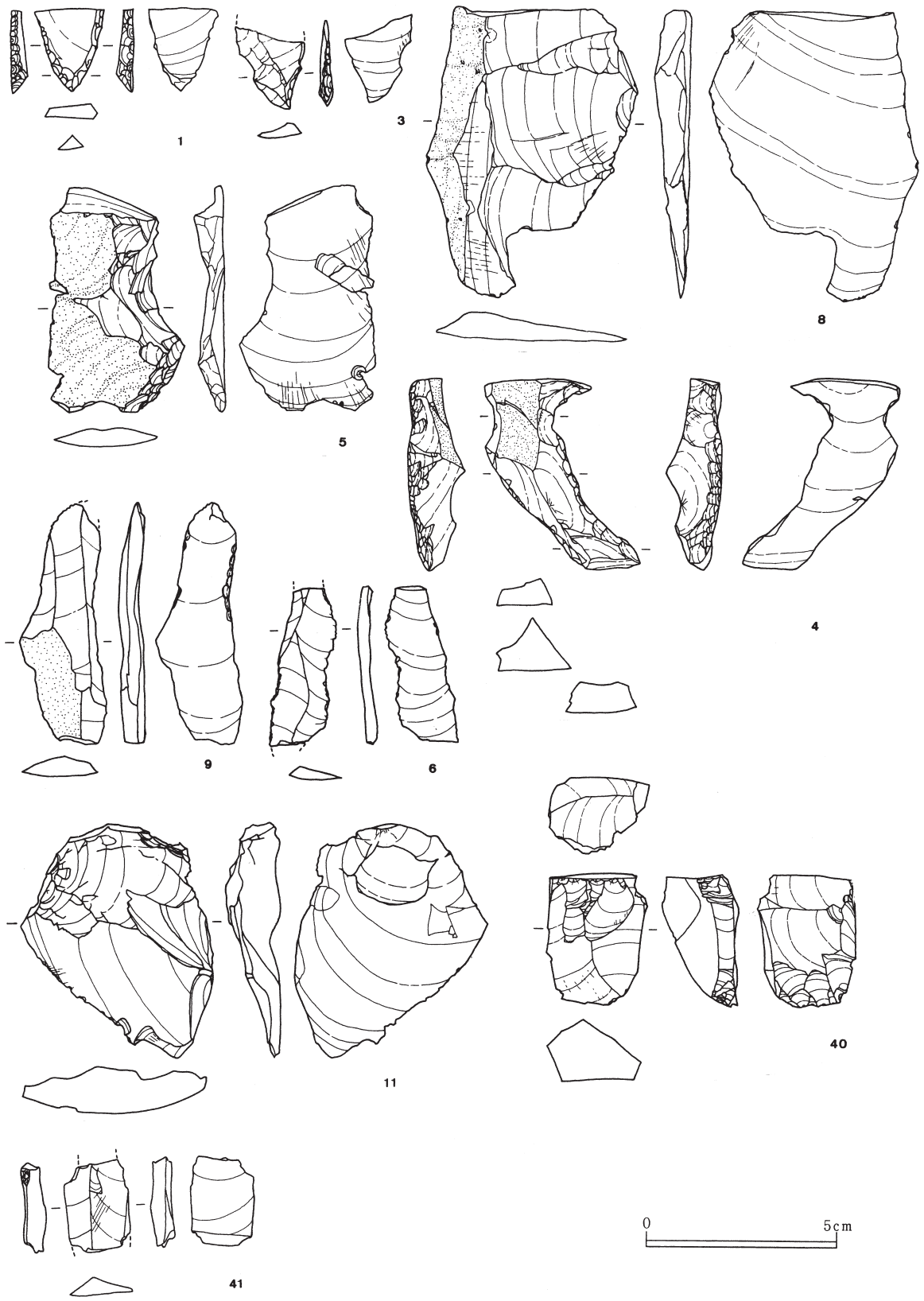
第35図　八幡根東遺跡　第５号ブロック出土石器（２）



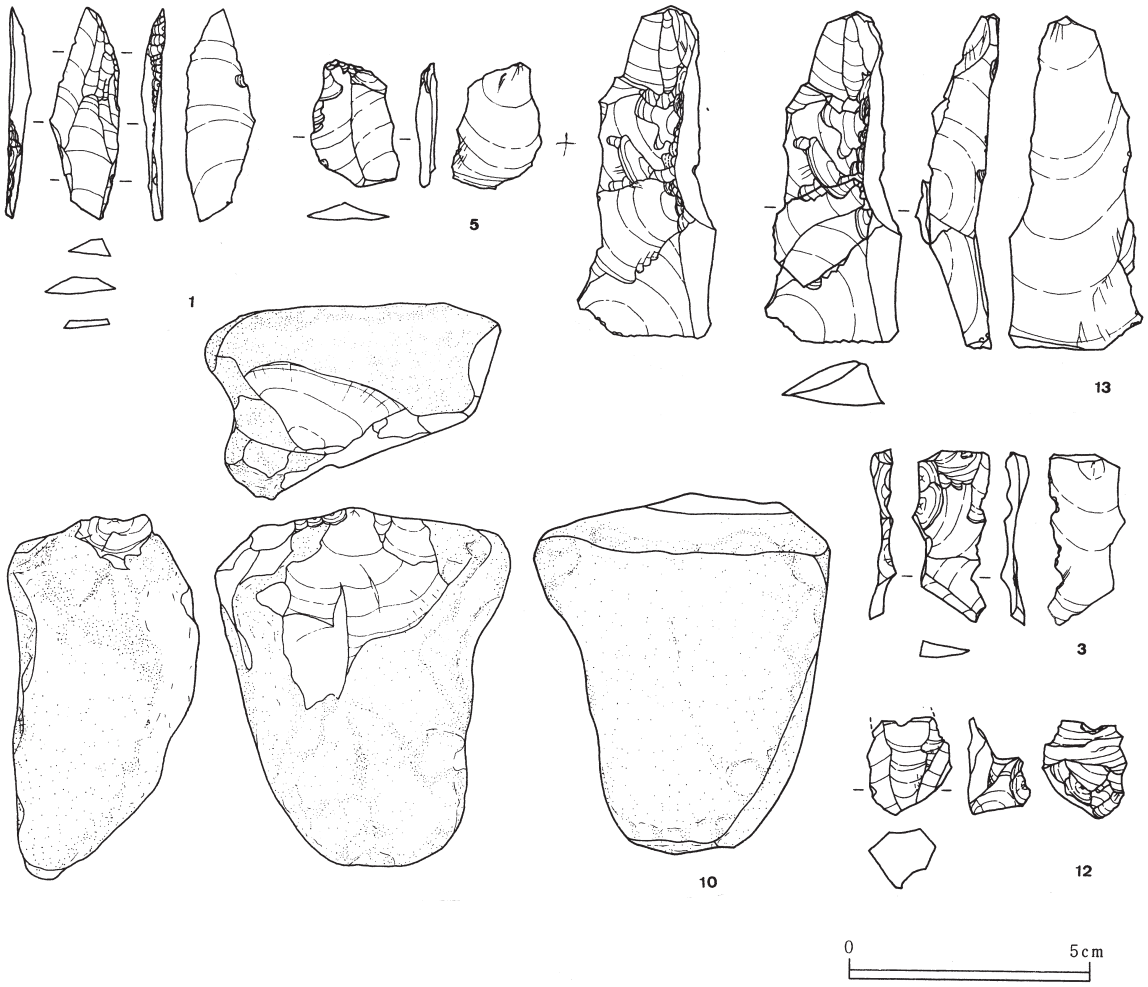
第36図　八幡根東遺跡　第６号ブロック出土石器



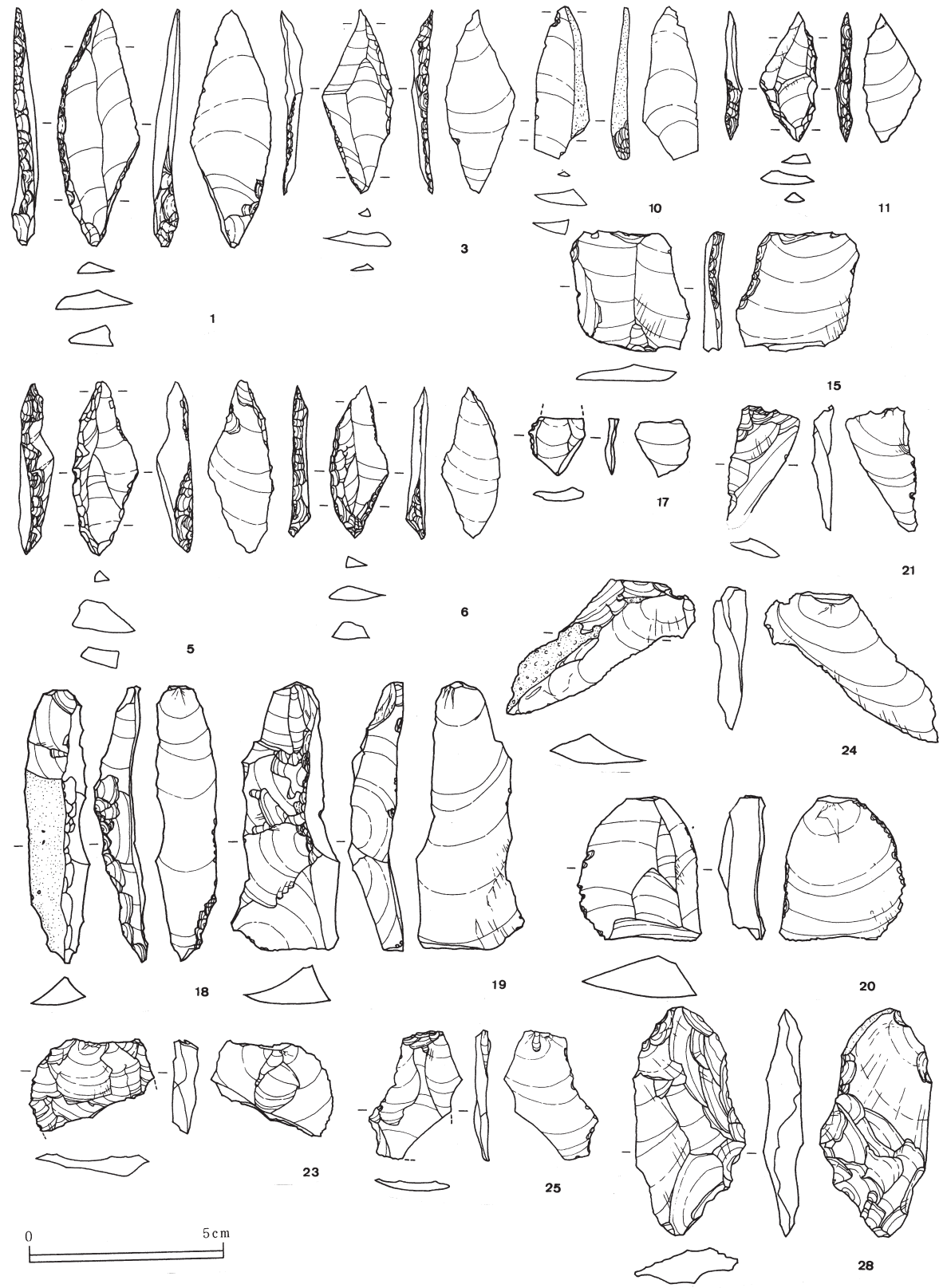
第37図　八幡根東遺跡　第７号ブロック出土石器



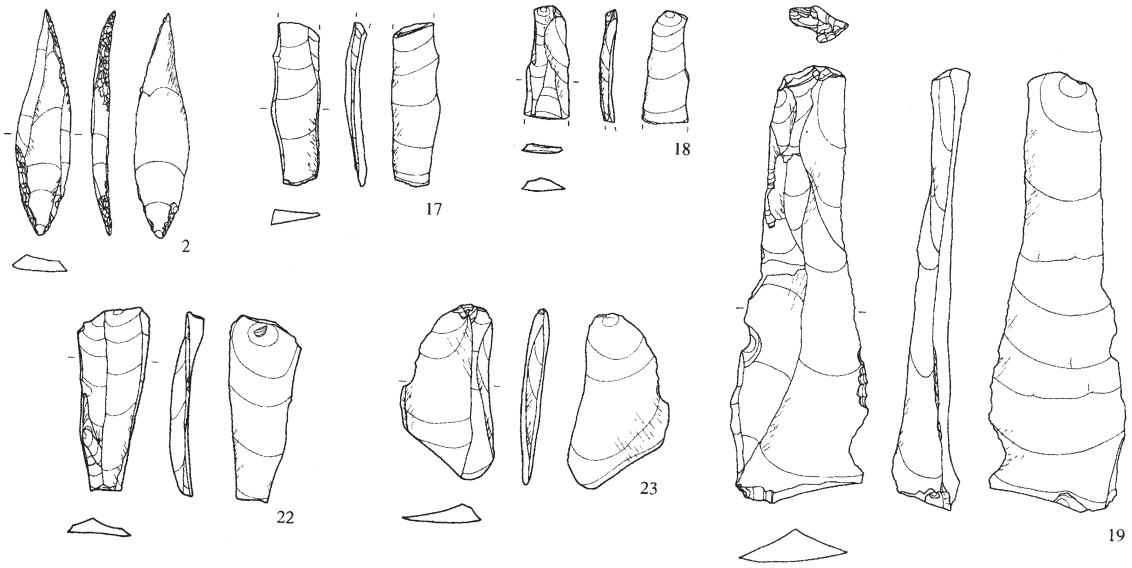
第38図　八幡根東遺跡　第８号ブロック出土石器



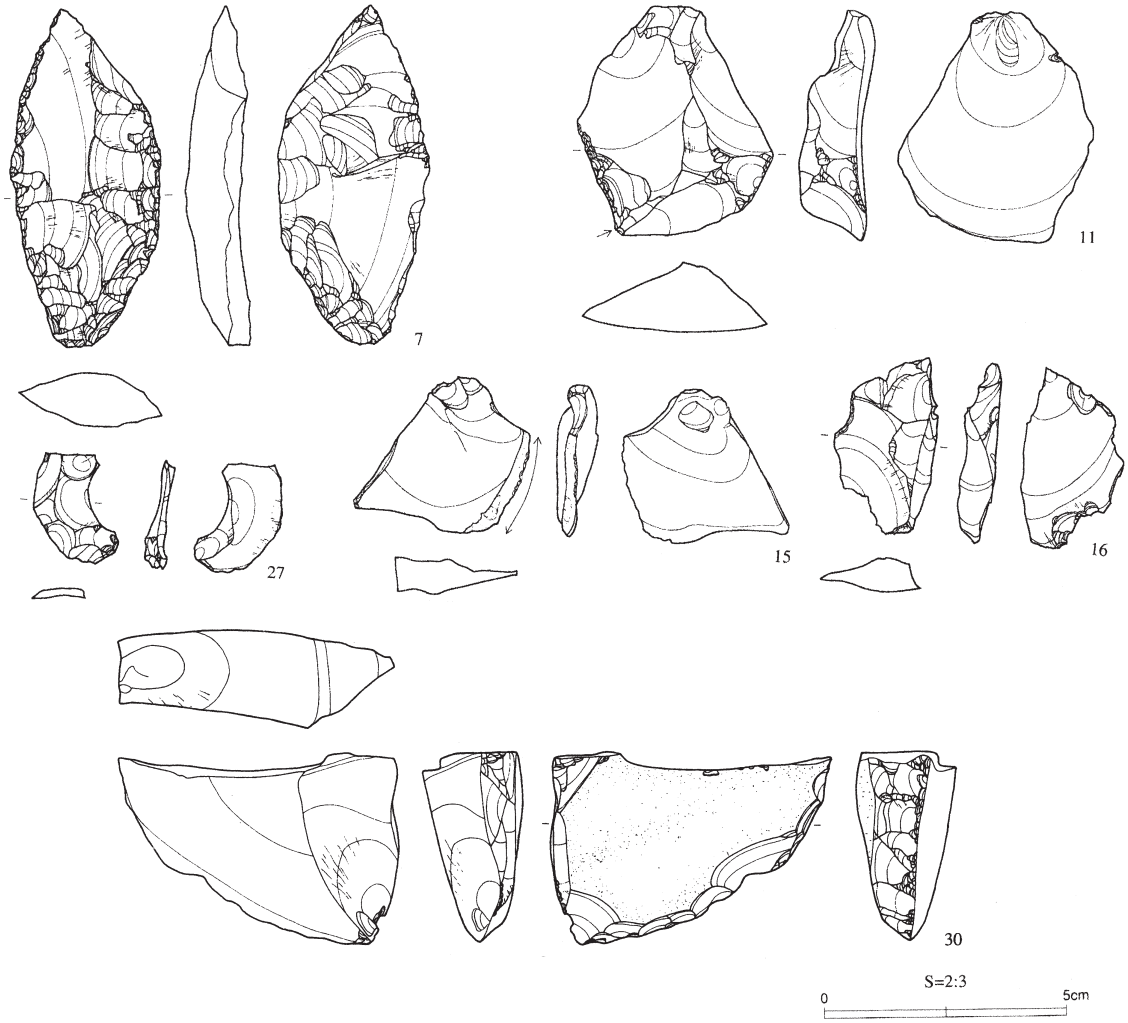
第39図　八幡根東遺跡　第９号ブロック出土石器



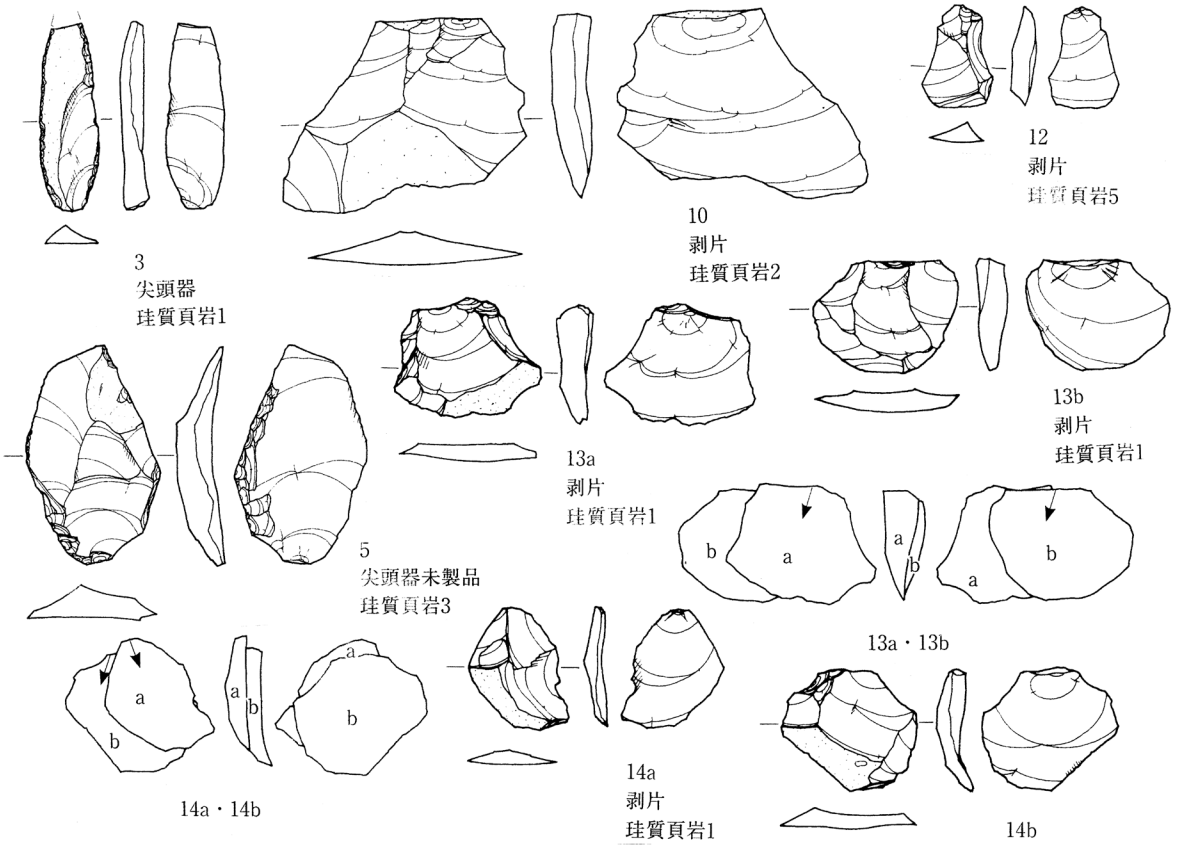
第40図　八幡根東遺跡　ブロック外出土石器



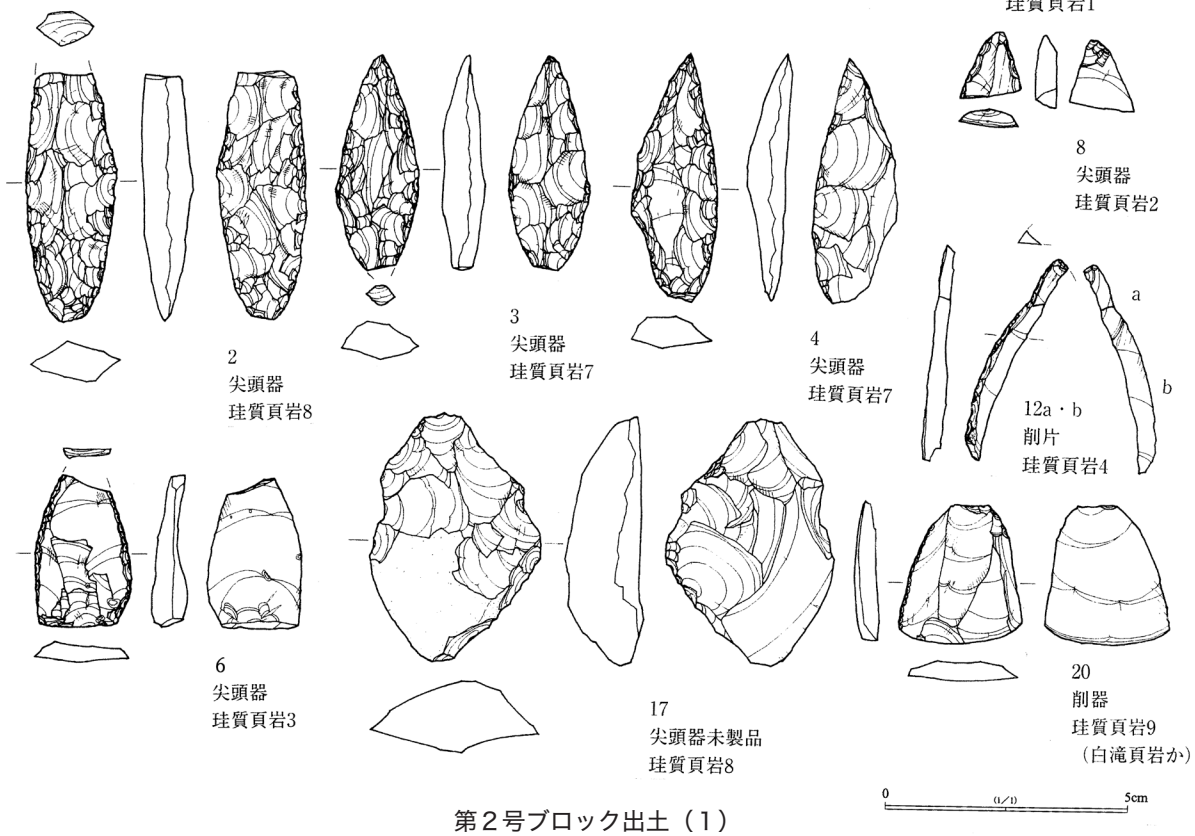
第41図　多功南原遺跡　第６号ブロック出土石器



第42図　多功南原遺跡　ブロック外出土石器

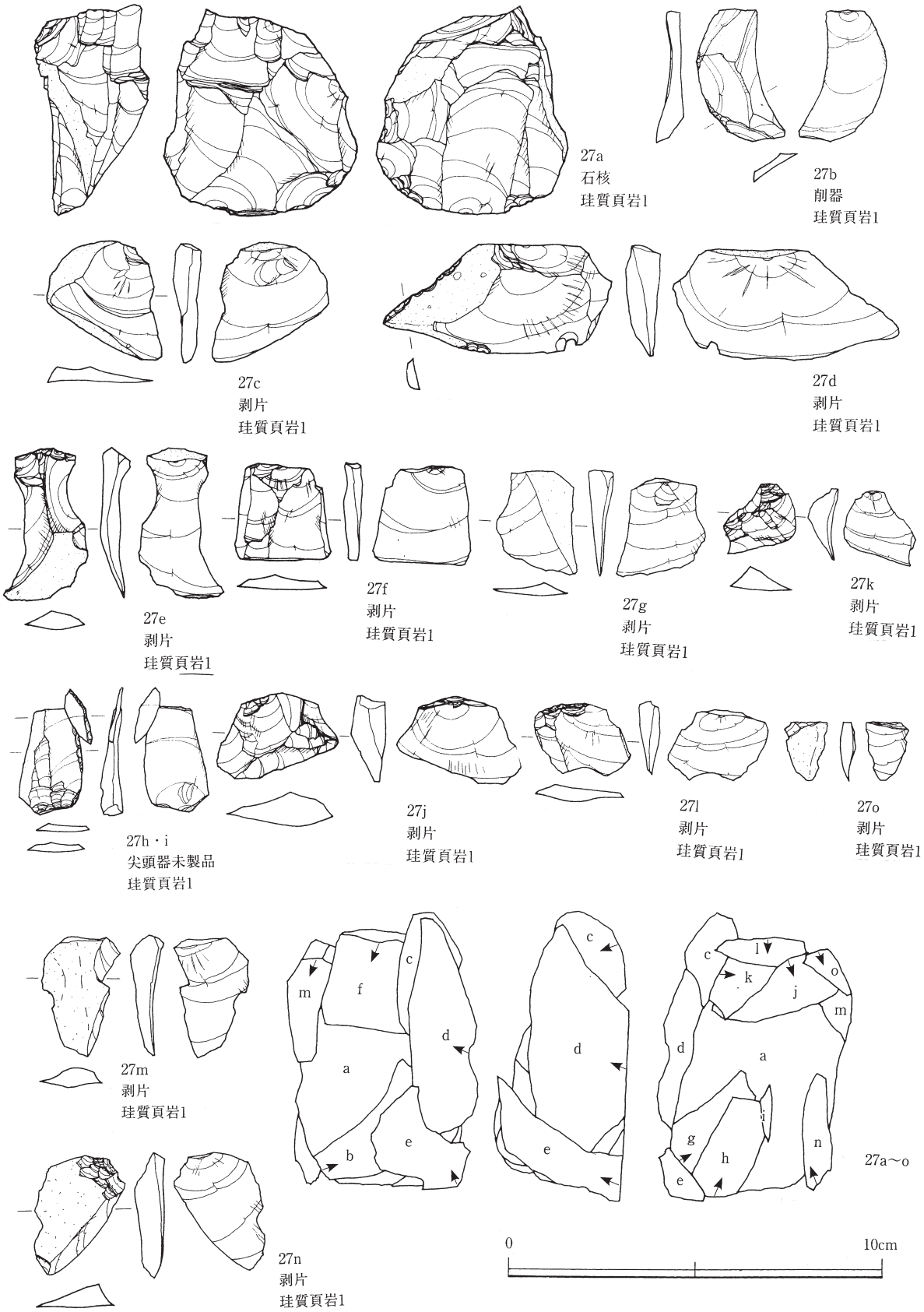


第１号ブロック出土



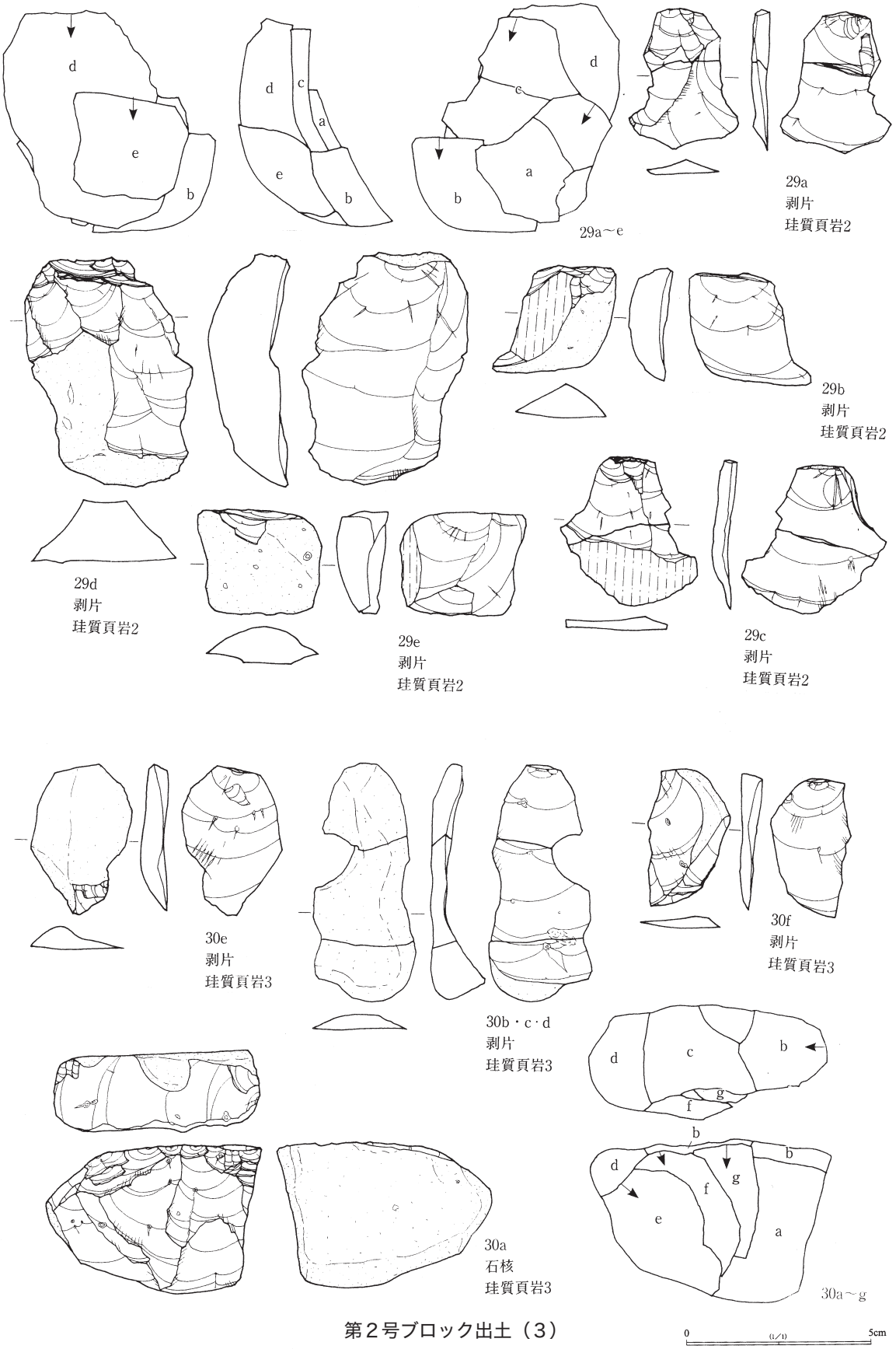
第２号ブロック出土（１）

第43図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（１）



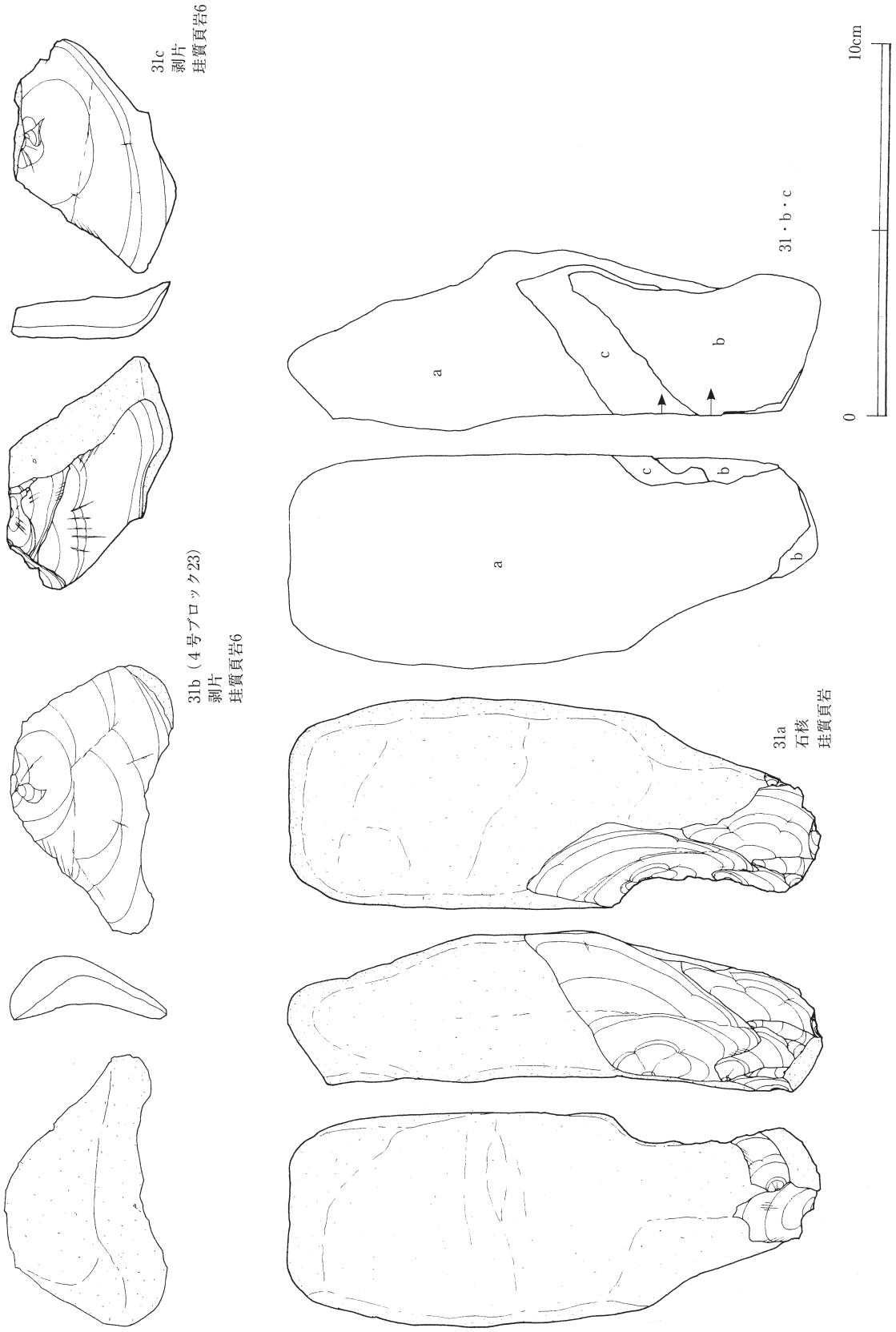
第２号ブロック出土（２）

第44図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（２）



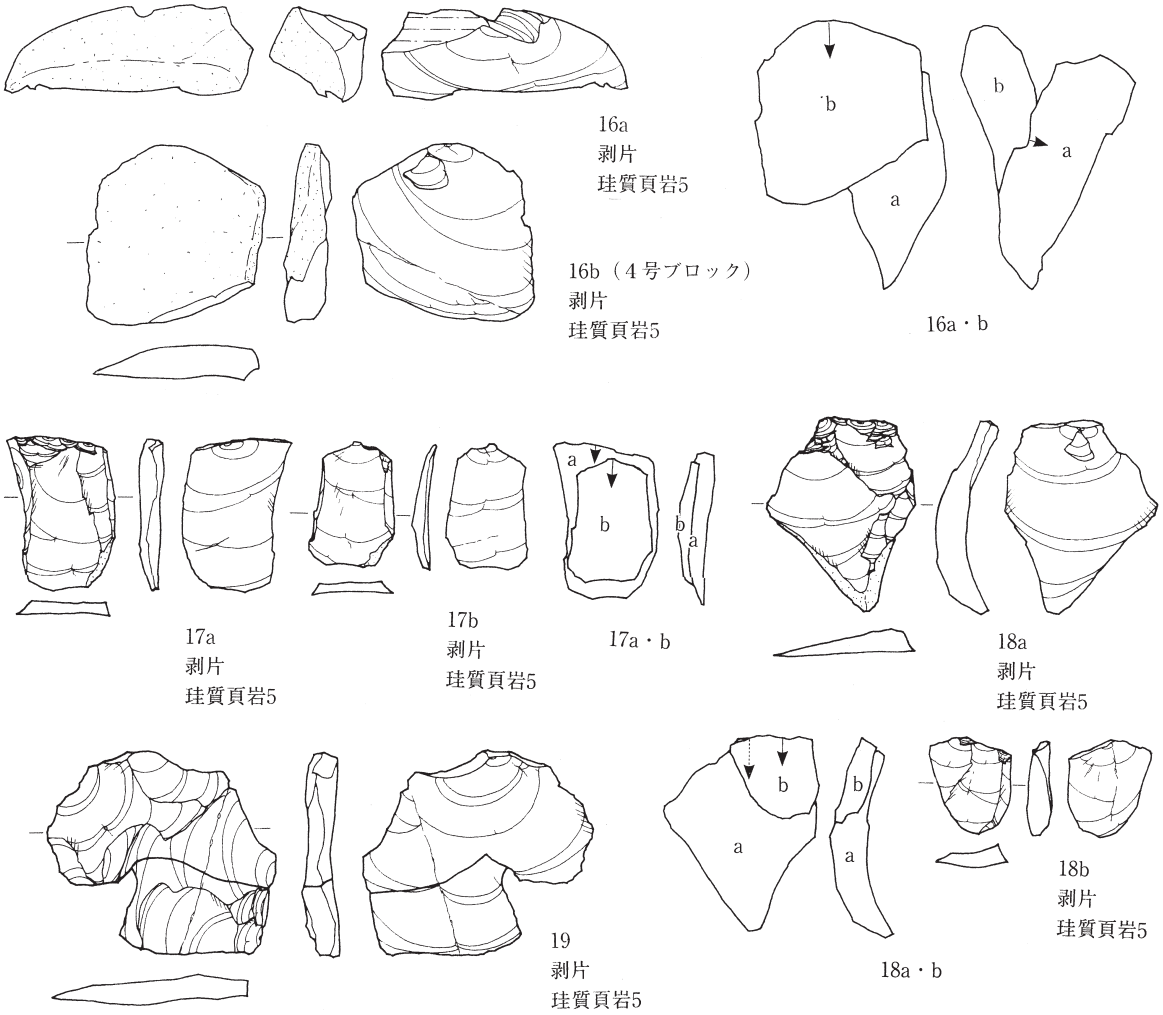
第２号ブロック出土（３）

第45図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（３）

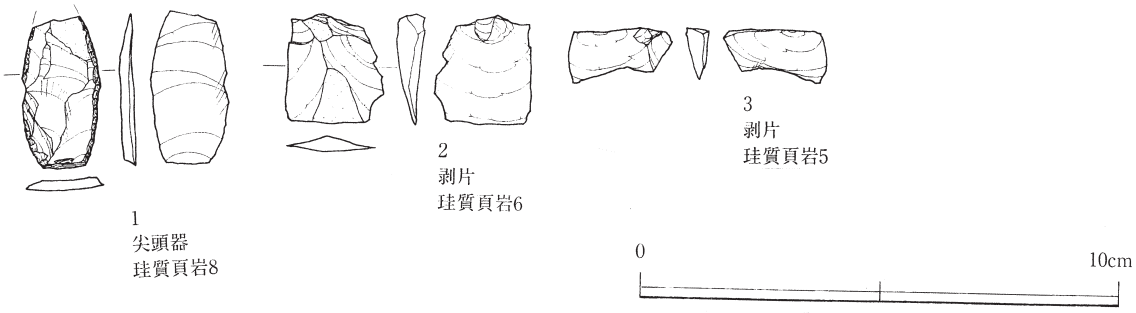


第２号ブロック出土（４）

第46図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（４）

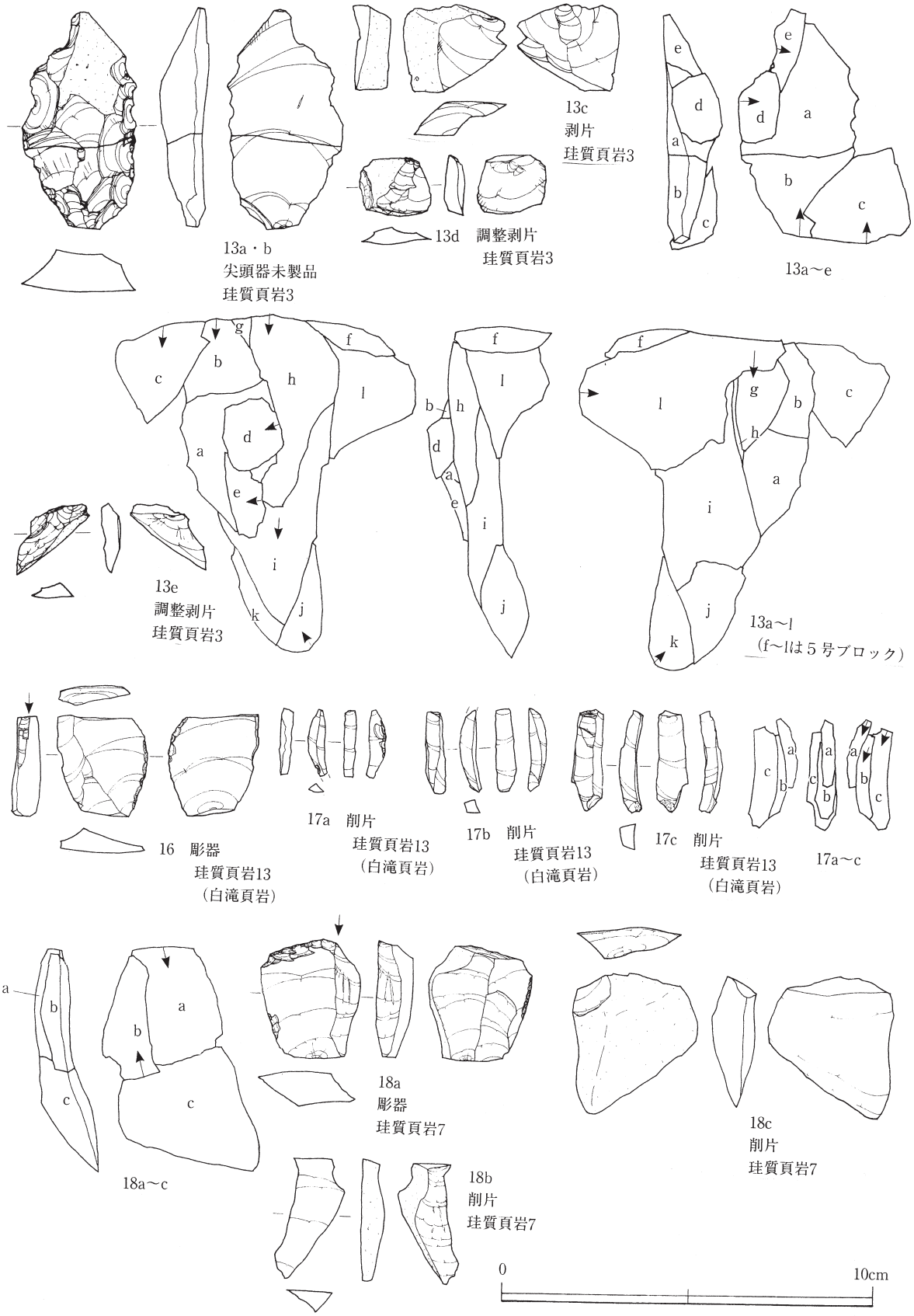


第３号ブロック出土



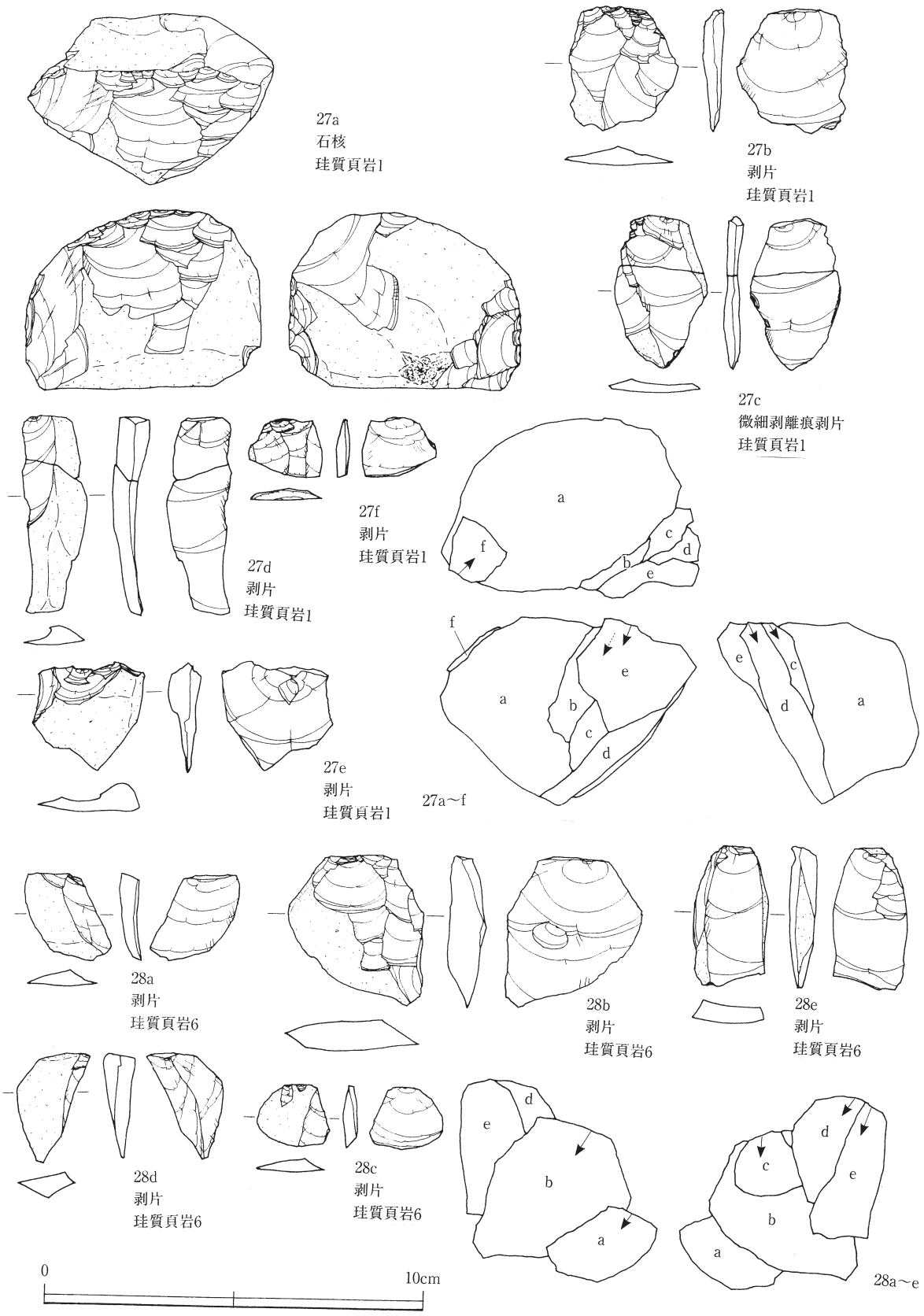
第６号ブロック出土

第47図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（５）



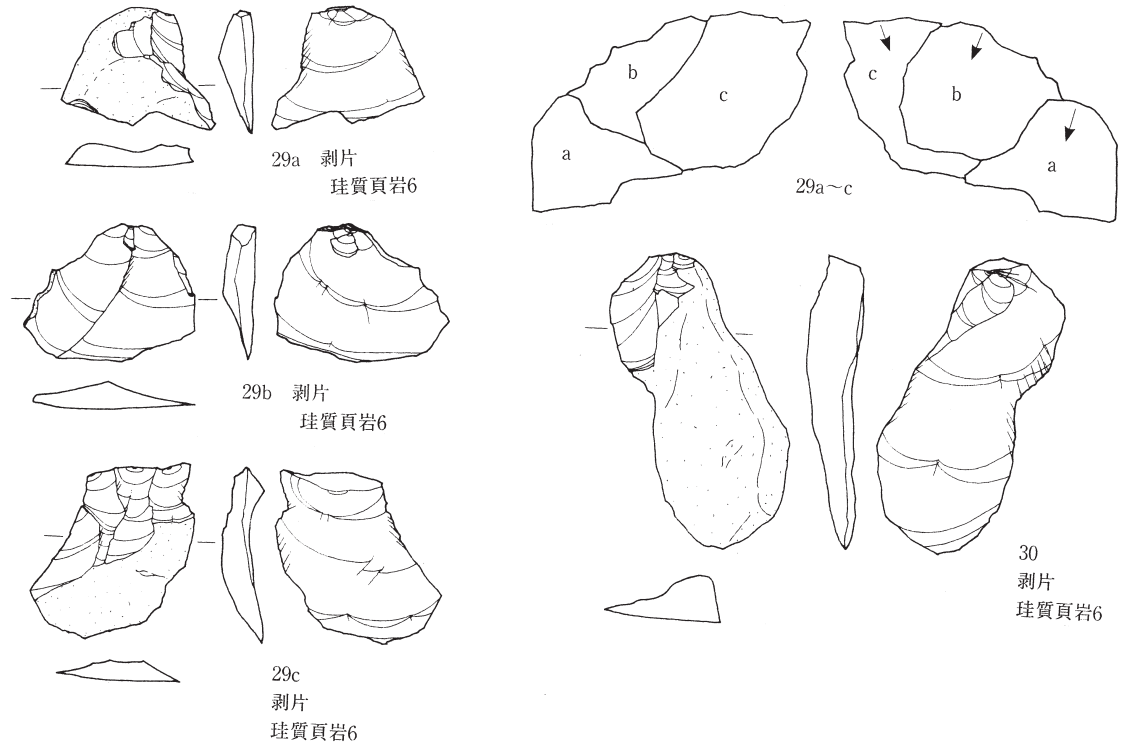
第４号ブロック出土（１）

第48図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（６）

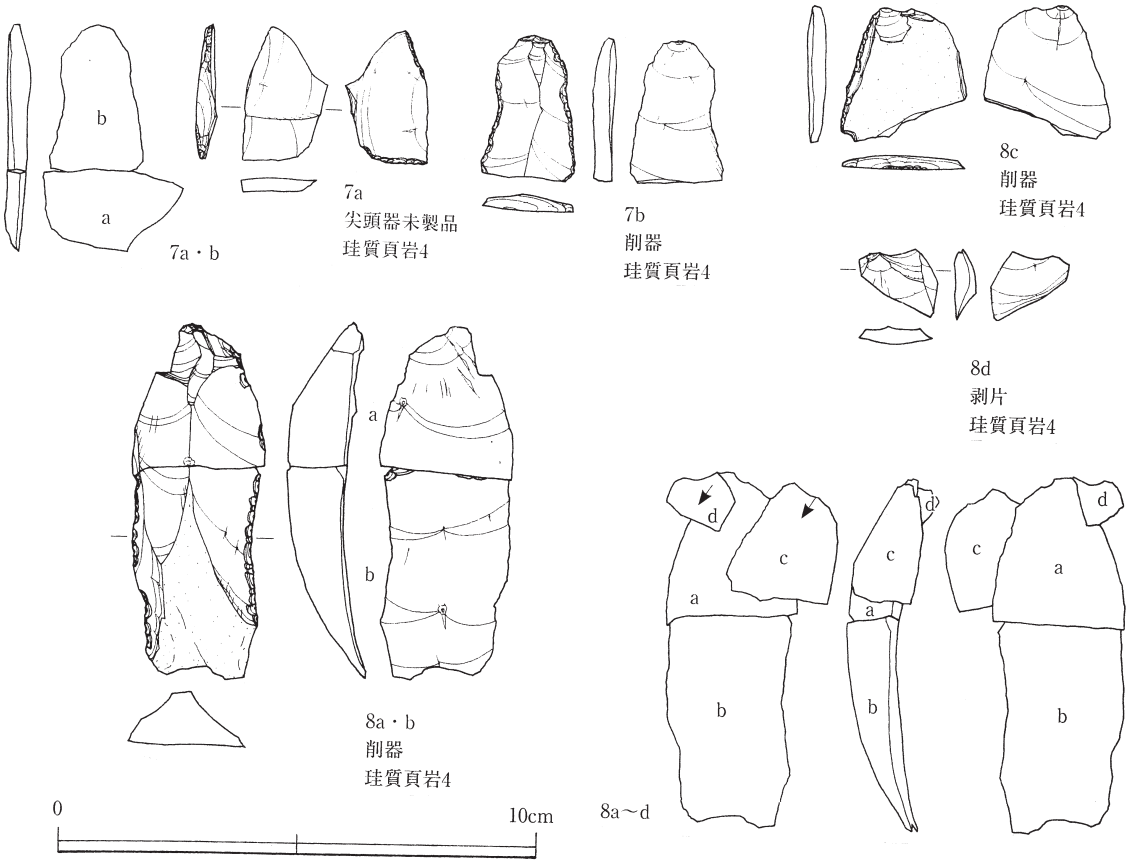


第４号ブロック出土（２）

第49図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（７）

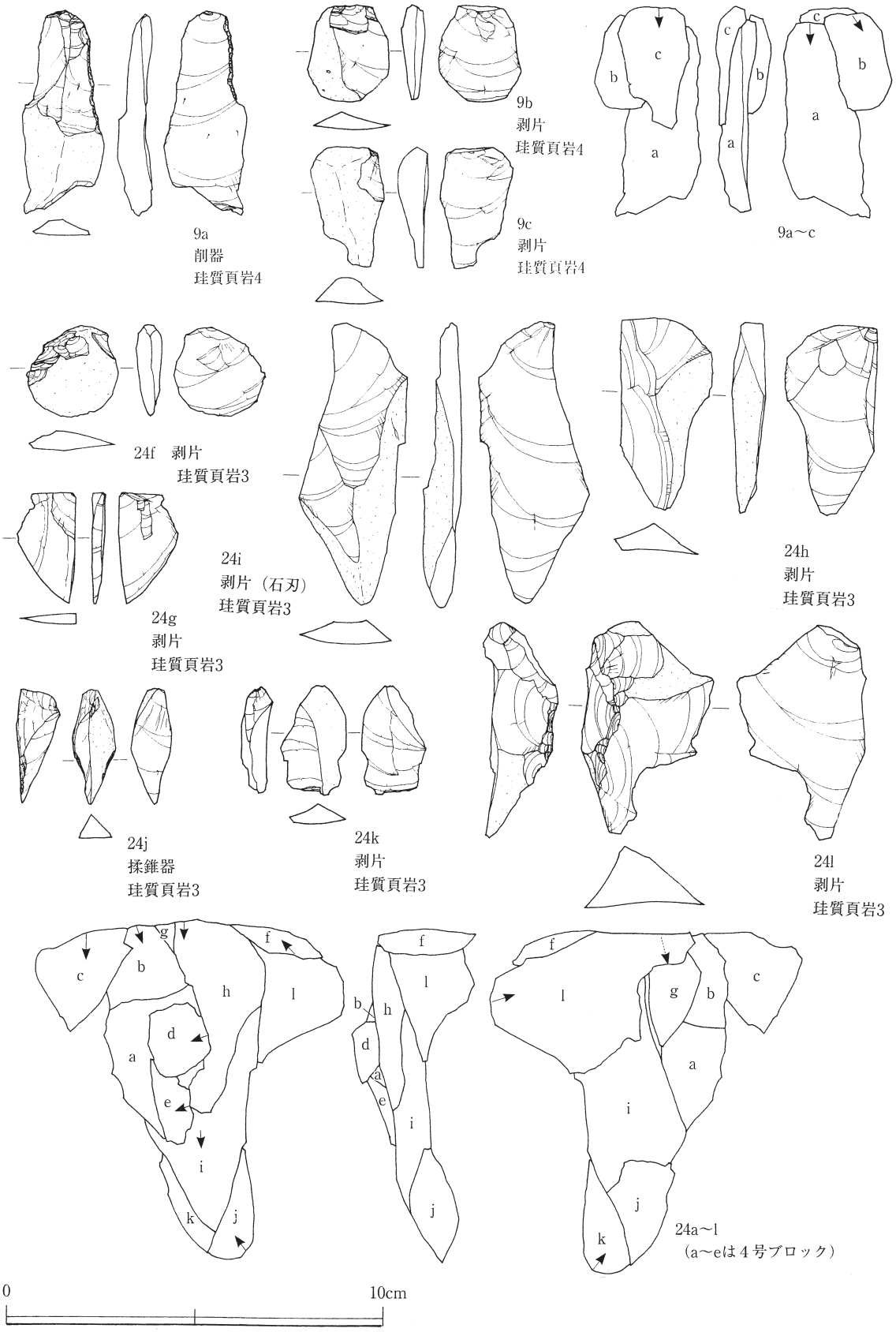


第４号ブロック出土（３）



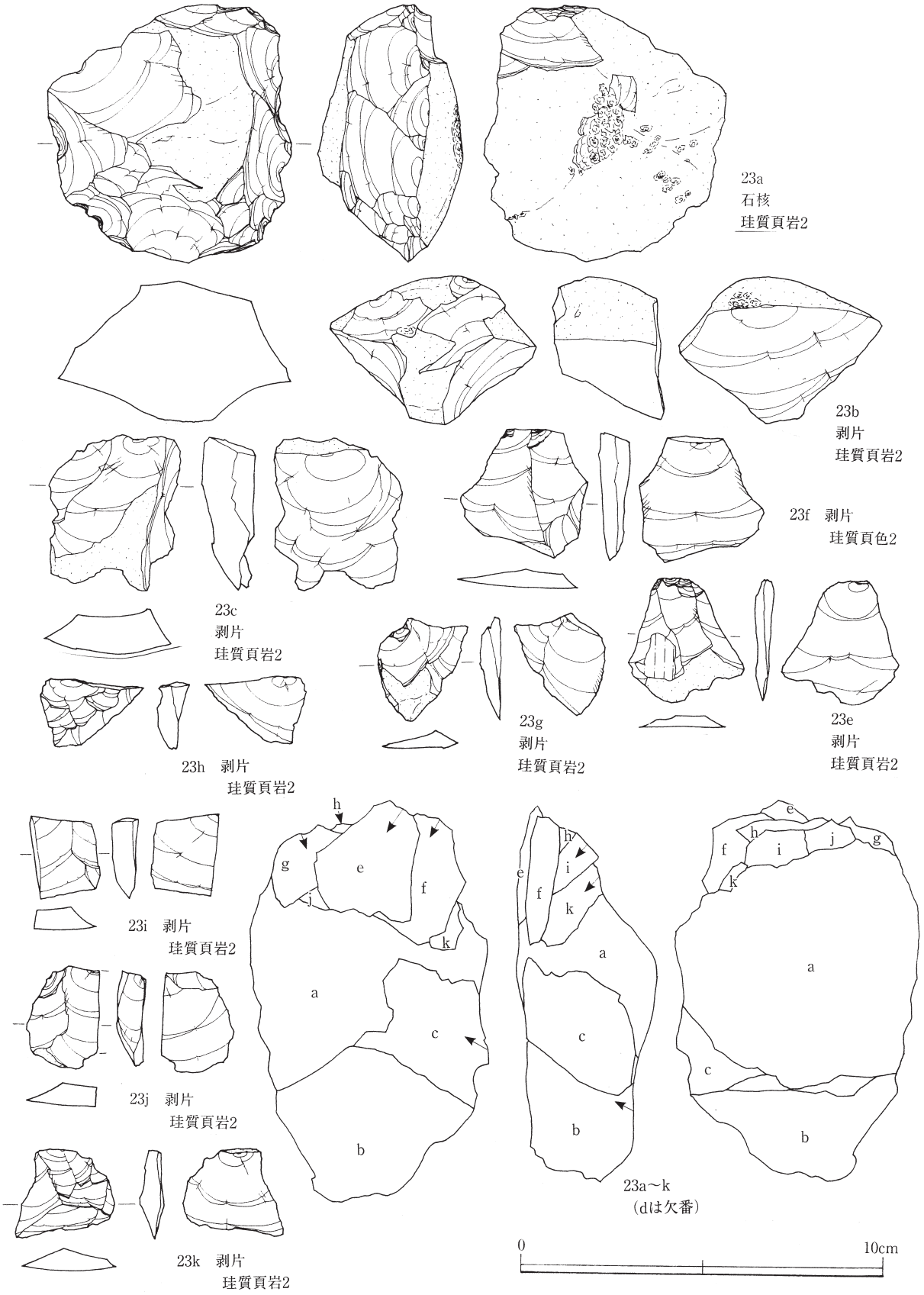
第５号ブロック出土（１）

第50図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（８）



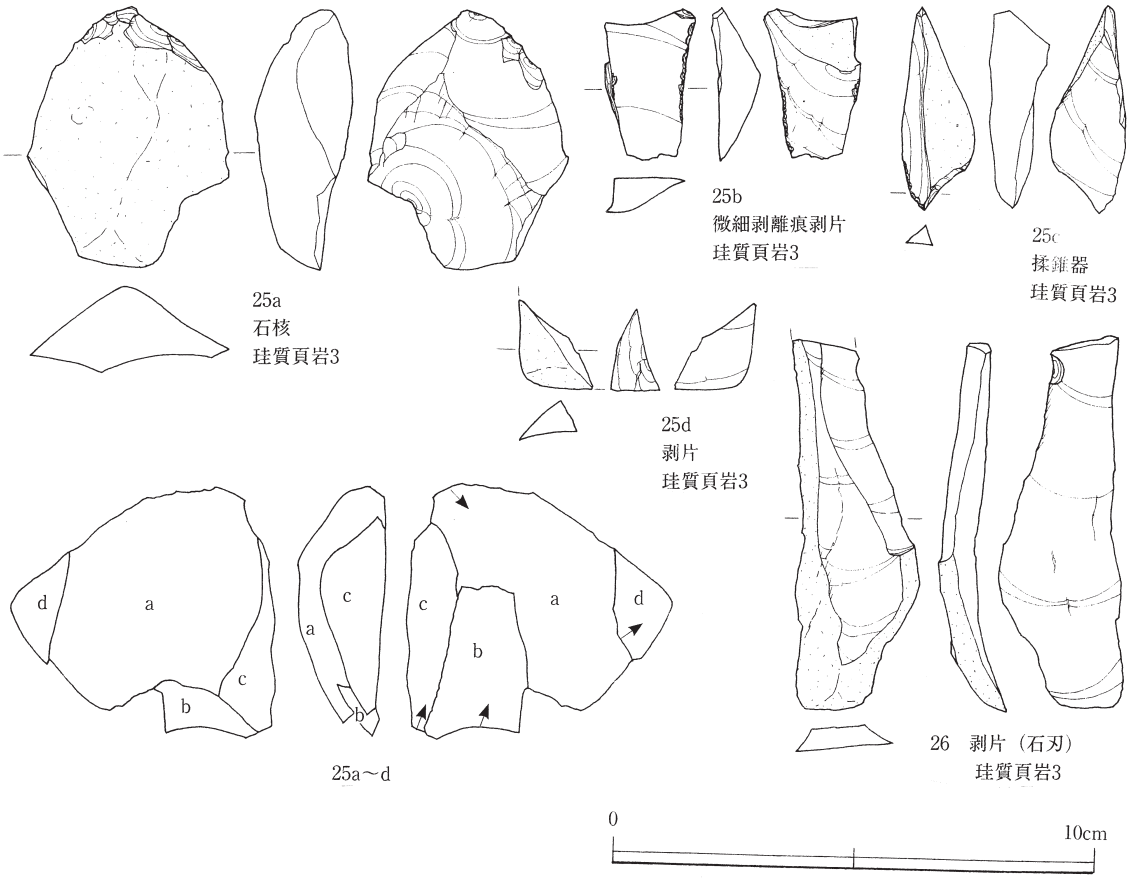
第５号ブロック出土（２）

第51図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（９）



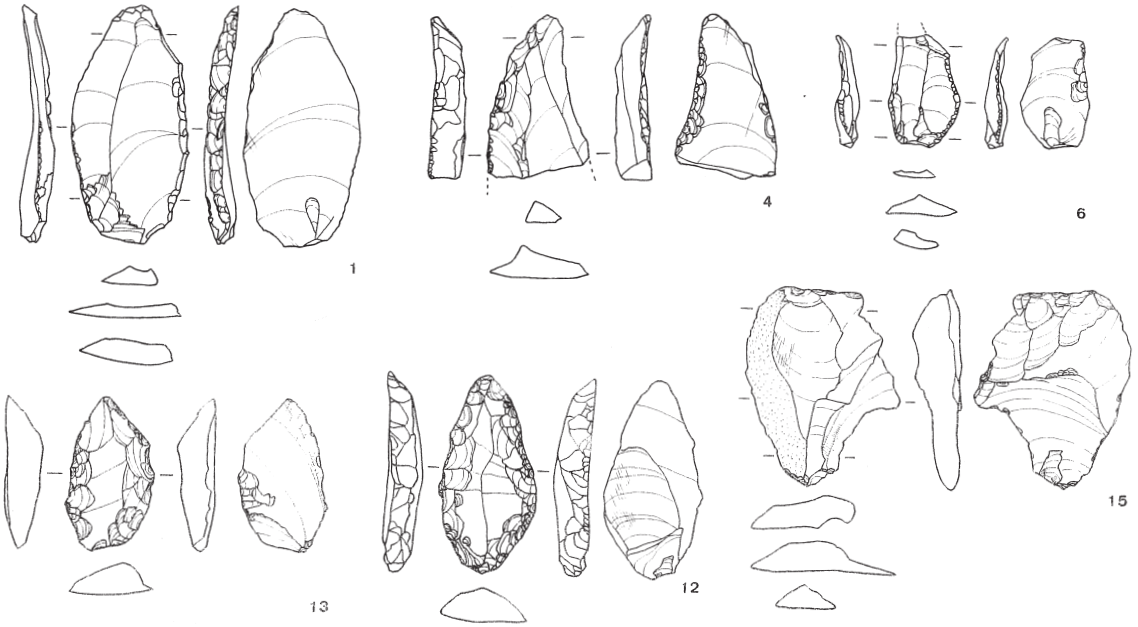
第５号ブロック出土（３）

第52図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（10）

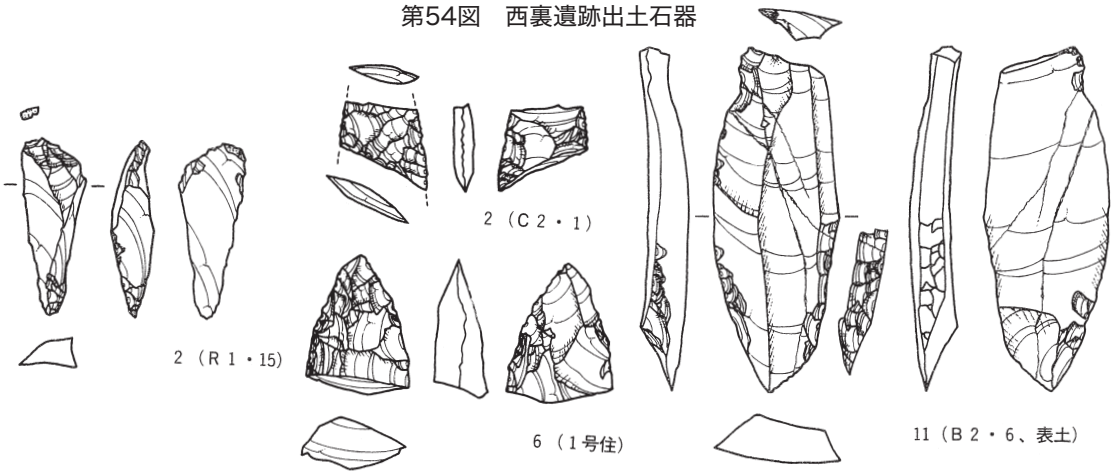


第５号ブロック出土（４）

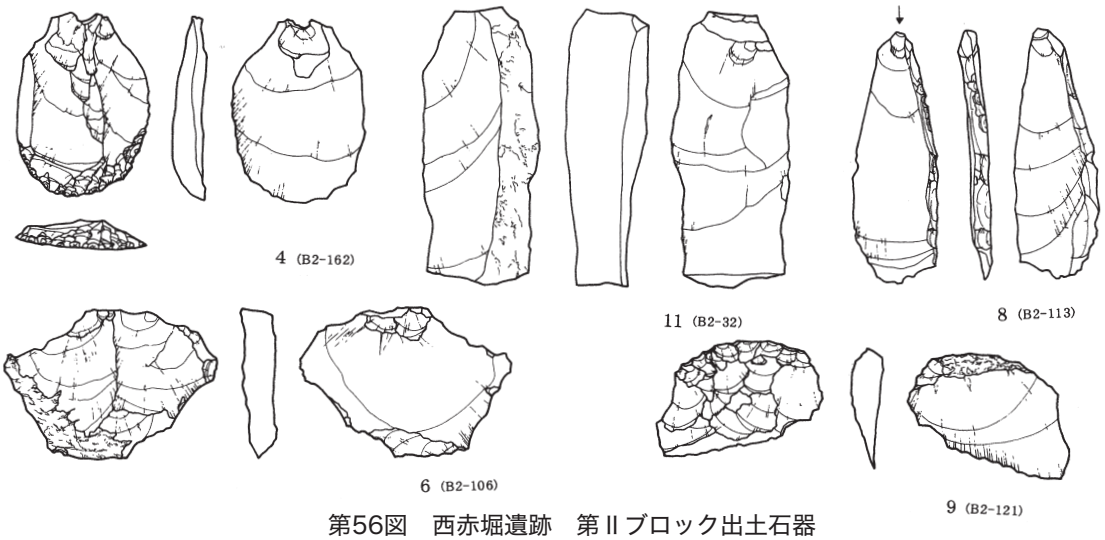
第53図　寺平遺跡　第１文化層出土石器（11）



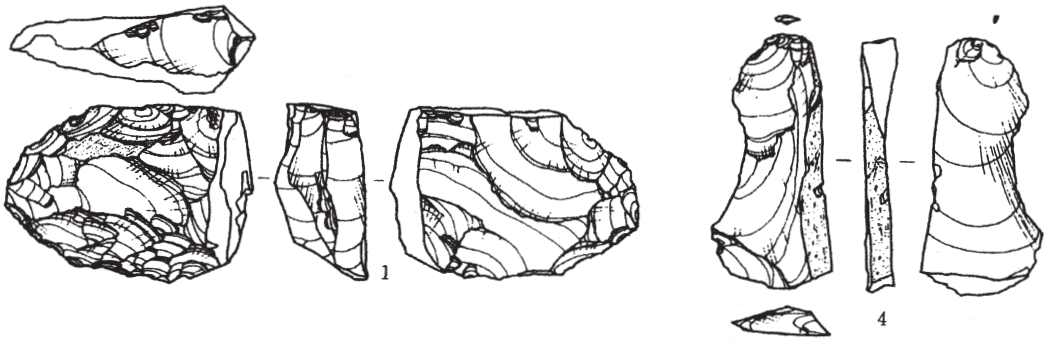
第54図　西裏遺跡出土石器



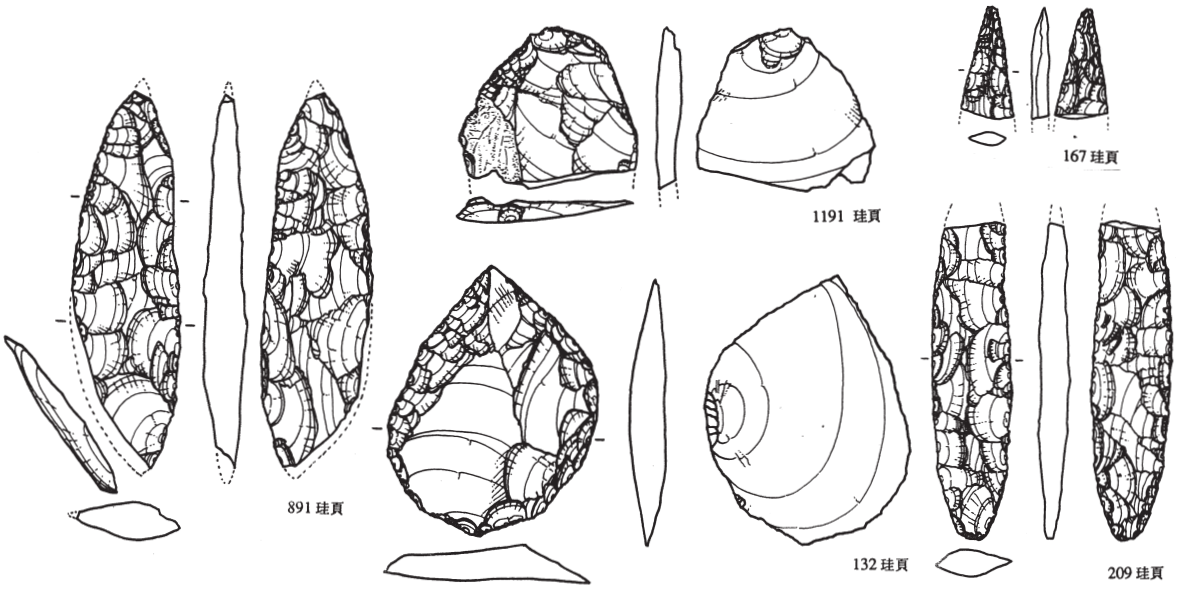
第55図　小倉水神社裏遺跡　ユニット外出土石器



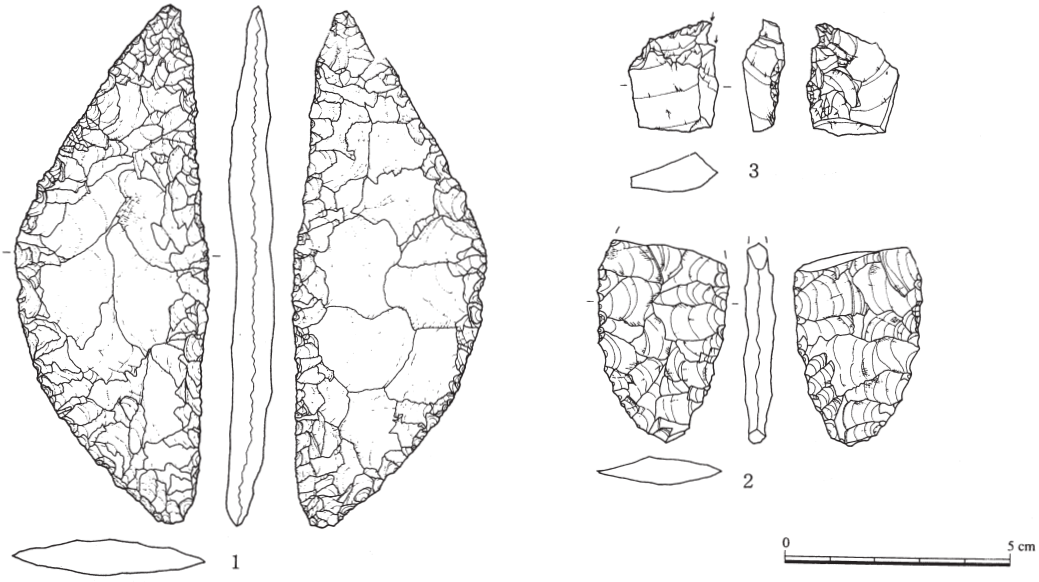
第56図　西赤堀遺跡　第Ⅱブロック出土石器



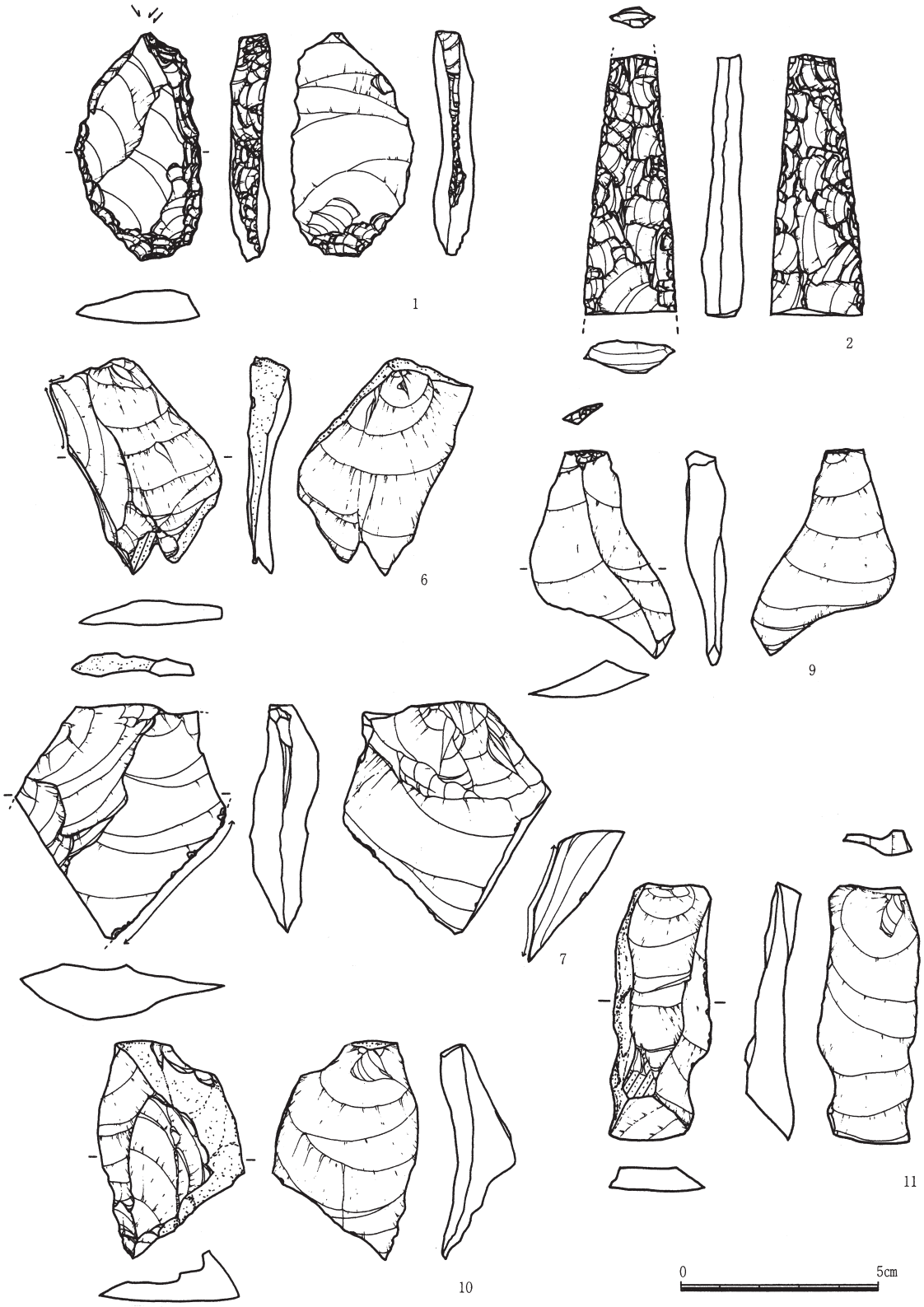
第57図　赤羽根遺跡出土石器



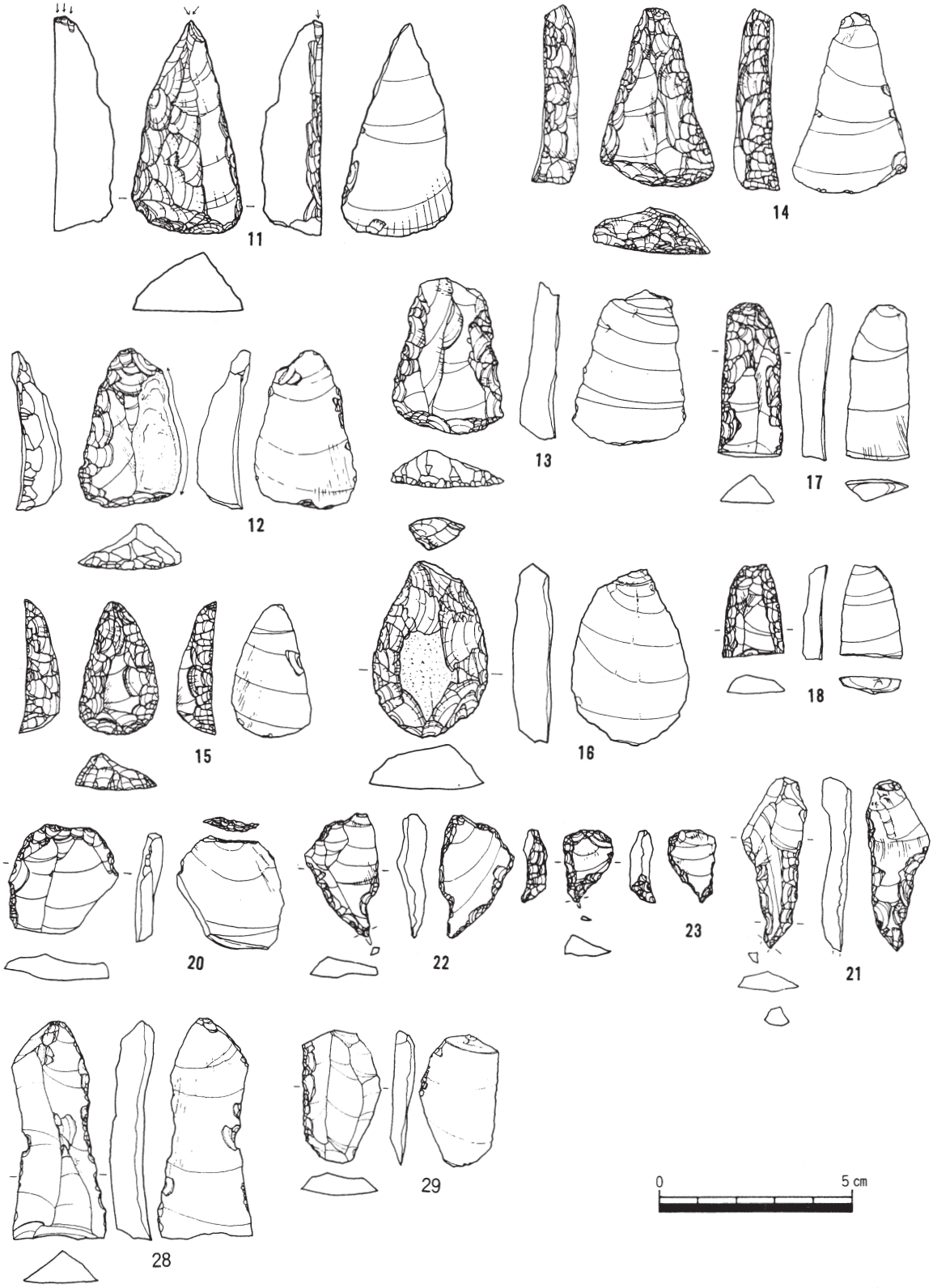
第58図　三ノ谷東遺跡　Ⅲ地区第１文化層出土石器



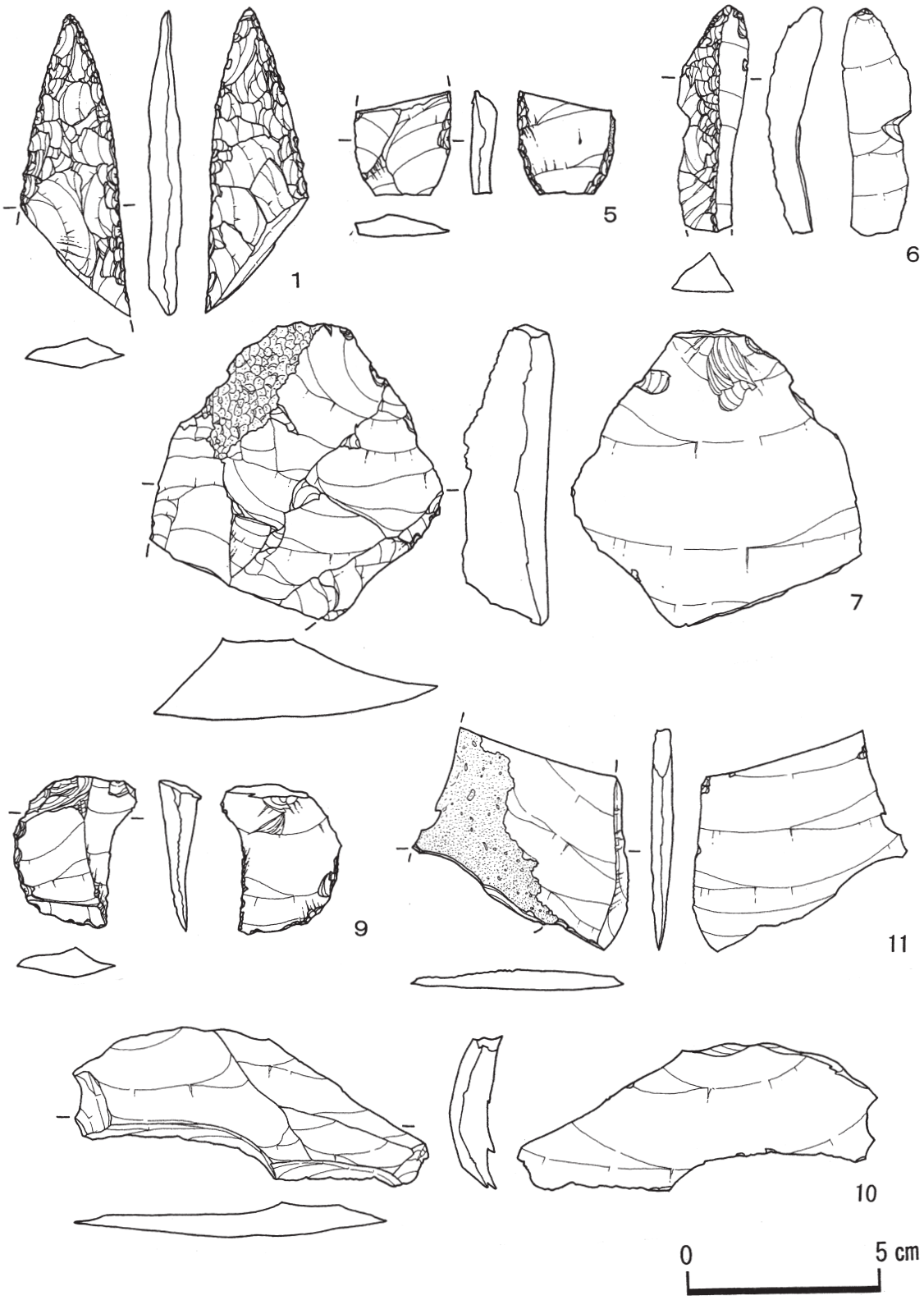
第59図　山崎北遺跡　包含層出土石器



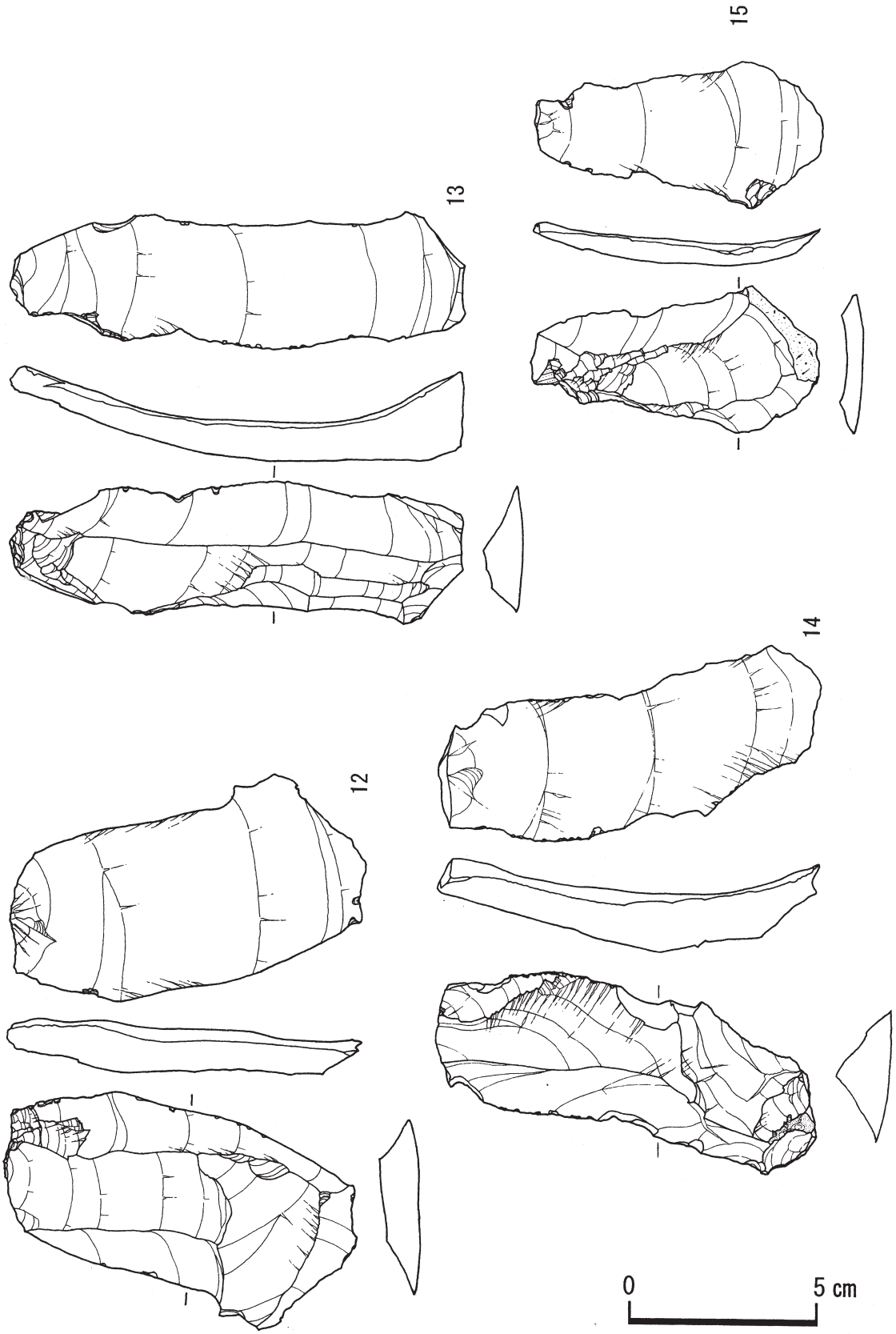
第60図　那須官衙関連遺跡　後世の遺構内出土石器



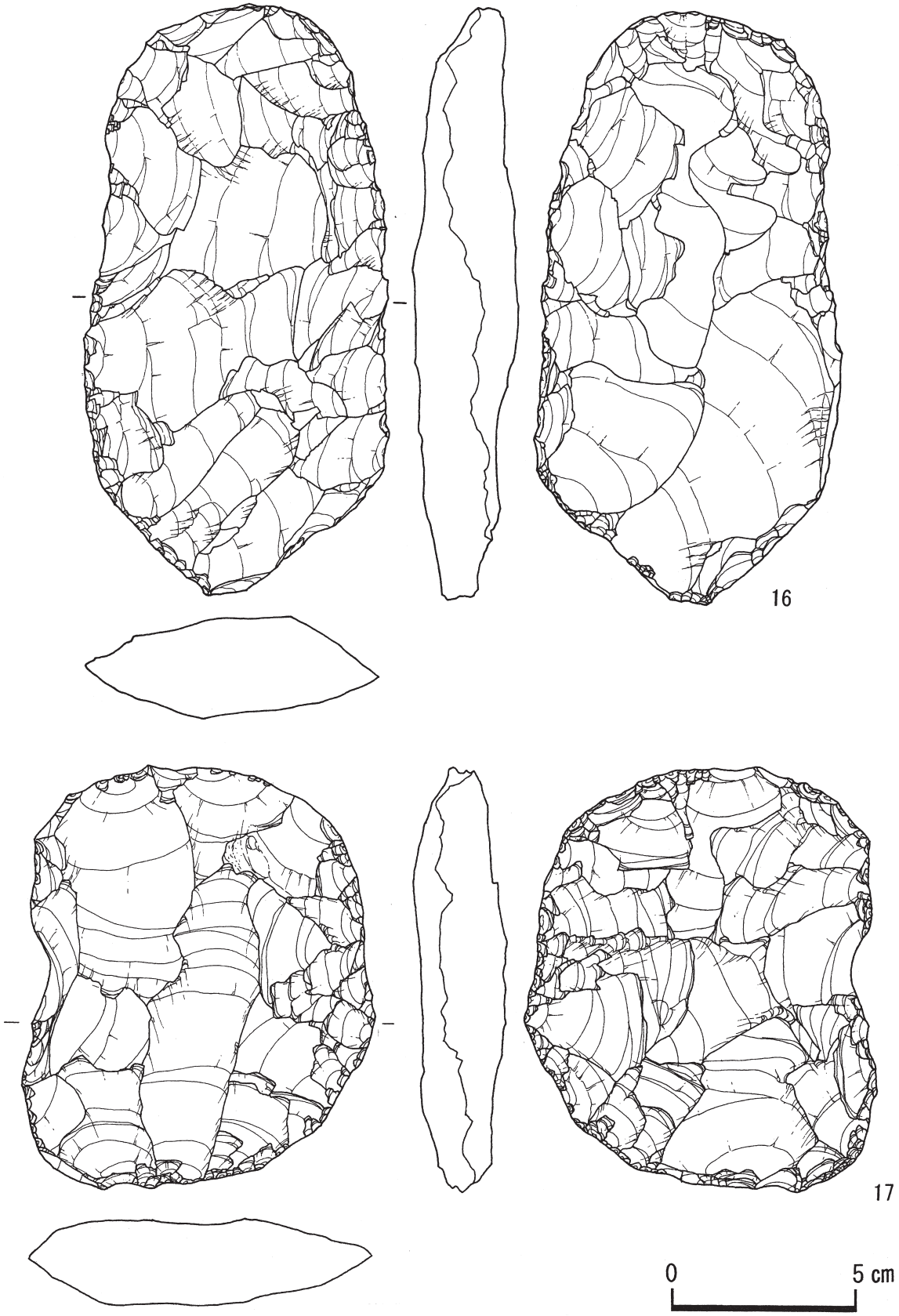
第61図　川木谷遺跡出土石器



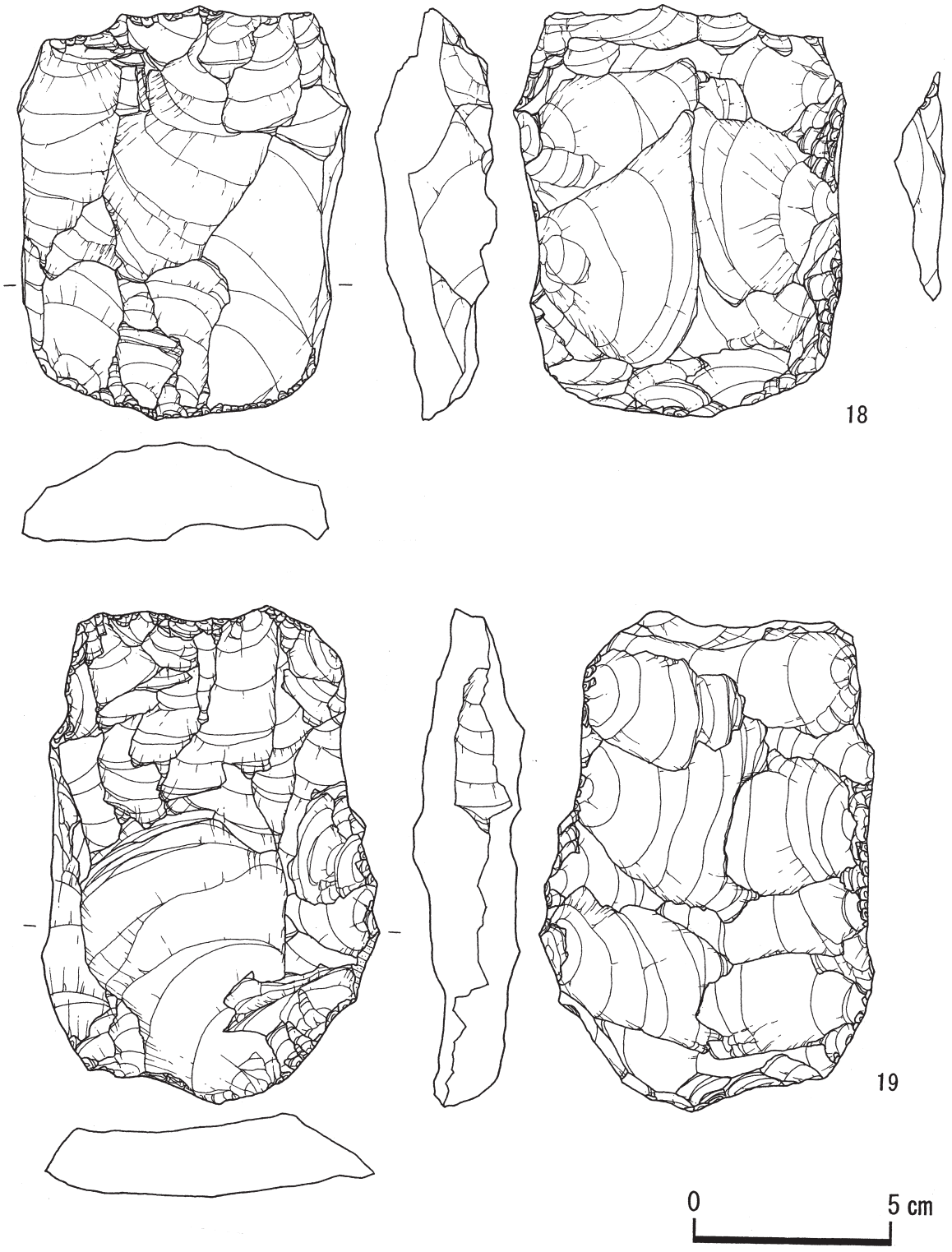
第62図　片府田富士山遺跡　後世の遺構内出土石器（１）



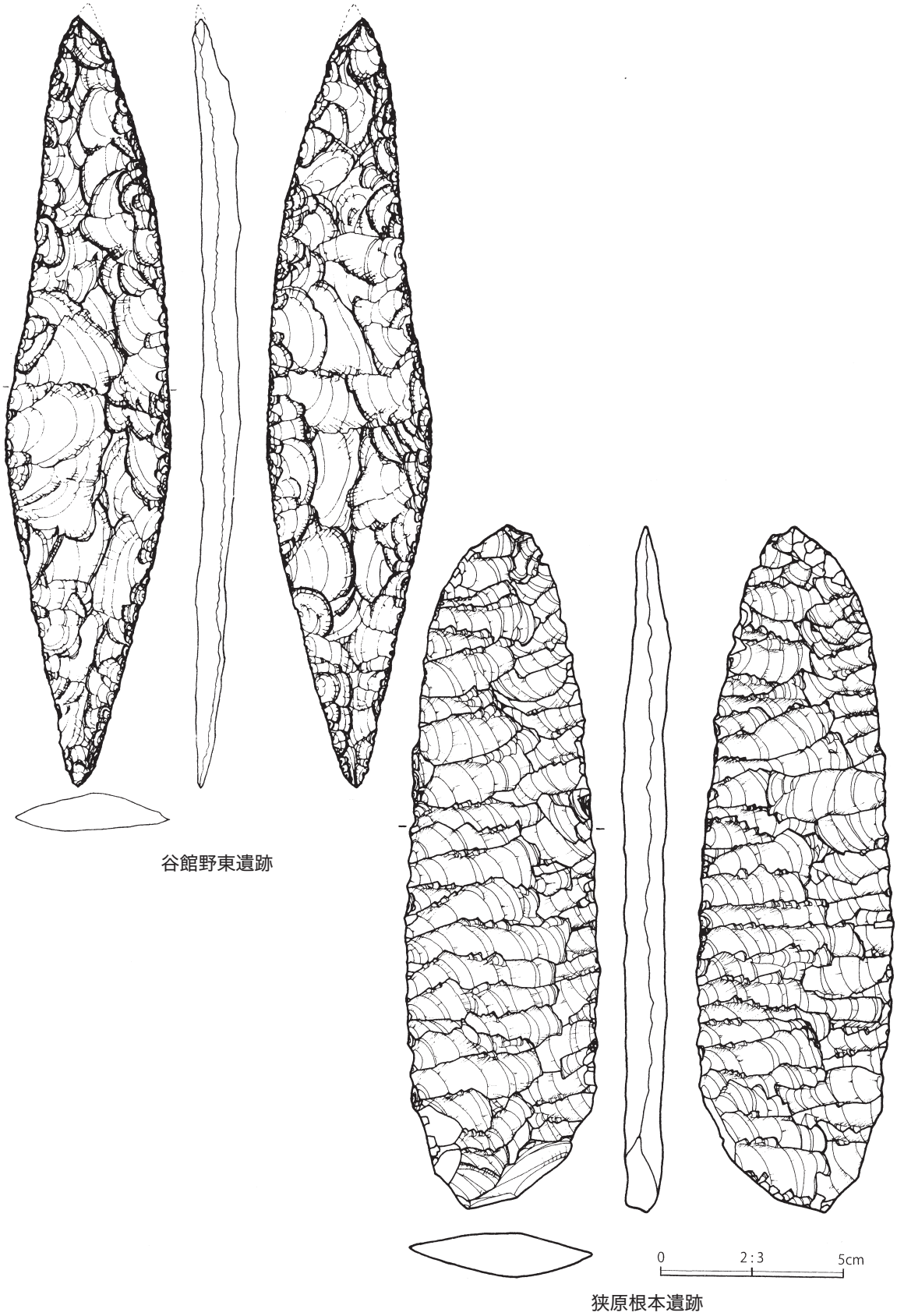
第63図　片府田富士山遺跡　後世の遺構内出土石器（2）



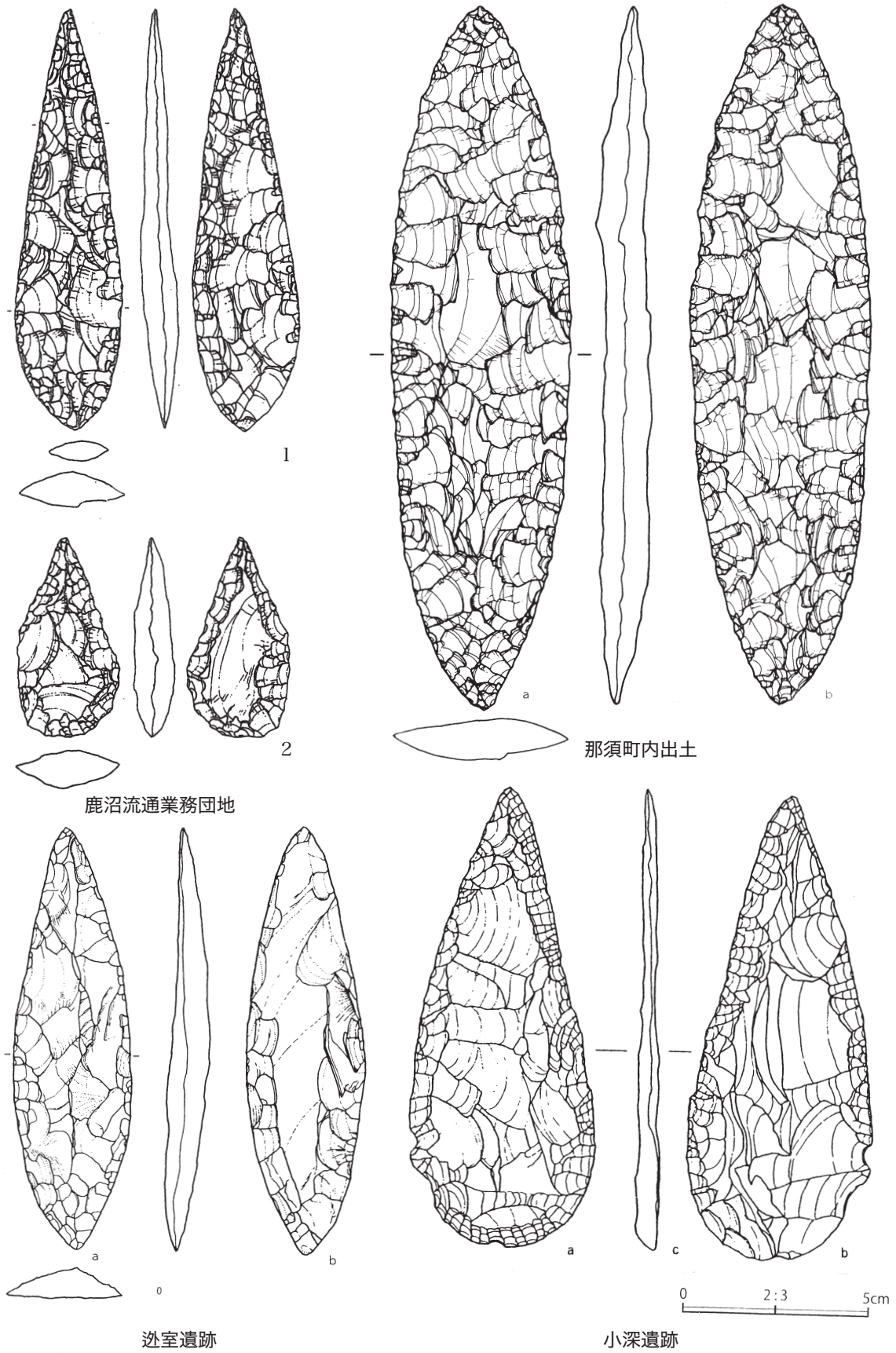
第64図　片府田富士山遺跡　後世の遺構内出土石器（３）



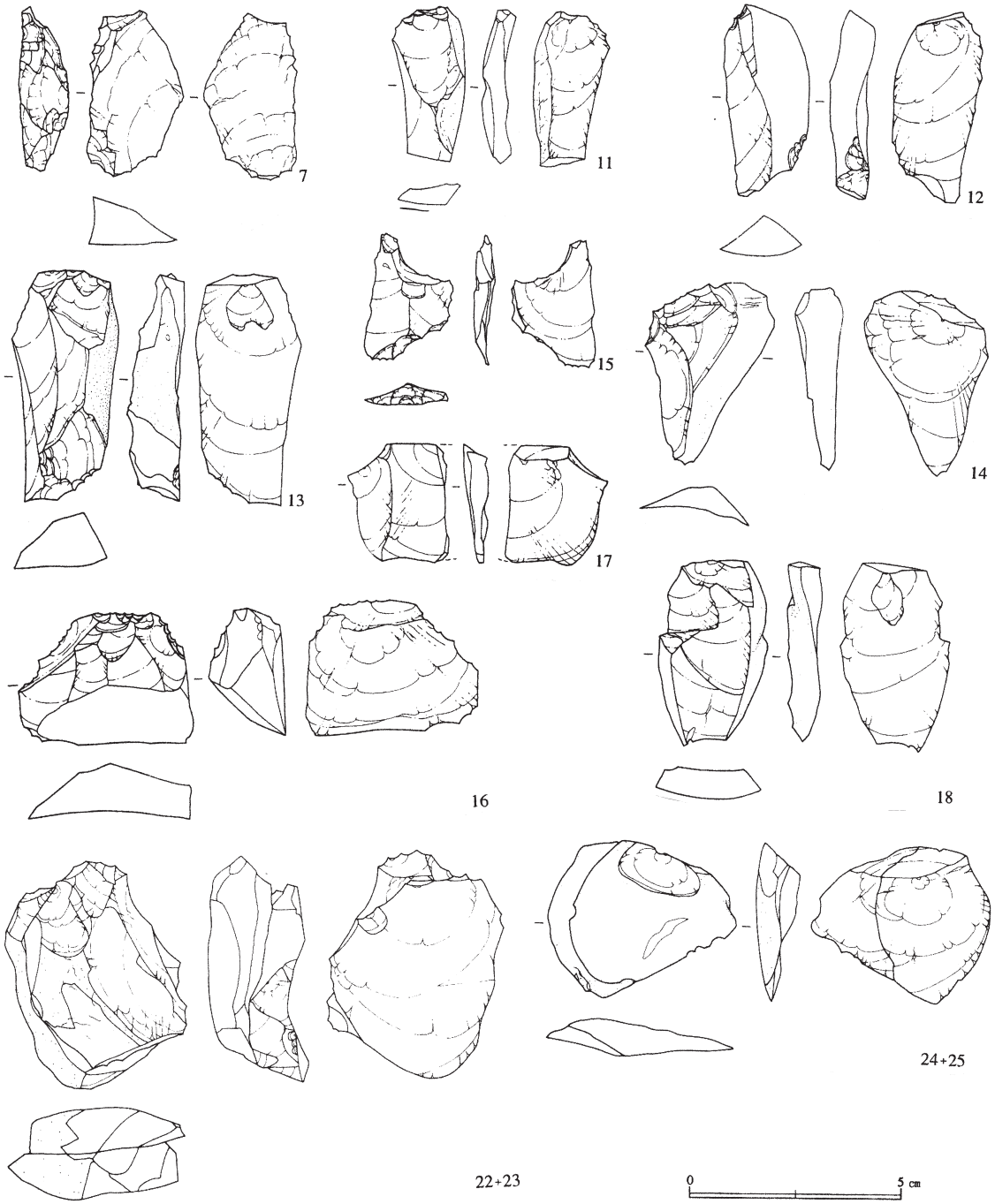
第65図　片府田富士山遺跡　後世の遺構内出土石器（4）



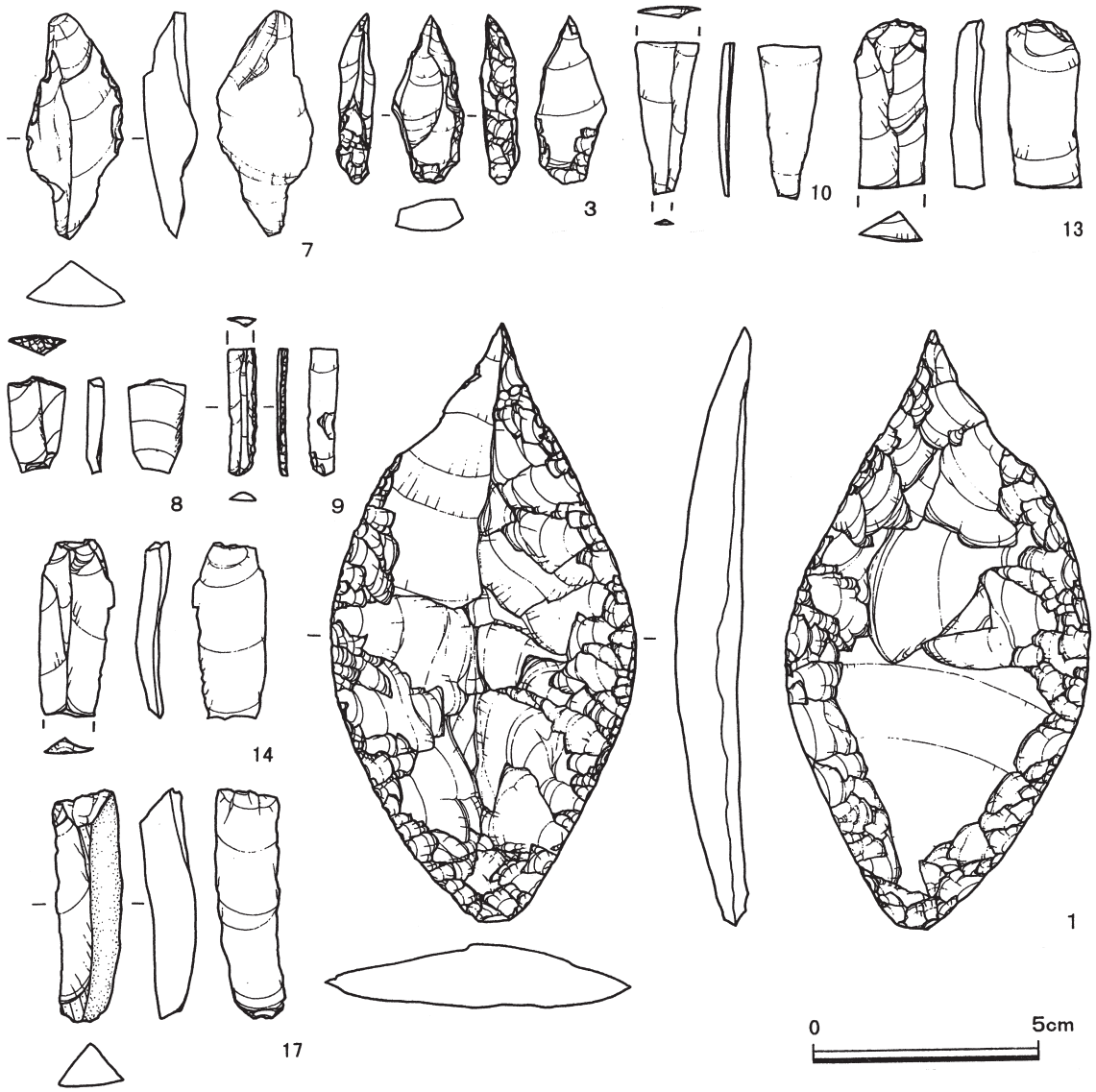
第66図　単独出土の大型尖頭器（１）



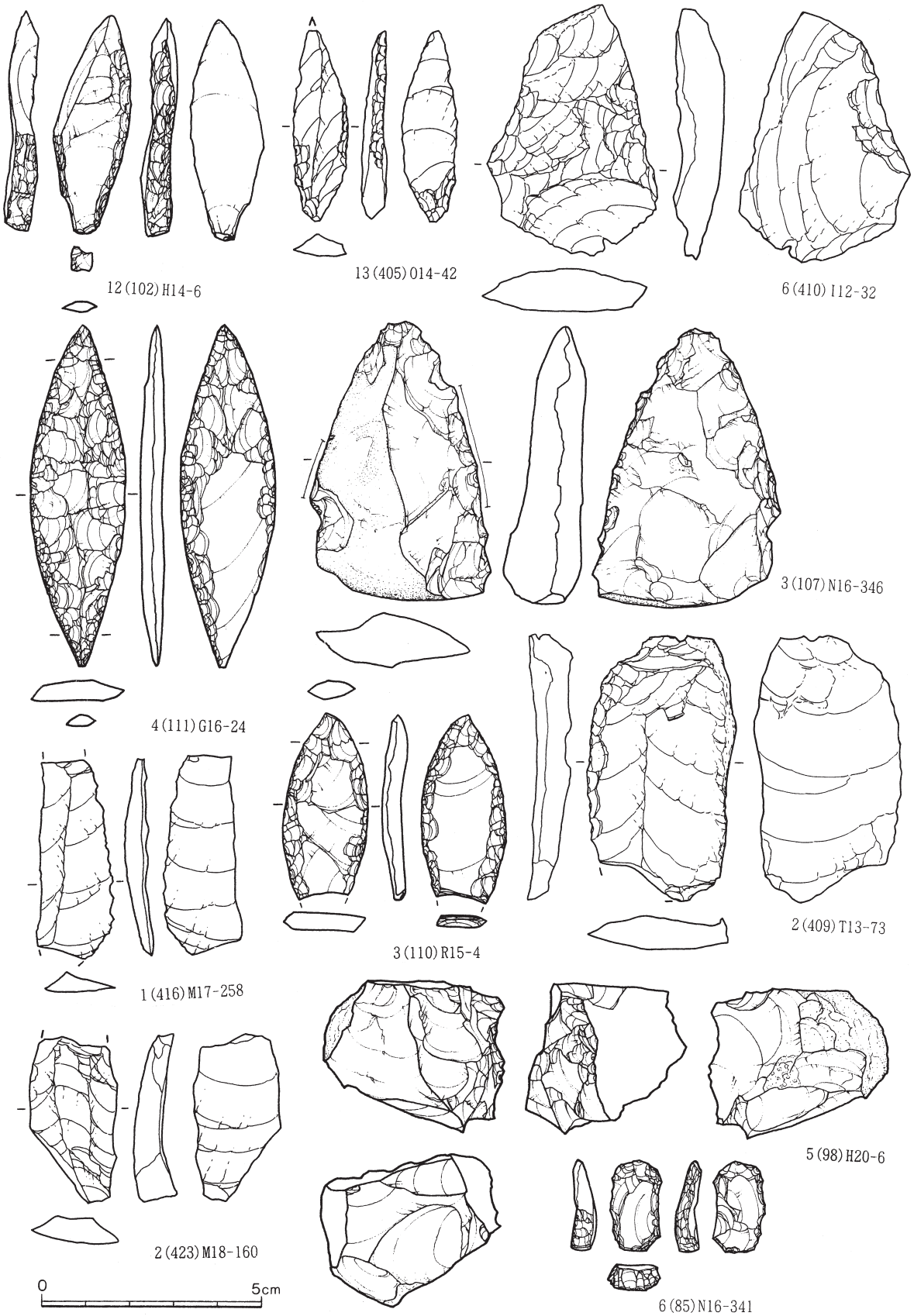
第67図　単独出土の大型尖頭器（2）



第68図　間々田六本木遺跡　３号墳周辺地区出土石器



第69図　八剣遺跡　第１ブロック（7）・後世の遺構内出土石器



第70図　西山遺跡出土石器

研究ノート　矢板市小丸山６号墳の再評価

石橋　宏（いしばし　ひろし）

１．はじめに
２．小丸山古墳群の概要
３．東日本の積石塚の様相
４．東日本の方形積石塚からみた小丸山古墳群
５．矢板市十三塚遺跡の様相
６．収束

方形積石塚である小丸山６号墳の墳丘や埋葬施設の構造を整理し、小丸山古墳群の封土墳との関係を踏まえ、静岡県浜松市二本ヶ谷積石塚群や群馬県高崎市剣崎長瀞西遺跡Ⅰ区の方形積石塚と比較した。墳丘の築造手順は二本ヶ谷積石塚群と共通し、埋葬施設の竪穴式石槨は群馬県に類例が多いが、群集墳の竪穴式石槨との比較も必要であることを説いた。最後に矢板市十三塚遺跡を紹介し、出土した鑣轡など、馬の飼育についても考慮する必要性を確認した。

１．はじめに

栃木県矢板市大字片岡字小丸山に位置する小丸山古墳群は６基の群集墳である。工業用地造成に伴い平成４（1992）年度に発掘調査が行われ、その成果が報告された（進藤1996）。特に注目を集めたのが長方形の積石の墳丘を持つ６号墳であり、調査者の進藤敏雄はこれを「積石塚」と捉えている（進藤1995、進藤1996）。この調査成果は、矢板市十三塚遺跡（中村1991）から出土した５世紀代の鑣轡の出土例も考慮して、2015年度から設営された栃木県埋蔵文化財センターの常設展示室の一角で、渡来人との関わりで説明されている。

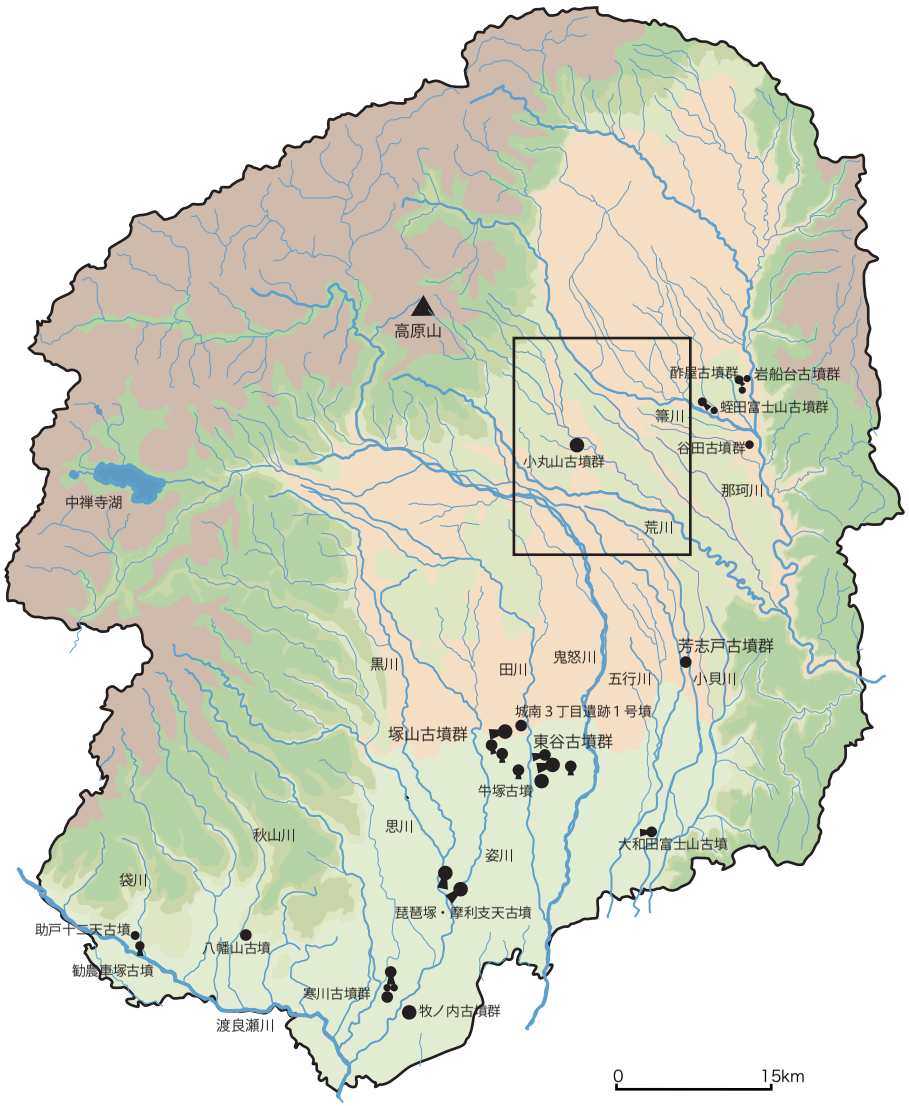
進藤が「積石塚」として位置付けた６号墳は、県内では認知されているものの「積石塚」として国内では浸透していない。筆者は進藤の調査研究成果の重要性を鑑み、改めて小丸山古墳群の調査成果を再確認し、他地域の積石塚との比較を行いたいと考える。

２．小丸山古墳群の概要

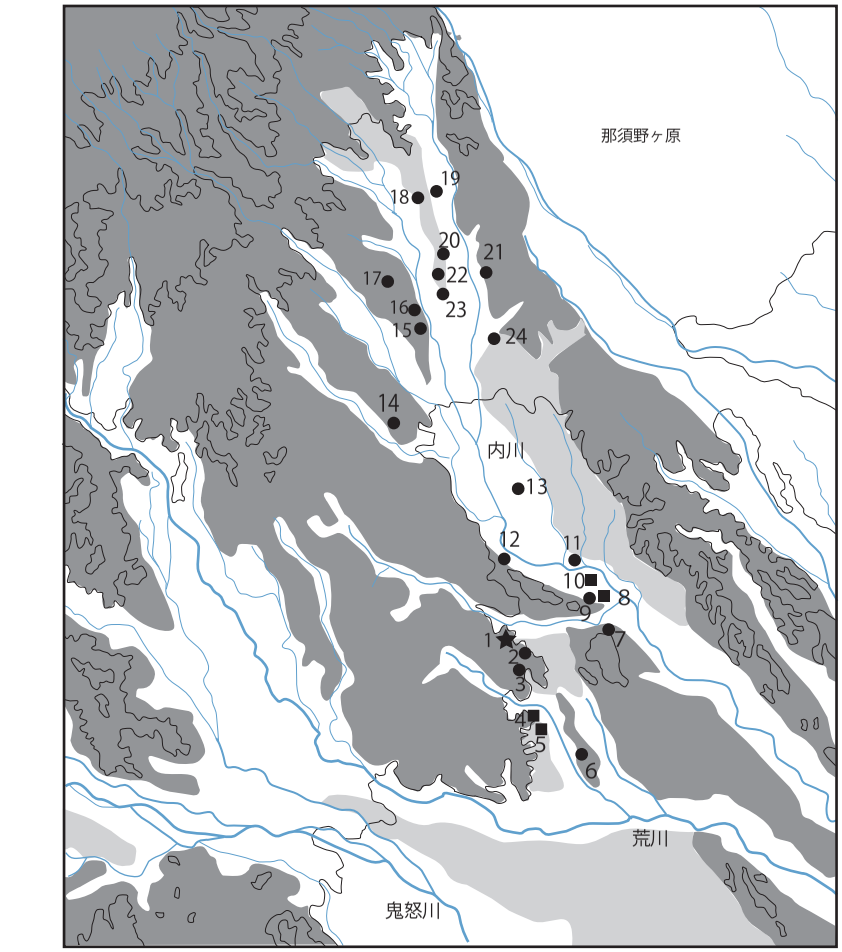
報告書（進藤1996）に従って、整理したい。小丸山古墳群の位置する矢板市は（第１図）、北東に那須野ヶ原台地が広がり、北西には、日光山地に隣接する「高原山」が聳えている。山裾は南東方向に延び、矢板丘陵となり、市の南部を横切る。高原山を源とする幾つもの沢は小河川にまとまりながら内川を形成し、最終的に荒川に合流する。丘陵は沢や小河川により開析され、複雑な様相を呈すが、南西に延びる舌状の丘陵（通称小丸山）頂部の南東に開けた緩斜面地に小丸山古墳群は位置する（第２図）。矢板市街の標高は200m付近、小丸山古墳群の立地する丘陵斜面は214m～217mである。

第１表　小丸山古墳群の概要

名称	墳丘形	墳丘内径	墳丘外径	埋葬施設	埋葬頭位	出土土器	埋葬施設出土遺物
１号墳	円墳	15.4m	約18.5m	木棺直葬	N－77°－E	高坏２点・須恵器広口壺１点	刀子１点
２号墳	円墳	最大14.8m	最大18.3m	木棺直葬	N－78°－E	坏４点・小型甕１点・甑１点・甕２点	なし
３号墳	円墳	最大14.2m	最大17.8m	木棺直葬	N－52°－E	坏２点・坩１点・甕２点	なし



第１図　栃木県の中期から後期初頭の主要古墳



1．小丸山古墳群　2．通岡古墳　3．愛宕山古墳　4．石関北遺跡　5．石関遺跡
6．乙畑・大久保古墳群　7．梶ヶ沢入口遺跡　8．岡遺跡　9．後岡古墳　10．十三塚遺跡
11．塚原古墳群　12．境林古墳　13．木幡神社古墳　14．番匠峰古墳群　15．西太田古墳群
16．庚申塚古墳群　17．上長井 D 遺跡　18．並塚古墳群　19．泉ヶ丘古墳群　20．大塚古墳群
21．権現原古墳群　22．堀越遺跡　23．登内古墳　24．荒井遺跡

第２図　矢板市周辺の古墳時代主要遺跡

４号墳	円墳	約8.７m	約10.4m	直葬	N－47°－E	坏１点	―
５号墳	円墳	最大10.8m	12.7m	木棺直葬	N－50°－E	―	なし
６号墳	積石塚	―	5.2×4.2m	竪穴式石槨	N－45°－E	出土なし	鉄鏃10点・鉄刀１点

古墳群について上記の表にまとめた。１号墳から５号墳が近距離でまとまり、４号墳の北側約45m離れて６号墳が位置する（第３図）。１号墳・２号墳・３号墳を中心とした群内の規模が大きい古墳が平坦な緩斜面地に位置している。６号墳は北側の急斜面地に近い位置に築造される（第３図右上）。

１号墳から５号墳の墳丘と埋葬施設

４号墳と５号墳は墳丘が削平されていたため、墳丘構造が判明する１号墳を例にすると、進藤は「墳丘の下半部は周溝の掘削により、地山を削り出し、上半部は黒ぼく土を旧地表面の上に盛り上げている。築成はまずドーナツ状に土を盛り、その中を満たすようにして行われている」とされ、墳丘築製後に墳丘中央部に墓壙を掘り（第５図）、棺痕跡から長軸3.2m×幅80cm程の箱形木棺（第４図）が埋置されていることを指摘している。群集墳の小規模古墳の築造方法であるが、ドーナツ状に土手状の盛土を行い、内部を埋めて墳丘を築盛する方法は青木敬の指摘する「西日本的工法」に該当する（青木2003）。２号墳や３号墳も同様の構造である。

築造時期

３号墳の墳丘下や１号墳・２号墳・４号墳・５号墳の周溝埋土内や１号墳・２号墳・３号墳の墳丘盛土内から榛名山二ツ岳由来のテフラが出土した。３号墳の周溝からは火山灰の一時堆積が認められた。３号墳は墳丘築造直前と墳丘築造後の２回火山灰が降下したと判断し、進藤はそれぞれをHr-FA・Hr-FPと考え、周溝出土土器も考慮し、Hr-FA直後にまず３号墳が築造され、Hr-FP降下以前に１号墳から５号墳が相次いで築造されたと指摘している。出土土器は、墳丘から周溝に比較的早い段階で流失して埋まったものと、周溝が埋没後奈良時代から平安時代に置かれた土器がある。表１は奈良・平安時代の土器は記載してない。出土土器（第６図・第７図）の３号墳出土短脚高坏や２号墳の長胴化した丸甕や模倣坏を考慮すると、６世紀前半の様相である。進藤の指摘通り１号墳から５号墳の築造は６世紀前半と捉えられる。

６号墳の埋葬施設と積石の構築順序

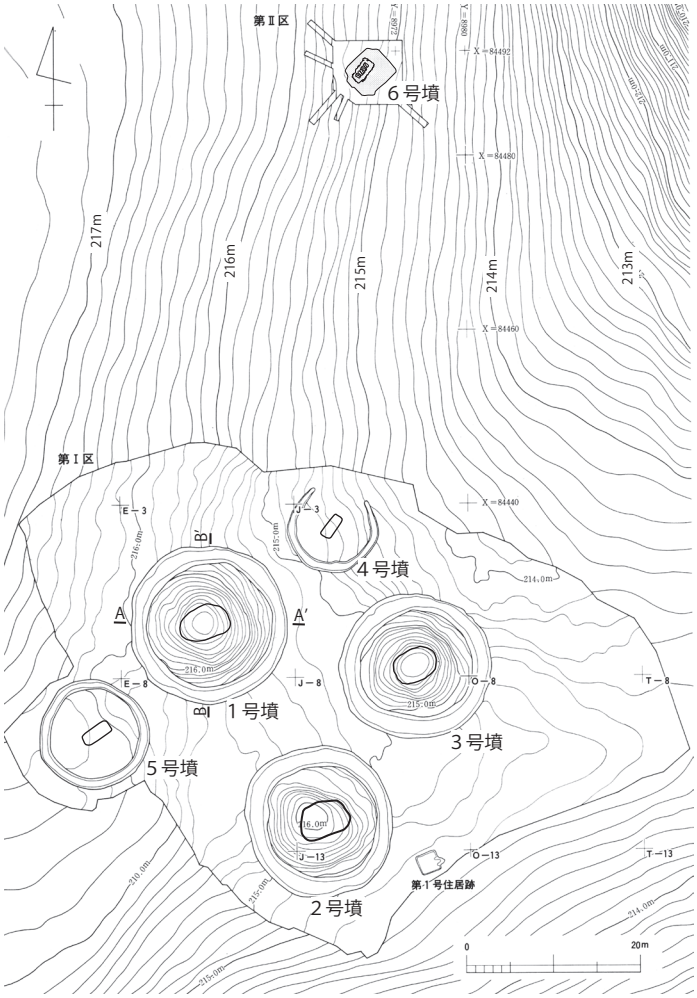
６号墳について触れたい。６号墳周辺は開墾されておらず、発見時に積石が一部露出しており、当初から盛土を持たないことが指摘されている。築造順序は以下の通りである（第８図）。

① 旧表土面に長軸３m、頭側（北東側）1.5m、脚側（南西側）1.3m、の範囲で石槨掘形を掘削する。深さは頭部側0.25m、脚部側0.4m。

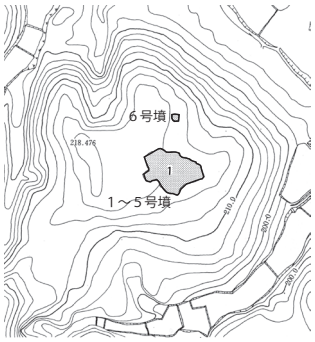
② 人頭よりやや大きめの河原石の平らな面を内側に向け、積み上げていく（第８図中央下）。この石槨の積石の外側にも裏込めの河原石を並べ、隙間を砂礫混じりの白色粘土で充填する。石槨積石は２段目以降はやや小ぶりで扁平な河原石を積んで壁体を構築し、握り拳大から人頭大程度の河原石を裏込めとして不規則に積む。これらの裏込めの石材の間も白色粘土で充填する。小口側は、天井石と同じ石英斑岩の柱状割石を２段積んで構築する。石槨内面は底面で長さ1.71m、頭部側で最大48cm、脚部側で幅30cm。

③ 平均0.45cmの高さまで積み上げ、床面及び壁体の下半部に白色粘土を２～７cmの厚さに塗る（第８図右下）。

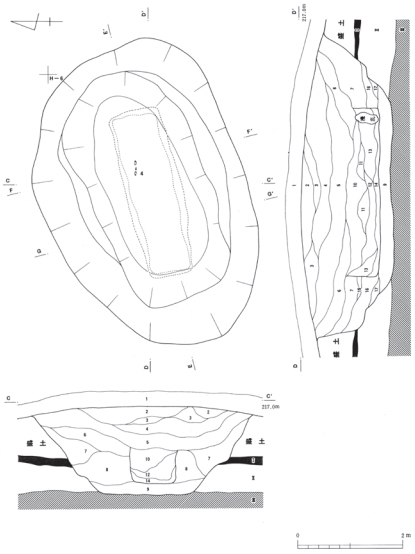
④ 被葬者を埋葬し、被葬者の左側に鉄刀を、右側に鉄鏃を配置する（第９図左）。



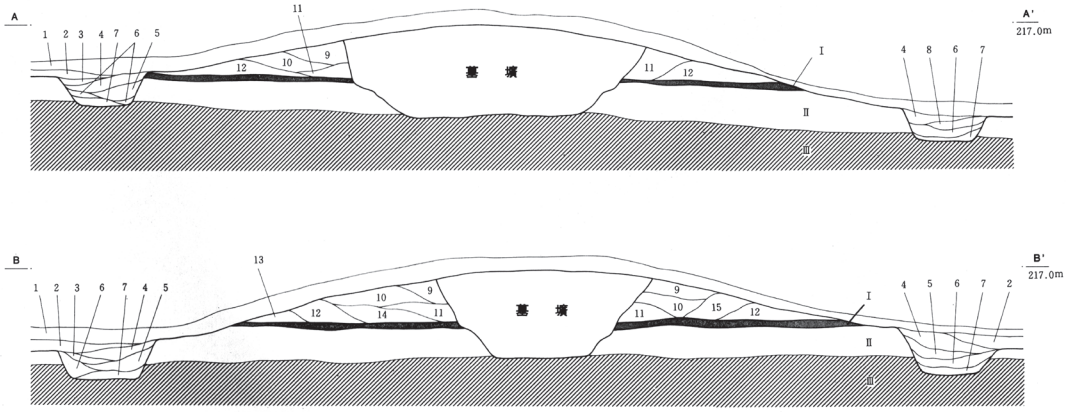
第３図　小丸山古墳群範囲図



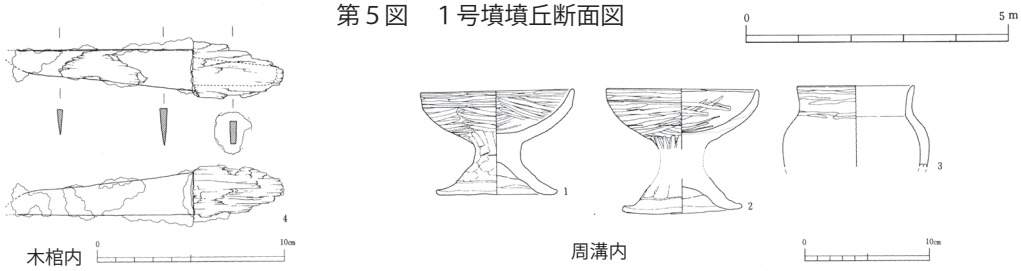
小丸山全体（５千分の１）



第４図　１号墳埋葬施設

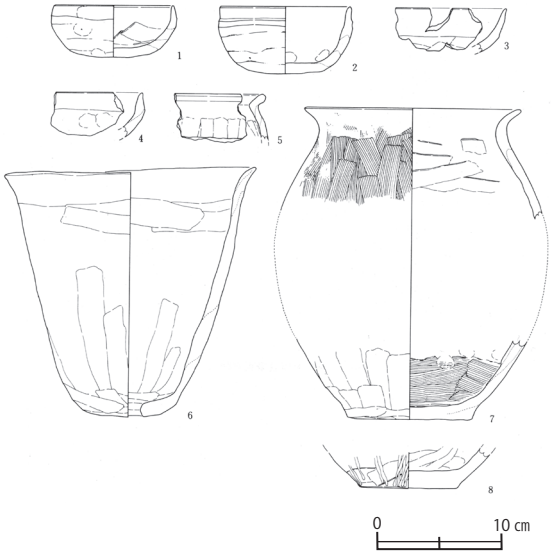


第５図　１号墳墳丘断面図

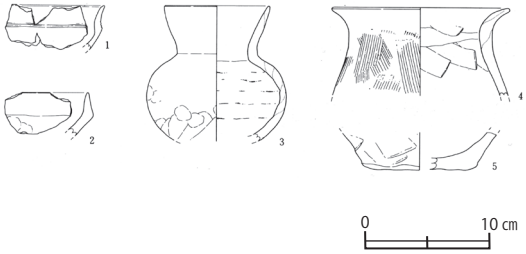


第３図～第６図進藤 1996 より作成

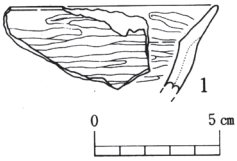
第６図　１号墳出土遺物



２号墳周溝出土土師器

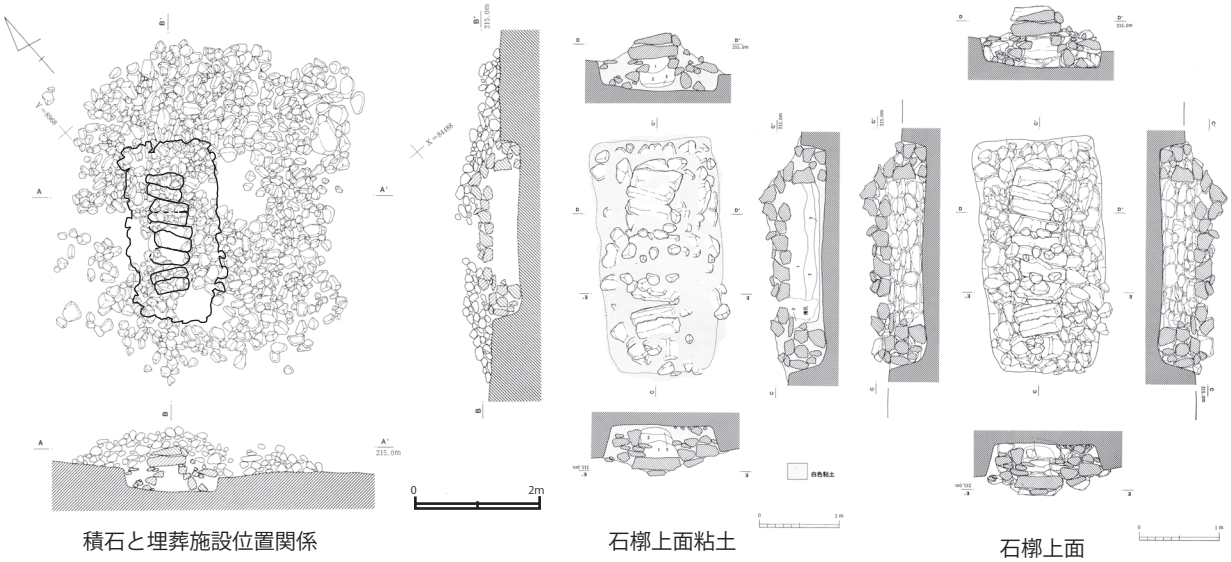


３号墳周溝出土土師器



４号墳周溝出土土師器

第７図　２・３・４号墳周溝出土土師器



積石と埋葬施設位置関係　　石槨上面粘土　　石槨上面

積石

粘土・蓋石除去後石槨

石槨粘土床

第７図・第８図進藤 1996 及び調査画像より作成

第８図　６号墳の墳丘と埋葬施設

⑤　長さ55～70cm、幅20～30cm重量50㎏程度の石英斑岩の柱状割石を天井石として並べ、石槨を密閉する（第８図右上）。

⑥　石槨全面を白色粘土で密閉する（第８図中央上）。

⑦　人頭大よりやや小さい河原石を用いて、平均２～３段、厚い箇所で４段積み上げ、積石を長方形上に仕上げる。積石総数2,412個、総重量21t。

これは①から⑥が埋葬施設の構築で⑦が墳丘（積石）の構築となる。埋葬施設は積石の中心から西にずれている点と、積石が複数段積まれている点や、埋葬施設より大幅に積石範囲が広い点を考慮すると、進藤の指摘するように石室の覆い[1]ではなく、低平な墳丘（積石）として理解するべきであり、小丸山６号墳は積石塚と捉えるべきである。旧地表面に掘られた墓壙に竪穴式石槨を構築し、掘形内に礫を詰め込む例が群集墳の中心埋葬や墳丘外埋葬に確認され、小丸山６号墳の竪穴式石槨に類似する点や、後述する群馬県西部の積石塚の築造手順との差異、１基しか確認できていない点などから、積石塚として広く認識されてこなかったのではないかと推測する。

６号墳の築造時期

竪穴式石槨から鉄刀と鉄鏃が出土した（第９図）。鉄鏃10点は全て有頸鏃群で１～４は柳葉式で腸抉が明瞭である。６・８・９は鏃身平面形が片刃矢に近いが両刃となるものである。X線では台形関（４・５・６）と棘関（８・10）が確認できるとされ、進藤は６世紀中葉と位置付けられている。棘関を考慮すると水野敏典の編年（水野2013）では後期２段階に位置づけられる。

小丸山古墳群内での６号墳の位置づけ

１号墳から５号墳は６世紀前半に位置付けられ、６号墳の築造は６世紀中葉の時期であり、近接した時期に埋葬された。３号墳・４号墳・５号墳とは埋葬頭位（表１）も近似しており、墓域も共有していることから６号墳も１号墳から５号墳の被葬者と関係があったことは間違いない。立地からは円墳が優位であったと判断している。６号墳を積石塚と認識するならば、他の円墳との異なる点(墳丘や墳形・構築手順・副葬品の差異)は被葬者の出自や表象に関わる問題と考えることができる。

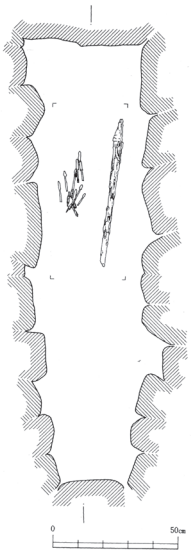
３．東日本の積石塚の様相

小丸山６号墳の様相を理解するため、東日本各地の積石塚古墳の様相を確認したい。多くの個別検討成果に加え、山梨県考古学協会や日本考古学協会2013年度長野大会での特集（山梨県考古学協会1999・日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会2013）があり、さらに研究成果の集大成である『積石塚大全』（土生田純之編2017）が刊行され、全国の積石塚の様相が明瞭となった。この成果を参考に各地の様相を触れたい。

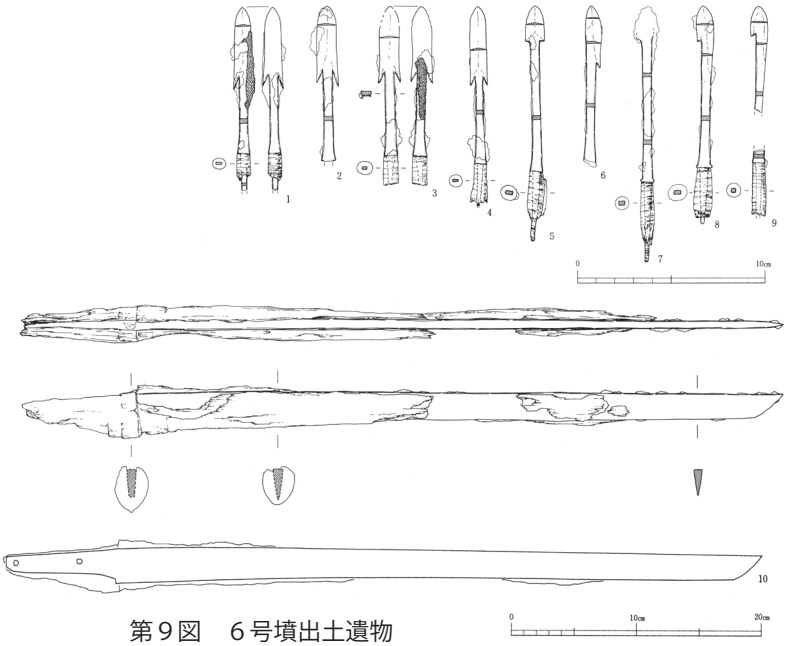
第10図に東日本における積石塚古墳の分布を示した。長野県の北信地方を中心に総数500基を超える大室古墳群や甲府盆地縁辺部の丘陵地帯に総数170基を超える横根・桜井古墳群の積石塚は円形を中心としており、方形を中心とした積石塚古墳として静岡県浜松市二本ヶ谷積石塚群や群馬県の積石塚が注目される。

浜松市二本ヶ谷積石塚群の様相

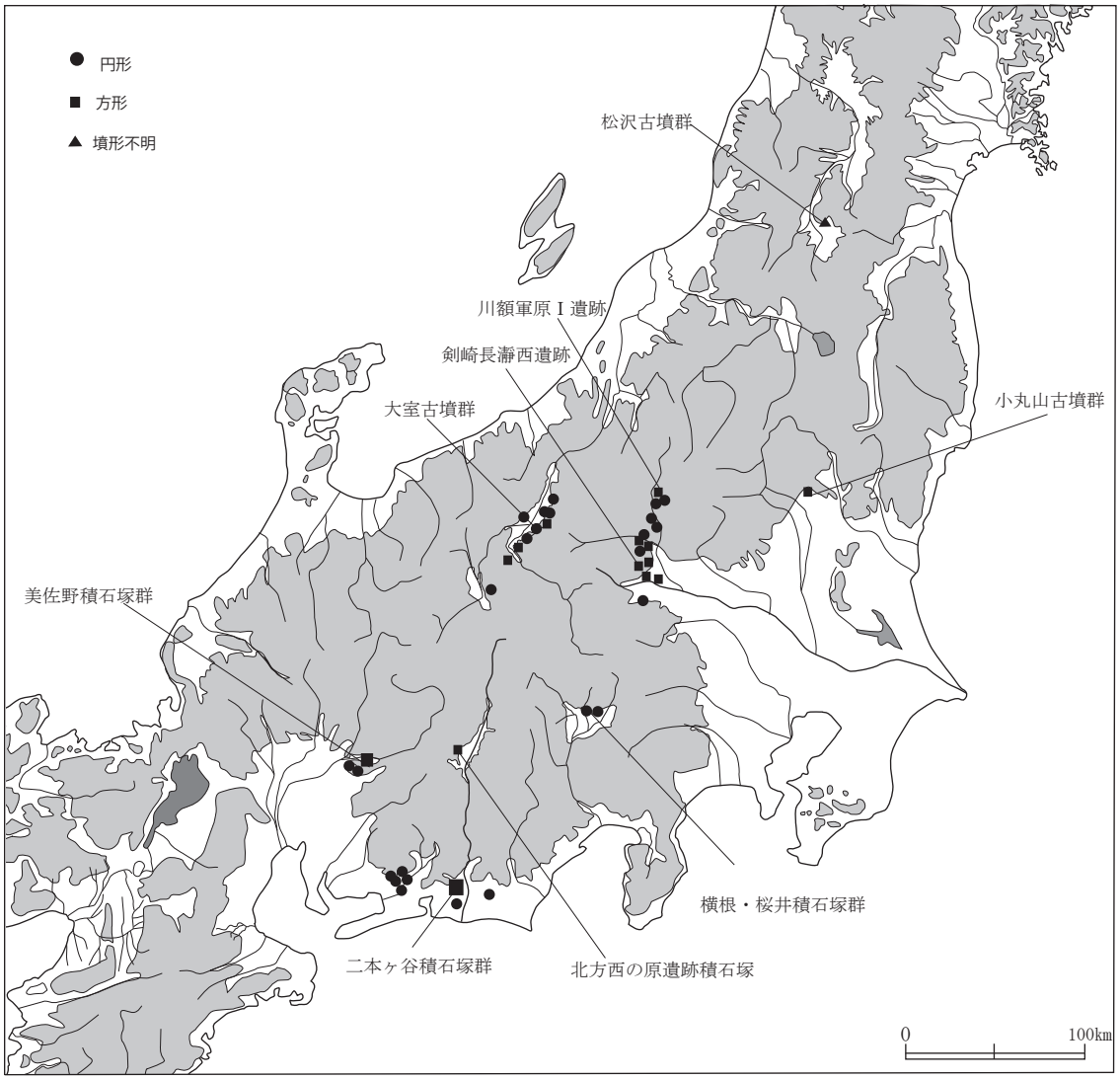
静岡県浜松市二本ヶ谷積石塚群は、周辺の封土墳とは異なり谷地形内部に立地している（第11図上段左）、28基の積石塚は調査の結果、陶邑の須恵器編年のTK216型式期には谷の東側で築造がされ、盛期はTK208型式期にあり、谷の西側や周辺も含め一部６世紀まで存続するとされる。方形ないし隅丸方形を基調とし、規模の大きいものは一辺９ｍを超えるものの、最も集中するのは、一辺4.5mから６ｍの範囲であり、一辺２ｍから３ｍの小規模のものが確認される。



進藤 1996 より作成



第９図　６号墳出土遺物



筆者作成

第 10 図　東日本における積石塚の分布

築造過程は、埋葬施設設置個所を浅く掘り、木棺や木槨状の施設を設置してから上部に積石を設置する（第11図上段右）。端部にやや大型の石材を使用して、積石の境界が明瞭なものもあるが、使用する石材に大きな差はないようである。滝沢誠は、韓半島の三国時代の墳墓について埋葬施設より先に墳墓を築く「墳丘先行型」と埋葬施設より後に墳丘を築く「墳丘後行型」が地域により排他的かつ伝統的に分布することを指摘した吉井秀夫の研究成果（吉井2002）を引用し、墳丘後行型の墳墓が分布する半島南部ないし半島西南部地域の墳墓との関連を見きわめる必要性を説く（滝沢2009）。鈴木一有は二本ヶ谷積石塚群が10m以下の方形を基本とした古墳であり、周辺地域の様相（恒武遺跡群など）を踏まえ、地域を束ねる被葬者ではなく、複合的な半島の技術・知識をもたらした外来系渡来系技術集団と想定している（鈴木2017）。墳丘と埋葬施設築造課程は、小丸山古墳群と共通する点が多い。

群馬県の方形積石塚

群馬県西部や北部における積石塚は60例ほど知られ、橋本博文や土生田純之により群馬県の積石塚と同時期の封土墳との詳細な比較が行われ、積石塚は同時期の封土墳に比して規模・立地・副葬品等から下位に属することが明らかにされている（橋本1999、土生田2006）。

５世紀を中心とした剣崎長瀞西遺跡では、TK208型式期を上限として、竪穴式石槨を埋葬施設とした方形の低平な積石塚が、６世紀には渋川市空沢遺跡など円形のものも確認され、無袖式の横穴式石室が採用される事例も増えるものの、小規模で方形の事例やごく小規模の円形の積石塚には、竪穴式小石槨が残存することが指摘されている（土生田2006・若狭2013・2017）。

特に方形の積石塚と剣崎長瀞西遺跡Ⅰ区に着目すると、若狭徹は、方形の積石塚を３類に区分する。１類　方形の基壇（盛土）の上に積石塚を載せたもの。円筒埴輪を持ち、大型。２a類　方形の低平な積石塚で、低い土壇（削り出し）に載るもの。２b類　低平で土壇に載らないもの。１→２a類→２b類の順で外寸が小さくなり、階層差があることを明確にし、剣崎長瀞西遺跡Ⅰ区（第11図中段左）では、中型円墳の長瀞西古墳（径28m）を中核として２a類と２ｂ類がセットなるものが認められ、何らかの集団構成が反映することを指摘している。

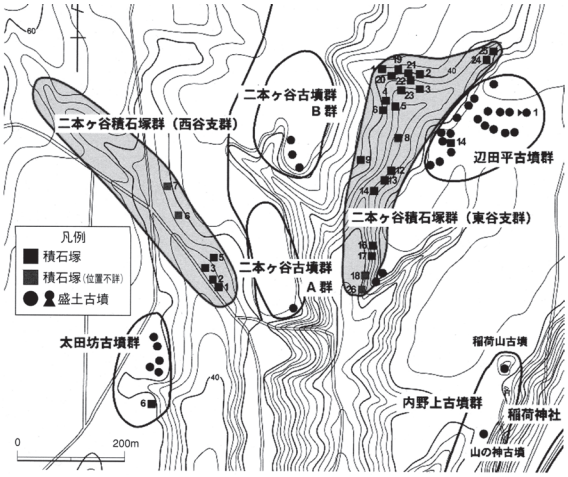
剣崎長瀞西遺跡の調査に携わった土生田純之は、Ⅰ区の古墳は方墳と円墳という形態以外に基本的な築造方法や景観（円墳は表面葺石・方墳は積石）に差異はないが、円墳が西から南に余裕のある占地をするのに対し、方墳や積石塚は東側の小谷の間近に密集して築造されおり、明確に区別できることを指摘している。

また、築造方法については、古墳築造予定地を浅く削り出して基壇を形成し、大型墳の場合、この中央に二段目を構築してその中に埋葬施設を構築しており、埋葬施設は地表上（第11図中段右）か二段目の上、あるいは二段目の中に設置されたものであることを指摘している（土生田2006）。同様に指摘されているが、７世紀に築造された昭和村川額軍原Ⅰ遺跡５号積石塚（第11図下段左）も古墳築造地を浅く掘りくぼめ、積石中に竪穴式石槨が設置されていることが良く分かる例である。

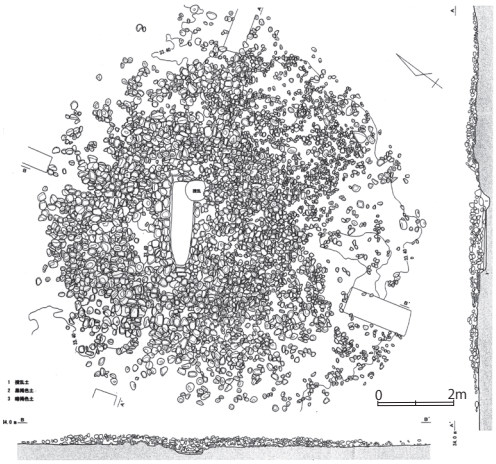
４．東日本の方形積石塚からみた小丸山古墳群

立地　小丸山１号墳から５号墳が比較的平坦な傾斜面に余裕をもって築造されたのに対し、小丸山６号墳が北側の急斜面に近い位置に築造された点は封土墳が優位な占他を行う他の地域と共通すると考える。古墳築造地は円墳被葬者が優先され、明確に区別された。

規模・墳丘・埋葬施設　地山に墓壙を掘りこみ、その上部に積石を行う点は二本ヶ谷積石塚群と共通する。木棺や木槨状施設ではなく、竪穴式石槨である点は群馬県の積石塚と共通する。しかし、旧地表面を掘りこん

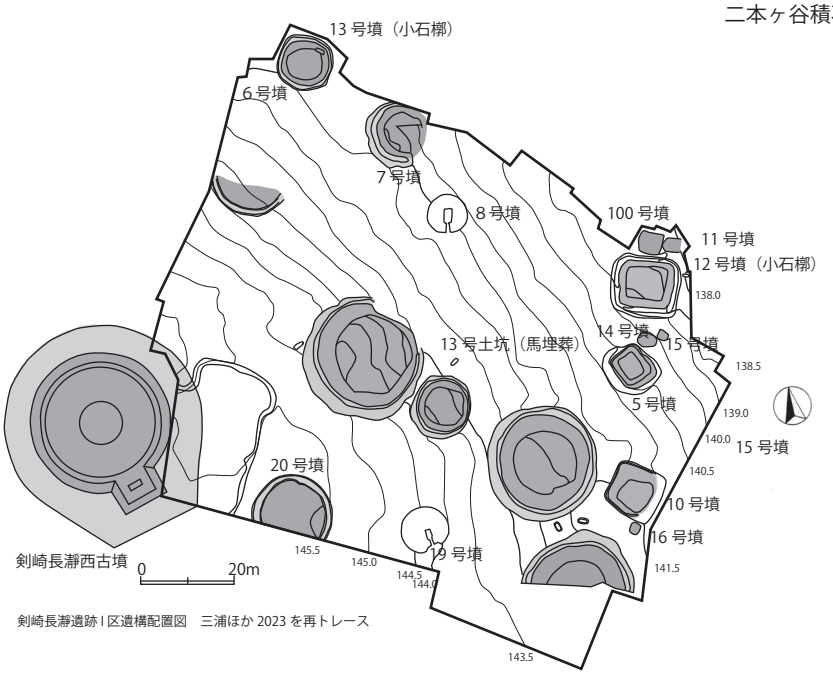


浜松市二本ヶ谷積石塚群位置図



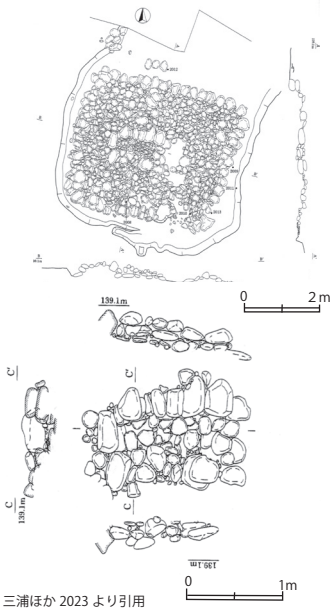
二本ヶ谷積石塚　鈴木ほか 2009 より引用

二本ヶ谷積石塚東谷 13 号墳



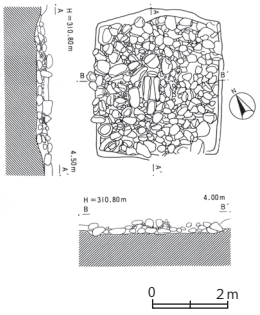
剣崎長瀞遺跡Ⅰ区遺構配置図　三浦ほか 2023 を再トレース

高崎市剣崎長瀞西遺跡Ⅰ区古墳分布図



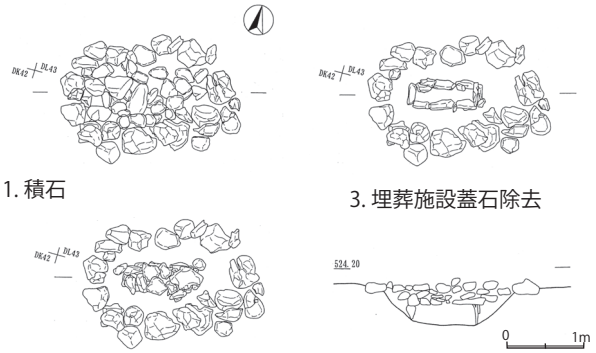
三浦ほか 2023 より引用

剣崎長瀞西遺跡 100 号墳の積石と石槨



小村 1996 より引用

昭和村川額軍原Ⅰ遺跡５号積石塚



1. 積石

3. 埋葬施設蓋石除去

2. 積石下部の埋葬施設

4. 積石と埋葬施設断面

渋谷 2017 より引用

飯田市北方西の原遺跡 SI02

第 11 図　東日本における方形積石塚の諸相

で設置し、床面や蓋石上面に粘土を多用して密封する様相は、群馬県や栃木県の群集墳中の小規模古墳の埋葬施設や、群集墳中の墳丘外側に単独で採用される竪穴式石槨とより類似点が多い。

なお5.2m×4.2mの規模は低平な積石塚では中規模ではないかと考える。

系譜　現状ではどのようなルートで矢板市に導入されたか、絞り込むことはできない。積石塚に限らず、群集墳の墳丘と埋葬施設をより詳細に検討することが必要と考えている。特に北関東や東北地方の５世紀後半から６世紀前半の群集墳に採用される竪穴式石槨や箱形石棺の波及ルートは整理が進んでいるとは言えず、この問題を整理すると、埋葬施設から言及できることも増えると考えている。

５．矢板市十三塚遺跡の様相

小丸山６号墳が積石塚として判断して問題ないことを記した。

東西を丘陵で挟まれた狭長な地形に積石塚が築かれた背景として、十三塚遺跡６号竪穴建物床面から出土した５世紀の鑣轡から、馬との関わりが想定されてきた。十三塚遺跡について触れたい。

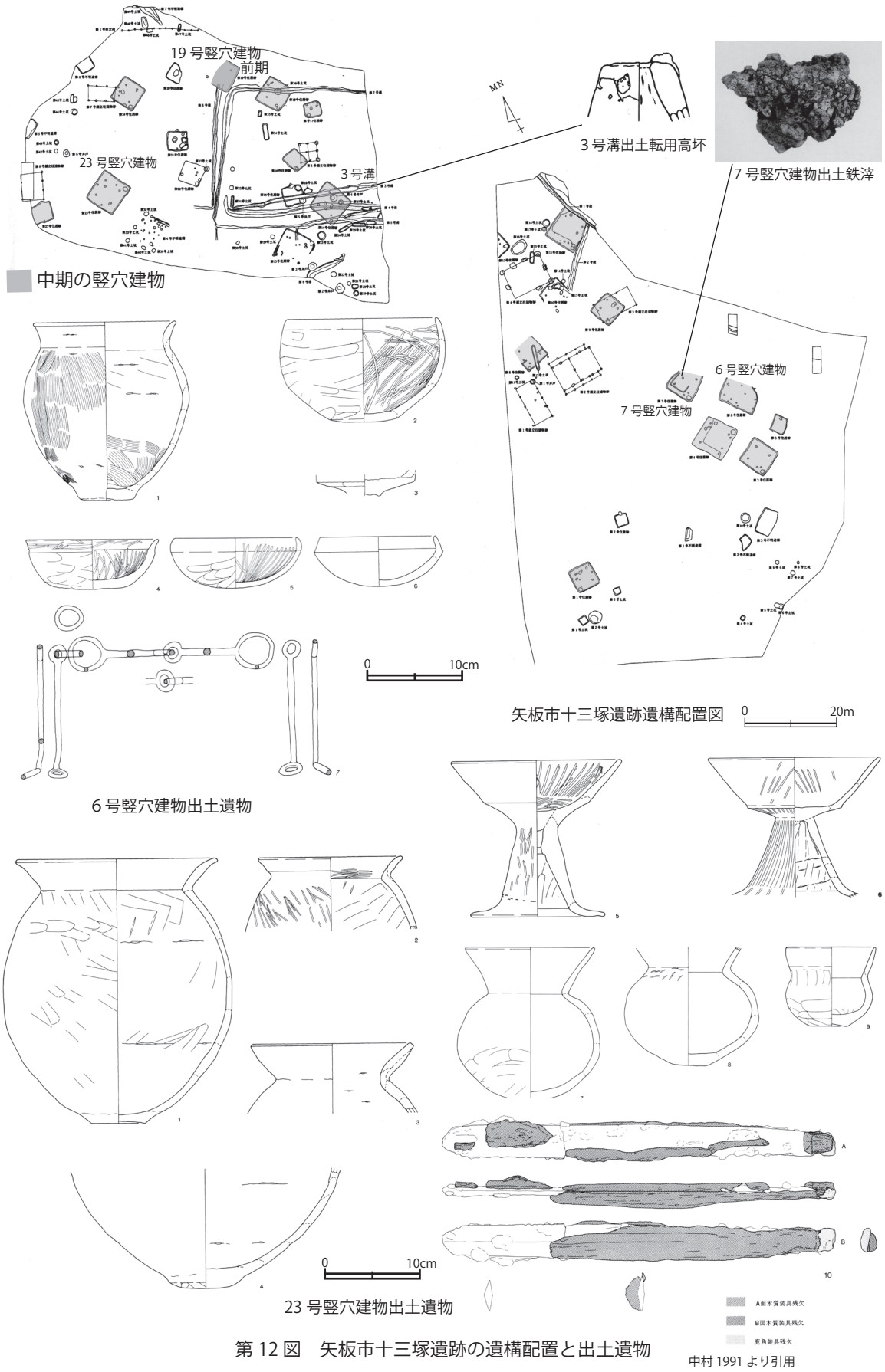
十三塚遺跡は内川に面した喜連川丘陵の北辺に接する低地に位置する（第２図）。東北新幹線建設に伴う調査が行われ、古墳時代中期の竪穴建物３軒が調査された（海老原・竹沢1975）。この調査区を挟んで東西の地区が圃場整備に伴い調査が行われた（中村1991）。圃場整備に伴う調査の遺構配置図が第12図上である。古墳時代中期の竪穴建物と平安時代の竪穴建物・掘建柱建物、中世と推測される溝が確認されている。19号竪穴建物のように前期に遡る事例があるものの、中期の竪穴建物が中心を占める。時期の判明する出土土器が伴う中期の建物は16軒である。明瞭に出土遺物と竈が伴う竪穴建物は確認されていない。鑣轡以外の渡来系文物は確認されないが、鉄器を比較的保有し、小鍛冶を行っていたことが指摘されている（中村1991）。鉄剣が出土した23号建物（第12図下）は平底甕や高坏、坩の残存を考慮すると、６号竪穴建物より古い様相を呈している。７号竪穴建物の床面からは鉄滓（第12図右上）が出土し、14号竪穴建物を壊している３号溝からは土師器高坏転用羽口（第12図上）が出土している。

鑣轡が出土した６号竪穴建物は出土した模倣坏から５世紀後半の年代が与えられ（第12図左）、十三塚遺跡の中期の建物では新しい時期のものである。

６号建物など通常の竪穴建物から出土する鑣轡は、日常的な使用や修繕の場を反映しているとの内山敏行の指摘（内山2006）があり、さらに６号建物出土例を百済系渡来人による馬匹生産の遺品と考える桃崎祐輔の見解がある（桃崎2005）。小丸山６号墳と６号竪穴建物とは時期差があるため、直ちに結びつけるのは躊躇するが、馬の飼育が行われていたと推定すると、積石塚を築くような渡来系人物の活動が５世紀に遡る可能性も考えなければならない。

６．収束

小丸山６号墳の紹介が中心となり、小丸山古墳群を群集墳としてどのように位置づけるか、検討が及ばなかった。矢板市には同時期の築造で墳丘や埋葬施設が小丸山古墳群と共通点の多い乙畑・大久保古墳群が知られているが、墳丘構造や埋葬施設が周辺地域の動向と対応するのか、その点を踏まえ、再論したいと考えている。



第 12 図　矢板市十三塚遺跡の遺構配置と出土遺物

中村 1991 より引用

註

1）長野県西の原遺跡の積石塚（第11図右下）は、蓋石上面を長方形に礫を積んで覆うものであるが、地表面に礫が露出している。埋葬施設より幅広の長方形の積石であり、墳丘（積石塚）と理解している。

参考文献

青木　敬2003「第２章　墳丘構築法の再検討」『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房

飯島哲也「序章信濃の積石塚　３信濃積石塚（大室以外）」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

岩崎浩恵・篠原祐一・進藤敏雄1995『栃木県埋蔵文化財調査報告第159集　乙畑・大久保古墳群』

岩原　剛2017「第２章東日本の積石塚　１東三河、中・東濃」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

内山敏行2006「第７章まとめ　第４節古墳時代中期の群集墳」『栃木県埋蔵文化財調査報告第299集　東谷・中島地区遺跡群７　磯岡北古墳群』

海老原郁雄・竹沢　謙1975「十三塚遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第16集　東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書その２』

小村正之1996『昭和村埋蔵文化財調査報告書第５集　川額軍原Ⅰ遺跡』

風間栄一2017「序章信濃の積石塚２　大室古墳群の実態」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

黒田　晃2001『高崎市文化財調査報告書第179集　剣崎長瀞西遺跡１』

渋谷恵美子2013「長野県南部の様相　飯田市飯田古墳群を中心に」『研究発表資料集　文化の十字路　信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会

渋谷恵美子・馬場保之・吉川豊2017『北方西の原遺跡』飯田市教育委員会

進藤敏雄1995「矢板市南部の群集墳について」『唐澤考古』14　唐沢考古会

進藤敏雄1996『栃木県埋蔵文化財調査報告第177集　小丸山古墳群・山苗代A・C遺跡』

鈴木一有2017「第２章東日本の積石塚　２遠江」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

鈴木京太郎・大塚初重・滝沢　誠2009『二本ヶ谷積石塚群保存整備事業報告書』浜松市教育委員会

芹澤清八2005『栃木県埋蔵文化財調査報告第287集　堀越遺跡』

滝沢　誠2009「二本ヶ谷積石塚群の歴史的性格」『二本ヶ谷積石塚群保存整備事業報告書』浜松市教育委員会

中村享史・日賀野宏志1991『栃木県埋蔵文化財調査報告第115集　十三塚遺跡』

日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会2013『研究発表資料集　文化の十字路　信州』

橋本博文1999「上野の積石塚再論」『山梨県考古学協会1999年度研究集会　東国の積石塚古墳』資料集

土生田純之2013「半島の積石塚と列島の古墳」『研究発表資料集　文化の十字路　信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会

土生田純之2017「終章　日本列島における積石塚の諸相」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

土生田純之編2017『積石塚大全』雄山閣

久野正博・佐野聖子・鈴木京太郎2000『内野古墳群』浜北市教育委員会

三浦茂三郎・関口修編『令和５年度高崎市観音塚考古資料館第35回企画展　剣崎長瀞西遺跡を考えるⅠ　－積石塚を含む５世紀の古墳群－』高崎市観音塚考古資料館

水野敏典2013「１金属製品の型式学的研究　⑤鉄鏃」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社

宮崎公雄2017「第２章東日本の積石塚　３甲斐」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

桃崎祐輔2005「東アジアの騎馬文化の系譜－五故十六国・半島・列島をつなぐ馬具系譜論を目指して－」『古代武器研究会・鉄器研究会連合研究集会　馬具研究のまなざし－研究史と方法論－』

山梨県考古学協会1999『山梨県考古学協会1999年度研究集会　東国の積石塚古墳』資料集

吉井秀夫2002「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』43巻３号　考古学研究会

若狭　徹2013「群馬県の様相　－上毛野における４・５世紀の交流と渡来文化（予察）」『研究発表資料集　文化の十字路　信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会

若狭　徹2017「第２章東日本の積石塚　４上毛野」『積石塚大全』土生田純之編　雄山閣

栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳の須恵器甕

－真格子叩き須恵器甕の出現期と副葬品－

内山敏行（うちやま としゆき）

はじめに
1　竹下浅間山古墳の概要
2　須恵器甕の概要
3　個別資料の特徴
4　副葬品と真格子叩き須恵器甕の出現時期
5　真格子叩き須恵器甕出現期の状況

墳長52mの前方後円墳から出土した古墳時代後期末の須恵器甕を追加報告・検討する。真格子叩き調整を行なう須恵器甕は、栃木県域南部に分布の中心を持つ下野系須恵器甕の一種である。竹下浅間山古墳は真格子叩き調整を行う須恵器甕の最初期の事例である。副葬品を検討して、馬具の宮代編年Ⅴ期後半に該当し、奈良県牧野古墳や島根県上塩冶築山古墳と並行する時期を推定した。須恵器編年では高蔵寺（TK）209号窯式期の古段階に相当する。

はじめに

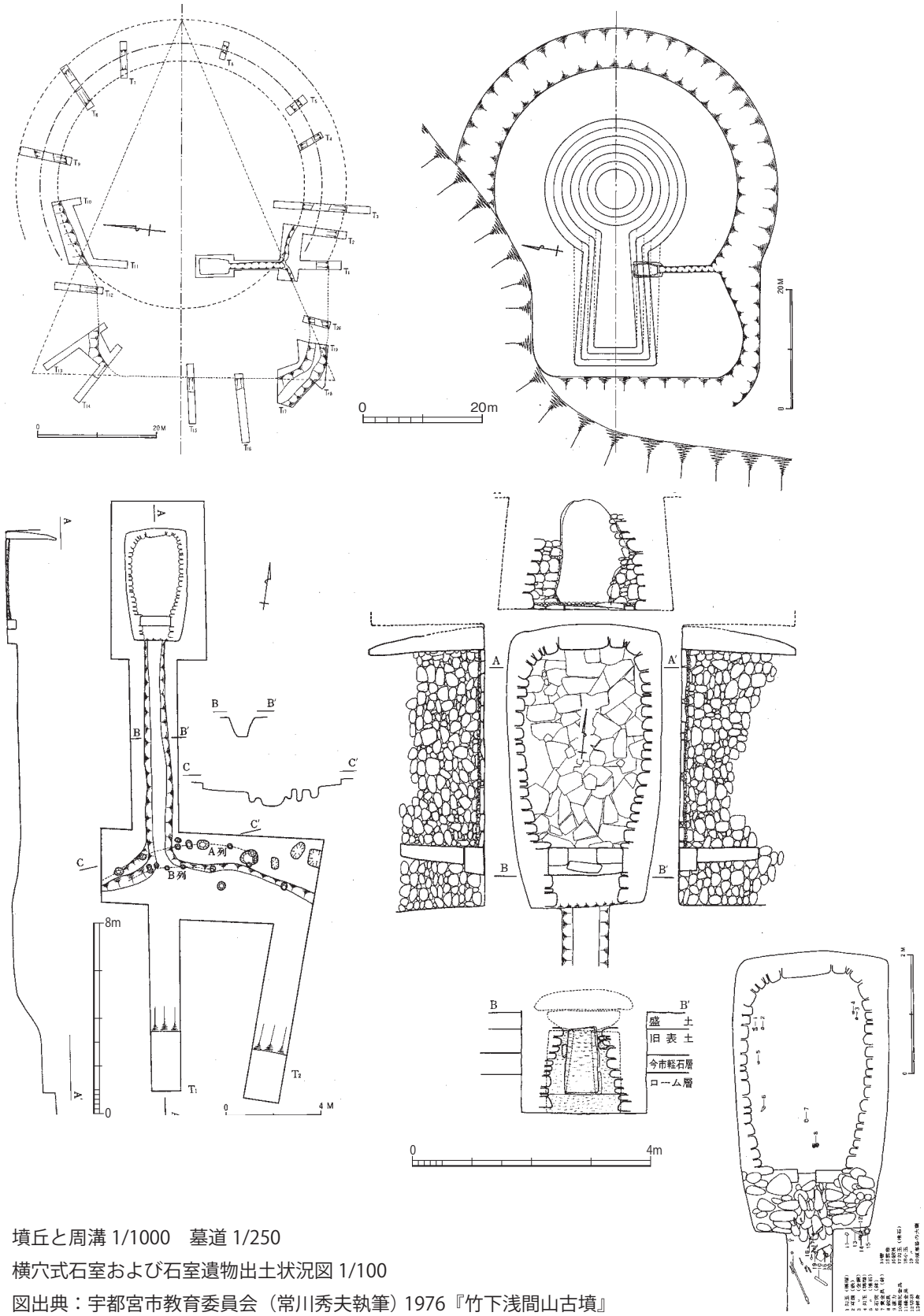
古墳時代後期末から終末期の下毛野地域つまり栃木県域南部では、外面胴部真格子叩き、頸部一本篦描き波状文、櫛描き横区画、長胴形胴部などの特徴を持つ在地産須恵器甕が認められる。この甕を佐藤渉は「下野系須恵器甕」と命名した（佐藤2019, p.87）。真格子叩きは群馬県域産や福島・茨城県域の須恵器甕にも少し認められるが（藤野2019, pp.73, 76）、特に栃木県域で盛んに用いられる成形・調整法で、下野系須恵器甕を認定する基準とされている要素のひとつである。

須恵器甕における外面真格子叩き調整の出現時期を考える手がかりは、最後の前方後円墳に伴う事例である。栃木県下野市御鷲山古墳、宇都宮市竹下浅間山古墳、那珂川町梅曽大塚古墳が該当する。最後の前方後円墳が築造される時期に、真格子叩き調整を行なう下野系須恵器甕が出現したことがわかる。出現以後の事例は、前方後円墳消滅後の大形円墳である下野市下石橋愛宕塚古墳や壬生町車塚古墳・三番塚古墳で認められる。下野市御鷲山古墳→下石橋愛宕塚古墳は連続する首長墳である。古墳時代終末期つまり７世紀に最も目立ち、７世紀中葉頃の生産地として真岡市南高岡窯跡（梁木1987）が知られる。７世紀末から８世紀前葉の栃木県佐野市三毳山麓窯跡群において北山・八幡窯跡群および和田窯跡（内山1997；津野他2004, pp.146, 150；三毳窯跡研究会2009・2011）で確認されるのが、真格子叩き調整甕の下限である。

本稿では、竹下浅間山古墳の報告書（常川1976）に掲載された以外の須恵器破片を追加報告して、真格子叩き調整の須恵器甕が伴うことを明確にする。そして副葬品から古墳の時期を検討し、真格子叩き調整技法の出現時期を明確にする。約半世紀前の出土資料を活用し、現状で観察できる情報を報告する。

1　竹下浅間山古墳の概要

竹下浅間山古墳は、栃木県宇都宮市竹下町に所在する古墳後期末の中規模前方後円墳である。墳丘上段が削平された後に周囲のトレンチ調査が行われて（常川1976）、墳丘下段長52.5m、後円部径41m、前方部長11.5mであることが判明した。また、破壊される前の記録によると墳丘上段は長さ42m、後円部径24m・高さ３m、前方部幅８～10m・高さ1.5mである。二段築成の墳丘下段の広い平坦面（基壇）は、後円部で平坦

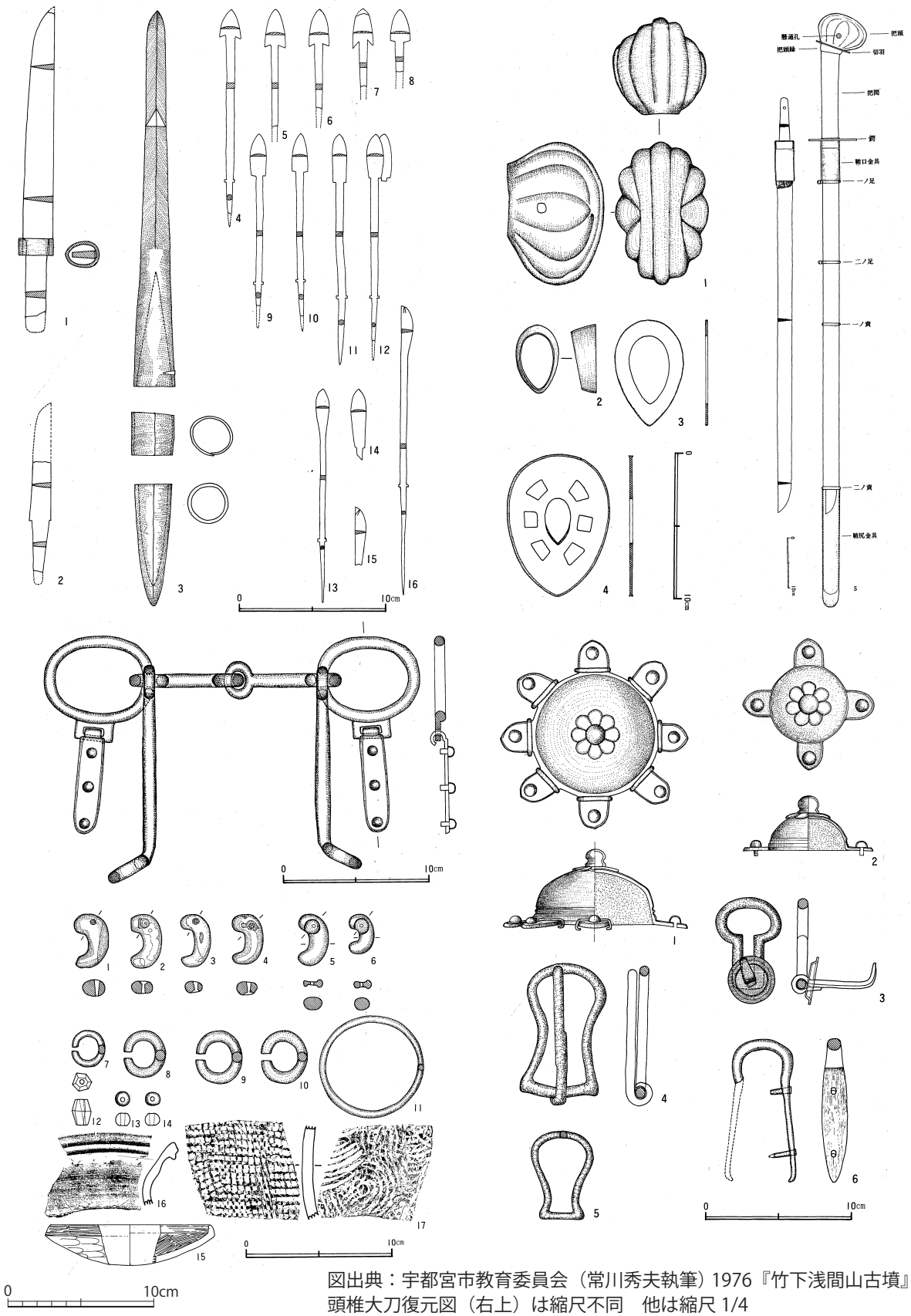


墳丘と周溝 1/1000　墓道 1/250

横穴式石室および石室遺物出土状況図 1/100

図出典：宇都宮市教育委員会（常川秀夫執筆）1976『竹下浅間山古墳』

第１図　竹下浅間山古墳の墳形と横穴式石室



図出典：宇都宮市教育委員会（常川秀夫執筆）1976『竹下浅間山古墳』
頭椎大刀復元図（右上）は縮尺不同　他は縮尺 1/4

第２図　竹下浅間山古墳の既報告遺物

面幅8.5m、前方部前縁で平坦面幅約２ｍと復原されている。周濠は幅６～７ｍ、深さ1.2～1.5mである（第１図上）。

宅地造成工事にともない、前方部に所在する横穴式石室（第１図右）が調査された。川原石小口積みで奥壁と天井石は硬砂岩の割石、玄門の間仕切石・立柱石・閉塞石は凝灰岩切石である。主に石室入口の外側周辺（第１図下右）で副葬品と須恵器破片が出土した。出土遺物は豊富で、金銅装頭椎大刀１振、馬具（釣金具付の小型矩形立聞造素環轡１・辻金具１・雲珠１・鐙釣金具１・しおで１・カ具２）、三角穂鉄鉾１、片刃および両刃の長頸鉄鏃19以上、刀子２、勾玉（メノウ４・滑石２）、水晶切子玉１、丸玉３（石製２・土製１）、耳環４（銅心金環２・鉄心耳環２）、銅釧１（以上第２図）、土師器杯破片、須恵器甕破片（第２図左下および第３・４図）がある。頭椎大刀は、報告書の復元図では単脚足金具が二箇所に描かれているが、足金具は出土していないので、本来は佩用装置を持たない大刀であった可能性のほうが高い。燃やされて柄頭・鞘尻・鞘木が被熱および炭化している（常川1976）。埋葬儀礼で装飾大刀を破損する事例である。

この地域で、先行する古墳は明らかではない。後続する可能性のある主要な古墳として、宇都宮市板戸町所在の板戸愛宕塚古墳群（とちぎ未来づくり財団2017）のSZ-01が墳径52m、SZ-02が墳径28mで７世紀頃と推定できる。SZ-02に真格子叩き須恵器甕破片がある。他に、板戸不動山古墳群（宇都宮市2014, p.7）、同市道場宿町所在の大塚古墳（時期不詳の円墳または近世の塚）がある。

２　須恵器甕の概要

浅間山古墳で出土した須恵器甕破片のうち、1976年報告書では第２図16・17として口頸部１片と胴部１片の実測図と拓本が掲載されて、「須恵器甕　16と17は同一個体である。16は口縁で外面は横ナデで整形され口唇部下に凸帯がまわっている。内面は横ナデである。17は体部片で外面には格子状の叩き目，内面は青海波痕がはっきりと認められる。色は灰色である。土器の出土地点は石室近くの墓道上からである。」と説明されている（常川1976, pp.20-21、第２図左下の16・17）。

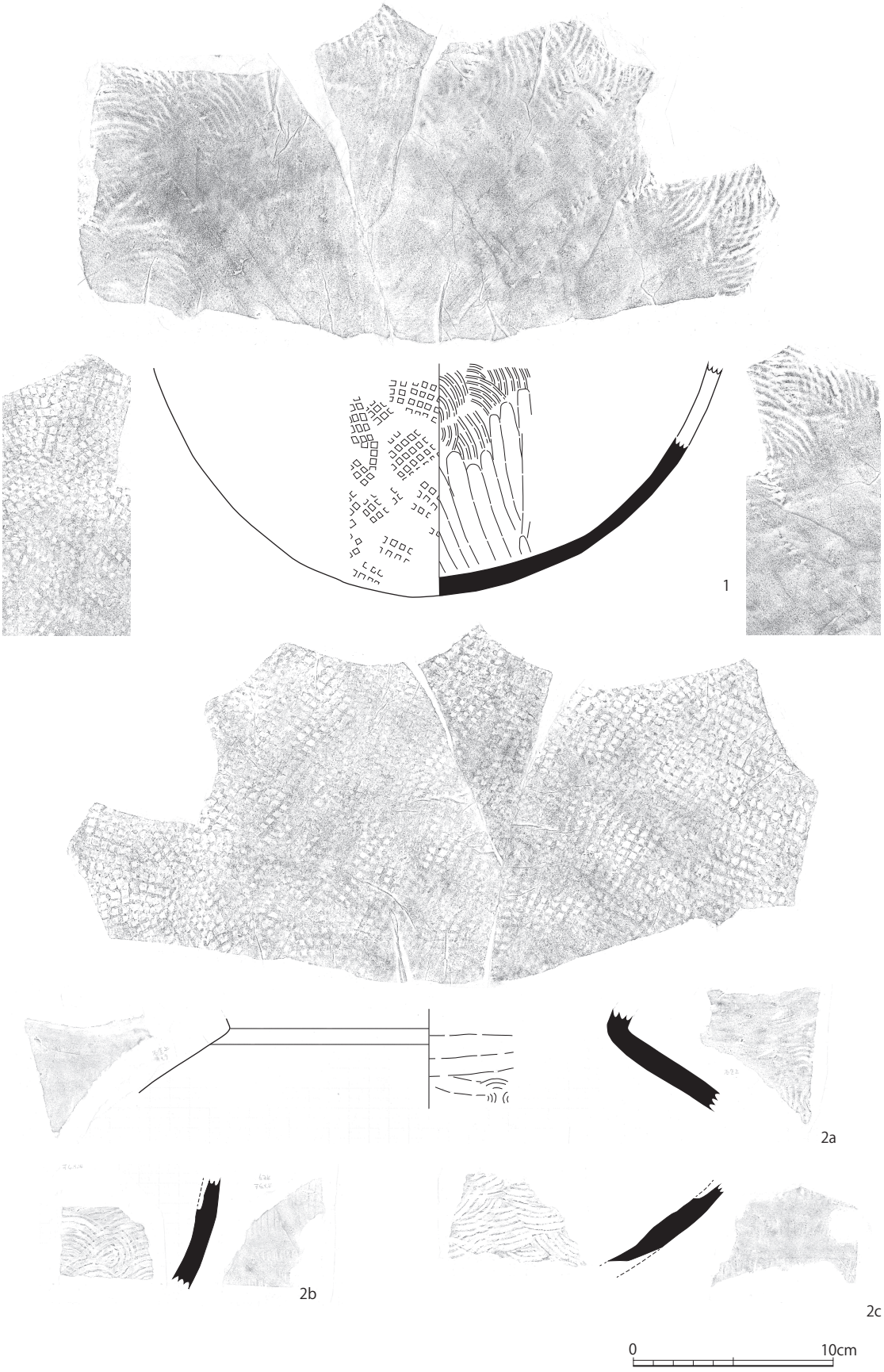
この２点以外の須恵器甕破片の、細片を除く資料をここで追加報告する（第３図１～第４図９、写真１）。1976年報告の16・17番と同一個体の破片が第３・４図中にあるかどうかはよくわからないが、拓本で比較すると第３図３と４が17に似ているように見える。現在、同じ遺物箱内に16・17は見当たらない。

成形および外面調整の特徴として、平行叩き（２・５・６）と擬格子叩き（７）の他に、真格子叩き（１・３・４）がある。木目平行の溝を彫った叩き板を使うのが平行叩きで、木目直交の溝を彫った叩き板を使うのが擬格子叩きである。真格子叩きは、木目に平行と直交の溝を両方彫った叩き板を使う調整で、下野系須恵器甕の特徴である。叩きの後にカキメ（３下部・４・８・９）や、間隔を開けたナデ（２ｂ・２ｃ）を外面に加えるものもある。内面はすべて同心円文当具痕で、１の底部と２ａの頸部は内面の当具痕を消している。９は内面に当具痕がなく横ナデである。

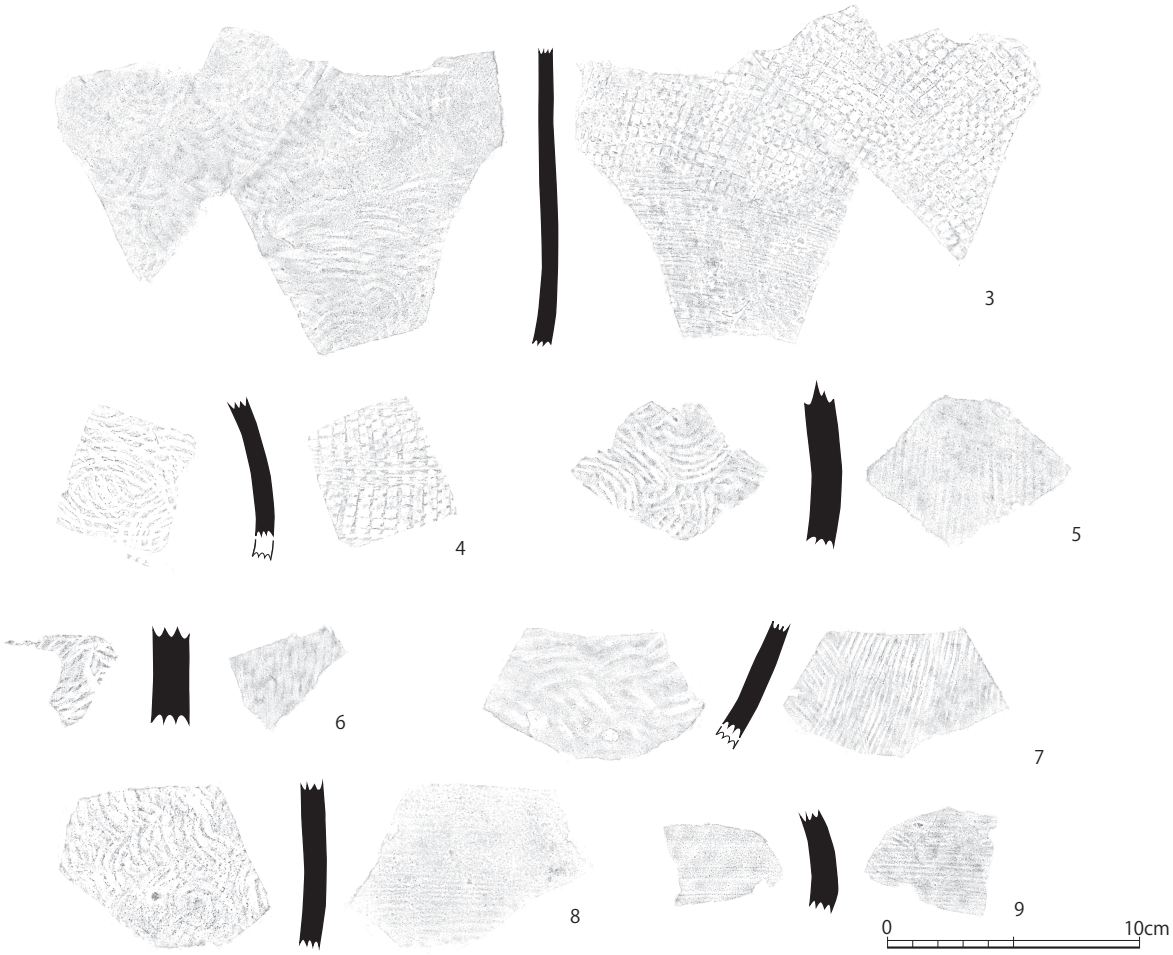
須恵器の個体数は６～７個程と考える。真格子叩きの甕が２種（１と３・４）、平行叩きの甕が２種（２と５・６）、擬格子叩きの甕が１種（７）、カキメを多く使う甕または壺瓶類が１種または２種（８と９）である。

第３図２ａ～２ｃの３片は、破面が赤い特徴的な色調・焼成と叩き調整からみて同一個体と判断できる。第４図５と６も、内面の当具痕に細い平行線状の木目が浮き出て見える特徴からみて、同一個体の可能性を持つ。第４図３・４は、内外面の叩き目から推定すると、1976年報告書掲載の17と同一個体かもしれない。

出土位置を確認できる遺物は、「石室上」・「墓道上」・「閉塞上」と注記されている破片（１・２・４）が多い。また注記が「１トレ西拡」あるいは「１トレ西端」の５・７・９は墓道入口部西側、「２トレ」と注記されている６は墓道入口の南東で出土している。



第３図　竹下浅間山古墳出土須恵器甕



第４図　竹下浅間山古墳出土須恵器甕

３　個別資料の特徴（第３図１・２、第４図３～９）

１　胴部復元径28.5cm以上・残存高11.7cm。外面胴部の真格子叩き目は、底部に近づくと不定方向にばらつく。内面は右から左へ進む同心円文当具痕の後に、一方向に向きがそろうナデで底中央下部の当具痕を消している。10YR6/1～10YR 7/11灰色で、胎土はやや粗く硬質で、５mm以下の白礫少量と２mm以下の白砂やや多量を含む。「閉塞上」の注記からみて、閉塞石上方の墓道埋土上層で出土した。遺物出土状況図で轡と刀の中間に20番としてこの須恵器の破片２点が描かれている（本稿第１図右下）。

２（a・b・c）　同一個体とみられる３片で、２aは頸部復元径20.0cm・残存高4.9cm。外面は頸部と肩部にロクロナデ（２a)、胴部は浅い縦位の平行叩き目の後に１～２㎝の間隔をあけた軽いロクロナデで幅狭く叩き目を消す（２b・２c)。内面の同心円文当具痕は、頸部付近ではヨコナデで大半を消し（２a)、胴下部では上方向へ進む当具痕が数多く重なる（２c)。2.5Y6/1黄灰色で、胎土はやや緻密・やや硬質で赤粒やや多量と白粒少量を含む。２a・２b・２cの注記はそれぞれ「石室上」・「墓道上」・「石室上3.23」で、石室と墓道の上方で出土した。3.23はおそらく３月23日の意味であろう。

３　胴部２破片が接合したもので、外面は真格子叩き目の後に破片下部に浅いカキメを入れる。内面の同心円文当具痕は、破片上部では浅く、破片下部では深い当具痕が下方向へ密に進む。7.5Y4/1灰色で、胎土は緻密硬質で白砂と白細砂やや少量を含む。発掘調査当時の注記がないため、出土位置は不明である。

４　外面は真格子叩き目の格子が縦方向にならび、叩きの後に４本１組の浅いカキメを入れる。内面の同

心円文当具痕は進む方向が不規則である。5YR6/1灰色で、胎土は緻密硬質で、白砂・白細砂少量と最大長径６mm以下の白礫・白粗礫少量を含む。「ボ道上」の注記からみて、墓道埋土上層で出土した。３と４は1976年報告図の17番の破片に叩き目が似ているように見える。

５・６　５と６は、同一個体の上半部と下半部破片かもしれない。外面は縦位の平行叩きで、叩き板の浅く細い木目が横位にかすかに見える。５には灰黄色気味の自然釉が降灰状に薄く付着するので叩き目がよく見えない。内面の同心円文当具痕には、平行線状の浅く細い木目（10本/１cm）が明瞭に浮き出ている。５ではおそらく当具痕が左へ進んでいる。５は外面5YR7/2灰白色、内面N7/0灰色、６は2.5GY6/1オリーブ灰色。胎土は緻密硬質で、長径３mm以下の白礫・白砂少量と白砂・細砂やや多量を含む。５は「１トレ西拡」の注記からみて１トレンチ西側拡張部分つまり墓道入口南西部で出土した。６は「２トレ」の注記からみて２トレンチつまり墓道入口南東方向の後円部南周溝で出土した。

７　外面は木目直交の溝を彫った叩き板で擬格子叩き。内面は浅い同心円文当具痕で、内面に小斑状の自然釉が見られるので底部が近いとみられる。胎土は緻密硬質で、長径４mm以下の白礫１点のほかに白砂・細砂少量を含む。「１トレ西端」の注記が１トレンチ西拡張部の意味であれば、墓道入口南西部で出土したものであろう。

８　外面は浅いカキメ、内面は同心円文当具痕。10Y5/1灰色で、胎土は緻密硬質で白砂と白細砂やや少量を含む。発掘調査当時の注記がないため、出土位置は不明である。

９　特に外面で上下方向の丸みが強い。外面はカキメ、内面はロクロナデ。2.5GY6/1オリーブ灰色で、胎土は緻密硬質で白砂と白細砂やや少量を含む。「１トレ西拡」または「１トレ西端」と読める注記からみて１トレンチ西側拡張部分つまり墓道入口南西部で出土したものであろう。

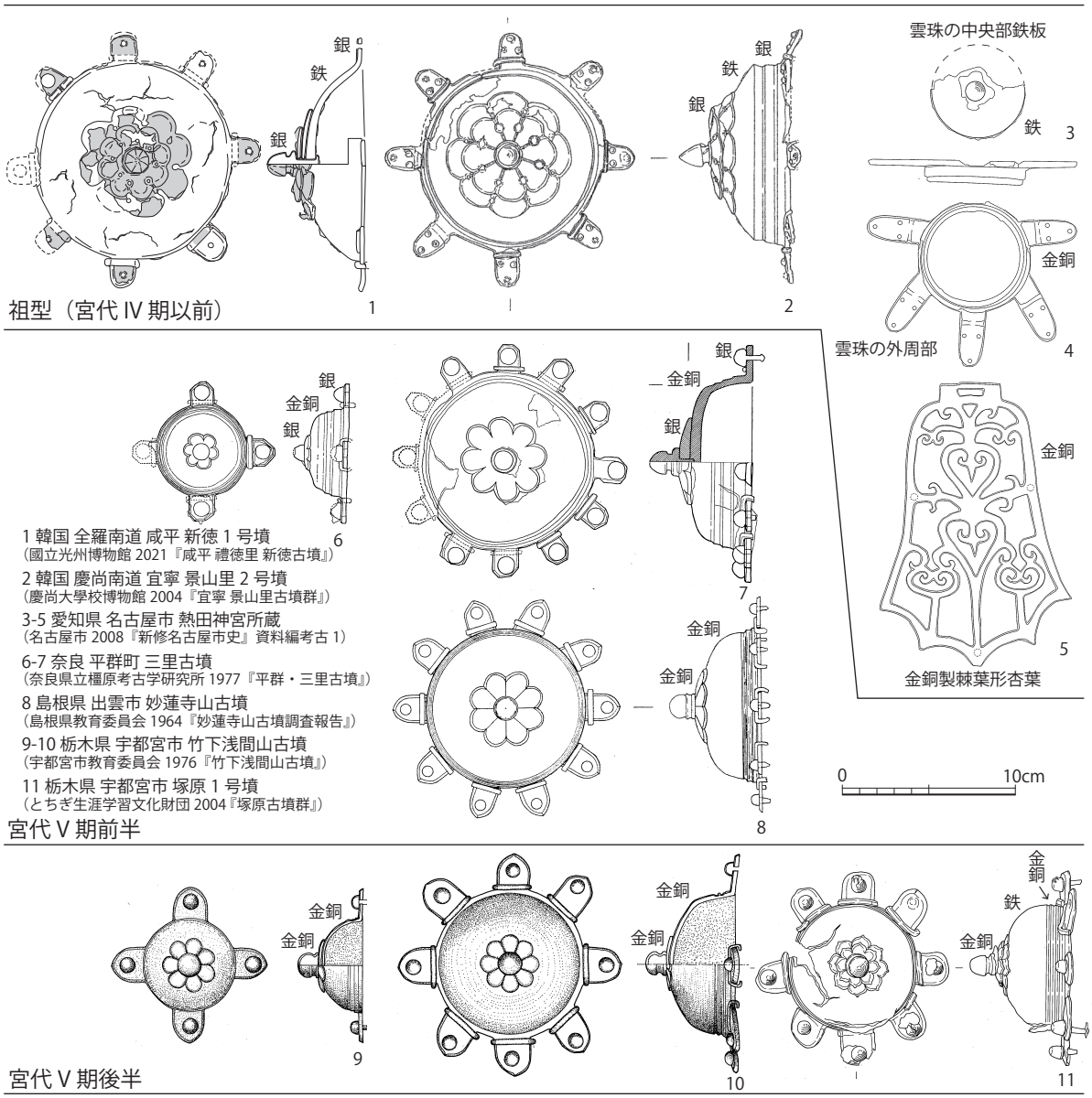
４　副葬品と真格子叩き須恵器甕の出現時期

竹下浅間山古墳の副葬品から古墳の時期、および真格子叩き調整の須恵器甕の出現時期を検討する。結論を先に示すと、高蔵寺（TK）209型式期古段階に並行し、６世紀末から７世紀初頭頃になる。

浅間山古墳の副葬品で、時期を最も詳しく検討できる遺物は、鉄地金銅装雲珠および辻金具である。浅間山古墳の雲珠・辻金具は、宮代編年Ⅴ期後半に該当する（宮代1993, p.274）。頂上に花形座と宝珠飾を持つ多脚（８脚～12脚）の鉢状雲珠を中心として、変遷過程をたどる（第５図）。

〔宮代編年Ⅳ期およびそれ以前〕　雲珠の脚数が８脚で、鉄製鉢部の上に銀張の花形座と宝珠飾を持つ韓国全羅南道 咸平 新徳１号墳例は百済系とみられる（諫早2021, p.116）。鉄製鉢部の下半に、銀張の２段を巡らせる慶尚南道 宜寧 景山里２号墳例（慶尚大2004）は、中央部別造・外周部有段金銅製の新羅系雲珠・辻金具の要素を鉢部に取り入れている（諫早2021, p.120）。中央部が鉄製／外周部が金銅製で２段を巡らせる新羅系舶載品として、愛知県熱田神宮所蔵品（推定熱田神宮周辺古墳出土品：瀬川2008）を図示した。百済系の鉄地銀装宝珠飾＋花形座と、新羅系の外周部有段装飾を併用して製作した地は、景山里２号墳が所在する大加耶地域であろう（李炫姃2009, p.109；諫早2021, p.120）。関連資料として、金銅製で段がある外周部に、金銅＋木製の中央部を組み合わせる大阪府海北塚古墳例があり（三輪1990）、これも大加耶製品と考えられる（内山2012, p.315；諫早2012, p.101；諫早2013, pp.353-355）。海北塚例は日本に搬入された舶載品馬具として宮代Ⅳ期に位置付けられる（宮代1993, p.273）。熱田神宮例に伴う棘葉形杏葉は、筆者編年案で後期２段階（内山2019, pp.67, 69）、桃崎編年（桃崎2001, pp.25-26；桃崎2023, pp.292, 294）で「熱田神宮・沖ノ島A・B・C段階」に含まれる。後期２段階の杏葉は、宮代Ⅳ期の雲珠・辻金具と連結して用いるので、熱

竹下浅間山古墳出土須恵器（上：1 側面　中：2～9 表面　下：2～9 裏面）



第５図　雲珠・辻金具の変化と時期

田神宮例も宮代編年Ⅳ期に位置付けできる。

〔宮代編年Ⅴ期前半〕　雲珠の脚数が10脚または12脚に増えた事例が倭で現れる。金銅張鉢部の上に銀張の花形座と宝珠飾を持つ12脚の奈良県三里古墳例（奈良県1977, pp.45, 47）は、頂部飾に銀を張る点が景山里２号墳例を継承する。10脚の島根県妙蓮寺山古墳例が三里古墳例に後続し、ここで頂部飾の被せ材が金銅に変化している（島根県教育委員会1964, pp.24-25）。

〔宮代編年Ⅴ期後半〕　段が凹線に変わり、雲珠の脚数が８脚に減る。鉢部の上半が鉄、下半が金銅張で凹線を巡らせる栃木県塚原１号墳例は、景山里２号墳例の上半鉄・下半銀張を継承している。上塩冶築山古墳例の鋲と責金具に銀を張る点も古い特徴である。竹下浅間山古墳例や島根県上塩冶築山古墳例（坂本他2018, p.39-40）は鉢部全面が金銅張で、上に乗る頂部の花形座には鉢部と別の金銅板を張る。型式学的には塚原１号墳と上塩冶築山が竹下浅間山よりも僅かに古い。

〔宮代編年Ⅵ期〕　雲珠の脚数は８脚で、脚の責金具、鉢部の凹線が省略されてゆく。頂部に花形座を載せ

る場合は、鉢部と同じ金銅板を一枚で張るように変化する（第６図下半）。

〔宮代編年と古墳後期編年および須恵器型式の並行関係〕　宮代V期はTK43型式期からTK209型式期前半、宮代VI期はTK209型式期後半に並行する（宮代1993, p.282）。竹下浅間山古墳が属する宮代V期後半の指標になる後期古墳として奈良県牧野古墳（奈良県立橿原考古学研究所1987）、島根県上塩冶築山古墳（坂本他2018）がある。牧野古墳の馬具２組のうち古相の組（鋲数が多い轡と杏葉、責金具を伴う雲珠と辻金具）、上塩冶築山古墳の馬具２組のうち新相の組（追葬された小石棺に伴う馬具）が、宮代V期後半に該当する。牧野古墳の須恵器はTK209型式の古段階と考えられている（白石1996, p.145）（註１）。また、上塩冶築山古墳の時期は須恵器編年出雲４期で、陶邑TK43期末からTK209期に相当し、宮代V期新相の馬具を追葬した小石棺はTK209型式期と考えられている（坂本他2018, p.173）。

竹下浅間山古墳の副葬品から判断できる時期、および真格子叩き調整の須恵器甕の出現時期は、宮代編年Ｖ期後半およびTK209型式古段階に並行し、暦年代は６世紀末から７世紀初頭頃と考えられる。三角穂式鉄鉾も同様の年代が考えられる（第１図左上、齊藤2023）。頭椎大刀（第１図右上）は、馬具よりも半世紀程度新しく考える意見がある（豊島2019）。この見解に従えば、馬具など初葬時の遺物を石室前に取り出した時の儀礼に用いた大刀か、または追葬の副葬品と考えることになる。

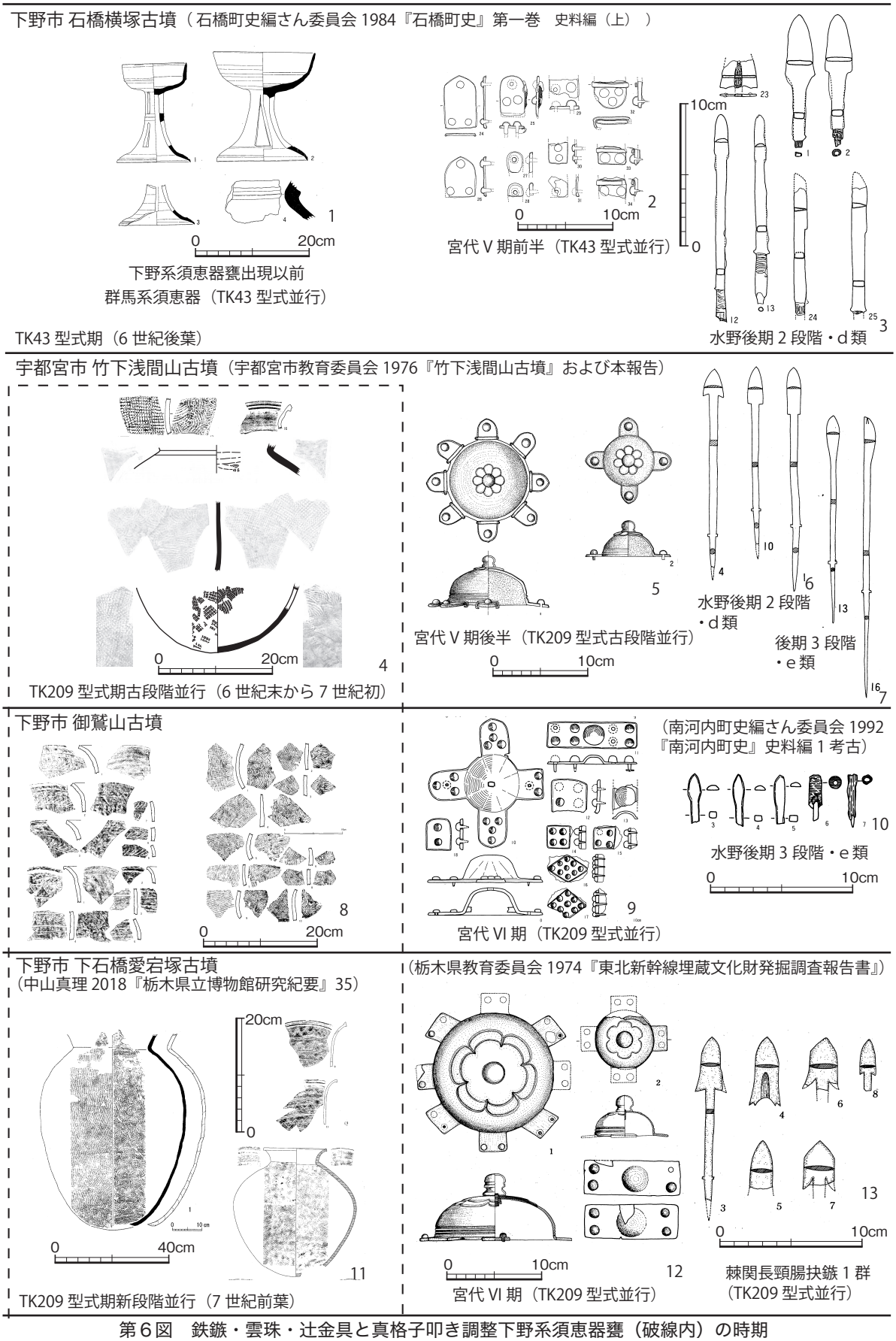
５　真格子叩き須恵器甕出現期の状況

下野系須恵器甕のうち、前方後円墳において埴輪と共存している下野市御鷲山古墳出土例を下野系須恵器甕の最古事例と佐藤はみている（佐藤2019, p.91）。下野系須恵器甕には、下野の地域色が強いものと、北関東西部の影響が強いものがあり、真格子叩き調整の須恵器甕は後者に含まれる（佐藤2022, p.125）。

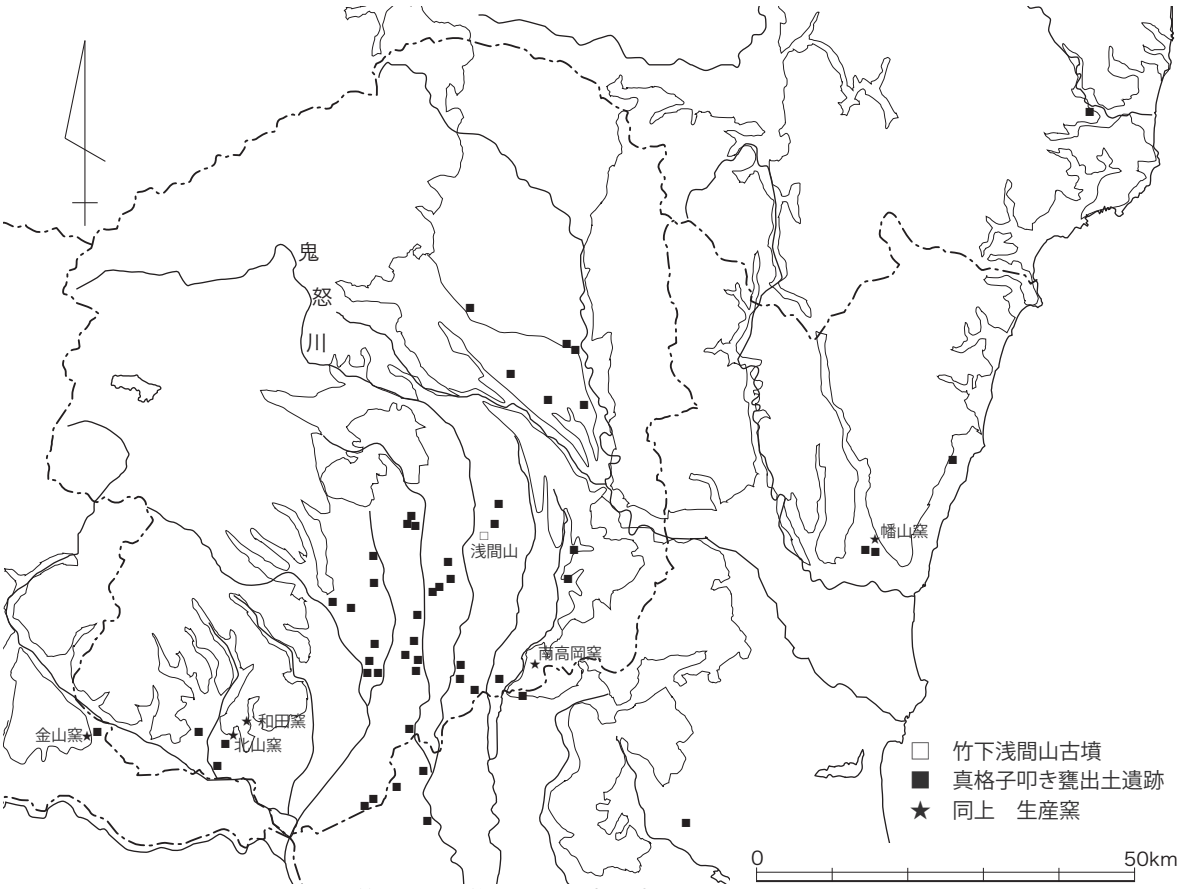
今回報告した竹下浅間山古墳は、真格子叩き須恵器甕の最初期の事例になる。竹下浅間山古墳の副葬品の時期は、下野市御鷲山古墳の直前段階である（第６図）。馬具は上述した雲珠・辻金具、鉄鏃は後期の広域編年（水野2003）と古墳時代終末期東日本の棘関長頸腸抉鏃編年（内山2003）を用いた。須恵器甕自体の特徴から浅間山と御鷲山の埋葬時期差を決めることは難しいので、二古墳の埋葬時期をおおよそ同じころ－最後の前方後円墳に真格子叩き甕が供給されたTK209型式期－ととらえた上で、被葬者たちが馬具や弓矢等を入手した活動時期差としては浅間山が御鷲山よりも少し古いと考えることができる。

埴輪があることを理由に御鷲山古墳を古く考えることは適切でないと考える。埴輪を持つ御鷲山古墳は後期後葉、埴輪を持たない竹下浅間山古墳は後期末で、御鷲山が浅間山より古いと考える意見もあろう。しかし、前方後円墳が消滅した後の終末期初頭に築かれた下石橋愛宕塚古墳や壬生町車塚古墳にも埴輪が残存することが明らかになっている（中山2020；日高2022）。第６図で竹下浅間山古墳以外の石橋横塚→御鷲山→下石橋愛宕塚古墳は、下野市石橋・薬師寺地域の首長墳系列である。終末期前葉の下石橋愛宕塚まで埴輪が継続するこの系列では、在地産の須恵器甕を多量に用いるようになった御鷲山・下石橋愛宕塚段階まで埴輪祭祀も長く残る状況を認識する必要がある（佐藤2019, p.91）。

真格子叩き須恵器甕は、在地生産が始まった初期段階で、鬼怒川東岸北部の竹下浅間山古墳まで供給されている。このことは、鬼怒川以西の下野市周辺古墳群と鬼怒川東岸の竹下浅間山古墳が、前方部石室と広い一段目を共有することや、下毛野中央部で産出する凝灰岩の玄門部石材を10km以上の距離まで陸路で供給していること（内山2021；今平2023, p.29）と関わる。下毛野南部の最有力首長層による強い影響力の範囲を読み取るうえで重要な事例である。



第６図　鉄鏃・雲珠・辻金具と真格子叩き調整下野系須恵器甕（破線内）の時期



第７図　真格子叩き須恵器甕の出土遺跡（６世紀末～８世紀前葉）

執筆後記と謝辞

竹下浅間山古墳は、文化財担当職員が市町村に配置される前の1970年代に、栃木県教育委員会の常川秀夫先生が宇都宮市教育委員会の発掘調査を担当し、当時の栃木県立郷土資料館で整理作業を行ったと見られる。おそらくその経緯によって、1970年代の出土遺物箱に竹下浅間山古墳の報告書不掲載資料が収納されて栃木県埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管されていた。報告書不掲載資料には、他に縄文時代中期土器片がある。

須恵器を調査・報告するに際して、宇都宮市教育委員会と今平利幸氏から御協力をいただいた。また、宮代栄一氏と、栃木県古墳勉強会の参加者各位から御教示・御意見をいただいた。御協力をいただいた方々に御礼を申し上げます。

註

（１）牧野古墳の須恵器高杯群には新古があり（土生田1988, p.48；新納2009, pp.82, 84）、このうち古い段階をTK43型式と考える意見がある（木下1989, p.80；酒井2009, pp.237-238）。白石（1996）は、牧野古墳で高杯の３方透に加えて２方透が伴う状況をTK209型式古段階の指標にする。その理由として、田辺報告（1966, p.71）でTK209号窯跡の高杯の「透しは２段でその配置は３方のものと２方のものとがある」という所見を挙げる。しかし、田辺（1966, p.70）はTK43号窯跡の高杯でも透しが２方向であることを報告しているので、２方透が出現して３方透と共存する状況はTK209号窯より前のTK43号窯ですでに現れている。TK43型式とTK209型式の区別に関して以上のような問題があることを認識した上で、ここで牧野古墳をTK209型式期に入れたのは、大勢の意見に従ったにすぎない（増田1995, pp.56, 78；佐藤2003, p.17）。TK43号窯とTK209号窯の資料内容で区別が難しい部分（白石2007, p.204；新納2009, p.82）に相当するのであろう。

（２）内山1997；藤野2019, pp.73, 76；三毳窯跡研究会2011, pp.46-51；佐藤2019, pp.84-86, 90；佐藤2022, pp.124-125で示された事例を中心として真格子叩き甕の分布を第７図に示した。まだかなりの遺漏があると思われる。

参考文献〔日本文〕 五十音順

諫早直人 2012「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会　北九州大会資料集　九州前方後円墳研究会　熊本，pp.89-121

諫早直人 2013「馬具の舶載と模倣」岡内三眞編『技術と交流の考古学』同成社　東京，pp.348-359

内山敏行 1997「律令制成立期の須恵器の系譜　栃木県」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会'97シンポジウム　古代生産史研究会　壬生（栃木県下都賀郡），pp.87-101

内山敏行 2003「古墳時代終末期の長頸鏃－東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価－」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会シンポジウム　七世紀研究会　大和，pp.27-42

内山敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会　豊橋，pp.313-324

内山敏行 2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」鈴木一有・田村隆太郎編『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学別冊30　雄山閣　東京，pp.65-78

内山敏行 2021「古墳時代下毛野の凝灰岩利用」『歴文だより』第121号　栃木県歴史文化研究会　宇都宮，p.2

内山敏行 2022「栃木県下野市御鷲山古墳の小札甲－２列円頭形と１列偏円頭形の組み合わせ－」『研究紀要』第30号　公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター　下野，pp.89-101

宇都宮市教育委員会 2014『竹下浅間山古墳とその時代』とびやま歴史体験館第18回企画展　宇都宮市教育委員会

木下亘 1989「大和における６世紀の須恵器概観」『斑鳩　藤ノ木古墳　概報』奈良県立橿原考古学研究所　橿原，pp.77-80

今平利幸 2023「第II章　大谷石と人との出会い」『大谷石文化への誘い』宇都宮市大谷石文化推進協議会，pp.21-40

齊藤大輔 2023「古墳時代後期における鉄鉾の変遷」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ－交差編年の手がかり－発表要旨集・後期古墳資料集成』中国四国前方後円墳研究会第26回研究集会（高知大会）実行委員会　高知，pp.159-172

酒井清治 2009「菅ノ沢窯跡群の操業順序と年代について」酒井清治・藤野一之・三原翔吾編『群馬・金山丘陵窯跡群』II－菅ノ沢遺跡（須恵器窯跡群・古墳群）・巌穴山古墳の発掘調査報告－　駒澤大学考古学研究室　東京，pp.232-242

坂本豊治・上山晶子・景山このみ・田村朋美・花谷浩 2018「上塩冶築山古墳の再検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第６集　出雲弥生の森博物館　出雲，pp.1-176

佐藤隆 2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築に向けて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号　大阪，pp.3-30

佐藤渉 2019「しもつけの大型古墳と須恵器甕－古墳時代終末期の墳丘儀礼－」『栃木県考古学会誌』第40集　栃木県考古学会　宇都宮，pp.79-95

佐藤渉 2022「第２節 車塚古墳の諸問題（１）壬生車塚古墳出土須恵器について」『栃木県壬生町 車塚古墳』II　壬生町埋蔵文化財調査報告書第34集　壬生町教育委員会（栃木県下都賀郡），pp.118-129

島根県教育委員会（山本清執筆）1964『妙蓮寺山古墳調査報告』

白石耕治 2007「陶邑編年と藤ノ木古墳の須恵器」『財団法人　大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館　2005年度　共同研究成果報告書』財団法人　大阪府文化財センター　大阪，pp.197-212

白石太一郎 1996「第４章　考古学的考察　1　土器よりみた古墳の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第65集　東国における古墳の終末　附編　千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告　佐倉，pp.143-147（白石太一郎2000『古墳と古墳群の研究』塙書房　東京　第11節pp.397-431の一部として再録）

瀬川貴文 2008「第３章　特論　第６節　古墳時代の重要資料」『新修名古屋市史』資料編　考古１　名古屋市発行，pp.906-914

田代隆・小森哲也 1984「横塚古墳」『石橋町史』第一巻　史料編（上）　石橋町（栃木県下都賀郡），pp.56-108

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』Ⅰ　研究論集第10号　平安学園考古学クラブ　京都

常川秀夫 1976『竹下浅間山古墳』宇都宮市教育委員会埋蔵文化財報告書第２集　宇都宮市教育委員会

津野仁・山口耕一・内山敏行・池田敏宏 2004「三毳山麓窯跡群の須恵器生産（II）－前半期の様相を中心として－」『栃木県考古学会誌』第25集　栃木県考古学会　宇都宮，pp.141-160

栃木県教育委員会（常川秀夫）1974「下石橋愛宕塚」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第12集，pp.119-199

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター（進藤敏雄）2004『塚原古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第280集，栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団　宇都宮

とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター（篠原祐一）2017『板戸愛宕塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第387集栃木県教育委員会・（公財）とちぎ未来づくり財団　宇都宮

豊島直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102巻第１号　日本考古学会　東京，pp.77-121

中山真理 2018「下石橋愛宕塚古墳出土の須恵器大甕について（一）」『栃木県立博物館研究紀要－人文－』第35号　宇都宮，pp.7-12

中山真理 2020「資料紹介 下石橋愛宕塚古墳出土の須恵器大甕について（二）」『栃木県立博物館研究紀要－人文－』第37号　宇都宮，pp.1-8

奈良県立橿原考古学研究所（河上邦彦）編 1977『平群・三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊　奈良県教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所（河上邦彦）編 1987『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会（奈良県北葛城郡）

新納泉 2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」『考古学研究』第56巻第３号（通巻223号）　岡山，pp.71-91

土生田純之 1988「古墳出土の土器」『季刊考古学』第24号　特集　土器から読む古墳社会　雄山閣　東京，pp.45-48（土生田純之 1998「第一部 土器と葬送儀礼 第１章 古墳と土器」『黄泉国の成立』学生社　東京，pp.32-39に再録）

日高慎 2022「第２節　車塚古墳の諸問題　（２）壬生車塚古墳の埴輪をめぐって」『栃木県壬生町　車塚古墳』II　壬生町埋蔵文化財調査報告書第34集　壬生町教育委員会（栃木県下都賀郡），pp.130-134

藤野一之 2019「第２章　関東地方における須恵器生産の展開　第２節　北関東型須恵器の成立と展開」『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房　東京，pp.58-79

増田一裕 1995「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号　土曜考古学研究会　桶川，pp.51-82

三毳窯跡研究会 2009「三毳山麓窯跡群の須恵器生産（III）－岩舟町和田窯跡出土須恵器の再検討（報告篇）－」『栃木県考古学会誌』第30集　栃木県考古学会　宇都宮，pp.147-169

三毳窯跡研究会 2011「三毳山麓窯跡群の須恵器生産（III）－岩舟町和田窯跡出土須恵器の再検討（考察篇）－」『栃木県考古学会誌』第32集　栃木県考古学会　宇都宮，pp.37-67

水野敏典 2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会　佐倉，pp.29-41

南河内町史編さん委員会（山ノ井清人・水沼良浩）1992「御鷲山古墳」『南河内町史』史料編１ 考古　南河内町発行（栃木県河内郡），pp.461-493, カラー口絵18-20

宮代栄一 1993b「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会，pp.253-290

三輪嘉六 1990「海北塚古墳」日本馬具大鑑編集委員会編『日本馬具大鑑』第一巻　古代上　日本中央競馬会　東京，pp.98-99，図版pp.115, 161

桃﨑祐輔 2001「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号　つくば，pp.1-36

桃﨑祐輔 2023『古代騎馬文化受容過程の研究　日本編』同成社　東京，第III章第３節pp.292, 294

梁木誠 1987「南高岡窯跡群採集の須恵器」『真岡市史案内』第６号　真岡市教育委員会市史編さん室　真岡，pp.122-137

参考文献〔韓国文〕　カナダラ順

慶尚大學校博物館（趙榮濟・柳昌煥）2004『宜寧 景山里古墳群』慶尚大學校博物館研究叢書第28輯　晋州，pp.39-44, 203-205

國立光州博物館（윤화수・박경도・장제근・김태영・노형신・최유지・임숙）2021『咸平 禮德里 新德古墳』國立光州博物館學術叢書第70冊　光州，pp.333-334

李炫姃（이현정）2009『嶺南地方 三國時代 三繫裝飾具 研究』慶北大學校 文學碩士學位論文　大邱，pp.108-110

諫早直人 2021「咸平 新德１號墳出土馬具の系譜と製作地」『咸平 禮德里 新德古墳－논고（論考）－』國立光州博物館學術叢書第70冊　國立光州博物館　光州，pp.102-121

中世の堀の理解についての一考察

－発掘調査から見えてきたもの－

杉浦昭博（すぎうら あきひろ）

はじめに
1　城ノ内遺跡発掘調査で出土した堀
2　中世平地城館の堀について
3　城館以外の中世遺跡（宿など）の発掘調査で確認された堀（溝）
4　城館以外の中世遺跡（墓域・聖域）の発掘調査で確認された堀（溝）
おわりに

本稿では、城ノ内遺跡発掘調査において確認された堀の性格を推定することを契機に、これまで調査された中世遺跡の堀（溝）について、遺跡の性格ごとに堀（溝）の規模・形態を整理し、考察する。特に中世平地城館に関わる堀については、城郭史学の成果をふまえ、４時期に区分できることを示し、それぞれの区分における堀の特徴を述べる。

はじめに

平成30年から令和元年に行われた上三川町多功地内城ノ内遺跡発掘調査[1]において、鉤型に曲がる規模の大きな堀が発見された。この堀は、同遺跡付近に存在した中世城郭多功城の堀とされたが、「中世の大きな堀（溝）は城館の堀」という「イメージ」はどの程度確かなものかと思った筆者は、城ノ内遺跡の堀を契機に、これまで県内で出土した中世の堀（溝）について再考してみることとした。

因みに、遺跡発掘調査担当者の多くは「溝」を使用するが、本稿では多くの場合「堀」と表記している。この点、報告書の表現と相違している箇所が多々ある。そもそも溝か堀かを分ける決定的な定義はない。筆者は防御を主目的として掘削されたものは堀、用水や区画が第一義的であったものは用水路・区画溝と理解しているが、発掘調査では、遺構や遺物からは堀の機能を決定できない場合が多い。そこで本稿では先学[2]を参考に、規模として上幅が２～３m以上、深さが1.5m程度を越えるものを堀と呼ぶことにする。

なお、本稿をまとめるにあたり、各報告書の内容について記載した部分の中に筆者の誤記や誤認がある場合、その責は全て筆者にあることを付記する。

1　城ノ内遺跡発掘調査で出土した堀

まず、城ノ内遺跡で確認された堀の概要を示す。平成30年度城ノ内遺跡発掘調査（以下、１区とする。）では、調査区の南側を東西方向に直行する堀SD-002が確認された。堀の規模は上幅3.8～4.6m、底幅0.6m、深さ1.7～2.4m、箱薬研堀で傾斜角50～70°。２時期があり、新しい堀は深さが0.3～１m浅くなり、丸底になって傾斜角も30～40°と緩くなっていた。

図１　城ノ内遺跡調査１区、２区中世遺構図

SD-002は、１区の西隣、令和元年度発掘調査区（以下、２区とする。）の東端において、やや湾曲し、南に

方向を変える堀に繋がる。２区の調査ではこの堀をSD-311とした。SD-311の規模は、上幅4.1～６m、底幅0.5～1.2m、深さ1.2～2.3m、箱薬研堀。南北方向側で２時期を確認し、新しい堀は深さが半分、断面は緩傾斜になって法面西側途中に平場をもつ丸底になっていた。

SD-002（以下、東西方向の堀と記す）とSD-311の湾曲部から南側部分（以下、南北方向の堀と記す）は、堀の深さや箱薬研の形状が近似しており、堀の成立は同時期と思われる。堀を掘削した時期は特定できないが、東西方向の堀の使用下限は、覆土中出土したカワラケの器形などから16世紀末以降で、堀を埋めた後に近世墓が掘られる以前、即ち近世初頭と推測される。

東西方向の堀は、その北側に存在した多功城の縄張りの一部を形成し、城の南堀であることはほぼ間違いない。しかし、堀の西端は、本来囲むべき城郭の中枢部を指向せずに多功宿の東際で止まって南に折れる。また、これに続く南北方向の堀の南端は西に折れ、多功宿の南辺を仕切るように延びていたことが推定された。

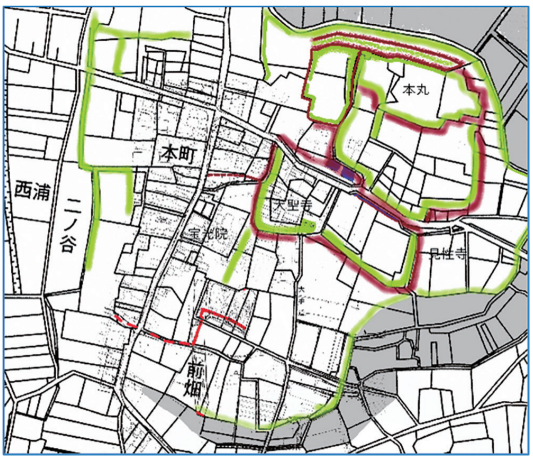


図２　多功城縄張り想定図

つまり、方向の異なる１本の堀は、多功城の南辺を区切り、多功宿の南東から南を囲むこと意図して掘られていたことになる。多功城は先に成立していた多功宿を意識して築かれた城であったから、宿との一体化を図る縄張りがなされたのであろう。

ただ、若干の疑問は残る。それは、堀が方向を変える部分が「不自然に」湾曲している点である。この点に関して調査担当者は、東西、南北方向の堀は同時期に掘削されたが、当初は繋がっていなかった可能性があると指摘している。筆者も同じ立場に立ってその根拠を探ってみると、湾曲部に掘り返し痕がなく堀の上幅が約１m広がり、底幅が約２倍になっていること。東西方向の堀が南北方向の堀との交点から１m程西に掘り込んでいること。覆土中の遺物の出土状況が、東西方向の堀と南北方向の堀とでは明らかに異なっていることが見えてきた。これらを勘案すれば、初め、この地点は通路などであったが、後に横矢を意識しつつ二つの堀がつなげられたという可能性はあろう。

写真１　城ノ内遺跡（堀部分）

ともあれ、城ノ内遺跡の堀は、16世紀末まで使用された中世の平城の外堀であるということは推測できた。それでは、「平地城館」の「外堀」という点に着目したとき、出土堀の規模・形状は中世の特定時期に比定できるのであろうか。この点について、先ず城郭研究の現状をまとめた上で、県内城館の発掘調査結果を再見したい。

２　中世平地城館の堀について

（１）　城郭研究の視点から

東国では、13～14世紀まで（いわゆる鎌倉時代）の在地領主居館は、堀と土塁を四方に巡らせた方形館ではなかったと提唱されてから35年が経過[3]し、現在のところ共通認識となった感がある。このことに関しては、13世紀にも方形の「館」が存在していたことも報告されているが、これらは荘園領主（地頭）の屋敷で

あろうとの推論がある。当時の「方形館」は「役所」であったという理解である[4]。武士の住まいについては、「館」ではなく「屋敷」と表現する論考[5]は増えつつあり、この時代の在地領主は屋敷を堀で防禦するという発想がなく、屋敷近くに溝（もしくは小河川、水路）があってもそれは区画や水利を目的としたものだったという理解が大勢を占めている。屋敷を囲む土塁に至っては当時の絵画資料にも描かれない。

鎌倉時代末頃、文書には「城を構え」「要害に籠り」といった表現が散見されるようになる。屋敷を盾や柵で囲んだり、望楼を挙げたりする行為は戦闘行為とみなされ、これを「城を構えた」と言った[6]のであった。この意味において当時「城」は戦時における臨時施設であって、日常に生活する屋敷は「城」ではなかった。

南北朝争乱期からは「館」も文書史料に頻繁に登場するようになる。「屋敷」「館」「城」用語の使い分けは文書の書き手、状況、時代毎に異なっており、明確な使い分けはなさそうである。しかし、「屋敷」ではなく「館」とするとき、その差異は居住者の変化だけでなく、非常時の対応といった住まいの構造面の違いも感じさせる。この時代、都の足利将軍邸、管領邸に大きな堀や土塁は築かれない[7]が、地方の地頭屋敷は周囲を塁堀で囲むようになる。館の規模には館主の社会的な地位によって、都の将軍邸を規範に例えば１町四方というような企画性が存在したという考察[8]もある。しかし、屋敷は領国経営の拠点であって、戦時には要害の地に城を築いて立て籠もるという戦術が一般的であったと思われる。

東国においては15世紀中頃に生起した享徳の大乱を戦国時代の始めとする[9]。これ以降、公方・管領の抗争が国人領主を巻き込み、大規模な合戦が頻繁に起きた。戦場には陣場（臨時の城郭＝陣城）が築かれることもあった。領主の居館には外敵の侵入を防ぐために幅数mを越える堀や土塁が必要となり、外郭も設けるようになった。領主が普段からこうした備えのある館＝城に居住するようになったことで、「城」は日常的なものとなったと言える。

16世紀中頃の天文・永禄以降、下野においては上杉、武田、北条といった他国の大軍が侵入を繰り返す[10]ようになる。国人領主たちは一揆的結合をもってこれに対抗したり、強敵と目下の同盟を結び一時的に服従する道を選択[11]したりすると同時に、拠点となる城の拡幅を迫られた。さらに、戦術としては鉄砲が使用されるようになると、城はこれにも対応する必要に迫られた。結果、特に外郭では幅10mを越える堀と土塁が不可欠となっていった。

以上のような理解に立ち、県内の中世城館調査結果について、特に堀に着目してみたい。なお、対象とする事例は、多功城同様の中世平地城館とする。

① 宇都宮城[12]

宇都宮市中心部に所在する。北に釜川、東に田川が南流する宇都宮台地上に位置するが、要害地形ではない。中世においては宇都宮氏代々の居城であったが、遺構が近世宇都宮城と重複し、これまでの調査も一部に限られているため、中世城郭としての縄張りの復原は道半ばである。ただ、近世宇都宮城に「西館」「南館」曲輪があり、これは中世宇都宮城の名称の名残りととらえることはできよう。

これまでの発掘調査で、近世宇都宮城清明台櫓土塁・堀下付近や近世本丸南虎口西側下付近で中世の堀跡が確認され、遺構は13世紀から16世紀に区分されている。13世紀の堀は直線に延び、上幅4.4～6.8m、底幅3.8～4.2m、深さ1.7mの箱堀。14世紀の堀は、上幅４～６m、底幅３m程度、深さ３～3.5mの箱堀。15世紀の堀は上幅３～５m、底幅0.2～１m、深さ２～2.5mの箱薬研堀。16世紀前半の堀は上幅４～８m、底幅0.3～１m、深さ２～３mの箱薬研堀。16世紀後半の堀は上幅8.5～13m、底幅４～８m、深さ2.7～4.5mの箱堀である。この内、15世紀から16世紀前半と推定される堀の形状・規模が城ノ内遺跡で確認された堀と似ている。

なお、注目されるのは、近世の本丸とは反対の方向に湾曲する16世紀の堀が数か所確認されていることである。中でも近世清明台櫓土塁・堀の下では北側の特定部分を囲むように掘られており、近世本丸南虎口西側付近では逆に南西の区画を囲む隅部分であるようにも見える。同市作成の推定復元図では、屈折して中心の曲輪を囲むような求心的な縄張りを想定しているが、中世宇都宮城は複数の方形郭の集合体、言わば群郭式の城郭であったとは考えられないだろうか。宇都宮氏の居館を中心にして、「西館」「南館」などが分立し、そこには芳賀氏を筆頭とする宿老中がそれぞれに屋敷（館）を構えていたのではないか。一部にはそれらを囲むように堀が巡っていたかもしれない。調査区が限られているため、断言はできないが、宇都宮氏が当主への権力集中をなし得なかった状況を踏まえれば、想定し得る景観であると思う。

② 壬生城[13]

壬生町の中心市街地に所在する平城である。宇都宮城同様、近世城郭として明治維新まで使用されており、中世城郭としての姿は明確でないが、報告書では近世本丸内で確認された鉤型で上幅９～12m、深さ約5.5mの堀を15世紀後半～16世紀後半の遺構と推定している。断面形は不明である。規模は近世の堀と比べても遜色がなく、城ノ内遺跡の堀と比べてはるかに大きい。堀の廃絶時期をもう少し絞れるかが今後気になるところである。

この堀のすぐ南に二の丸虎口の堀も確認されている。上幅7.5mの一回り小ぶりな堀で、こちらは16世紀中頃～後半とされる。断面形は箱堀（報告書の別箇所では薬研とも記す）という。水堀であるかどうかはわからない。中世壬生城は地域領主壬生氏の本拠であった。

③ 川連城[14]

栃木市旧大平町の永野川東岸に所在する。南流する永野川が形成した河岸段丘に築かれた平城で、本丸を中心に回字形の縄張りであったとされるが、遺構が少なく、これを確認することはできない。廃城は天正18年～慶長14年の間であろう。当城は皆川氏支城であった。

令和２年度の発掘調査により、外郭の堀跡が確認されている。上幅11.5m、底幅5.8m、深さ３mの箱堀で、途中に折があり、城内側に土塁を伴っていた痕跡がある。堀の南端は切岸となって永野川河川敷に落ちている。水流があった可能性があり、堀底には堀障子を思わせる畔が認められた。堀の下限は廃城時に近いと思われる。

川連城は、多功城と同時期の境目かつ拠点的な城郭であった。外堀は城ノ内遺跡出土の堀と比べれば、上幅が３倍近い。その理由は、掘削された時期差と流滞水の有無が考えられる。

④ 平出城[15]

宇都宮市東部鬼怒川西岸に所在する。東を南流する鬼怒川が形成した岡本段丘上に位置する平城であるが、特に要害地形ではない。良質な史料に恵まれないが、宇都宮氏の支城で、戦国期の城郭と思われる。中心部の民家屋号に「北城」「中城」「御城」などがあり、想定される外堀（惣堀）の範囲が広大であることから、群郭式の縄張りと推測される。

平成21年度からの発掘調査により、城域の東側に折りのある南北方向の堀が確認された。報告書では鉤型に張り出す部分を東虎口と想定している。堀の上幅は３～４m、底幅0.4～0.8m、深さ２m。箱堀で、土塁が存在した可能性は一部に限られた。この堀の城内側には４棟の厩が存在したことが判明している。

平出城で確認された堀の規模は城ノ内遺跡で出土した堀に近く、戦国末期の城郭の外堀としては見劣りがする。この点に関連して、調査で確認した堀は、南に想定される「宿」を内部に取り込む惣堀であり、東の外堀はさらに東側にあった可能性を指摘する論考がある。もしそうであれば、出土した堀の規模性格は、城ノ内遺跡２区の堀と同じであったことになる。

写真２　平出城（堀断面）

⑤ 荒井館[16]

大田原市町島地内、蛇尾川東岸に所在する。平成29（2017）年から行われた発掘調査において、居館西側の堀は直線的で、幅７～10m、深さが２m程度の箱堀。滞水の部分があったことが確認された。なお、調査当時、居館南側に高さ約３mの土塁が遺存しており、同様の土塁を西側にも想定すれば、実質上、堀幅は８～11m、深さは５mになる。城ノ内遺跡の堀と比べると堀幅が２倍以上あるのは、河川を取り込んだためであろう。郭内は60×64mを測る。

写真３　荒井館（主郭全景）

荒井館跡の南300mには水口館跡が存在する。水口館は大田原城を築く以前の大田原氏居館とされている方形館である。報告書では荒井館を水口館以前の領主居館ととらえ、複数の方形館で構成される群郭式の城館の存在を想定する。これは、15世紀末～16世紀前半の同族一揆阿保（大俵）党による領国支配の実態を考察した上での遺跡の解釈である。考古学と文献史学双方の研究成果が反映されている。

⑥ 堀米城[17]

佐野市街地の北、犬伏宿の西に所在する。秋山川東岸に位置するが、特に要害地形ではない。地表面の城郭遺構は既に消滅し、縄張りを復元することはできないが、14世紀前半の領主堀籠氏の居城とされている。その根拠は千葉県鋸山日本寺所在の梵鐘刻銘元享元（1321）年「堀籠宮内左衛門尉源有元」である。

発掘調査で確認した直線的な堀は、狭い範囲ではあるが、遺構確認面で上幅3.2m、底幅0.3～0.4m、深さ1.6m。箱薬研堀で、二重堀の可能性があった。城域南東端の堀の一部と思われ、外郭の堀であることも想定された。報告書では、出土遺物から堀の時期を13世紀中～後半とする。

堀米城の存在時期が堀籠有元時代の14世紀前半であり、出土遺物でさらに遡るとすれば、時代背景から、堀米城は館もしくは屋敷となろう。出土堀を「外郭の堀」と仮定する際には、いわゆる回字形だけでなく、例えば「宿」のような空間が堀内に存在したか否かなど、多様なケースを想定したいところである。確認堀の規模は城ノ内遺跡出土堀に似ている。

⑦ 薬師寺城[18]

下野市薬師寺に所在する。薬師寺城跡付近は館野前遺跡として昭和61年～平成元年に発掘調査され、この際、３本の堀が出土した。主郭の北郭北辺に続くとみられる直線的な堀は、上幅７～８m、深さ4.5mの薬研堀で掘り返しが認められた。主郭南辺に続くとみられる堀は上幅８m、底幅３m、深さ４mの箱堀で掘り返しは認められなかった。出土カワラケ編年は、13世紀初頭から15世紀後半までであることから、城の廃絶は15

世紀の終わりごろと推測されている。

しかし、当地は薬師寺氏・小山氏の支配領域から、結城氏の領国となって戦国期に至っており、天正６(1578)年には小田原北条氏の来攻に備えて結城晴朝が「薬師寺在陣」したことが書状[19]から知れる。この時、結城氏が薬師寺城に陣を置いたかどうかははっきりしないが、出土した堀の規模は戦国後期の遺構であったとしても見劣りはしない。薬師寺城については薬師寺氏衰退以降に視点を当てた研究が課題として残っており、堀もその中で再考する余地があるように思う。

⑧ 長沼城[20]

真岡市内の鬼怒川東岸に所在する。小山一族長沼氏の居城とされる。長沼氏は鎌倉末期に長沼庄を離れるが、14世紀末に復帰し、15世紀中頃まで当地域を支配した。推定範囲図に合わせると北堀に相当する13～14世紀の堀は、上幅約６m、底幅２～４m強、深さ２m強の直線的な箱堀で流水の形跡があった。規模の大きなこの堀には、灌漑目的の水利機能があったと思われる。その内側にも上幅約4.5m、底幅約2.5m、深さ1.5m前後の湾曲する箱堀が確認され、報告書では15～16世紀前半の遺構の可能性を指摘している。この堀を城ノ内遺跡出土東西堀と比べると、規模は似ているが、断面は薬研堀と箱堀という違いがあり、長沼城堀の底幅は広い。ここにも流水の有無が関係していると思われる。

写真４　長沼城（15～16世紀堀断面）

なお、本報告書に掲載されている長沼城の推定範囲図は、地籍図や地割、小字をもとに作成された図であるという。歴史地理学的な立場から長沼城の姿を初めて再現した本図の価値は大きい。一方で、曲輪の配置や折ひずみの形状等、城郭の構造面からは不可解な点も少なくない。本図を貴重な素図として、多様な調査方法により修正を重ねていくことが長沼城の構造の解明につながるものと期待したい。

⑨ 諏訪山遺跡[21]

下野市旧南河内町地内、自治医科大学南に所在する。天和元(1681）年「秋田藩下野領領分絵図」[22] には「諏訪山」に方形四区画が描かれ、「堀あとのよふニ少見得候」と付す。この堀を含めた一帯は、諏訪山遺跡として昭和57年～平成２年に発掘調査され、Ｉ地区において上幅3.3～4.3m、底幅0.3～0.6m、深さ1.8mの薬研堀が確認された。報告書では「諏訪山城」の堀跡であると推定している。この堀の規模は城ノ内遺跡出土堀に近い。

写真５　諏訪山遺跡（全景）

確かに発掘調査で確認された堀の形状は上記絵図に似ており、絵図の方形四区画は城館跡を表しているようにも見える。しかしここに城館があったことを示す文書史料は管見の限りない。加えて、絵図では薬師寺城跡に回字形の堀跡を描き「古城」と記すのに比べ、この区画については、「諏訪山」とのみ記し、前記の付札を添えている。この違いを重視すれば、江戸初期、諏訪山の四区画は方形地割の集合体としか理解されていなかったことになる。わざわざ（やや強調して）四区画を書き入れた理由は、領分の境目にある特徴的な地形と入会地を明確に記す必要があったからとも考えられる。

報告書では「諏訪山城」の堀を、区画内の方形竪穴で出土したカワラケから16世紀代としている。と、す

れば、15世紀には廃絶に近い状態となったとされる薬師寺城より100年も後に廃された城館であるのに、地元の人々が城跡であると認識していなかったことになる。薬師寺城の廃絶時期が現状認識よりも下がるのか。それとも、そもそも諏訪山は城跡ではないのか。調査区域が限られてはいるが、堀内に特に城館に関連する遺構は見当たらないことも気になる。直線的で区画性が強く感じられる掘割であるが、諏訪山遺跡を16世紀の城跡とするためにはさらに史料を集積する必要があるだろう。

⑩ 宿尻館[23]

小山市東部、西仁連川西岸に所在する。平成元年から発掘調査された田間東道北遺跡において、鉤型の堀が発見され、地割から一辺が125mの方形館を形成すると推測された。上幅3.2m、底幅0.6～0.8m、深さ1.5～1.8mの箱薬研堀。報告書では、土塁の存在を確認できなかったとする一方、付近には明治期の開墾まで土塁と堀が残っていたという記録があることも記し、出土堀を宿尻館に比定している。さらに、出土遺物から14世紀～15世紀の館という年代観を想定して「小山氏の領国支配と防衛にあたっていた」「館群のネットワーク」が存在したと推測する。

写真６　宿尻館（堀）

このような推測は、報告書作成当時、戦国城館について広く提唱された解釈であったが、今日ではさらに多様な視点に立った理解が迫られている。堀についても、条理地割、耕地開発、15世紀以降の変遷など、更に検討すべき課題が残されているように感じる。

⑪ 中妻遺跡[24]

野木町佐川野地内に所在する。16区の発掘調査において、東西20m超、南北40m超を区画する、上幅2.1～4.7m、深さ約２m、Ｌ字に曲がる薬研堀が確認された。堀の内部からは３×９間の大型掘立柱建物跡や長軸７mを測る２軒の方形竪穴遺構が出土した。

遺物の特徴から鎌倉時代の遺構と推測されている。ただし、堀廃絶の時期は確定できていない。堀の規模は城ノ内遺跡の堀に似ている。

写真７　中妻遺跡（堀断面）

⑫ 金山遺跡[25]

小山市南東部の東野田に所在する。昭和60年から行われた発掘調査で、南北約50mの区画（東西間は不明）を囲む堀の西辺が出土した。さらにこの区画の南側にも長さ約10m程の区画の存在が判明した。堀幅は3.4～4.7m、深さは0.8～1.8mの丸底堀。湧水が確認され、水堀の部分があったと思われた。報告書では戦国時代の集落もしくは館の堀と推測している。これ以上のことは明らかでないが、区画の規模から、集落というよりは屋敷または館の可能性が高いと思う。城ノ内遺跡の堀と比べると、若干浅い。

写真８　金山遺跡（堀断面）

⑬ 大関台・小屋原遺跡[26]

宇都宮市西部の西刑部地内に所在する。埋蔵文化財センターと宇都宮市の調査により江川左岸の平地に南北約80m、東西40～50mの範囲を区画する堀が確認された。さらにこの外側を巡る可能性のある堀も確認されており、二重の堀に囲まれるとすればその範囲は、東西190m、南北130m以上を測ることになる。内側の堀の上幅は2.6～3.4m、底幅0.4～0.5m、深さは1.3～1.5mの箱薬研堀であった。区画の南辺に土橋を確認したが、区画内には同時代の遺構・遺物がほとんどなく、その性格を判断するに至らなかった。

写真９　大関台遺跡（堀区画部分）

報告書では、文献史料を手掛かりに、16世紀前半の陣城の可能性を述べる。堀の規模は城ノ内遺跡の堀よりもやや小さい。

⑭ 森後遺跡[27]

さくら市鹿子畑に所在する。当地は古代において、駅家に関わる集落が存在したと推定される遺跡である。遺跡の西部で幅2.7～4.0m、深さ0.7～1.2m程の断面薬研形の区画溝が出土した。溝は鉤型の形状をしており、堀の西辺で土橋の存在を確認した。

区画の性格を推測する遺構に乏しかったが、報告書では、館の存在を推測し、遺跡付近の城館と関連があった可能性にふれている。堀の規模は城ノ内遺跡よりもやや小さい。

写真10　森後遺跡

⑮ 横倉館[28]

小山市東部、西仁連川西岸に所在する。平成２年から調査された横倉遺跡において、南北60m以上を区画（東西間は不明）する鉤型の溝が確認された。上幅１～1.8m、底幅0.5～0.6m、深さ0.5～0.7m、断面逆台形の溝と、上幅1.3m、深さ1.3m、断面薬研形の溝であった。

報告書では、出土遺物から16世紀の年代を推定し、小山家臣横倉氏の居館であると想定して鷲城を守る防衛ラインの一端を担っていた可能性に触れている。しかし、溝の規模に関連して注目すべき見解は、「台地上に館が建ち、その北の低地に集落跡が存在する景観を描くこともできよう」としていることである。

写真11　横倉館（堀）

⑯ 宿居館[29]

足利市西部の山下町に所在する。中世から近世、さらに明治以降まで使用された屋敷跡である。東西60m、南北70mの区画を囲む溝は、幅２m弱、深さは１m弱。宿居館は中世から近代までの複合遺跡であり、15世紀以降、屋敷を囲むという溝の役割は、時代が下っても続いていた。

⑰ 北の前遺跡[30]

宇都宮市上戸祭に所在する。発掘調査により、戦国時代から江戸時代の初め頃と思われる土豪（村落領主）の屋敷跡とみられる方形の周溝が出土した。

溝は東西36～38m、南北45～50mの範囲を隅丸方形に囲む。規模は上幅１～２m、底幅0.5～0.8m、深さ0.2～0.4m程度、断面は丸底形。溝で囲まれた内部には、２棟～３棟の掘立柱建物跡や柵や門跡の柱穴を確認した。屋敷の周りを囲む溝には水流の跡があった。

溝の規模は小さく、城ノ内遺跡の堀とは明らかに異なる。一方、土豪の屋敷の周溝としては一般的規模であると言える。

図３　北の前遺跡中世遺構平面図

⑱ 高島館[31]

上三川町北部、江川東岸に所在する。歴史も館の規模も不明だが、方形単郭を基本とする村落領主の居館と思われる。平成13～15年に実施された発掘調査において、館の南東隅部分の堀跡が確認された。堀は自然河川を利用したものと考えられ、上幅10～12m、底幅６～８m、深さは0.6～１m、断面は丸底形であった。館の存在時期が不明なため、時代の特徴として把握することはできないが、堀上幅が広い割りに深さが浅く、底幅も広い点は河川利用もしくは灌漑などの水利機能を持つ堀の特徴として挙げられよう。城ノ内遺跡の堀とは異なる形状であるのは、堀のもつ機能の違いによるものと考えられる。

⑲ 寺平遺跡[32]

市貝町塙の小貝川北岸に所在する。寺平遺跡で見つかった屋敷跡の溝は、一辺が60mの区画を区切る（報告書では確認した遺構から溝のラインを想定し、「囲む」と表記している）という。規模は幅２m、深さ0.5mで断面丸底形。報告書では14～15世紀前に築かれ、15世紀中頃に廃絶になった方形館の堀と想定している。

14世紀後半に益子氏を相続した市花輪勝直は、相続するまで市花輪居館に住んでいたが、市花輪館以前に住んでいた館がここであるという位置づけには整合性がある。もし築館が14世紀前半であったなら、住まいは方形館という概念でなく、在地領主の屋敷として理解すべきであろう。城ノ内遺跡の堀より規模は小さい。

⑳ 新町遺跡[33]

佐野市犬伏新町地内に所在する。発掘調査により、区画の角部と思われる溝を確認した。規模は幅0.8～１m、深さ0.45m、断面薬研形。遺跡は唐沢山城の南方に位置することから、報告書では城に関わる屋敷の溝の可能性を指摘している。中世の屋敷の環濠としては一般的ともいえる規模の溝である。

以上、平地に築かれた城館（屋敷）の堀の発掘事例を再見した。これらを先述の中世城郭史に当てはめ、目安として４つの区分に分けて類型化したい。

（Ⅰ）12世紀～14世紀初め（鎌倉時代）

①、⑥、⑧、⑪、⑭が該当する。⑭は時代が特定できないが、古代の駅家との関連を考慮し、中世前期と仮定する。この内、方形に近い区画溝であると推測されるのは、⑪と⑭である。２つの遺跡の溝幅は２～４ｍ、深さ１～２ｍになる。区画される区域は、⑪が20m超×40m、⑭は２重区画で外側が70m超であった。溝が四周を囲んでいたとすれば、遺跡は地頭屋敷（荘園支配役所）であった可能性を追究したいところである。

また、①は直線的で、⑥と⑧は調査地が限られていたため、どのように区画をした堀（溝）であったかわからない。堀幅は４～７ｍ、深さは1.6～２ｍの範囲である。共通点として、広い堀幅に比べて浅い傾向が認められ、水流水利との関連が想定される。

（Ⅱ）14世紀前半～15世紀中頃（南北朝争乱期～室町時代前半）

事例では、①、⑦、⑩、⑫、⑲がこの時期にあたる。ただ、⑦については、遺構の廃絶時期が16世紀に下る可能性を指摘したい。方形に近い区画堀であると推定されるのは、⑩、⑫、⑲である。これらの堀（溝）幅は２～3.5m、深さは0.5～1.8mの範囲に収まる。想定区画範囲は、⑩が125m四方、⑫が50m程度、⑲が60m四方であった。いずれも一部が確認されたに過ぎないが、方向性から方形区画を囲っていた堀（溝）と思われる。堀（溝）の規模はあまり大きくはない。

①は区画性も感じられるが、断片的でよくわからない。堀幅３～６ｍ、深さは２～3.5m。⑦は直線的で区画性の確認はできない。堀幅は７～８ｍ、深さ４～4.5m。２例の堀は前代に比べて規模が大きい。

（Ⅲ）15世紀中頃～16世紀中頃（享徳の乱～天文頃）

県内事例では、①、⑤、⑧、⑨、⑬、⑮がこの時期にあたるとされる。この全てが方形に近い区画堀と想定される。堀（溝）の規模は３つに大別される。①、⑤が最も規模が大きく、堀幅４～10m、深さ２～３ｍ、次いで⑧、⑨、⑬が堀幅３～4.5m、深さ２ｍ未満、⑮は、溝幅１～1.8m、深さ0.5～1.3mであった。①は下野最大の国人領主宇都宮氏の居城中心部の堀であり、⑤は河川を引き入れた堀であること、⑮の性格や時期が特定できないことを勘案すれば、この時期の城館の堀（空堀）としては、幅４ｍ前後で深さ２ｍ程度が一般的であったと推測できよう。堀に囲まれた区画は、⑤が約60m四方、⑨が一辺70m程度の区画４つの集合体、⑬が80m×40～50m、⑮が一辺60m以上（他辺の長さは不明）であった。区画（主郭）の広さが50～70m四方程度で、複郭もしくは二重区画プランが一般的であったことが推測される。

（Ⅳ）16世紀中頃～16世紀末（天文～慶長初年）

県内事例では、①、②、③、④、⑳である。①、②、③については、堀幅が10mを越え、深さも３ｍ以上になる。④は前代（Ⅲ）の規模に近いが、これは堀の掘削が16世紀中頃以前であったが、16世紀末まで使用されたからであろう。このようなケースは、多くの城館で見られたに違いない。⑳は拠点城郭に付属する屋敷の区画溝の例である。

ただし、以上の理解は、対象となる城館が持っていた機能を踏まえなければならない。中世の城には様々な築城主体、政治的・軍事的役割があった[34]からである。具体的には、その城館が国人領主に従属してその上級家臣となった在地領主の本拠であったか、領主が築き、城番を置いた臨時性の強い境目の城であったか、

それとも村落領主（土豪）の屋敷であったのかを見極めることである。加えて、このような城館の役割は時期によって変化、複合する場合もあるから、良質な文献史料によって、当該地域の領国支配の推移をつかむことが不可欠となる。堀の機能としては、水堀である場合、水利目的を帯びる[35] ならば、水量を考慮して一定規模の広さが必要となったろうし、少量の水しかない狭い堀でも、用水支配のシンボルとして、あるいは村同士の紛争に際しては、十分にその役割を果たせたであろうと考えることもできる。

先の事例の⑯、⑰、⑱はこのような狭い堀（溝）を巡らせた村落領主（土豪）の館の例である。これらは堀（溝）によって囲まれた内郭が40～70mである点で共通しており、近世以降現在に至るまで子孫の居宅として使用し続けられている例もある。従って確認した堀（溝）が中世遺構かどうか、判断は一層慎重にならざるを得ない。

以上の前提に立ち、再び城ノ内遺跡出土の堀の変遷を想定したい。

多功城は、宇都宮氏家臣として多功宿を支配する在地領主多功氏の城として13世紀ごろに成立し、15世紀初頭～中頃にかけて多功城と多功宿を囲む堀（城ノ内遺跡出土堀）が整備された。

その後16世紀後半になると、上杉氏、北条氏など他国衆の大軍が宇都宮領内に侵攻するようになり、宇都宮氏の主要な拠点城郭であった多功城も他国衆の攻撃を受ける対象となった。さらに鉄砲が多用されるような合戦の様相が変化により、従来の外堀（城ノ内遺跡出土堀）が役不足となった多功城は、南に城域を拡張し、より規模の大きな堀を備えた城郭となった。令和３年度城ノ内遺跡発掘調査によって法面の一部が確認された堀跡は、新たに設定された多功城惣堀の一部であろう。開析谷を利用したこの堀の幅は15mほどになる。

城域の拡張後も元の外堀（発掘調査出土堀）は曲輪間を区切る内堀の一つとして使用されたが、16世紀最末、宇都宮氏家臣として多功を支配してきた多功氏が所領を失って多功城は廃城[36] となった。廃城に伴い、堀の多くは埋められる。やがて、江戸期に入ると、かつて堀があった周辺には墓が掘られ、墓域が形成されていった。

３　城館以外の中世遺跡（宿など）の発掘調査で確認された（堀）溝

ここでは、城ノ内遺跡２区南北方向の堀に宿を囲む役割を想定したことに関連して、宿を区画する溝・堀その類例を発掘事例から比較検討してみたい。

（１）下古館遺跡[37]

下野市旧南河内町地内、自治医科大学南に所在する。昭和56年～平成２年にわたって実施された発掘調査により、東西176m、南北470mの範囲を方形に囲む堀を確認した。堀の規模は上幅平均4.7m、底幅平均0.45m、深さ平均２m。南東の区画を囲む堀で上幅平均3.8m、底幅平均0.3m、深さ平均1.7m。共に箱薬研堀。堀の計測値・形状は城ノ内遺跡出土堀に近い。

写真12　下古館遺跡（北辺の区画堀）

報告書の「土塁が存在しないこと、堀の防御機能が充分でないなどの状況」、田代著書の「城館の堀に比べて規模が小さく、土塁の痕跡も認められない。本格的な防御施設とは言い難いが、単なるランドマークの区画溝としては立派すぎる」という指摘については、当報告書発表当時一般的であった戦国城郭についての固定化されたイメージが感じられ、にわかに賛同できない。しかし、発掘調

査の結果を総合的に勘案すれば、下古館遺跡は城館跡と理解すべき遺跡ではなく、従って確認された堀も城館に伴うものではないことは明白であろう。

堀に囲まれた部分については、中世の宿や市とする考察がある。報告書では、出土遺物から遺跡の成立を13世紀中葉、衰退を15世紀初頭とする。

写真13　下古館遺跡（聖域の区画堀）

（２）日光道西遺跡[38]

小山市街地北部に所在する。出土遺物から、13世紀後期から14世紀と考えられる上幅７m、底幅3.2m、深さ２mの箱堀を確認し、東西150m以上、南北500m以上の区画を囲むと想定された。報告書では、この堀について、戦国小山城「木沢口」の前身であり、区画は奥大道と深く関わること。下古館と同じように宿を区画する堀と推測している。また、同じ時期に聖域を囲んでいたと想定された堀は、上幅３m、底幅0.6m、深さ0.7～1.5mの箱薬研堀であった。下古館と同様、遺跡に関わる豪族として、小山氏との関連が考えられている。宿を区画すると推定された堀は、城ノ内遺跡南北堀の２倍の幅がある。

（３）下陰遺跡[39]

真岡市八木岡地内に所在する。発掘調査により複数の区画溝（堀）が確認された。報告書ではこれらの区画溝を、八木岡城の一部、館、市（津）の遺構であろうと推測している。館と推測された区画溝は上幅2.3～3.7m、底幅約0.5m、深さ約0.8～0.9mの箱薬研形。市（津）とされた区画の溝は上幅1.9～3.6m、底幅1.6～２m、深さ約0.6～0.9mで断面は薬研形から丸底まで様々である。八木岡城の外郭とされた区画溝は上幅約2.3m、底幅約0.6m、深さ約0.9mの箱薬研形である。なお溝の中には灌漑用水の流路としても使用されたものがあったと述べられている。

写真14　下陰遺跡
（館とされた区画溝）

報告書では、溝以外の出土遺構・遺物から総合的に判断して、遺跡の時期を15世紀～17世紀初頭とし、城、館、市（津）の存在を推定している。確かに「市場」「堀内」「東館」などの小字が付近にみられることは、遺跡の性格を推定する手掛かりとなり得る。しかし、あくまで溝だけに注目すると、そのような区画ごとの特徴が明確に表れているようには思えない。どの区画も、溝の幅は広くて２～3.5m程度、深さ１m以下という点で共通している。深さは城ノ内遺跡の堀の半分程度に過ぎない。

写真15　下陰遺跡
（八木岡城の一部とされた区画溝）

語句から派生するニュアンスの違いと言えなくもないが、15世紀～17世紀に限定すれば、「館」の溝は「屋敷」の周溝（堀）とするのが妥当であろう。他の溝の多くは農業経営に係る灌漑目的の溝のように見える。八木岡城外郭の（曲輪や馬出の）溝という想定は、妥当であろうか。当該時期において防御機能が発揮できる規模で

あったとは思えない。加えて、八木岡城に関しては、延元四（1339）年、北朝方の拠点として南朝方に攻め落とされたという史実[40]がある。当時、下陰遺跡一帯にはどのような景観が展開していたのだろうか。この時、八木岡城はなぜ北朝方の拠点となり得たのであろうか。下陰遺跡にはなお多くの謎が残されているように思う。

写真16　下陰遺跡
（遺跡の背景に八木岡城跡）

（４）城南３丁目遺跡[41]

宇都宮市南部に所在する。12世紀後半～13世紀前半にかけての遺構として、長さ75m以上の東西方向の溝（上幅1.5～２m、底幅0.6～0.9m、深さ1.2m。ただし、往時の地表面から＋0.5mの可能性があるという。断面は逆台形。）と、南北25m以上で東西42m以上の鉤型の溝（上幅0.9～1.7m、底幅0.3m、深さ0.75m、断面は逆台形。）が出土した。報告書では、方形居館の遺構と推定しつつ、その成立時期と「道」との関係性において下古館遺跡との共通点を指摘している。

（５）上芝遺跡[42]

旧国分寺町柴に所在する。遺跡の東半部において、東西60m以上、南北102mの区画を囲む堀が確認された。上幅は1.6～2.5m、底幅0.3～0.7m、深さ1.8～2.7mの箱薬研堀。出土遺物は13世紀から16世紀に渡るが、遺構に伴うものはほとんどなかったという。区画内には地下式坑14、井戸９、土坑350などがあり、堀はこれらを囲んでいたことになるが、当初予想された墓域説について、報告書では、土壌分析の結果から否定的である。ただ、100mを越える区画の規模から、単独の館を囲む堀の可能性も低いように感じる。条理地割との関連はないだろうか。

写真17　上芝遺跡（区画堀）

（６）清六Ⅲ遺跡[43]

野木町内思川東岸台地に所在する。低地に張り出した台地上に位置するが、東から見れば平坦な地続きである。遺跡では、中世の遺構の中に、調査区全体を４つに区画する溝が出土した。規模は幅広な区画溝で上幅２～2.5m、深さ0.1～0.3m、狭い溝で上幅0.2～0.4m、深さ0.3～0.5m。断面形はいずれも皿状であった。

遺跡は谷を挟んで南側に存在した野木城と関わる室町時代の町場の跡と推定された。北西区画では規模の大きな掘立柱建物と井戸、南西区画ではやや小さな掘立柱建物や井戸、地下式坑（地下室）、中央区画では多くの小規模な掘立柱建物、井戸、地下式坑（地下室）などが出土し、北西の区画と間には道の跡も確認した。

清六Ⅲ遺跡の区画溝は、宿全体と宿外を区切る溝ではなく、宿内の一定区域を区切る（宿割）溝である。同じ性格の場所において、この溝の規模が標準となり得るか、今後、事例の集積が求められる。

写真18　清六Ⅲ遺跡（溝）

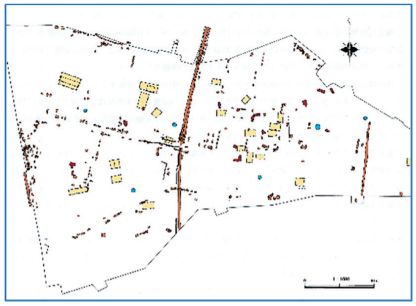


図４　清六Ⅲ遺跡（中世遺構）

（７）青龍渕遺跡[44]

鹿沼市南部の黒川西岸に所在する。報告書では、中世を４時期に分け、溝によって区画された地域の変遷を推論している。１段階は区画が出現した13世紀後半で、上幅5.6m～7.9m、底幅0.2～0.8m、深さ2.6m～3.1mの箱薬研堀が東西方向に伸び、東寄りに堀を貫く南北方向の道路がある。付近の一部が墓域であった可能性があるとする。２段階は14世紀後半で、この堀がなくなり、この南側に上幅2.7～4.1m、底幅0.3～0.6m、深さ1.2m～1.9mの鉤型の箱薬研堀が掘られる。３段階は15世紀後半で、道路が改修された時期、４段階は16世紀で、区画内の一部が墓地となった時期とする。また、遺跡周辺の道路や地割から推測し、下古館遺跡との類似点を掲げて、宗教的な色彩を帯び、河川交通と関連して成立した遺跡であると評価している。

写真19　青龍渕遺跡
（東西方向の堀）

13世紀後半にこのような大きな堀を掘った理由は何か。遺跡を貫く南北道路の性格や黒川水運の実態など、周辺の中世の景観について、文献・フィールドワークからもアプローチが必要な遺跡である。

（８）西根２遺跡[45]

栃木市旧岩舟町内に所在する。幅0.7～0.9m、深さ0.2～0.3mの溝は中世から近世にかけて存在したと考えられる集落を区画しており、３～４つの区画内には数軒の掘立柱建物と井戸が造られていて、なかには漆に関わる工房もあった。遺跡は16世紀代を中心とすると考えられ、３時期の変遷が想定されている。集落（宿）内の区画溝としての性格は、清六Ⅲ遺跡に近いとみなすことができる。溝の形状も近似する。

写真20　西根２遺跡

（９）星ノ宮遺跡[46]

市貝町文谷地内に所在する。報告書によれば、中近世の遺構は６時期に分けられる。14世紀後半～15世紀前半は、掘立柱建物と井戸で構成され、さらに古い時期の古瀬戸入子が出土している。15世紀中葉～後葉には区画溝が掘られ、建て替えの認められる掘立柱建物跡などからの出土遺物が豊富であった。16世紀後半は集落の拡大期で、区画溝を伴う大型の建物が整然と並んでいた。16世紀末～17世紀初頭にかけては、建物跡が最も多い時期で区画溝も掘られていた。掘立建物群を区画する溝の上幅は1.6m、底幅0.6～１m、深さは0.2～0.6m、断面逆台形であった。溝の全体像は不明であるが、複数の溝がそれぞれに個の屋敷を区画していた可能性もある。

今日でも人々は、屋敷を囲う塀や自分の土地と他人の土地とを区切る工作物などを造る。それは、自分が所有する土地を目に見える形で他と分けたいという意識が存在するからである。中世前期には、散村が多かった東国でも、交通の要所には市・泊・津そして町場（宿）が形成されるようになった。しかし、自力救済が基本の中世では、個人だけで所有物を守ろうとすることには限界があり、住民は同族や地域集団として結束して共有地を他と区切り、権利と治安を保持する必要があった。ここに宿を囲む堀を掘るという行為の目的があったと理解することができる。

宿を区画する堀は13世紀から出現しており、在地領主屋敷を囲む堀の出現以前である点は注目される。堀の幅は１m未満から８mに迫るものがあり、深さも0.3m程度から３mを測るものがあって、時代ごとに追っても規模は様々である。それは、外部からの侵入を制限する外に、用排水の管理、住民の階層や職能など同集団を括るためなど堀を掘る目的も多様であったことと関係があるに違いない。

また、堀の機能が同じで、掘られた時代が近くても規模が異なる場合がある。（１）下古館遺跡と（２）日光道西遺跡を比較すると、深さ２m程度であることは共通するが、上幅が大きく異なっている。この相違は、水流を利用できたか否かが関わっていると考えられる。２つとも堀で区切る第一義は外敵（人だけとは限らない）の侵入阻止にあるから、空堀であれば堀底は薬研形にせざるを得ないが、仮に薬研形で上幅を７～８mにしようとすれば、目的を実現する法面の傾斜角度を考慮すると、堀底を４～５mも掘り込まなければならないことになる。しかし、もし水流が得られれば、堀底は幅広でもよく、その分堀上幅は広げることができる。（２）の場合は、深さ２mにも関わらず、堀幅を７m確保することができている。

以上、城館以外（宿など）の堀の出土例を参考にしても、城ノ内遺跡２区の南北方向堀は、宿際に沿うように掘られている様子と断面の形状・規模から、下古館遺跡や日光道西遺跡同様に宿を囲む堀であったと想定することが可能であることを指摘したい。多功宿の西側の堀の存在については未調査であるが、宿西端には「二の谷」という小字があり、堀でないにしても谷地形が存在していたことを示唆する。因みに「二ノ谷」から北上すると、開析谷を隔てて字「天神」の台地に至るが、ここに所在した多功遺跡の発掘調査[47]では、南北方向の堀が確認されており、その規模は上幅５m、下幅0.5～0.7m、深さ1.7～２mであって、城ノ内遺跡の堀と似ている。仮に多功遺跡の堀と城ノ内遺跡の東西堀が開析谷を挟んで天神、本宿を囲む目的で掘られたとすると、堀が囲んだ範囲は南北約320m、東西約40mということになる。

４　城館以外の中世遺跡（墓域・聖域）の発掘調査で確認された（堀）溝

城ノ内遺跡１区では、東西堀の北側（多功城内側）に中世墓壙が散在する様子が確認[48]されている。堀と墓域との関連を考察する上で、墓域を区画する溝（堀）についても類例を調べ、特徴を整理して比較することが必要である。

（１）市ノ塚遺跡[49]

真岡市（旧二宮町）高田地内に所在する。発掘調査によって、一辺が27m～35mの方形の区画を囲んだ溝が確認された。上幅は約1.4m～3.7m、底面は丸底で、深さは0.2～0.5m。溝で囲まれた区画の内部には、生活を感じさせる遺構や遺物が少なく、掘立柱建物一棟と方形竪穴（地下室）群、長方形土坑が多く出土した。方形区画は14世紀後半から15世紀前半（南北朝時代から戦国時代の前頃）の墓域と推定されている。墓域を溝で囲むことで、聖と俗との境を明確にした例である。

写真21　市ノ塚遺跡（周溝）

また、市ノ塚遺跡の第二次調査では、町境に掘られたと考えられる堀が確認された。幅が３～４.8m、底幅は1.3～1.6mで凹凸があり、一部には溜水の跡があった。深さは1.6m程度。発掘された部分は限られたが、報告書では、専修寺を中心とする宿を囲む堀の一部と推定している。

（２）野高谷薬師堂遺跡[50]

宇都宮市野高谷町地内に所在する。中・近世の大規模墓地遺跡であり、15世紀後半～16世紀に墓域が形成されたと思われる。また、区画内には一定程度の生活の場が存在したことも想定されている。溝（堀）が囲むのは、おおよそ東西134～187m、南北125～230mの範囲である。区画溝（堀）は幾筋も確認されたが、主な溝（堀）３条の規模は、それぞれ上幅1.8m～2.4m、深さ１～1.2m（いずれも多く計測された部分の数値）。上幅2.2～3.3m、深さ1.3～1.5m。上幅0.7～1.5m、深さ0.2～１mであった。

（３）横倉宮ノ内遺跡[51]

小山市横倉地内に所在する。15世紀中葉～後半には上幅1.2～1.4m、深さ0.5mで長さが５m～７mの数本の溝で仕切られた区画内に比較的規模の大きな屋敷群があり、溝は神社にも関連したと推定されている。

15世紀末～16世紀にかけては土壙群が大規模な共同墓地を形成し、これを上幅0.3～２m、深さ0.1～0.6mの溝が方形に囲っていたことが判明した。

大規模共同墓地は17世紀に終焉を迎えるが、この時期も、墓地を方形に区画する溝があった。

写真22　横倉宮ノ内遺跡

（４）エグロ遺跡[52]

佐野市越名町地内に所在する。中世の墓域を区画する大小多数の溝が確認された。溝は上幅が0.4～１m程度が多く、深さは0.1～0.5mで深くても１m程度であった。

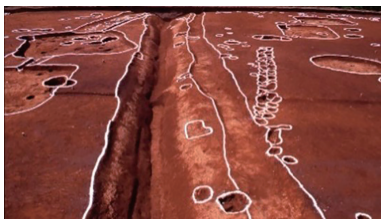


写真23　エグロ遺跡（区画溝）

（５）黒袴台遺跡[53]

佐野市黒袴町・西浦町地内に所在する。中世の墓域等に係ると推定される溝が確認されている。墓域を区画する溝は、平均1.1m、底幅平均0.4m、深さ平均0.3mであった。

（６）立野遺跡[54]

宇都宮市東谷町・中島町地内に所在する。調査５区で確認された方形区画は一辺が72×44m以上と47×45m以上の２つあり、中世の墓域等に係ると推定されている。墓域を囲む溝は、上幅0.6～３m程度、深さ0.5～0.7m、断面形は一定でなかった。

（７）南飯田前畑遺跡[55]

小山市南飯田地内に所在する。調査６区と７区において３～４区画の方形区画溝が確認された。区画は一辺が20m程から60m弱まで様々である。６区の区画溝は、上幅2.5～３m、深さ0.5～１m。７区の溝は大きなもので上幅２～３m、深さ１m前後。小さなもので上幅１～２m、深さ0.6～0.8m前後。断面は逆台形から丸底まであった。

これらは区画内の遺構と遺物から墓域を囲む溝とされている。

（８）佐川野上遺跡[56]

小山市南飯田地内に所在する。調査２区において、方形に区画する溝（堀）を複数確認した。溝（堀）は大きなもので上幅0.8～３m、深さ１～1.5m。小さなもので上幅0.2～１m前後であった。区画内の遺構と遺物から、区画溝は墓域を囲む溝とされている。

写真24　佐川野上遺跡区画溝

（９）鹿沼流通業務団地内遺跡[57]

鹿沼市上石川地内に所在する。一辺50m四方の方形区画溝（堀）は幅２～3.5m、深さ１～1.3mで、この区画の西、南、南東にもそれぞれ方形区画が確認された。西の区画は東西55m、南北70mで、溝は幅0.8m、深さ0.25～0.6m。南の区画は方25mあり、傾斜地のために溝（堀）は幅２～2.7m、深さ0.85～１mとやや深い。南東の区画は東西45m、南北20mで、ここも傾斜地のため、溝（堀）幅は2.5m、深さ1.5mとやや規模が大きい。報告書では、これらの区画は出土遺物から15世紀後半～16世紀の墓域とし、遺跡の北方500～600mに所在した石川館（城）[58]との関係に言及している。

写真25　鹿沼流通業務団地内遺跡

(10) 野沢遺跡[59]

宇都宮市野沢町地内に所在する。15～16世紀にかけて成立し、近世まで営まれ続けた墓域を囲む溝が確認されている。報告書では、建物等の痕跡がなかったものの、館・城・寺院廃絶後に墓地が営まれた可能性に言及している。溝によって区画されたのは東西41～43m、45～53m以上の区域であった。溝幅は0.4～最大2.5m、深さ0.1～最深1.1mと一定でない。

写真26　野沢遺跡

(11) 成願寺遺跡[60]

宇都宮市西刑部地内に所在する。発掘調査によって、現在も当地に所在する医王山薬師院成願寺[61]の北辺を形成した区域溝と思われる直線的な溝が確認された。上幅は２～2.5m、深さは１～1.2mであった。確認できたのは北辺のみで、他方向を区画する溝の有無や規模、時期の特定には至らなかったが、寺伝などから鎌倉期以降の遺構と思われた。

(12) 樺崎寺[62]

足利市樺崎町に所在する。足利氏の氏寺・廟所跡で、鎌倉時代に創建され、室町時代には鎌倉公方の厚い庇護を受けた。寺は15世紀中ごろ以降から徐々に衰退し、明治期に廃寺となった。

寺跡は平成13年に国の史跡に指定されており、この前後から開始された発掘調査では、寺域内で複数の区画溝（堀）が発見されている。この内、導水路を除く中世の区画溝（堀）の規模は以下の通りであった。寺

域北辺の大溝（堀）は樺崎川の氾濫防止も兼ねて掘られたと推測され、上幅は５m以上で深さ1.5m、断面逆台形。主要伽藍と僧房域を区画する溝は上幅0.6〜0.8m、深さ0.2〜0.3mで断面逆台形。辻部屋内の区画溝は上幅約１m、深さ約0.3m、断面逆台形。西部屋内の区画溝は上幅1.2〜３m以上、深さ0.2〜0.3m、断面逆台形。樺崎寺の区画溝は上幅、底幅共に広く、浅いことが特徴である。

聖域と俗界を溝（堀）で区切る場合、日常生活の場は俗なる場所（現世）であるから、溝（堀）で区画されるのは聖なる場所(来世)ということになる。溝(堀)で区切るのは、鎮魂や死者を崇拝する気持ちだけでなく、死を恐れ、死が日常に入り込むことを忌み嫌う気持ちの表れでもあったろう。また、野犬などの侵入によって聖域が荒らされることを防ぐ目的も考えられる。

そのような目的を想定すれば、必要とする区画溝・堀の規模は自ずから定まってくる。聖域の傾斜地形に左右される部分もあるが、区画溝には、幅が１m未満の溝もあれば、２〜３m程度を測る溝も多いというように、堀幅に一貫性がないこと、深さは数十cmから１m未満と浅い溝が多いこと、堀底形の成形が甘い傾向が認められることは当然であるとも言えよう。

おわりに

遺跡発掘調査において中世の堀（溝）の出土例は数多い。言うまでもなく、堀を掘るには、人、金、時間が必要である。従って、意味もなく堀を掘ることはあり得ず、堀には必ずその存在意義があったはずである。加えて、堀（溝）は使用される期間中、メンテナンスが欠かせず、常に堀浚いが行われたと考えられる。中でも城館の堀や水利のための堀（溝）については、頻繁に堀浚いが行われたはずであり、堀の使用時期に直結する遺物が覆土中に残ることはまずない。

しかも発掘調査においては、範囲が限定されていることから、一定の区画を囲む堀なのか、直線的に仕切るだけの堀なのかすら判別できず、とりあえず出土した溝（堀）の長さと断面形「薬研形（Ｖ字形)」、「逆台形（底面が幅広)」などを事実記載するしかないことが多い。溝で区画された内側の遺構が解釈できなければ、漠然と「根きり溝」「区画溝」などと推測し、覆土の状態によって埋没の様子と流滞水の有無を、出土遺物によって溝（堀）の廃絶時期を想定するしかない。しかも、覆土から出土した最も新しい時代の遺物は、必ずしもその堀の使用最終時期を表すものとは限らないという調査の限界は、今後もそれほど変わり得ないだろう。

ただ、これまでは一定規模以上（本稿で筆者が堀とした程度の幅と深さ）の堀（溝）が発見された際、その溝が方形（鉤型）に曲がっている場合は猶更、安易に「城館の堀」などと想定する傾向はなかったであろうか。堀（溝）遺構の性格を推測する際、その前提として、文献史学、歴史地理学、フィールドワークなど多様な調査研究成果に敏感でありたいと改めて自戒する。

本稿で述べたかったことを改めて整理し、さらに今後追究したい課題を加えてまとめに代えたい。

1　中世平地城館の堀（溝）には、その城館の使用時期と機能により特徴がみられる。特に、12〜14世紀代の堀（溝）を屋敷・館の堀（溝）と想定する際は、「堀と土塁に囲まれた方形館」というかつてのイメージを払拭した上で、遺構の性格を考察することが求められる。加えてこの時期の遺構に「城」用語を用いる場合は、その明確な根拠が示されなければならない。

2　下野国内では「堀で囲まれた宿」の景観が成立するのは13世紀頃と想定されている。そうした宿は、どこにどのように存在し、15世紀以降どう展開していくのか。今後事例を集積し、在地領主の一円的な支配の確立（宿・道の支配、居城の拡大）との関連の中で考察してみたい。

3　屋敷（居館）、用水、寺社、道をセットとする視点（本拠の形成）[63] に立ったとき、これまで調査された区画溝（堀）を伴う遺跡はどのように再評価されていくのか。新たな位置づけが生まれる可能性を感じている。

本稿をなすにあたり、当センター副所長篠原祐一氏からご意見を賜りました。末筆ながら御礼申し上げます。

［註　引用、参考文献］

(1) 城ノ内遺跡発掘調査は、2018年度、2019年度、2021年度に行われた。2023年度は整理作業を行っている。

(2) 馬瀬智光「洛外における堀の変遷」京都市文化財保護課研究紀要　2018年。論考において馬瀬氏は、平安後期以降の洛外で検出された遺構例を抽出し、京都市内においては、幅３m、深さ１m以上のものが堀と認識されることが多いとしている。このことを参考に、筆者は溝と堀の境を、一般成人の身長を目安として堀幅はその２倍、深さは身長並みと定義した。

　なお、堀の断面形についても、報告書毎に表現は様々であるが、本稿では、歩行ができない程度の底幅の空堀を薬研堀、薬研形だが堀底の歩行が可能と思われる幅を有する空堀を箱薬研堀、堀底が広く平坦な空堀を箱堀、傾斜が緩く堀底が平面でない空堀を丸底堀と表現した。この表記に関しても各報告書記載の表現と相違する。溝の断面形についても、報告書の表現を尊重しつつ、筆者の考える基準に照らして一部の表現を変えている。

(3) 橋口定志「中世居館の再検討」東京考古５　1987年を初出とする。考古学の成果から、それまでの城館理解が修正された意味は大きい。

(4) 近畿地方では12世紀後半には水堀を巡らせた居館が出現するという。中井均「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』新人物往来社1991年　同書が著された当時の認識において中井氏は、東国と西国の違いと捉えている。また、土塁についても西国の事例として12世紀末には存在したと推測する。

　茨城県つくば市島名前野東遺跡は13世紀後葉から14世紀前葉（南北朝初期）の一辺約100m四方の方形館で、四周を堀が囲む。堀幅は3.6～５m、深さ1.2～1.5mである。この遺跡について、齋藤慎一氏は、同遺跡の他にも数例をあげた上で、「鎌倉時代から南北朝時代にかけての方形館とは、都市などに居住する領主が遠隔地にある所領を支配するため、いわば役所のような機関」「荘園内の政所に近似する」「方形単郭を意識した遺跡＝方形館がこの時期に存在した」と述べている。齋藤慎一・向井一雄『日本城郭史』吉川弘文館　2016年

　「役所のような機関」はなぜ四周に堀を巡らせる必要があったのか、そのような「役所」は在地領主屋敷と比較してどれくらい分布していたのか、そもそも役所のような地頭屋敷や軍事性の低い土豪屋敷は「城館」概念の中にどう位置付けられていくのかなど、今後の論議が注目される。

(5) 一例として田中大喜『中世武士団－地域に生きた武家の領主－』国立歴史民俗博物館企画展示図録　2022年　Ⅲ章36頁

(6) 中澤克昭『中世の武力と城郭』吉川弘文館　1999年

(7)「洛中洛外図」歴博甲本　大永３～４（1523～24）年頃成立　国立歴史博物館蔵

(8) 中井均「中世城館の発生と展開」物質文化48　1987年　また、註（４）。

(9) 峰岸純夫「東国における十五世紀後半の内乱の意義－享徳の乱を中心に－」『中世の東国－地域と権力－』東京大学出版会　1989年

(10) 永禄元（1558）年からの長尾景虎による関東侵攻、元亀四（1573）年北条氏来寇で生起した多功原合戦など

(11) 北条氏に対抗した佐竹氏を盟主とする国人連合「東方之衆」や上杉輝虎に対して離合を繰り返す佐野氏など地域領主の動向がその一例である。

(12)『宇都宮城跡』－平成24年度・25年度調査－　宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第90集　宇都宮市教育委員会　2015年
今平利幸「掘り出された宇都宮氏の中世館・城郭」『中世宇都宮氏の世界』彩流社　2013年

(13)『下野壬生城』壬生町埋蔵文化財調査報告書第15集　壬生町教育委員会　2000年

(14)『川連城跡』日本窯業史研究所編　栃木市教育委員会　2021年

(15)『平出城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第397集　公益財団法人とちぎ未来づくり文化財団埋蔵文化財センター　2020年
篠原祐一「平出城私考」『歴史と文化』30号　栃木県歴史文化研究会　2021年

(16)『荒井館跡　水口龍泉寺跡　船山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第408集・大田原市埋蔵文化財調査報告第６集　栃木県教育委員会・大田原市教育委員会・公益財団法人とちぎ未来づくり財団　2022年

(17)『堀米城跡・堀米遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第385集　公益財団法人とちぎ未来づくり文化財団埋蔵文化財センター　2017年

(18)『下野市内遺跡発掘調査報告書　三仏・向山・館野前遺跡・薬師寺城』下野市埋蔵文化財調査報告　第８集　下野市教育委員会　2010年

(19)「結城晴朝書状」『戦国遺文下野編第二巻』1206号文書　東京堂出版　2018年

(20)『長沼城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第335集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2011年

(21)『諏訪山・諏訪山北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第147集　財団法人栃木県文化振興事業団　1994年

(22)『南河内町史　史料編５　絵画』所収　南河内町　1990年

(23)『田間東道北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第149集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　1994年

(24)『南飯田前畑遺跡・中妻遺跡・佐川野上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第391集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2019年

(25)『金山遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第135集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　1993年

(26)『大関台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第251集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2001年

(27)『森後遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第328集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2010年

(28)『横倉遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第182集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　1995年

(29)『宿居館跡発掘調査報告書』足利市埋蔵文化財調査報告　第45集　足利市教育委員会　2001年

(30)『北の前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第252集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2002年

(31)『高島遺跡群』栃木県埋蔵文化財調査報告第309集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2008年

(32)『寺平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　市貝町教育委員会　2016年

(33)『新町遺跡』　佐野市文化財調査報告書　第25集　佐野市教育委員会　2009年

(34) 萩原三雄「中世城館研究の課題と展望」『中世の城と考古学』新人物往来社　1991年

(35) 佐野静代「平野部における中世居館と灌漑水利－在地領主と中世村落－」人文地理第51巻第４号　人文地理学会　1999年

(36) 系図によれば、多功領主の祖となる宗朝が多功に館を構えたのは、宝治二(1248)年という。多功氏が所領を失うのは、主家宇都宮氏が改易となった慶長２（1597）年である。まもなく多功城も公収されて廃城となったと思われる。

(37)『下古館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第166集　財団法人栃木県文化振興事業団　1995年
田代隆・鈴木泰浩「道・市・宿－下古館遺跡とは何か」『知られざる下野の中世』随想舎　2005年

(38)『日光道西遺跡Ⅲ』小山市文化財調査報告書第56集　小山市教育委員会　2002年
『日光道西遺跡Ⅴ』小山市文化財調査報告書第95集　小山市教育委員会　2015年

(39)『下陰遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第310集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2006年
『下陰遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第330集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2010年

(40) 延元四年三月二十日付北畠親房御教書写「‥矢木岡城被落候　城中輩惣領以下　不漏一人被誅畢‥」栃木県史史料編中世三所収　1978年

(41)『城南３丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集　宇都宮市教育委員会　1996年

(42)『上芝遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第137集　財団法人栃木県文化振興事業団　1993年

(43)『清六Ⅲ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第228集　財団法人栃木県文化振興事業団　1999年

(44)『青龍渕遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第317集　財団法人栃木県文化振興事業団　2009年

(45)『西根２遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第320集　財団法人栃木県文化振興事業団　2009年

(46)『星ノ宮遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第369集　財団法人栃木県文化振興事業団　2014年

(47)『多功遺跡Ⅱ』上三川町埋蔵文化財調査報告第11集　上三川町教育委員会　1993年
『多功遺跡Ⅲ』上三川町埋蔵文化財調査報告第16集　上三川町教育委員会　1997年
(48) 遺物から中世墓と判断された土壙は３基。他に中世の土坑と思われる遺構を43基確認し、この中には墓壙も含まれると思われた。なお、地下式坑も８基確認されたが、墓壙か貯蔵穴かの判断はできなかった。
(49)『市ノ塚遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第303集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2007年
『市ノ塚遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第373集　公益財団法人とちぎ未来づくり財団　2015年
(50)『野高谷薬師堂遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第375集　公益財団法人とちぎ未来づくり財団　2015年
(51)『横倉宮ノ内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集　財団法人栃木県文化振興事業団　1995年
(52)『エグロ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第260集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2001年
(53)『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第261集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2001年
(54)『立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2005年
(55)『南飯田前畑遺跡・中妻遺跡・佐川野上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第391集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2019年
(56)『南飯田前畑遺跡・中妻遺跡・佐川野上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第391集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2019年
(57)『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第121集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　1991年
(58) 発掘調査は行われていないが、複郭の城郭で、宇都宮氏配下の石川氏の居館とされる。堀跡や土塁の一部が残存しており、現在も子孫が居住する。
(59)『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第271集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2003年
(60)『成願寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第239集　財団法人とちぎ生涯学習文化財団　2000年
(61) 成願寺の創建は、寺伝によれば正治年間（1199～1200）である。同寺には足立藤九郎盛長に関わる伝承がある。
(62)『法界寺発掘調査概要』足利市埋蔵文化財調査報告第29集　1995年
『史跡　樺崎寺跡（法界寺跡）発掘調査概要Ⅱ』足利市埋蔵文化財調査報告第57集　2008年
(63) 齋藤慎一『中世東国の領域と城館』吉川弘文館　2002年　　註（４）『日本城郭史』

研究紀要　第 32 号

発　行　　公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
〒329-0418
栃木県下野市紫474番地
TEL　0285（44）8441（代表）
FAX　0285（43）1972
HP：http://www.maibun.or.jp

発行日　　令和６（2024）年３月29日発行
印　刷　　第一印刷株式会社